

ガチャ爆死からの八つ当たり

あーさあ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガチャで爆死したのでモチベ維持のために書き殴る。
言うまでもなく八つ当たり。R-18は初めて。

主に原作Fateに居ない、EXTRAやGrand Orderのキャラを標的としてえっちな描写で犯していくだけの小説です。

pixivの方にも数話、お試し投稿しております。

【注意】

題名だし言い出しっぺは作者なので心苦しいのですが、感想欄へゲームのこと。主に「く持つてる」、「く当たった」等の、いわゆる小説そのものに無関係な書き込みはぐ遠慮下さい。作者の心が折れてしまいますし、運営さんにも負担になりますので。

どうか、よろしくお願い致します。

目次

ジャンヌ・オルタ編

黒の聖女(1) | 1

黒の聖女(2) | 6

黒の聖女(3) | 12

黒の聖女(3) | 21

二人の聖女の饗宴編

聖女達の饗宴(1) | 34

聖女達の饗宴(2) | 42

聖女達の饗宴(3) | 50

聖女達の饗宴(4) | 58

沖田総司編

桜色の劣情(1) | 69

桜色の劣情(2) | 77

桜色の劣情(3) | 84

アルトリア・ペンドラゴン(槍)編

嵐の王の秘め事(1) | 93

嵐の王の秘め事(2) | 100

嵐の王の秘め事(3) | 108

スカサハ編

影の国の女王は乙女の夢を見るか(1) | 116

影の国の女王は乙女の夢を見るか(2) | 123

影の国の女王は乙女の夢を見るか(3) | 129

モードレッド編

お年頃な叛逆の騎士(1) | 138

お年頃な叛逆の騎士 (2)

145

お年頃な叛逆の騎士 (3)

152

お年頃な叛逆の騎士 (4)

159

織田信長 編

小さな魔王の二度目の恋 (1)

167

小さな魔王の二度目の恋 (2)

175

小さな魔王の二度目の恋 (3)

184

ジャンヌ・オルタ編 第二章 (仮名)

吼え立てよ我が劣情 (1)

191

吼え立てよ我が劣情 (2)

199

赤王 x 白王 編

散り乱れる白百合と薔薇 (1)

207

散り乱れる白百合と薔薇 (2)

215

散り乱れる白百合と薔薇 (3)

225

散り乱れる白百合と薔薇 (4)

234

散り乱れる白百合と薔薇 (5)

242

アルテラ 編

されど古の戦闘王は只人の夢を見る (1)

252

されど古の戦闘王は只人の夢を見る (2)

261

されど古の戦闘王は只人の夢を見る (3)

269

アン&メアリー 編

二人の女海賊が欲したモノ (1)

280

二人の女海賊が欲したモノ (2)

287

【番外編】

サンタと良い子の性なる夜 (1)

295

ジャンヌ・オルタ編

黒の聖女（1）

一夜の夢、叶わぬ理想、願いは其処に在る。されど、必ずしも報われるとは限らない。溶けていく数字、積もっていく不満と怒りは運勢、確率という名の不平等によって辛辣に、かつ無慈悲に現実を痛感させる。

自分が生きるために必要な財を投げ打ってまで求めるのは、結局は自己満足と優越感という取るに足らない個の感情。しかし、感情が在るからこそその人間であり、追い求めてしまう。

——ああ、きつと今回も

——彼女は自分のところへ来ない

——いつか、いつか、次こそは

——出逢える日を、信じるより道はない

——自分の身を、削ってまで



深淵にも思える闇の中、まどろみにも似た世界。どちらが上で、どちらが下なのかも分からない。例えて言うなら、呼吸できる水の中へ居るような感覚。

どうやって来たのかは覚えていない、どこへ向かおうとしていたのか、どこへ向かえばいいのかも分からない。意識は薄い膜が張ったように朧気で、思考は巡らせる度に霧散し消えていく。

そんな時、どこからか声が聞こえてきた。侮蔑が込められた高笑い、心底楽しそうな笑い声。その声色は鈴のように凜としているのに、言葉に込められている感情と不釣り合い、不協和音。

「あらあら、もう諦めてしまうの？ 潔いのね——」

深淵から抜け落ちてくる影、それは徐々に人の形を成していく。

かつては神々しき光を放っていたであろう金色の髪は傷み、すでに色褪せてしまっている。だが髪質は失われていないのか、影が歩み寄ってくる度に左右へ揺れる結われた長い髪は絹のように滑らかな動きで揺れる。

かつては確固たる信念が込められたであろう胸、それは見た目こそ同じだが、すでにその胸中を埋めていた信念は欠片（ピース）となつて抜け落ちてしまっている。抜け落ちた心には、大きくぽっかりと穴が空いていることだろう。

かつては真つ直ぐに理想を見つめていたであろう瞳は、もはや輝きなど携えていない。あるのは侮蔑、憤怒、失望、信じてきた者達、守ろうとしてきた者達の裏切りに絶望し濁ってしまった汚れた瞳。

かつては革命の象徴として掲げられた純白の旗も傷み、荒み、今では疑念と無念によって漆黒に犯された呪いの旗と成り果ててしまっている。

「まあ、その方がいいと思うわよ。私としても、アナタに使役されるとかヘドが出そうですもの——」

必死に笑いを噛み殺しながら深淵から出てきたのは堕ちた聖女、理想の途中、志半ばで没した聖女が成ったかもしれないカタチの一つ。

——もしも、聖女が怨みを抱いたら

——もしも、聖女が人間に絶望していたら

——もしも、聖女が自分を憎んだら

いくつもの可能性が存在する、もしかしたら史実の彼女は怨みを抱き、人間に絶望し、自分自身を憎んでいたのかもしれない。しかし、後世に伝えられたのは一人の聖女としての姿。事実なのか、偶像なのか、それは誰にも分からない。

いや、”どちらであろうが関係ない”のだ。

なぜなら、唯一絶対の真実がある。

——命が尽きる直前に彼女が抱いた想いは

——慈愛か、憎悪か、それは問題ではない

——どんな想いを抱いていようが

——聖女ジャンヌダルクは、確かに居たのだから
故に目の前には、ジャンヌ・オルタが”居る”。

他でもない、アナタが”願った”が故に。

「ほんと、ご苦勞様としか言えないわね。聖杯から生み出された紛い物に過ぎない私を求めるなんて、正氣の沙汰とは思えないわ———だいたい、アナタが求めているのは———」

身動きが取らない自分の下半身へ、彼女の脚が絡み付いてくる。さらに体を寄せてくる彼女は、故意に豊満な乳房を押し付けてくる。彼女の柔らかな肢体が、腕が、まるで蛇のように体を這っていく。

いつしかジャンヌ・オルタの顔が、すぐそこにあつた。互いの吐息が感じれるほどの距離で見た彼女は、研磨された宝石のような肌と、妖しく輝く瞳、整った唇をもって甘く囁いてきた。

「———”こっち”、じゃない———?」

耳朶を通して脳を犯してくる彼女の言葉と、体温により熱せられた吐息。全身を這い伝わってくる、柔肌の感触と体温。その抗いがたい物理的、体感的な誘惑は、もはや媚薬や麻薬の類い。脳髓は痺れ、四肢は艶やかな肌に蹂躪され、理性は少しずつ削られていく。

密着する体を器用に捻り、脚を絡めたまま彼女は腕だけを持ち上げ移動させ始める。胸板へ細くキメ細やかな指先が置かれ、ゆつくりと這っていく。

まずは鎖骨、突き出た部分を爪先で撫でていくと、次は肩へと指を滑らせる。肩口の形を確かめるように何度か往復させたら、そのまま脇腹を経由して腹部までは緩やかに。

彼女の指先が滑るたびに、触れた場所へ電流にも似た言葉にできない感覚が体を跳ねさせる。その反応を楽しんでいるのか、ジャンヌ・オルタは妖しく微笑むだけ。

腹部へ到達した彼女の指先は弧を描いていたが、いつしか這わされた指は一つではなくなっていた。二本、三本と増やされていく指。単調だった刺激は変化し、それぞれの指が意志を持っているかのよう。

「恥ずかしくないわけ? ”こんな”にして———気持ち悪い」

耳元でジャンヌ・オルタが放った蔑みの言葉、吐息は熱いのに鼓膜

を叩いた言葉には、凍てつくほどの侮蔑と軽蔑が込められていた。

喉で笑いを噛み殺す彼女は、いつしか指先だけではなく掌をもつて腹部を撫でていた。布越しに感じた彼女の掌の感触は柔らかく、先程までの指だけを用いた愛撫とは比べものにならない刺激を与えてくる。

ただ腹部へ掌を置いているだけなのに、そこから伝わってくる熱は焦燥感を煽ってくる。触れてほしいと自己主張してしまう下半身の反応を楽しむだけで、彼女は何もしてこない。

「ああ、気持ち悪い、気持ち悪い。正直すぎるのも考えものよね、ほんと死んでくれないかしら——そうね、”この先”をしてほしいなら対価として命を貰う、なんて面白くない？」

腹部から下腹部へと、ゆっくり移動していく彼女の掌。触れるか触れないかという距離で、伝わってくる熱だけを充てがってくる。

今にも大笑いしそうなジャンヌ・オルタ。こちらの返答を待ちながらも彼女は、ダメ押しとばかりに整った唇から血のように真っ赤な舌を出す——耳朶へ、舌尖を搦じ込んできた。

卑猥な水音が直接、鼓膜を響かせる。だが彼女の舌尖は容赦なく耳朶の肉壁を味わうようにうねり、唾液を擦り付けてきた。その度、直に頭へ叩き込まれてくる卑猥な水音は先の甘い言葉など比ではない。

唾液という粘液が擦り付けられる感触、熱く柔らかい舌が耳朶を縦横無尽に犯していく。出し入れされれば、その度に搦じ込まれる舌尖が脳を突く。抗うこともできず、ただただ蹂躪されていく耳朶。

と、そこでようやくジャンヌ・オルタが耳朶を犯していた舌を抜き放った。瞬間、耳朶と彼女の舌が糸を引いて、ぷつりと切れる。重力に引かれ落ちていく糸は、幾度となくなぶられ、混ぜられたせいかわ白く濁っていた。

——少し息を荒くさせているジャンヌ・オルタ

——微かに頬を紅潮させ

——自身の唾液で唇を濡らす彼女は

「——ねえ、どっつすめ。」

——と、囁いた

↓「すみません、命は惜しいです…」
「命が惜しくてオルタ抱けるかッ!!」

黒の聖女（2）

「すみません、命は惜しいです…」

↓「命が惜しくてオルタ抱けるかツ!!」

「ふうん、そう。好き者ね、アナタ——」

クスクス、と小馬鹿にしたような笑み。それと同時に、自身の体へ密着していた彼女が、するりと抜けていく。何故と思った直後、ふと周りの景色が変化を始めた。闇に包まれていた周囲へ、わずかに光が差し込んでくる。

徐々に鮮明になっていく景色、そこは見慣れた部屋。

カルデア内部の、自室だった。ただ、明かりは無いに等しい。仄暗い部屋の中、辛うじて間近に居る彼女が見える程度の光源。

「そ、アナタの部屋。どうせなら、心行くまで楽しみましょう。これは夢なんだから——命は、落とすかもしれないけどね」

いつの間にかベッドの脇へ立っていたと気付いたのは、ジャンヌ・オルタが背中から抱きついてきたから。衣服越しに感じる彼女の豊かな乳房、それは密着されたことで卑猥に形を変え背中へ柔らかな感触と体温を伝えてくる。

さらに彼女は、肩口へ顎を乗せてきた。横を向くと彼女の整った顔立ちが間近に見え、妖しい微笑みと共に長い舌が顔を覗かせる。そして暗闇の中、真っ赤な舌は唇をなぞるように這わされる。形を確かめるように、口の端から端まで唇を味わうように蠢く舌。

徐々に彼女の舌は大胆に、唇を蹂躪するかの如く激しさを増す。すると、ぴちやぴちやと彼女の唾液にまみれた舌が、卑猥な水音を立て始める。

「——ん、んう、——ッ——はア——」

ついには、唇を強引に押し上げ口内にまで舌が侵入してきた。絡み付いてくる彼女の舌は、まるで別の生き物のように舌腹を擦り上げてくる。それだけではなく、歯といわず歯茎といわず、口内が彼女に蹂

躓られて行く。

時おり呼吸に合わせて、どちらのものとも区別が付かないほどに混じり合った唾液を呑むと甘い味、言葉で形容できない痺れが脳を焼く。

「——んア、ん——つちゆ、——はア——ふふっ——」

ジャンヌ・オルタは追撃を緩めてくれない。

吸われ、擦られ、荒ぶる彼女の舌に翻弄されている間、すでに彼女の腕が次の標的を見定めていたようだ。いつの間にか籠手は消失しており、彼女は素手。色素の薄い彼女の白い手は、暗闇の中では本物の蛇に見える。

細く長い指に、履いていたズボンのベルトが苦もなく外された。ずり落ちていくズボン、露にされた下着。布一枚を隔てて、すっかりキスによる昂りで固くなった肉棒をなぞる。

「——ん、はあ——ふふっ、気持ち悪い。このおぞましい棒で、あの聖女様も啼かせちゃったのかしら？」

先端を丹念に指先でなぞられる、布越しとはいえ敏感な場所を執拗に責められ無意識のうちに漏れる先走り。下着へシミを作っても、彼女は一向に愛撫を止めようとしめない。

「あら、興奮したの？　ますます気持ち悪いわね——」

遂に、彼女の掌が下着の中へと侵入してきた。そして抵抗する間もなく下着は剥かれ、昂った肉棒が露にされる。外気に触れ萎縮してしまいうだったのが、その前にジャンヌ・オルタの指が肉棒へと這わされる。

上から被せるようにして握られた肉棒が、緩やかに上下へ擦られ始めた。それほど強く握られてはいないが、指が龟头を撫で、カリを引つ掻け、裏スジをなぞる。どれもが脳髓を揺さぶるほどの快感を伝えてきて、自分の意思とは関係なく肉棒はビクンツ、ビクンツと痙攣してしまう。

「——もう果てそうなの？」

すでに肉棒の先端から溢れた先走りが潤滑油となり指を、掌を汚してしまっていた。そのせいで彼女が上下運動により肉棒を擦る度、に

ちや、にちや、と粘性音が響くのを聞きジャンヌ・オルタが歪んだ笑みを見せる。

だが、何とか耐えている。まだ、欲望を解放するには至らない。いまだに快感が背中へ走り、愛撫の度にビクビクと肉棒は情けなく痙攣していても――

「――気に入らないわね」

だが、それはジャンヌ・オルタの気に障ったらしい。盛大に糸を引きながら掌と、指が肉棒から解放される。どうしたのか、と思った時。ふと背中へ感じていた乳房と、肩口へ乗せられていた顎の重圧が消える。

――背面から前へと回り込んできた彼女は

――そのまま足を折り屈み込むと

――その整った顔を、肉棒へと近付けていき

「――ん、っ――」

唇を、亀頭の先端へと当ててきた。そして微かな光源に照らされテラテラと光る先走りを、舌で舐め取ってくる。その瞬間、これまでにない快感が背中を突き抜けた。

「――んあ、む――ぺろっ、――ッ――」

熱い吐息と共に舌先が、つつつ、と裏スジを這っていく。上から下へ、下から上へ。舌と共に頭を上下させる度に、下半身全体へ電流が走ったのかと錯覚する。そんな感覚など歯牙にも掛けず、彼女は執拗に、それでいて丹念に舌腹のザラついた部分で亀頭を擦り続けている。

「――んちゅ、――れろ――、――あん――はア――」

途中ビクンツと一際激しく跳ねた肉棒が、舌の快感から逃げるようとした挙げ句、彼女の鼻先を小突いてしまう。自分の意思とは無関係に動いてしまった肉棒による報復、先走りで唇から鼻先までを汚された彼女が、非難するように上目遣いで睨んできた。

「――んう――くっさあい、吐き気がするわ」

口ではそう言いながらも、彼女の表情には恍惚が窺える。そんななか、肉棒のサオ部分が握られた。痙攣による快感からの逃避を許さな

い、と固定したのだろう。

——瞬間、亀頭が彼女の口内へと呑み込まれていく

「あ——ん、むう——」

熔けそうな口内の熱と、粘性を帯びた唾液が亀頭を包み込む。唇で甘噛みされる肉棒は快感に震え、中で蠢く舌は亀頭へと絡みついできて先端や裏スジを擦り上げてくる。その快感は、射精したいという欲求を煽り、霞んだ視界は明滅し、膝を震わせてしまうほど。

その反応を楽しむかのように、肉棒をくわえたまま上目遣いで見上げてくるジャンヌ・オルタ。快感に抗おうとする意思を感じてか、眉根を上げた彼女は唐突に——

「——ん、っ——んっ、——ん、お——ッ——」

さらに肉棒を口内へ迎えようと、腰へと顔を埋めてくる。肉棒の根本部分まで唇が到達すると、今度は吸い付きながら顔を離していく。唇によってサオを擦られると肉棒は少しずつ膨張を始め、蠢く舌に裏スジを始めとし全体をねぶられ、喉奥を亀頭が小突く度に先走りが漏れてしまう。

腰の奥から沸き上がってくる、射精への欲求。自分のモノであるはずの肉棒は、別の意思をもっているかのようにで自制が利かない。

「ん、んッ、——むう——んッ、——ッ——ッ!!」

限界が近い、もう膨張しきって痛いほどに固くなった肉棒を通して、彼女は察したのだろう。頭を前後させる速度が徐々に上がっていく。早く、激しくなったストロークに比例して、快感が先程よりも小刻みに脳髓を叩いてくる。

彼女の頭が激しく動く度、先走り口内の唾液が混ざった粘性の体液が、じゅぽっ、じゅぽっ、と卑猥な水音を響かせる。

——もう、射精そうだ

異物を口内へ迎えたことによるものか、ジャンヌ・オルタの目尻には涙が浮かんでおり苦悶の表情。それすら、もはや射精を促進させる要素の一つでしかない。激しく、大きく痙攣を繰り返す肉棒。

「——んんッ、んッ、ぷア、はあ——出しちやうの？」

口を離した彼女の舌が、れろお、と肉棒を舐め上げてきた。大きく

口を開け、肉棒の先端から白く濁った体液が漏れ出ているのに気付いた彼女は——固定するために添えていた掌で、激しくサオ部分を擦り上げてきた。

ゾクゾクと駆け上がったってくる快感、腰の奥から来る射精への欲求、もはや止められない、止まらない。抵抗することもできず、欲望に身を任せようとした時。

「ほら、我慢しないで。私めがけて、生臭くて、気持ち悪いの、たあくさんびゅびゅーってシてもいいのよ——」

——理性と我慢は、決壊する

腰の奥からせり上がってくる快感、それはあつという間に肉棒へと集束し、膨張しきった肉棒を駆け抜け、龟头の先端から勢いよく、飛び出した。

「あ、ああんツ——びゅびゅって、きたあぁツ!!」

肉棒から放たれた白く濁った体液は、目の前で大きく口を開けていたジャンヌ・オルタへ降りかかる。顔も、髪も、頬も、唇も、舌も、ドロドロとした精液を浴びて汚されていく。絶頂は過ぎていくものの、いまだに精液は龟头からほとばしっており止まる気配がない。

獣のような生臭い、鼻につく精液が彼女の顔を汚し、滴っていく。どこか恍惚としており、うつとりとした満足げな表情を浮かべるジャンヌ・オルタは、いまだに先端から精液を吐き出す肉棒を——

「あー、んツ——んくっ、んぐツ——んっん、ん、——」

口にくわえ吐き出される精液を飲み下していく、その度に彼女の喉はゴクツ、ゴクツ、と大きく鳴動していた。喉奥を精液が叩き、ドロドロとしたそれが喉を通っていく感覚に、ジャンヌ・オルタは身を震わせていた。

数秒ほど続いた射精も、ようやく精液が出尽くした。それを察してか、じゆるっ、と音を立てながら口内から肉棒が解放された。顔中どころか、髪や黒い修道衣までもが白濁に汚された彼女は射精の余韻で緩やかにビクンツ、ビクンツと動く肉棒を愛しそうに舐めていく。

肉棒の中へ残った最後の一滴までを舌と唇で吸い出したジャンヌ・オルタの顔は、ひどいものだった。陶磁器のような肌、艶やかな髪、ど

こもドロドロに汚れテラテラと光って見える。

もはや、足腰は立たなくなっていた。膝が力を失い、その場へと座り込んでしまう。そんな自分をジャンヌ・オルタは、少し精液が付いた舌をちろつ、と覗かせながら侮蔑の視線で見下してくる。

「はあ——まずつ、しかもドロドロ、どれだけ溜めてたの？」

クスクスと、先ほど精液を飲み下したばかりの喉を震わせ笑った彼女は、不意に立ち上がった。汚ならしい、と精液が付着した黒い修道衣を脱ぎ捨てていく彼女が向かうのはベッド。

修道衣の下、彼女の豊満な乳房と難攻不落の秘部を覆う下着は、これまた黒。ベッドへ腰掛けたジャンヌ・オルタは、まるで挑発するように足を徐々に左右へ開き——

「まさか、一発で玉切れとか萎えること言わないわよね？ どうせなら、こつちも味わいたいんじゃないか？」

その誘惑に、勝てる者はいるのだろうか？

立ち上がることはままならないので、まるで這いずるかのようにベッドへ、脚を広げる彼女の元へと近付いていく。その様を楽しそうに眺めていたジャンヌ・オルタは、脚を広げきる。

さらには、指先を自身の秘部へと持つていくと黒の下着をズラし、その奥へ隠されてた割れ目を覗かせる、まるで見せ付けるかのように。

「——さあ、いらっしやい？」

遠目に見ても分かる、ズラされた下着の奥から顔を覗かせた割れ目から、涎のように愛液が垂れていたのが。それは、先ほどまでの行為によるもの、彼女も昂っていたことの証。

吸い込まれそうな光景を前にして、思ったのは——

↓「優しく犯す」

「激しく犯す」

黒の聖女（3）　　激

「優しく犯す」

↓「激しく犯す」

見せ付けられた秘部へと吸い込まれていくなか、ふと思い至った。このまま流されるというのもいいが、やはり彼女が啼く声も聞いてみたい、と。

「どうしたの？　はやく来なさい、欲望のままに、ね」

彼女の指が、自らの意思で秘部の入口を拡げる。糸を引く愛液が淡い光に照らされ、指に触れると、くちゅつ、と卑猥に音を立てた。

徐々にベッドへ近づき、体を上げ、広げられた脚の間へ体を持っていくと、思惑通りにコトが運んでいるのが嬉しいのかジャンヌ・オルタは黒く笑みを浮かべる。だが、その余裕の表情は一気に変わった。

秘部へ顔を押し当て、割れ目を目掛けて舌を這わせた瞬間。

「——ッ——ちよ、違——あんッ!!」

彼女の股間へ顔を埋めると、甘い雌の臭いが鼻についた。それでも構わず唇を用いて割れ目へ、ヒダへ、陰核へとしゃぶりつく。じゆるじゆる、と息を吸い込む度に唾液と愛液が鳴る。

予想外の事態に、ジャンヌ・オルタは今、何をされているのか瞬時には理解できなかつた。ただ下半身から、自身の秘部から感じる感覚が背中をゾクゾクと震わせるだけ。こんな感覚は知らない、とベッドの上で身動きし逃亡を図るが——

「やめ、あ——んんう、——はあん——」

彼女の細い腰を掴み、顔の押し当てを強めてやる。それだけで拘束され逃げることも叶わない、あとは彼女にされたことを仕返すだけ。執拗に、丹念に、体が昂りを求めるまで、秘部をねぶり倒す。

べちやべちや、くちゅつくちゅつ、わざと卑猥な水音を立てながら秘部へと唇を当て、ヒダを吸い、舌をもって入口をほじる。その度に、

面白いほどに彼女は腰をビクンツ、と跳ねさせた。

抵抗のつもりなのか、秘部から顔を離させようと頭を押してくる腕。だが、その力は弱々しく、離そうとしているのか、さらに強く押し付けようとしているのか、見た目では分からない。

「——ッ——ッ——ッ!!」

ふと気付けば、先ほどまで彼女が上げていた喘声は聞こえなくなっていた。変わりに、苦しそうな荒い呼吸音と、くぐもった声が聞こえてくる。

その理由は、自分の二の腕へ噛み付き、意思とは関係なく漏れてくる喘ぎ声押し殺そうとしていたからだ。顔を背け、必死に声を押さえようと努める彼女の姿は新鮮で、嗜虐心を刺激する。

彼女の強く閉じられた目元、目尻には涙が見て取れる。秘部を通して走る電流のような快感が背筋を震わせ、抗えぬ感覚に翻弄された腰は力を入れ耐えようとしているが、抵抗もむなしくビクンツ、ビクンツと跳ね続けていた。

「——ッ——ッ——ッころ、ひて、やりゆ——ッ!!」

唇と舌で愛撫している最中、上目遣いで様子を伺っていたのがバレたらしい。腕へ噛みついたまま、怨嗟の声を呟いてきた。しかし頬を紅潮させ、下半身を好き勝手になぶられ続けて体を跳ねさせてしまいい、甘く高い喘声を必死に押し殺すことしかできない彼女の瞳へ覇気はない。

どうせ容赦する気などないのだ、さらに腰を強く固定し舌で割れ目の入口を押し上げ、中へと埋没させていく。それに気付いたのか彼女が抵抗の意思を見せるが、もう遅い。ぐちゅつ、という生々しい音と共に、舌が彼女の秘部を、内部の膺壁を擦り上げた。

「——ッ——ひぎゅ、——ん、んんんツ——ッ!!」

瞬間、彼女は仰向けのまま大きく背筋を反らし、腰を大きく跳ねさせた。ただらだと、舌で強引に押し上げた割れ目から愛液が溢れてくる。それと唾液を混ぜた潤滑油によって、彼女の体内へ舌を挿し込んでいく。

ぐちゅつ、ぐちゅり、と音を立て膺壁を舌のザラついた部分で擦る

度、侵入してきた異物を拒もうと周囲の膣壁からの圧迫は強まってくる。負けじと舌へ力を込め、締め付けてくる膣壁を押し返す。

「んんッ、——うあ——んんッ——あんッ——ッ!!」

もはや彼女は、自分の二の腕へ噛み付き喘ぎ声を押し殺すことさえ出来なくなっていた。代わりに腕を顔の前へやることで、自分の顔を出来る限り見られぬようにするのが精一杯。

自分の思い通りに動かない体、秘部から侵入してくる舌という異物の感触、秘部を通して絶え間なく襲ってくる強烈な快楽の波、それはジャンヌ・オルタの理性を徐々に剥ぎ取り昂らせていく。

きゅ、きゅつ、と舌を締め付ける膣壁が不規則に痙攣を始める。すでに溢れた愛液はシートへ大きなシミを作るほど、気を抜けば溺れてしまいそうだ。

「——ん、い——も、やめ——ろお——ッ!!」

必死の制止、しかし止めない。顔を、口元を、これまで以上の力で秘部へと押し付ける。鼻先と充血し真っ赤になった陰核がぶつかり、伸ばしていた舌はさらに膣の奥深くへと侵入した。

ぞわっ、とジャンヌ・オルタの背筋へ寒気が走った。これまで以上に自分の中へ入ってくる舌と、鼻先に潰される陰核の刺激で彼女の肢体は一気に昂り絶頂を求め始めた。

「んああ——ッ——そ、こ——ら、めえ——来るう——ッ!!」

おそらく無意識なのだろうが、彼女は自身の秘部を押し付けてきた。意思とは裏腹に快楽を求め始めた体は、快感の荒波が絶頂を運んでくるのを予感し強張らせる。

舌が出入りする度、膣壁を擦る度、溢れる愛液は量を増やしていく。両脚の爪先はピンと伸び切り、掌は引き裂かんばかりにシートを握りしめる。

そこに居るのは、もう先ほどまで強気に出ていたジャンヌ・オルタではない。蕩けた表情を浮かべ、快楽により弛緩した唇からは唾液を垂らし、体中で快感を得ようとする一匹の雌。

——そして、その時は訪れる

あらん限りの力をもって鼻先で陰核を潰し、膣壁を搔き分け届くと

ころまで舌を突き入れた瞬間、ぷしゅつ、と彼女の秘部から勢いよく潮が噴き出した。

「あ、——んんっ——いッ——あああああッ!!」

不規則に締まる膣壁が舌を押し潰されるのを感じながら、噴き出した潮を飲み下していく。すると、絶頂を迎えて腰をビクンツ、ビクンツと何度も跳ねさせていた彼女だったが、唐突に全身が弛緩していくのを感じた。

頭の左右から圧迫を続けていた両脚は力なく放り投げられ、シーツを握りしめていた手や、顔を隠すために掲げられた腕にも力は込められていない。

絶頂の余韻か、まだ微かに痙攣を続ける彼女の体。荒い息を吐く度に揺れる、いまだ下着で隠された乳房。そんな弱り果てた彼女の姿を確認し、秘部から顔を離す。すると、にちやあ、と糸を引いた愛液、または唾液が重力に引かれぷつりと切れる。

「——は、——ッ——はあ、はあ——はっ——」

顔を離しても、彼女に反応は見られない。離したことさえ、気付いていないのかもしれない。

舌で強引に、好き勝手に彼女を蹂躪した興奮、行為の果てに絶頂を迎え弱々しい姿を見せる彼女。その事實は、さらなる欲求の呼び水。

——彼女を犯したい、蹂躪したい

——いまだ弱々しい彼女を、懇願してくるほどに責め立てたい

——今すぐにも、彼女の膣内^{なか}で果てたい

その欲求のままに力なく放り投げられた彼女の脚を広げ体を振じ込むと、秘部へと腰を近付け、もう完全に復活していた肉棒の先端を当てがった。

「ふあ? え、ちよ——待って、今は敏感に——ッ!!」

そこまでされては、さすがに絶頂の余韻へ浸っていた彼女も、何をされようとしているのか気付いたようだ。今さら脚を閉じようとしても、押し退けようとしても、逃げようとしても、それは無意味。ドロドロに蕩けた秘部と亀頭が触れ合うだけでも、粘液の感触と熱で果ててしまいそう。

制止の言葉など無視し、一気に腰を秘部めがけて叩きつけた。

「——あああッ——んぐッ、——ッ——ひいッ!!」

ぐちゅり、という生々しい音と共に亀頭を秘部へと埋没させていく。左右からの圧迫などものともせず、奥へ奥へと強引に押し込んでいく。すると絡み付く愛液と膣内の熱さが肉棒を襲い、ゾクゾクと背中へ突き抜けていった。

途中、何か固いものにぶつかった気がしたが、お構いなしに腰を前へ前へと押し出していく。すると破瓜によるものか、秘部から愛液と混ざり桃色の体液が筋を引いてきた。

「——いたっ——やめ、——おね、が——ッ!!」

体の奥から走ってくる痛みには耐えかねたジャンヌ・オルタの顔が歪み、頬を涙で濡らし、懇願するような瞳で見上げてくる。だが、それは興奮を煽るだけ。支配していく、蹂躪していくという優越感。それは肉体的な快楽とは違った別種の快感となって、背筋をゾクゾクと震わせる。

そして、ついに、亀頭が彼女の膣内、最奥へと到達する。充血し固くなった亀頭がぶつかるコリコリとした感触、それはおそらく子宮口。

「——ぐっ——ううッ——ッ——はあ、——はあッ——!!」

ようやく止まった異物の挿入感と、破瓜から来る激痛。それを恥も外聞もなく、顔をぐちゃぐちゃに汚しながら、荒い呼吸を繰り返すことで耐えるジャンヌ・オルタ。

だが、まだ終わりではない。突き出した腰を、今度は徐々に引いていく。カリが締め付けてくる膣壁を擦ると、中へ埋もれた肉棒を離すまいと吸い付いてくる刺激は圧倒的だった。

「——あ、——動、く——なアッ!!」

これには、彼女も対応に困る。痛みには耐えようとすれば体は強張り、図らずも肉棒を締め付ける膣圧を強めてしまう。しかし力を抜けば痛みと快楽に身を委ねてしまい、それこそ彼女自身、どうなってしまうか分からない。

苦悩する彼女へ、考える時間は与えない。

肉棒は粘液にまみれていたおかげか抵抗も少なく、半ばまで引き抜かれ止まる。だが停滞も数秒、再び腰を強引に前へと倒し肉棒を秘部へと戻していく。

——あとは、ただ、ひたすらにそれを繰り返すだけ腰を引き、肉棒を半ばまで引き抜く。

強引に腰を押し出し、出したばかりの肉棒を埋没させていく。

この動作を、何度も、何度も、ゆっくりと。

回数を重ねる度に蓄積されていく快感、秘部の中を往復し続ける肉棒は緩やかな刺激に痙攣の回数を増やす。互いが互いを高め合い、昂らせ、絶頂へ向けて走り始める。

「——あ——ッ——く、う——ん——ん——ッ!!」

次第に彼女も、痛覚は薄れてきたようだ。膣内へ肉棒を挿し込んだ直後とは違う声音。痛みだけではなく、違った感覚によって漏れてしまふ高い声質へ変わっていく。

だが、それを認めたくないのか、唇を引き結んだ彼女は腕を顔の前で交差させ抵抗の意を示す。その行動はさして効果がない、むしろ逆効果であることを知らぬまま。

迫り来る射精への欲求は、さらに強い快感を求め無意識に腰の動きを早めていく。じゅぷつ、じゅぷつ、と音を立てる結合部は体液が弾け、白く濁った糸を引きシートを汚す。

「——んっ——んう、ッ——ん——ッ!!」

早くなつていく腰のストロークに合わせて、喘ぎ声を噛み殺す熱い吐息が聞こえ始める。気になったのは、今の彼女の表情。どのよう顔に歪ませているのか、見たくて堪らない。交差された腕、その手首を掴み強引に引き離そうと力を込める。

「——ッ——や、やめ——ッ——んっ——見る、なあ——」

本人は睨んでいるつもりなのだろうが、瞳に力が感じれない。むしろ焦点の合わない瞳は涙ぐんでおり、引き結びたい唇は弛緩しているのか閉じきらず端から唾液を垂らす、と酷い有り様。

嗜虐心と支配欲のままに、ジャンヌ・オルタの頭へ手を回し固定してから唇を奪う。閉まり切らない唇から舌を口内へ侵入させるのは

容易く、熱い吐息を間近に浴びながら舌を絡めていく。

戸惑いながらも絡めた舌を味わっていた彼女の両手が、首へと巻き付いてきた。互いが互いを求め合うように体は密着し、唾液を交換していく。

「んう、あむ——ちゅ、——ふあ——ツ——あんツ——ツ」

昂りは、限界間近。

キスに集中するために止めていた腰が、再び前後運動を再開する。より強く、より激しく、上の口と下の口を責め立てた。水音に加えギシツ、ギシツ、とベッドが軋む音も大きくなっていく。

膣奥の子宮口へ、亀頭で何度もノックする。コリコリとした感觸の入口へ亀頭が擦り付けられる度に、互いはビクビクと体を痙攣させていた。

「んああ——ツ——んちゅ、あん——あ——ひうツ——あ、ああん——く、んううツ——ツ!!」

せり上がってくる射精感と共に、膣壁を擦る肉棒が徐々に固さと太さを増していく。射精の前兆だ。膣内で肥大化する肉棒を膣越しに感じたジャンヌ・オルタは身を強張らせた、が、思い直したかのように瞳を揺らすと——

——彼女の細く長い両脚が、腰へと絡み付いてきた

動きが制限されても、腰の動きは止まらない。首へ回された腕で頭は固定され、両脚を絡めた腰は後退と離脱を許さない。もはや射精までは、秒読み段階。いつ爆発してもおかしくない。

——なのに

「ああ、気持ち、いい——アナタのが、んちゅ——出た、り——あ——入ったり——い、嫌なの——にイ——ツ——やあ、怖い——すごいのが——く、くツ——りゅうう——ツ!!」

彼女は羞恥のタガが外れたのか、唇を離し快樂の大波に煽られる不安、快感を恥ずかしげもなく喘声と共に叫ぶ。その言葉が、どれだけこちらを昂らせるかを知らぬまま。

「あ、ツ——やア——も、おかしくな、りゅ——ころひ、たいの——にイ——こん、なの——覚え、たら——も、戻れ——な、ひ——ツ

!!

膣壁は中へと埋まる肉棒を引き千切らんばかりにキュツ、キュツ、と不規則に締め、最奥の子宮口は口を開け欲望のままに放たれるであらう迸りに備えていた。もう彼女は、受け入れ態勢にある。あとは、ただ、快樂と欲望の赴くままに――

「あ、あああッ――激し、イ――こ、壊れ、りゅ――うう、んッ――来て、――出し、てえ――びゅびゅ、つて――アナタの、が――欲し――ッ!!」

膣の中で肥大化した肉棒が、ビクンツと大きく跳ねた。もう耐えられない、背中から登ってくる絶頂と射精感を予期したと同時に――ずりゅ、と力の限り腰を秘部へ押し付けた。

瞬間、龟头が口を開けた子宮を叩くと――

「――あ、――来る、来るウ――すごい、のオ――い、くうん――イ、ク――あ、あああああッ!!」

同時に、絶頂を迎えた。

――龟头から、勢いよく精液が迸る

――注がれる精液を溢さぬよう、子宮は伸縮を繰り返す

ドクンツ、ドクンツ、と脈打つ肉棒。痙攣の度に噴き出す精液が子宮の中へと溜まっていくのを感じるジャンヌ・オルタは恍惚の表情を浮かべ、続けて何度も訪れる緩やかな絶頂に何度も身を震わせていた。

「――あ――あ、ああ――いっぱい、出てりゅ。あつ、くてえッ、ドロドロでえ。も、入らな、ひ――あん、む――れろ――ちゅ――」

体を密着させ、精液を子宮へ注ぎ終えるまで二人は舌を絡め合い余韻に浸る。貪るようなキスではなく、ついでむような、緩やかな口付け。

――唇が触れ合う度に幸福感、充実感が

――二人の胸中へと訪れる

――そんな、一夜の夢



「ケダモノ」

シートで体を隠したジャンヌ・オルタが、非難するように睨み付けてきた。どちらが先に誘ってきたんだ、と言いたいところだが、我を忘れてしまったのは事実。否定しようにも否定し切れないのは辛いものがある。

「あ、そうだ、対価は命だったわね——」

言われて、思い出した。

いつそバツサリやってくれ、と合掌。

しかし、反応はない。チラツと彼女を盗み見ると、かすかに頬を染めながらシートで口元を隠し黙ったまま。だが、こちらの視線に気付いた彼女は——

「ま、今回は貸しにしといてあげるわ。次で返してちょうだい」と、呟いた。

しかし、”次”というのは——

「ええ、せいぜい私の機嫌を損なわないよう善処なさい。もし少しでも苛ついたら、容赦なく”斬り落とす”から——」

黒い笑みを浮かべる彼女は、それ以上答ええない。”何を”斬り落とすつもりなのかは、考えない方が良さそうだ。むしろ察したとしても全力で分からないフリをしろ、その方が身のためだ、と全神経が警笛を鳴らしていた。

触らぬオルタに祟りなし、だ。くわばらくわばら。

〈END〉

黒の聖女（3）　　く優く

↓「優しく犯す」

「激しく犯す」

吸い込まれるように彼女へと近付いていく途中、ふと思った。流されるまま、欲望のままに体を重ねていいのだろうか、と。答えは否。彼女に言葉を伝えていない、想いを明かしていない。

ベッドへ乗り彼女の目の前まで来ると、間近に黒い微笑みが見える。何を企んでいるのかは分からないが、いま優先すべきは彼女の思惑ではない。ジャンヌ・オルタの肩へ手を添え、倒れ込む勢いのままに相手を押し倒す。

ベッドへ押し倒され仰向けになった彼女は、何が起こっているのか分からずキョトンとした表情。そんな彼女へと覆い被さり、体を密着させ、顔を耳元へと寄せていくと——想いを、口にした。

「好きだよ」

「愛してる」

「はア？　アナタ、何を言っつて——ひうツ!!」

彼女からの答えは待たない。言葉を遮るように、目の前にある形の良い耳へ軽く歯を立てる。するとその感覚に驚いたのか、密着している彼女の体がビクンツ、と大きく跳ねた。

甘噛みによる緩やかな刺激、それは直接的な快樂とは別種のもの。慣れない快感が体へ走る度に、ふるふると、彼女の体は小動物のように震えてしまう。強気で口汚い彼女が見せた弱々しい姿は、とても愛しく思えた。

髪の毛の匂いなのか、彼女の匂いなのかは分からない。まるで花のような匂いを鼻先に感じながら、彼女の耳と、その周囲へ唇を這わしていく。耳の裏、頬、首筋、鎖骨へと唇を滑らせ、向かう先は彼女の豊満

な乳房。

「んッ——あ——はあ、はあ——」

体中へ唇を通し与えられる微弱な快感、くすぐったさから身を捻ることと逃避しようとするジャンヌ・オルタ。しかし体を密着させ、上から組み敷かれているせいで上手く逃げられない。

それどころか体を捻ったことによつて、彼女の豊富な乳房を包んでいた下着がズレてしまう。おそらく、背中側にあつたホックが、動いた時にシートへ引っ掛かり外れてしまったのだろう。偶然に助けられながら、逃げようとする彼女を追い詰めるために、乳房へと唇を這わす。

「んッ——」

柔らかい弾力に、唇が弾かれる。顔を埋めれば埋めるほど、弾力で強く反発してくる乳房の柔らかな感触。それを口先だけで確かめていると、ふと気付く。ドクンッ、ドクンッ、と早鐘を打つ彼女の心臓の音に。興奮しているのか、期待しているのか、それは彼女にしか分からない。

卑猥に形を歪ませる乳房を登頂していると、ふと頂上部で自己主張を始める乳首が見える。すでに充血し、ぷつくらと膨らんでいるそれを、口にふくんだ。

「あ——ひゃあん——ッ!!」

瞬間、甲高い喘声上がる。が、その声に最も驚いた様子を見せたのは、他ならぬ彼女自身。不意打ちで訪れた快感へ、過敏に反応した結果。もう油断はしない、と強い意思を感じる瞳で睨み付けてくるが

「ひ——ッ——あぐ——んんっ——うッ、ん——ッ!!」

乳首を唇で擦る度に、舌先で突く度に、硬い歯で甘く噛み付く度に、彼女の意思とは裏腹に漏れ出てくる喘声。快楽によつて制御できない、と彼女は悟り代わりに口元を掌で覆って、漏れ出てきそうな喘声を無理やり飲み込もうとしている。

それは、嫌だ。彼女が上げる喘声を、もつと聞きたい。快楽に翻弄される表情を、もつと見たい。少し強引に口元を覆っていた彼女の手

を取り払う、その時かすかな抵抗を感じたが、戻させるわけにはいかない。掌を重ね、指を絡めてやる。

「——やっ——ひう——あん——やめ、んんツ!!」

懸命に身を振り逃げようとするが、指を絡めた掌と密着させた体がそれを許さない。むしろ体が捻られる度に、下半身の肉棒と彼女の腹部が擦れ興奮が高まっていく。

心は絡み合う指に囚われ、耳は甲高い喘声に犯され、密着させた体が熱と快感を共有する。凶らずも、互いが互いを昂らせていく。そう、彼女も少しずつだが理性が瓦解しつつある。

—— 快楽を求めてしまう体は火照り

—— さらになる快感を、さらになる快楽を

乳房から口を離すと、ぷつくりと充血した乳首が外気に触れピクツ、と震えた。唾液でテラテラと光っている様は卑猥で、見惚れてしまいそう。だが、それを堪えて顔を上げると、彼女の顔を覗き込んだ。

「——はあ——あ——ん——な、何——?」

トロンとした、どこか蕩けるような顔。荒く呼吸する唇はかすかに開かれ、熱い吐息を吐き出す。色素の薄い肌、その頬が朱に染まっている。なかば無意識のうちに、空いていた手を伸ばし彼女の頬を撫でる。

すべすべしている彼女の頬は、とても触り心地が良い。朱に染まっているせいか、かすかに熱を帯びているのが分かった。

「——なに、よ——何のつもりなのよ、これ——」

そう言いながらも、彼女は頬を撫でる手を重ねてくる。払い退けられるかとも思ったが、その反応は予想外だった。自分の心臓が、早鐘を打ってしまうのを自覚した。ゴクリ、と唾液を飲んで鳴った喉が妙に大きく聞こえた気がする。

顔を寄せていく、すると彼女は意図に気付いたようだ。一度だけ視線を逸らす、が、思い直したかのように伏せると、最後に瞳は閉じられた。これは、同意の証。

頬へ手を添え、顔を寄せ、唇を重ねた。

「——ッ——んう——あ——ちゅ——」

薄く開いた唇へ、優しく噛み付いてみる。すると同じように、ジャンヌ・オルタは重ねた唇を律儀に噛み返してきてくれた。求められたという事実には、心が踊った。ついでに唇を重なる度ちゅつ、ちゅつ、と音が鳴る。

堪らなくなり、舌を出して唇をなぞってみた。最初はビクツと体を揺らしたものの、抵抗はない。むしろ、彼女も薄く開けた唇から舌を出してきて触れ合わせる。

舌先と舌先がぶつかり、ぴちや、と唾液が跳ねる水音が響く。もはや互いに理性というタガは外れてしまっていた、求めるがままに舌は絡められ、求められるがまま舌への愛撫を受け入れる。

「——んあ——む、ん——ちゅ——はん——あ——れろつ——」

背中へ、彼女の腕が回される。口付けにより呼吸が難しくなり、苦しきから逃れようとしたのだろう。だが、それでは互いに止まらない、止められない。舌と舌が絡められ、唾液を混ぜ合い、吐息を交換し、興奮のままに昂りへと身を任せる。

そして、どちらとも言わず唇が離れると、舌と舌を繋いでいた唾液の糸がぷつりと切れる。熱に侵された思考、理性を失い本能が鎌首をもたげ、瞳を交わらせた。瞳は、これから行われる行為への期待に揺れる。

密着していた体を離し、ベッドへ座ると衣服を脱ぎ捨てた。それを見た彼女も恐る恐るベッドへ座ると、下着を外し、脱ぎ去っていく。

「——み、見ないで、よ——気持ち、悪い——」

一糸纏わぬ姿になった彼女が、腕を胸の前で交差させる。先程まで愛撫していた乳首は腕に隠されてしまったが、彼女の豊満な乳房までは隠せるはずもなく。羞恥に頬を染めながら顔を背け、自分の体を抱くような格好の彼女は嗜虐心がそえられる。

身を寄せ彼女の背中へ手を回してやり、優しくベッドへと寝かせてやる。一つになりたいという欲求に背を押されるまま、彼女の膝へ手を置く。徐々に開かれていく脚、露になっていく彼女の大事な部分。

先の口淫、乳房への愛撫によって、すでに彼女の受け入れ態勢は

整っていたようだ。秘部の周囲は愛液によって濡れそぼっており、割れ目は彼女の呼吸と呼応し入口を開閉させる度に、とろつと新たな愛液を垂らし続けている。

「だ、だから——見るなって言っただけでしょ——」

少し凝視し過ぎてしまったようだ、ジャンヌ・オルタに咎めるような視線を向けられてしまった。気を取り直し、開ききった彼女の脚の間へと体を入れる。そして、もうすっかり戦闘状態になっている肉棒を、割れ目になぞり擦り付けた。瞬間、裏スジへ愛液と柔らかい肉の感触が熱を伝えてくると、背中へゾクツと快感が走った。

抗い難い快感は脳髓を焼き、今すぐにも彼女の膣内へと肉棒を挿し入れ蹂躪しろ、と訴えてくる。だが本能を辛うじて残る理性で抑え込み、亀頭で割れ目をなぞるだけに留める。先端から先走りを漏らし、愛液と絡ませ、混ぜられた体液でくちゅつ、くちゅつ、と触れ合った性器同士が鳴る。

「——ひい——んん——ツ——あ——」

その時、ふとジャンヌ・オルタは何か言いたそうに口を開いた。切なそうで、悲しそうで、不安そうな表情。気になったので行為を中断し顔を覗き込んでみるも、彼女は口を開くだけで言葉は出さない、そして最後には顔を背けてしまった。

なんだろう、何を言いたかったのだろう、疑問は鎖となつて心へ絡み付いてくる。どうしても、さっき彼女が言い淀んだ言葉を聞きたい。思い至ったら、あとは実行するのみ。

彼女の秘部へと押し付けていた肉棒、その亀頭から裏スジにかけて愛液を塗りたいと一度離す。今度はサオ部分をあてがい、ゆつくりと腰を上下させ割れ目をなぞっていく、互いの性器の形を確認するように。

「——ふあ——んツ——あん——う、んん——」

摩擦する二人の性器、擦られる割れ目と、起立した肉棒。くちゅつ、くちゅつ、と音を立てながら擦り合わされる度、緩やかな快感が二人を襲う。ゾクゾクと背筋は無意識のうちに震え、摩擦箇所は火傷しそうなほど熱く、興奮に呼吸は荒くなる。

——ゆっくり、ゆっくり性器を擦り合わせる

——何度も、何度も、緩やかな快感を彼女へ押し付ける

その時、彼女の体が何度もビクンツ、ビクンツ、と跳ね始めたのに気付く。顔を苦悶と不安に歪ませ、両手で自分の頬を挟んで迫り来る何かに耐えているようだ。少しずつ蓄積されていった快感の波は度重なる刺激で大波へと形を変え、振り回されるまま理性と体が制御不能に陥ってしまったのだろう

「——ひう——んんっ——あん、っ——や、あ——おか、ひ——おかひくな、りゆう——ツ!!」

下半身からの快感と、彼女の言葉にゾクゾクと背筋が震える。顔を真っ赤に染め今にも泣き出しそうな彼女は、緩やかな、もどかしい性器への刺激に耐えかね荒い呼吸と甲高い喘声を上げる。

まだ、まだ、もつと彼女を狂わせた。強気で口汚い彼女の弱々しい姿を、泣き顔を、懇願してくる様を見たい。欲求を強引に理性で蓋をし、ゆっくり、緩慢とした腰の上下運動で性器を擦り続けた。

「——やああ——それ——えぐっ——ら、めえ——くちゅ、くちゅっ——って——ひうツ——する、の——やらああ——ツ!!」

その甲斐あつてか、とうとう彼女の理性は完全に崩壊した。涙を溢れさせ、緩やかな快感に我慢できないと甲高い声で主張する。顔の前で腕を交差させ見られないようにしてはいるが、脱力している今の彼女には叶わない。隙間から見えた彼女の顔は涙と唾液で、無惨なほどに汚れていた。

おそらく無意識だろうが、彼女も腰を落とし、肉棒へと割れ目を擦り付けてくる。膣の奥からせりあがってくる快感が、肉棒を求め制御不能になった体を突き動かしたのだろう。卑猥に捻って、肉棒をくわえようと先端を探すように蠢く腰を掴む。ここで挿れてしまつては、元も子もない。

—— 快楽を欲する体、溶けていく理性

—— 腰を掴まれ、緩やかな摩擦から抜け出れない

—— もはや彼女は、自分が何を言っているのか自覚できない

「も、むりィ——ほし——のオ——くちゅくちゅ、やあ——なかつア——

ひれ、て——かきまわ、ひ——て——よお——ッ!!」

欲望のまま、求めるままにジャンヌ・オルタは声を張り上げた。その言葉は、互いの理性を完膚なきまでに破碎する。望んでいた、期待していた懇願。涙混じりに快感を求めてくる彼女の言葉に突き動かされるまま——

——割れ目に隠れた秘部へ

——龟头を、滑り込ませた

瞬間、ぞぞつ、と寒気が腰へ走る。溢れる愛液と周りの膣壁を搔き分ける感触、それを肉棒越しに感じて一気に興奮が高まった。止まらない、止められないまま、肉棒をさらに奥へ、奥へと突き入れる。

「——ふあああ、はい——つ、てえ——ッ!!」

異物が性器が侵入してくる感覚、制御できない体が膣を脈動させ、肉棒を締め付けてしまう。その度に、ビクンツ、ビクンツ、と彼女の全身が痙攣し、ベッドの上で何度も跳ね上がる。

その時、彼女の膣内を進む肉棒の先端へ、壁のような、不自然な引っ掛かりを感じた。だが勢いのままに腰を前へ、前へと動かしていたせいか——わずか一瞬の停滞の後、弾けるように不自然な引っ掛かりが消えた。

「ひっぎ——う”う”——あ——い、つ——たあ——ッ!!」

瞬間、彼女の泣き顔が激痛に歪む。

同時に、腰へ違和感を感じ結合部を見下ろすと——

——つつつ、と割れ目から赤い筋が流れ出てきた

——肉棒を伝ってくるそれは

——重力に引かれ、ぽたつ、ぽたつ、と

——シーツへ真つ赤な花を咲かせた

その様を見て、血の気が引いた。いまだに顔を苦悶に歪める彼女は、割れ目から漏れる赤い筋、それは一つの事実へ直結する。そう、彼女は、”初めて”だったのだ。初めて胎内へ男を受け入れた証が、現実を突き付ける。

腰を引こうとした、その時、彼女の手が胸板を叩いてくる。

「——くう、ん——ぬ、ぬいた、ら——ほんと、に——ころす、から——

「ッ!!」

きつ、と涙を浮かべながら睨みつけてくるジャンヌ・オルタ。その言葉は、きつと本気だ。そう察してしまつては、引こうとしていた腰を止めるしかない。だが胎内から伝わる激痛が彼女を襲っているかと思うと、心配になつてくる。

数秒ほど、互いに動きを止めた。彼女の荒く短い呼吸が部屋へ響くなか、眼下の彼女の様子を窺うと――

「んっ――もお――そんな、かお――しないで――」

彼女の掌が、頬を撫でていく。激痛に耐え、無理やり微笑もうとしている。それほど、心配そうな表情を浮かべてしまつていたのでろうか。激痛で泣きわめきたいのは彼女のはず、なのに沸き上がってくる罪悪感を察して氣遣われてしまった。肉欲に支配されていたことを、恥じたくなる。同時に彼女を、とても愛しく感じた。

「――も――だいじよ、ぶ――だから――その――ッ――うごいて？」

歯切れ悪く、ぼそぼそと口の中だけで求めてくる。頬へ添えられた手を取り、再び指を絡ませ、停滞させていた肉棒を腰ごと前へと突き出していく。

ずりゆ、と愛液で滑つた肉棒が、膣壁を擦りながら奥へと突き進む。伸縮を繰り返す膣壁が蠢く度に、愛液にまみれた亀頭が動く度に、頭を殴られるような快感が襲ってくる。

と、ついに肉棒が最奥へと到達したようだ。柔らかい膣壁を搔き分け辿り着いた子宮口、少し固い感触が先端を通して伝えてくる。

「――ひう――んッ――ああ――ッ――おく、きたあ――」

お互いが身動きする度に肉棒の先端が子宮口を引つ搔き、コリコリとした感触が心地よい感覚を伝えてくる。もう奥には行けない、となると次は、肉棒を引き抜くしかない。

腰を引くと、入れる時とは違った感覚に震えてしまう。締め付けてくる膣壁をカリが引つ掛け、擦れる度にゾクツと腰や背中へ電流のような快感が走ってきた。

「――んんう――ッ――ひ――っん――くう――うんッ――」

まだ痛みがあるのか、彼女の表情に快感は見られない。どうすれば涙を流しながらも肉棒の出し入れを受け入れる彼女を楽にできるか、と考えると、一つの結論に達する。痛覚を越える、破瓜の痛みを忘れるほどの快楽を与えてやればいい、と。

——ゆっくり、腰を前後へと揺らす

——馴染ませるように、少しずつ

——何度も、何度も、彼女の膣内なかを行き来する

次第に彼女へ、変化が訪れてきた。食い縛られていた口元は緩み、口の端からはかすかに唾液の筋が見える。時おり体、腰がビクンツ、と跳ね上がる。瞳は徐々に覇気を失っていき、蕩けたように揺れる。

「——んっ——あん——あ——ツ——も——だいじよ、ぶ——だからあ——もつと——はげしっ——く——ぐちゅぐちゅ、て——してえ——ツ!!」

彼女の腕が肩口へと添えられる、先ほどまでの苦痛に歪んでいた表情は掻き消え、どこか物憂げで、懇願するように見上げてきた。強がりに見えなくもなかったが、緩やかな快感に自制が利かなかつたのも事実。

せめて、と思い上半身を落とし彼女の背中と首筋へ手を回し抱きしめてやる。するとジャンヌ・オルタは驚いたように目を点にしたが、こちらの思惑を察してか微笑み背中へ腕を回し返してくれた。

上半身で体温を共有しながら、言われるがまま腰のストロークを早めていく。先ほどまではなかった肉と肉がぶつかるパンツ、パンツ、という音が大きく響き、時おり結合部から体液が弾けるぐちゅっ、ぐちゅっ、と生々しい音が混ざる。

「——んんツ——ひう——あ——ふあ——はッ、ん——んう、ん——あ、や——きも、ち——いっ——よお——ツ!!」

抱き合ったことで甲高く、悲鳴にも似た彼女の声が、吐息に混じり耳元で聞こえる。破瓜の痛みは、すでにない。いま彼女の体を支配しているのは、下半身から這い上がってくる快感のみ。

肉棒が膣壁を掻き分け入り込んでくる度に甘い痺れが脳を叩き、子宮口をノックされる度に体の奥が疼き、引き抜かれ力りが膣壁を擦る

度に意識を持つていかれそうな錯覚に陥る。

抱きしめる彼女の体がビクンツ、ビクンツ、と痙攣しているのが分った。その反応は肉棒によって与えている快感によるもの、自分が彼女の体を翻弄していると思うと興奮が抑えれない。

「——ああん——ぐちゅぐちゅ、ツてえ——ひあ——これ——しゅご、ひ——んんう——あたま——ツ——まつ、しろ——にイ——ば、ばかに——なりゆう——ツ!!」

腰の打ち付けが、無意識のうちに強くなっていく。ドロドロに溶けた蜜の熱が、膣壁の圧迫と相成つて肉棒を焼く。熱と摩擦による快感が腰を、背中を突き抜ける度に膣内^{なか}で肉棒は膨張していき先走りを漏らしてしまう。

すると、ずりゆつ、ずりゆつ、と膣壁が肉棒を求め不規則に伸縮を繰り返し始めた。それは、絶頂への秒読み。もう長くは保たないだろう、お互いに。

「——やつ——ら、め——くる——く、りゆうう——はあ、んん——お、つき——の、があ——やらつ——こわ、ひ——やああ——ツ!!」
彼女の長くしなやかな両脚が、腰へと回された。覆い被さった体は腕と足によって固定され、もう離れることはできない。求められるまま、求めるまま、本能に従い互いに腰を打ち付けあった。

膣内の肉棒が、ビクンツと跳ねる。腰の奥からせり上がってくる射精への欲求を限界間近の理性で堪え、ラストスパートとばかりに勢いよく腰を何度も打ち出した。

「——あ——ああ、ん——ひう、つ——んん——あ——しゅ、きい——らし、てえ——あ、あちゅ、いの——あ、なた——のお——ひつ、ぱい——なか、へ——びゅびゅつ、れ——ツ——ほ、し——ツ!!」

もう、限界だった。涙声で懇願してくる彼女の言葉に、残っていた理性が粉碎された。沸き上がってくる衝動と、解き放ちたいという欲求のままに——力いっぱい、腰を押し付けた。

ずりゆんつ、と勢いよく突き入れた肉棒が、最奥の子宮口をえぐる。すると、凄まじい快感がジャンヌ・オルタを襲った。苦悶に表情を歪め、ぞわつ、と背筋に走る寒気と共に、昂りは頂点を突き抜けた。

「ひう——ん、やつ——あ、い——イク、う——んんっ——イツ——イツくうう——うん——ひあ——んい——あ、ん——ッ——ああああッ!!」

きゆうっ、と彼女の絶頂に呼応して膣壁が締まる。

——瞬間、子宮口とキスをしていた龟头から

——白く、ドロドロとした、精液が迸る

ドクンツ、ドクンツ、と肉棒が痙攣する度に、先端から迸った精液が子宮へと注がれていく。射精感と解放感が体を駆け巡る度に視界は明滅し、飛びそうになる意識を気力だけで繋ぎ止める。

「あ——ん、う——ああ——で、て——りゅ——あつ、い——のおびゅびゅっ、て——お、く——いっばい——ッ——ふああ——」

大きな絶頂の余韻に浸りながら、彼女は小刻みに何度も体を跳ねさせる。子宮へ注がれる精液に意識を向ける度に訪れる快楽は、彼女の体を駆け巡りビクンツ、ビクンツと軽い絶頂を幾度となく与えてきた。

数秒ほど続いた、長い長い射精が終わる。

いまだに彼女の膣壁は精液を欲し伸縮を繰り返していたが、全てを出し切った肉棒は痙攣するだけ。荒い呼吸音だけが響くなか、ふと真横にあった彼女の頬へと口付ける。

「んう——ん——しゅ、きい——ん、ちゅ——」

恍惚とした表情の彼女が、それに気付き唇を寄せてきた。先の行為のような激しさはなく、ゆったりとした動作で、ついばむように口付け合う。

——余韻に浸りながらキスを交わす

——長い、長い時間を

——緩やかな快感と充実感に身を任せた



行為の後、どうして処女のくせに無理して誘ってきたのか聞いてみた。すると彼女の思惑、その全容を理解した。手淫や口淫、誘ってくような口上も全ては強がり演技によるもの。手淫と口淫で昂っているところを挑発し、押し倒され処女を奪われたという既成事実を作りたかつたんだと。

理由は簡単、知らずに処女を奪ったとなれば多少の罪悪感を感じるだろうから、責任を感じて少しは自分を気に掛けてくれるだろう、と期待してのこと。

まったくもって、素直じゃない。

で、そんな究極的ひねくれ者なザンネン聖女様は――

ベッドの上で頭からシーツを被り、転がっておられた。

揺らしてみたり、指で突いたりしてみても反応がない。泣いている、というワケではないだろう。どっちかと言えば、目論みが盛大に失敗した挙げ句、先の行為で乱れに乱れまくってしまった自己嫌悪によるものだろう。

「ほんと、最っ悪――」

その時、ひよこ、っとシーツの一部からジャンヌ・オルタが顔を出してくる。頬を膨らませ不満そうな顔を隠すことなく、じろっ、とこちらを睨み付けてきた。

「計画は御破算、処女を奪われた上に膣内射精なかだしされて悦んじやうなんて――これじゃ、ただ自分の恥を曝しただけじゃない。ああ、ほんと最悪。やり逃げされた気分よ」

むすつ、とむくれる彼女の視線を受け、思案してみる。彼女の計画、というか目論みは処女を奪わせて責任取れ、という流れに持っていくこと。

それなら、御破算どころか大成功だ。

――今は、彼女のことを

――こんなにも、愛しいと思えるから

「計画は大成功だよ。君のことが、今はとても愛しい…」

「——そういうこと、恥ずかしげもなく言ってくるからムカつくのよ」
頬を染め、視線を逸らすジャンヌ・オルタ。

だが、ふと口元を緩ませ微笑を浮かべると——

「そういうところ、ほんと——大っ嫌い——」
シートから抜け出てきて、唇を重ねてくる。

——その時の、彼女の微笑みは忘れられない

——聖女と呼ぶに相応しい、慈愛に満ちた

——とても眩しい、輝くような笑顔を

〈END〉

二人の聖女の饗宴編 聖女達の饗宴(1)

「——あ、お帰りマスターちゃん」

夜、食事を終えて自室へと戻ると扉の近くへジャンヌ・オルタが立っていた。カルデアに戻ってから姿を見ていなかったけど、なぜ彼女は今、自室の前に居たんだろうと疑問が浮かぶ。

「待ってたのよ——さ、入って」

さっさとドアを開け、部屋の中へと入っていくジャンヌ・オルタ。うん、すごく自然に入ってたけど、その部屋は君のじゃないからね。とは、口が裂けても言えない辺り、とても辛い。

すごく嫌な予感がする、いや、むしろ嫌な予感しかしない。

ともあれ、彼女を追って自室へと入る。

——と、すごい光景が飛び込んできた

「——ッ——んーッ!!」

——部屋に居たのはジャンヌだった

——なぜか全裸で、口に猿ぐつわをはめられた状態で

——ベッド脇の椅子へ縛り付けられている

こちらに気付いたジャンヌは、真っ赤になった顔を背けてしまった。あまりにも突然の事態に、頭がついていかない。目頭を押さえ、おそらく、いやたぶん、というか確実に元凶であろうオルタへ視線を移すと——

「——何よ?」

彼女は服を脱いでるところだった。わけがわからないよ。

「アナタ常日頃から言うじゃない、仲良くしろって。だからアナタを交えて裸の付き合い(?)をすれば、仲良くなれると思ってのことよ。ただ聖女様が快諾してくれなかったから、ちよつと強引にさらって——
——ついてきてもらったわ」

一糸纏わぬ姿になったオルタが、ニタアと笑う。あ、これはまた口

クでもないこと企んでる顔だ。っていうか、今さらった、って言うおうとしたよね。つまりアレか、ジャンヌを罠に嵌めたということか。オルタ、怖い子。

最近オルタに振り回されているせいか、彼女の思考がだいぶ読めるようになってきた。経験則から推測すると、たぶん——ジャンヌは聖女、こういう情事に耐性など無いだろう。そんな彼女の前で紛い物とはいえ自身が性行為に及べば、遠回しに聖女を冒瀆することができ、つまるところ嫌がらせできる。

とまあ、そんな魂胆だろう。相変わらずの歪みっぷりだ。

「——ううう」

顔は背けられているが、視線だけこちらを向けてきたジャンヌと目が合った。その瞳は涙ぐんでおり、「助けて」と訴えてくる。だが、どうしても気になってしまう。椅子へ全裸で縛り付けられている彼女の豊満な胸、羞恥に顔を真っ赤にして涙を浮かべる表情、小動物のように震える様、どれもが官能的で、意識してはいけないと理解しているても股間が熱くなってしまう。

と、そこで不意に熱を帯び始めた下半身に違和感を感じた。ズボンも、下着も履いているはず、勃起し始めている肉棒に圧迫感を感じるのが普通。なのに、不思議と圧迫感が少ない。かちやかちやと、金属が擦れる音が聞こえたような気がしたが、きつと気のせいだ。

ものすごく原因に心当たりがあるが、とりあえず視線を落としてみると、屈んだオルタがズボンを下ろしているところ。肉棒の勃起により膨らんだ下着を見て、うつとりと、恍惚にも似た表情を浮かべていた。

「——ほら、早く脱ぎなさいよ」

下着越しに肉棒へ頬擦りしてくるオルタ、どうやら拒否権はないようだ。ジャンヌを助けたいとも思うけど、オルタが許してくれるわけがない。さて、どうしたものか——

「オルタへお仕置きした後ジャンヌを救出する」

「ジャンヌを助ける前にオルタへ折檻じゃ」

よし、これでいこう。これならオルタの企みも成功する上にジャンヌも無傷で助け出せる、どちらも満足できる最高の選択だと思う。たぶん。きつと。

となれば善は急げ。上着とシャツを脱ぎ捨て下半身にすり寄ってくるオルタの膝裏へ腕を差し込み、背中へ手を回し持ち上げる。いわゆる、お姫様抱っこというやつだ。

「——ふえッ!？」

いきなりのことに頭がついていかないのか、オルタは腕の中でオロオロと慌てだした。羽毛のように軽い彼女を落とすはずはないのだが、彼女は落下の恐怖からか両手を首に回してくる。

向かう先はベッド。近くまで寄ると、抱き上げたオルタを下ろし上へと覆い被さった。オルタは頬を朱に染め、いまから行われるであろう情事を予感し恍惚の表情を浮かべている。

さあ、お仕置きを始めようか——



オルタと二人してベッドへダイブしてから数十分が経過した今、彼女はベッドの上で四つん這いになり、背後から容赦なく子宮口をえぐる肉棒に全身を震わせていた。

「——ああん——いつ——お、つき——や——はげ、しっ——んう——ちよ、ま——まつ、てえ——ッ!!」

逃げようと体を振る彼女の腰をがっしりと両手で固定し、制止の言葉に耳を貸すことなく一心不乱に腰を振る。腰が彼女の臀部へとぶつかる度に部屋へ、ぱんっ、ぱんっ、と肌と肌が打つ高い音を響かせていた。

遠慮もなく、氣遣うことなく、肉棒によって強引に快樂を押し付け続けた結果、オルタは何度目かの絶頂を迎えようとしていた。度重なる肉棒の出し入れにより混ぜられた愛液が結合部から、ぐちゅっ、ぐちゅっ、と卑猥で生々しい音と共にシートへと垂れていく。

「——んい——あ——ひぐッ——うん——あ、ああ——こわ、れ——りゅうう——やめっ——おね、が——やすま、せ——ん、っ——んうううッ——ひ、ひっ、た——まら、ひっちやつ、ら——のお——ッ!!」

ベッドへ顔を押し付けたオルタの口端から垂れる唾液がシミを作り、シートを掻きむしるように握る彼女は、またもや絶頂を迎えビクンッ、ビクンッと体を跳ねさせる。

そんな二人をヨソに、椅子へ縛り付けられたジャンヌは目の前で行われる情事を直視できず、強く目を閉じて抵抗し続けている。しかし、手が拘束された状態では行為中の音や匂いまでは遮ることができなかったようだ。

ぱんっ、ぱんっ、と肉が奏でる音。

ぐちゅっ、ぐちゅっ、と鳴る生々しい水音。

呂律が回らない、オルタの嬌声。

二人の体液から漂ってくる、獣のようなニオイ。

(ああ、主よ——)

ジャンヌの耳、鼻を犯す肉欲の合唱。それは着実に、ゆっくりと彼女の理性を剥ぎ取っていく。意思とは裏腹に呼吸は荒くなっていき、腹部の奥の子宮が疼く。もはや、抵抗するのも限界だった。

「——ふあっ——んう——えぐっ——ッ——うん——いぐっ——ひっぐっ——ご、ごめ、な——ひや、い——ごめんなひやいいい——ッ!!」

恐る恐るジャンヌは、目を開けてしまう。するとベッドの上で、文字通り獣のように性交を続けるオルタ達の姿が飛び込んできた。自分に近いモノ、自分の紛い物であるオルタが犯される姿は彼女にとって、快樂への欲求を刺激するには十分な威力。

(あああ、オルタさん——あんな、顔で——)

ジャンヌは、肉欲を受け唾液と涙に汚れたオルタの姿を自分に重ね

てしまう。どれほどの快楽を受けているのか、どれほど心地よいか、ジャンヌに知る由はない。だが、だからこそ求めてしまう。それが禁忌だと、知りながら。

ガクガクと震える脚、辛うじて動かせる腰をジャンヌは前へ、後ろへと揺らし始める。固い椅子へ、露出した自身の秘部を擦り付け始めたのだ。オルタの性交を直視し、その場で組み敷かれている自分を想像して、ジャンヌは自慰に耽る。

（——ああ——だ、だめです——肉欲に、負けては——ツ!!）

理性が制止を促すも、すでにジャンヌの体は快楽を求める雌へと化していた。子宮の疼き、渴望する快楽、体が求めるままに腰を振り続けた。固い椅子にヒダが擦れ、陰核が潰される度に彼女の体へ電流のような快感が走る。

「——んああああッ——ら、めえ——も、ゆる、ひてえ——も、やらあひぎっ——ひき、たく——な、ひい——こわれ、りゅ——くるっ——ひやう——よお——ツ!!」

「——んう——ッ——んっ——んぐっ——んんっ——ツ!!」

ジャンヌの嬌声は、猿ぐつわによって奏でるのを阻まれてしまう。代わりに、塞がれた口の端から、ぽたっ、ぽたっ、と唾液が落ちていく。抑えることができない快感、昂っていく体、翻弄される心。

無意識のうちに、ジャンヌは腰を揺らす速度を早めてしまう。おそらくオルタ達の性交、その終わりを察したのだろう。ぼしんっ、ぼしんっ、と肉が鳴る音は生々しく、強くなっていく。それと同時に肉棒と膣から、ぐちゅっ、ぐちゅっ、と水音が部屋へ大きく響き渡ったから。

「——も、らめ——びゅびゅ、て——きてえ——らしてえ——わら、ひの——なかつ——ひっ、ぱ——に——ひてえ——んう——ッ——んんんっ——ツ!!」

「——ッ——んっ——う——んッ——ツ!!」

ビクンッ、ビクンッとオルタの体が跳ねるのを見たジャンヌは、猿ぐつわを噛み切らん勢いで歯を食い縛る。オルタを自分に重ね、ジャンヌは力いっぱい椅子へ秘部を擦り付け、陰核を押し潰した。

瞬間、ぞわつ、とジャンヌの体が粟立つ。知らない感覚に驚くも、次いで襲ってくる大きな快感の波が彼女を襲い、ぷしやあつ、と秘部から多量の潮を噴き出した。

「んう、っ——ん——ッ——ん——んんんッ!!」

「——あ——あ、イク——イツ——くうううん——ッ!!」

ジャンヌとオルタ、二人は同時に絶頂を迎えた。

オルタは子宮口へ、どくんっ、どくんっ、と精液を注がれる度に幸福感が胸を占めていき、唾液と涙に汚れた顔を恍惚に歪めてしまう。

ジャンヌは、初めて体験した絶頂によるものか、ぐったりと全身を弛緩させる。無意識にガクガクと脚を震わせ、小刻みに襲ってくる緩やかな絶頂に耐えていた。

——生々しい、獣のようなニオイが充満する部屋

——荒い呼吸だけが、響いていた



腰を引きオルタの秘部から肉棒を抜くと、ぐぢゅっ、という音と共に、精液と混ざり白くなった体液が漏れてきた。すると支えを失ったオルタの体は、脱力のままに突き出していた臀部を落とし、最後にはうつ伏せとなってしまう。

ビクンツ、ビクンツ、と痙攣の度に秘部から、ぷしゅっ、と潮とも精液とも言えない体液を漏らすオルタを尻目に、立ち上がった。向かうのはベッド脇、椅子へ縛り付けられているジャンヌの元。

縄をほどいて彼女を拘束から解放したら、ミツシヨンは終了。オルタへの説教、ジャンヌへの謝罪、ベッドシーツの片付けなど、いわゆる後処理のことを思うと溜め息の一つも吐きたくなる。が、今はそんなことを気にしている場合じゃない。

「」

と、そこで気付いた。せつかく拘束を解いたのに、ジャンヌは立ち上がる気配がない。いまだ猿ぐつわを外そうとせず、顔を伏せたまま、椅子に腰掛け体を震わせている。もしかして、彼女に何か異常が？

そう思つて、猿ぐつわを外してやると――

――ねとお、と猿ぐつわと彼女の口元が唾液の糸を結ぶ

――驚きながら、彼女の顔を覗き込むと

「はっ――はっ――ん――あ――」

トロンとした瞳は、焦点が合っていない。口元からは涎を垂れ流し、荒い呼吸を繰り返す。震えているのかと思つたがそれは間違いだ、彼女は全身を小刻みに痙攣させている。その姿は、なんとも官能的だった。

「――あ――ま、しゆたあ――」

どうやらジャンヌは拘束を解き、猿ぐつわを外したことで、ようやく自分の体が自由になったことに気付いたらしい。が、こちらを見上げてくるジャンヌの目は虚ろで、どこか悲しげだ。

と、不意に椅子へ座っていた彼女が、両脚を左右へ開き始めた。瞬間、むあつ、と鼻先へ生々しい雌のニオイが漂ってくる。出所はジャンヌの股間。閉じられていた脚が開かれると、太ももの辺りが大量の愛液によつてテラテラと光っているのが見えた。

そして、椅子には大きな水溜まりができています。

ああ、これは、つまり――

「わら、ひ――おふたり、の――せいこう、みれ――た、たつしちやひ、まひた――い、いけないのにい――わらひ、せいじよ、れ――こ、こんな、のお――」

脚を限界まで左右へ広げ、愛液と潮によつてドロドロになった秘部を見せ付けてくるジャンヌは、何度も体を痙攣させながら見上げてくる。その瞳に涙を浮かべ、時おり嗚咽を混じらせながら独白を続けた。

「――しゆ、よ――お、おゆる、ひ――くたさ、ひ――ああ――えぐつ――ま、ましゆたあ――お、ねがひ――れす――わらひ、に――ばつ、

を——」

ぼろぼろと涙を流しながら、ジャンヌはさすがのように見上げてくる。ジャンヌは聖女、神に全てを捧げるべきであり、今までもそうだった。なのに、今ここで、彼女は肉欲に負けてしまった。

故に彼女は神にすがらない、すぎる資格がないと考えているのだろう。指標を失い、どこへ救いを求めればいいのか分からないジャンヌ。そんな彼女がすがってきたのは、サーヴァントである彼女のマスター。

「——ううっ——ひっぐ——おね、がい——れす——」

大粒の涙を流し懇願してくるジャンヌに、いつもの凜とした雰囲気は微塵もない。その姿は、まるで迷子になった子供のよう。あまりにも弱々しい彼女の姿を見て、胸が締め付けられてしまう。ここで断つてしまえば、彼女がどうなってしまうのか想像すらできない。

ど、どうしよう——

「大丈夫、聖女だって女の子だよ」

「分かった、お仕置きだ」

聖女達の饗宴（2）

↓「大丈夫、聖女だって女の子だよ」

「分かった、お仕置きだ」

目の前で椅子に座り、涙を流すジャンヌの頭を撫でてやる。なるべく優しく、髪を鋤くように。彼女の髪はサラサラとした絹のような肌触りで、もし許されるのなら、ずっと撫で続けていたいほど。

とはいえ、そういうわけにもいかない。少しずつ彼女の嗚咽が収まってきた頃を見計らって、顔を覗き込む。まだ目の端へ涙が見えるものの、だいぶ落ち着いてきたんじゃないだろうか？

「すみません、マスター。取り乱してしまつて——」

口調もしっかりしてきた彼女は涙を拭いながら、気恥ずかしそうに微笑んでくる。良かった、一時は彼女が壊れてしまうんじゃないかと心配だったけど、この柔らかな慈愛に満ちた微笑を見る限り最悪の事態は免れた、と思う。

だが、そう思つたのも束の間。急に顔を伏せたジャンヌは開いていた脚を閉じながらも、ふるふると震えだした。いきなりのことに、ぎよつとしてしまつたが——

「あ、あの、マスター。私が、また神へ仕える前に、その——今この時だけでも、私を聖女としてではなく、一人の女性として愛して頂けませんか？」

太ももを擦り寄せ、気恥ずかしそうに身を振らせるジャンヌ。"このような事態"にならなければ彼女の口からは出て来なかつたであろう言葉、それはジャンヌダルクという聖女の言葉ではなく、一人の少女の願い。

その心境を察して、断れるはずがない。加えて生まれたままの姿で、つい先ほど自慰によつて達し、どこか切なげで物欲しげに揺れる瞳で見つめられれば、なおのことである。

——彼女の願いを叶える、と答えを聞いたときの彼女の

「——あ、ありがとうございますッ!!」

——その表情の、なんと嬉しそうなことか

吸い込まれるように彼女の顎を掴み持ち上げ顔を寄せると、驚いた様子を見せながらも恐る恐る目を閉じるジャンヌ。優しく、触れ合うように軽く唇を重ねてやるだけで彼女はビクンツ、と肩を震わせ体を強張らせてしまう。

安心させるよう、恐怖を与えないよう、ゆっくり彼女の唇へ甘く噛み付いた、柔らかく甘いジャンヌの唇を味わうように。すると最初は成すがままだったジャンヌの唇が開かれ、仕返しと言わんばかりに優しく噛み返してくる。そんな彼女の必死な様子に、胸が締め付けられた。

「ちゅ——んう——ん——あ——はあ——んむっ——」

無意識のうちに伸ばした舌がジャンヌの唇へ触れると、控え目口から先端だけ顔を覗かせた舌を触れ合わず。ぴちゃっ、と唾液が混ざり音が響くのも束の間、ゆっくりと舌が絡まり始める。

彼女の舌を通して交わされた唾液の甘さ、熱さに脳が痺れていく。だが、それはジャンヌも同じだったようだ。間近に見える彼女の瞳はトロロンと緩み、舌を通して流れ込んでくる唾液に溺れている。

「——んあ——ちゅ——れろっ——うん——ま、しゅたあ——あん——んむ、ん——あうん——ッ——」

十分に堪能し尽くした舌を離すと、二人の唾液が糸を引き切れる。その時、ふとジャンヌは落ちていく唾液の糸を目で追った。すると、「あ」と蚊が鳴くような呟きが彼女の口から漏れる。

「——これが、マスターの——」

視線を落とした彼女が目にしたのは、キスによる興奮で再び固さを取り戻し始めている肉棒。先ほどオルタへ欲望を吐き出したばかりだというのに、もはや肉棒ははち切れんばかりに膨張しビクンツ、ビクンツと元気いっぱい脈打っていた。

別の生き物のようにビクンツ、ビクンツと脈打つ肉棒を見た彼女は唾を飲み、ごくつと喉を震わせる。性交によって得られる快感と快楽

を期待する今のジャンヌは、いまや聖女どころか女性ですらなく、ただの雌へと成り果てていた。

「——ああ、マスター。申し訳ありません——」

椅子へ座る彼女は、そのまま屈み込む。ちょうど目の前へ来た肉棒へ顔を寄せていくジャンヌは、両手で肉棒を握ると躊躇いながらも口付ける。さらには、その小さく形の整った口から舌を見せ、つつつ、と亀頭へ舌先を滑らしていった。

「——ん、っ——れろっ——んん——ペろっ——ああ——これえ——があ——ましゆ、たあ——のお——ペろお——」

もどかしい、むず痒い感覚を亀頭へ感じ背筋が震える。先ほどオルタを蹂躪した肉棒は乾き始めてはいるものの、体液から発生した獣のようなニオイを漂わせている。なのに、ジャンヌは迷う様子さえ見せず舌先で亀頭を、ちろちろっ、と舐め回している。

「——んっ——ふふっ、不思議そうですね、マスター。私が”こういうこと”を知ってるのが。その理由はですね、私だって聖女と呼ばれる前は年頃の女の子でしたし、聖杯から与えてもらった知識にもあつたからです。そう、知ってただけ——実践したのはアナタが初めてです、だから勘違いしてほしくありません」

ジャンヌはクスツ、と笑みを浮かべ唾液の糸を引きながら舌を離す。いつもの彼女にはない、どこか妖艶で複雑な笑みだ。仕方ないことだとはいえ、情事そのものや男を悦ばす方法を知識として得てしまった女の子。

聖女として在り続けたなら、きっと彼女は得た知識を用いることはなかつただろう。だが今の彼女は快楽を求めてしまい、神の教えに背いた迷い子。すぐるべき神を失い、ただただ雄を求める一人の雌。

理性のタガが外れた今のジャンヌは、持て余していた体と持て余していた知識を総動員し、初めての性交へと臨む。背徳心にゾクゾクと体を震わせ、マスターへの想いを免罪符にして。

そんな彼女は身を乗り出してきて——

「知識」と”経験”は違います。キスがこんなにも幸せな気分になれることも、昂っていく気分と快感から来る浮遊感も、殿方の性器の

熱さや味も、私は知らなかった——ただ、今は少しだけ、知識を与えてくれた聖杯に感謝しています。だって——」

瞬間、ふにゆつ、と肉棒が柔らかく温かいモノに包まれる。それは、ジャンヌの豊満な乳房。下から持ち上げられた乳房、マシユマロのような弾力の大きな二つの双丘が、器用に肉棒を挟み込んだ。

「——んっ——こうやって、マスターを悦ばすことができるんですから」

柔らかく肉厚な乳房が挟み込んだ肉棒は、膣内や口内とは違った快感を体中へ巡らせる。むにゆつ、むにゆつ、と彼女が自身の胸を動かす度に感じる圧迫感は、肉棒を押し潰さんとするほど。

だがマシユマロのような双丘では潰すこと叶わず、程よい圧迫感と滑らかな肉の感触が興奮を煽ってくるのみ。肉棒は真っ白な肌、双丘に挟まれ隠れてしまっているが、辛うじて亀頭だけが頭を覗かせる。先端から、先走りを滲ませながら。

「——んあ——もつと、気持ち——よくなって下さい、マスター」

とろおつ、とジャンヌの口から糸を引き落ちていった唾液が亀頭を濡らす。そして期を見計らったかのように彼女は、双丘を卑猥な形に歪めていった。にゆるつ、にゆるつ、と粘性を帯びた体液が擦れる音が聞こえる。

まんべんなくジャンヌの唾液が付着した肉棒は、それを潤滑油として抵抗なく乳房の摩擦を受け入れる。にちやつ、にゆるつ、と彼女の力加減や擦れ具合で変わる水音と、乳房から押し付けられる快感は想像を絶していた。

「——あ、ん——ふっ——ビクンツ、ビクンツ、て——あん——脈打つて、ます——よッ——マスター、気持ち——いい、ですか？」

気持ちいいに決まってる、快感に溺れてしまう。にちやつ、にちやつ、とジャンヌが肉棒へ乳房を擦り付ける速度、激しさを増していくごとに、まるで腰が抜けそうなほど気持ちいい。その昂り、興奮を察したのかジャンヌは——

「——んっ——れろっ——んう——ああん、むっ——ふうん——」

ジャンヌは自身の双丘から頭を出した亀頭へ一度だけ舌を這わせ

た後、先端へ甘く噛み付いてきた。にゆるっ、にゆるっ、と肉棒を乳房で擦り上げながら、先端へと口付け舌先で尿道を、ちろっ、ちろっ、と刺激される。もう限界だった、せり上がってきた射精の欲求に抗うことができない。

両手でジャンヌの頭を掴み逃げられぬようにして、肉棒へと押し付ける。途中、亀頭の先端を舌と唇が擦れたが気にする余裕はない。乳房が擦る肉棒のサオが膨張する、込み上げてきた欲望、快楽に後押しされた精液は、自制を利かぬまま――

「ふ、つく――ん――ツ――ん、んう――んんツ――んんツ――!!」

――亀頭の先端から、飛び出していった

――ジャンヌの口内へ注がれていく精液

――彼女の小さな口の端から溢れた精液が

――ぽたっ、ぽたっ、と彼女の乳房を汚していく

「ん、んん――ツ――ぶあっ、ん――ひゃ、あん――ツ!!」

ジャンヌは、貯まらず口を離してしまった。しかし亀頭から迸った精液は彼女の行動に関係なく、勢いよく顔を、髪を、舌を、頬を汚していく。ビクンツ、ビクンツ、と脈打つのに合わせて飛び出していく欲望は留まることを知らず、ジャンヌの顔へ、べったりと付着した。

「ふ、あ――ん、んつく――あちゅ、い――これえ――ましゅたあ、のお――」

顔中に飛び散った精液の熱は彼女の理性を焼き、むあっ、と漂う雄のニオイが鼻を犯す。だらしなく垂らされた舌にもべつとりと、すすんつ、と雄のニオイを貪る鼻先にも、白くドロツとした精液が付着していた。

腰を引くと、ねちやつ、と唾液と精液が混ざった糸を引きながら肉棒が彼女の乳房から解放された。すると身を離れたジャンヌは、脱力していた体を震わせながら立ち上がる。そして、ガクガクと震える脚を広げ、椅子へと手をつき臀部を持ち上げると――

「ああ、マスター。もう、私、我慢できません。聖女なのに――ああ――処女なのに――こ、こんな、はしたないこと、いけないのにい――」

椅子へ手をつき、震える脚で何とかバランスを保ちながら突き出されたジャンヌの臀部。呼吸と連動し生き物のように蠢く割れ目、ヒクヒクと伸縮を繰り返す菊門が丸見えだ。

先の自慰、そして口淫と乳房による奉仕で、彼女の下半身はひどいことになっている。太ももどころか踝まで愛液を垂らし、臀部は自身の愛液と潮でドロドロ、ふるふると震える彼女の背中には汗の玉が窺える。

「——も——くだ、さい——マスターの——」

ふりふり、と彼女の臀部が揺れる。

たぶん、自分でも分からないままやっている。濡れに濡れた下半身、自分の最も大事な部分を晒し、いやらしく臀部を振る。それが、どれほど雄を昂らせる行為なのかも知らずに。

吸い込まれそう、だった。その時——

「言葉遣いができてないわよ、聖女様。そんなんじや、マスターちゃんに愛してもらうなんて夢のまた夢ねえ——」

「——ッ!!」

背後から抱き締められて、我に返る。誰か、なんて考えるまでもない。背中へ感じる柔らかい乳房の感触と、首筋へ絡められた両手、そして間近にある顔は——いつの間にか意識を取り戻していた黒き聖女、オルタ。

「まあ、一時的にはいえ、アナタは信仰を押し付けてくるだけの糞ほどの価値もない神じゃなくて、マスターちゃんを選んだ、その選択だけは認めてあげる——」

クスクスツ、と本気で楽しそうに含み笑いを続けるオルタ。ジャンヌへと無慈悲に言葉を浴びせるオルタへ、とっさに「止めろ」と言おうとしたが、彼女の指が唇へ当てられ口ごもってしまう。そんな中、微笑むオルタは小さく「大丈夫よ」とだけ呟くとと——

「今のアナタは聖女ではなく、ただの雌。快楽を抗う必要も、神への祈りもいらぬ。雌でしかないアナタが願う欲望のままに、可愛がってくれるマスターちゃんへ相応しい言葉を選んでお願いすべきでしょ？」

ふるふると、臀部を突きだしていたジャンヌは――

「は、い――ま、ます、たあ――どう、か――こ、この――いやしい、めす――にい――お、おじひつ――を――ああ――せえ、し――をツ――さっきの、あついの――ここへ、めぐんで――くだ、さいい――」
ジャンヌは臀部を突き出しながら、震える腕を股間へと持つていき、指で割れ目を自ら拡げて見せた。くぱあつ、と口を開いた秘部は愛液に濡れ、肉棒を今か今かと待つているように蠢いていた。

そんな光景から目を背けると、間近にあったオルタの顔が見える。彼女にしては珍しい、慈愛の笑みを浮かべていた。どこか満足そうな、それでいて楽しそうな、穏やかな表情。

「背負いすぎなのよ、聖女様は。これくらいの荒療治でもしないと、ガス抜きどころか甘えることすらできなくなるほどに、ね――私が気を利かせてあげたんだもの、これだけ見せつけければ、いくら糞みたいな神でも見て見ぬフリしてくれるでしょう。あとは、楽しむだけよ」

言葉と共に、するつ、と離れていたオルタはジャンヌの腕を引っ張りベッドへと放り投げる。そして力なく仰向けで倒れたジャンヌへ、ゆつくりと覆い被さったオルタ。ベッドの上で重なる二人が、こちらへ顔を向けてくる。

欲情しきった、快楽への期待に瞳を揺らす二人の聖女。その光景は官能的で、卑猥で、求められているという事実により下半身が疼きだす。

「――ますたあ、きてえ――」

――白い聖女が、呂律の回らない声で懇願してくる

「――早く来なさい、また――メチャクチャに、して?」

――黒い聖女が、興奮に揺れる瞳で見上げてくる

「……………ああ、いま行くよ」

――求められるまま、誘われるまま

——ベッドを、ぎしつ、と軋ませて
——重なる二人へ、覆い被さった

聖女達の饗宴(3)

二人へ覆い被さると、オルタとジャンヌ、どちらも唇から赤い舌を覗かせた。キスがしたい、という意思表示なのは分かるが、どちらへ先にするべきなのだろうか。思い悩みつつ顔を寄せていき舌を出すと、食い付いてきたのは意外にもジャンヌの方だった。

「——んん——んちゅ——ツ——はあ——れろっ——」

下へ組み敷かれながらも必死に首を伸ばし、顔を上げ、ジャンヌは寄せてやった舌へ吸い付いてくる。唇で擦られ、舌が絡められ、唾液を塗り込むように蠢く舌の感触が心地いい。

すると、「むう」と不満そうに頬を膨らませたオルタが強引に割り込んできた。ジャンヌと頬がぶつかるのも構わず、いや、むしろ故意に当たったのかもしれない。ぶつかった衝撃で離れた舌尖が、オルタへ奪われる。

「——わら、ひ——にも——ちや——んっ——ひなさ、ひ——」

「——ああん、オルタさん——ひどいです——んう——」

舌を離されたジャンヌが、負けじと舌を突きだしてきた。それはオルタと絡めていた舌を突き、都合3本の舌が絡み合う。額を密着させ、誰かの熱い吐息を鼻先へ浴びながら舌を踊らせる。

ぴちやつ、ぴちやつ、と混ぜられた唾液が鳴る。緩んだ口元から糸が引き、重力に引かれベッドシーツを汚すも誰も気にする様子はない。貪るように互いが互いの舌を求め絡み合い、そこに居る者達を昂らせていく。

「——ちゅ、うん——えあ——れろっ——ちゅ、っん——あ、ましゅ

たあ——ひか、ないれ——」

「——んう——ペろっ——あ、んっ——あん——あ、う——あ——」

糸を引きながら顔を引くと、二人は名残惜しそうな瞳で見上げてくる。が、それも数秒。ジャンヌとオルタの頭を撫で、互いに向き合うよう促すと、二人は昂りのままに相手へ唇を重ねた。

「——ちゅっ——あ——おる、たしやんの——あ、まあい——んっ、う

「んっ——がつつき、すぎ——よ——あん、むっ——」
ちゅっ、ちゅっ、と眼下でお互い腕を相手の首へ手を回し、抱き合っ
て唇を重ねるオルタとジャンヌ。首を曲げ、唇をねぶり、舌を絡める
度に二人は身を捻り豊満な胸を押し付け合っている。大きな双丘が
彼女達の身動きに反応し、ぐにつ、ぐにつ、と卑猥に歪ませる様は壯
観の一言。

なんとも情熱的に相手を求めるオルタとジャンヌ。そんな二人を
見下ろしていると、仲間外れにされているような気分になった。悔し
いので、空いた両手で二人の臀部を撫でてやる。

「——やん——お、ひ——りい——んう——れろっ——」

「——やつ——くすぐつ、た——ちゅ——あむっ——」

張りのある二人の臀部を撫でてやると、ピクツ、ピクツと震えが掌
を通して伝わってくる。そのまま臀部から伝わる二人の反応を楽し
むのも良かったが、仲間外れにされたような気分が嗜虐心を刺激し
た。

しつとりとした肌触りの臀部を揉み、弾力を楽しみながら指先が向
かったのは秘部。湿り気を指先で感じ、少しまさぐると、入口の部分
を見つけた。すでにジャンヌの秘部周辺は彼女の愛液でトロトロ、ま
だ核心部へ触れてもいないのに指先がふやけてしまいそうだ。オル
タは湿り気こそあるものの、濡れ方は十分とは言えない。

「——つぶあ——ん、むう、んっ——ちゅっ——あ、ましゅたあの、ゆ
びい——あん——ペろっ——ん、ちゅ——むう——ツ——」

「——んんっ——あつ、ます——たあ——ちや——んんう、っ——れ
ろっ——ふっ、うん——あ——はあ——ペろっ——ツ——う、ん——」

オルタの秘部へ、指を滑り込ませた。すると乾いていた秘部の周辺
とは違い、熱い粘性の体液が指先に絡む。それは、おそらく先の性交
で吐き出した精液。

愛液に混ざり彼女の体温で温められたそれは、いまだに指先へネバ
ネバとした感触を伝えてくる。指先の粘液を圧迫してくるオルタの
膣壁へ塗り付けるように折り曲げると、ぐちゅっ、ぐちゅっ、と水音

が響いた。

「——んんうっ——ひっ——な、かあ——あ、む——ぐちゅぐちゅ——
やあ——れろっ——ああん——やらっ——あふれ、りゅ——」

嬌声を上げ始めたオルタの膣内をかき混ぜながら、ジャンヌの秘部へと這わした指を割れ目に添って擦り付ける。ヒダの形を確かめるように、指先へまとわりつく愛液を潤滑油として上から下までを丹念に擦り上げた。

「——ん、あんっ——ふあ——ちゅ——ああ——ましゅ、たあ——くちゅくちゅ——ああん——いい——あッ——んんっ——」

二人が互いを求める速度が、さらに上がってきた。首に手を回し合い唇を押し付け舌を踊らせ、秘部からせり上がってくる快感から逃れようと腰を捻らせる。その淫靡な姿は興奮と昂りを高め、一刻も早く二人を快楽と絶頂へ墮としたい欲求に駆られた。

精液と愛液が同居するオルタの膣壁へ、さらに激しく指を擦りつけていく。その反動か、ぐちゅっ、ぐちゅっ、と音を立てて彼女の割れ目から溢れた体液が掌まで伝ってきたのが分かる。膣壁を執拗に擦り、中で溜まる体液を掻き出すように動かすと、きゅっ、きゅっ、とキツく指先が吸い付いてきた。

「——んい——ああ、っ——かきら、しちや——やあ——で、ひやう——からあ——あんっ——むうっ——ちゅ、ん——んっ、あ——ひい——あっ——ツ!!」

オルタの昂った体が、ぞぞっ、と粟立つと背中を逸らせジャンヌと顔を離してしまう。名残惜しそうに、だが羨むような瞳で喘ぐオルタを見つめるジャンヌ、その様子は明らかに油断している。

ジャンヌの割れ目、ヒダを擦る指の力を強め速度を上げる。すると途中、指先に固い陰核が何度かぶつかるのが興奮を煽ってきた。愛撫によつてビクンッ、ビクンッと腰を震わせ指へ割れ目を押し付けてくるジャンヌを見下ろすと、例えようのない征服感が沸き上がってくる。

「——やあそこお、——くりくり、て——され、るの——いいれ、す——ああ、んっ——ひい——あ——ツ——ま、らあ——いッ——ふう——

「ッ!!」

——二人が快感に吞まれ、身を捻る様を見下ろす

——達してしまいたい、と指を通して下半身が訴えてくる

——だからこそ、あえて

——二人の性器から、指を離した

肩を、腰を痙攣させ荒く呼吸するジャンヌとオルタ。達したいという欲求に支配され熟しきった体は、唐突に止まった愛撫によって昂ったまま、お預けを喰らう。火照った体、熟しきった秘部は、絶頂間近で止まった快感を求め彼女達に悲痛な声を上げさせる。

「やあ、ゆびい——ぬいちゃ、やあ——いきそ、らった——の、にい——
なかあ——せええき——ぬりゆぬりゆ、してよお——ッ!!」

「——い、いじわる——しない、れ——ましゆ、たあ——くちゆくちゆ
——ひてえ——いかせ、へ——くだしやいい——ッ!!」

二人が必死に求めてくる姿に、ゾクゾクと背中が震える。だが、あえて二人には何も言うことなくベッドへ腰を下ろす。脚を放り投げた下半身、股関で大きく膨張している肉棒を見せつけるように。

すると意を察してか、体の向きを変え這うように二人が寄ってくる。彼女達の目には、おそらく目の前で起立しビクンツ、ビクンツと揺れる肉棒しか映っていない。競うように、肉棒へ顔を寄せていくオルタとジャンヌ——

——先に到達したのは、オルタだ

「あむっ、んんう——じゅっ——んっ——つぶあ——ん、むっ——」

オルタは躊躇うことなく肉棒の先端、龟头を口にくわえしゃぶりついてきた。じゆるっ、じゆるっ、と吸い付く音を響かせ、快樂への欲求に突き動かされるまま唇で、口で、舌で肉棒を貪ってくる。

「やあ、オルタさん——わらひにもお——ますたあ、のお——ほしい、
れすう——」

出遅れたジャンヌは肉棒を貪るオルタへと頬を擦り寄せ、肉棒の根本へ甘く噛みついてきた。とはいえ、ジャンヌはその程度で満足できるはずもなく、涙ながらに舌を突き出していく。

そんなジャンヌを尻目に、肉棒を独り占めたオルタはご満悦、一

心不乱に頭を振って肉棒への奉仕を独占する。龟头を包み込むオルタの口内の温かさと、根本を這うジャンヌの唇と舌。飛びそうな意識を繋ぎ止め、二人の口によって得る快感に酔いしれた。

「——んう——じゅっ、ん——ぷあ——あん、ちよ——よこから——」
「——わら、ひ——もお——えぐっ——ほしひ、れすう——ちゆ、つん——れろっ——じゅっ、ん——じゆるっ——ぷあ——あつ、む——」
呼吸するため口を離れたオルタの隙を突いて、ジャンヌは肉棒の根本からサオへと唇を滑らせる。そして、そのままカリへ唇を引っかけ、近くにあつたオルタの頬を押し退けながら龟头へしやぶりついてきた。

もはや、肉棒は二人の唾液と先走りでドロドロだ。ジャンヌの口内でビクンツ、ビクンツ、と跳ねる肉棒は、彼女の舌を、歯を叩く。だが、それすら快感なのかジャンヌは恍惚とした表情で口内の肉棒へ舌を絡めていく。

だが、ジャンヌは満足しない。さらに貪欲に肉棒へ吸い付き、舌を踊らせ、龟头の先端、尿道を刺激してくる。そんな必死の奉仕を見て火が着いたのだろう、オルタは赤面しながら背中を仰げ反らすと——その豊満な乳房を、肉棒へ寄せていく。

「——んっ——せつな、い——のお——お、おっばい——」
むにゅっ、とジャンヌの頬と肉棒へオルタの乳房が押し付けられる。するとジャンヌも、オルタへ触発されたのか肉棒から口を離すと——

「ふあ——おっ、ぱい——れ——ごほお、し——れす、ね——」
ジャンヌもオルタに負けず劣らずの豊満な乳房を、肉棒へ押し当ててくる。2つの大きな双丘へ挟まれた肉棒が姿を隠してしまう様は、卑猥の一言。押せば押すほど強くなる弾力、張りのある二人の乳房が、ぐにゅっ、ぐにゅっ、と形を変える。

二人が押し付け合う乳房、それに挟まれた肉棒がビクンツ、ビクンツ、と震えてしまう。圧迫感、温かさは、抗えようのない快感を与えてくる。だというのに、もはや快楽に溺れる2匹の雌に抑えなどない。赴くまま、求めるまま、貪欲に肉棒を責め立ててきた。

「あつ、ちゅい——おっぱ、い——こす、れて——あ——でたあ——ちゅ——あ——れろつ——ペろつ——」

押し付けあつていた双丘の間から、亀頭が顔を覗かせる。すると、必死に舌を伸ばし舌を這わすジャンヌ。ザラザラとした舌が亀頭を撫でる度に、突き抜けるような快感が腰を突き抜ける。

「あ——わら、ひ——もお——ああ——れろつ——んっ——」

舌を出したオルタは肉棒の力、そして裏スジを舌先でえぐつてくる。故意なのか無自覚なのかは分からないが、執拗に敏感な部分を目掛けて舌先を掘り込んでくる感覚にゾワツ、と背中へ寒気が走つてきた。

「ちゅ——れろつ——あ、ましゆたあ、の——ぴくん、つてえ——ま、ら——いっばい——かけ、れ——れろつ、ちゅ——くだ、ひや——いい——ツ!!」

「びゅびゅ、つれ——だひ、てえ——んう——おひん、ぽ——ひ、か——かんがえ、られ——にやい——わらひ、た、ひ——にい——れろつ——まひゆたあ、ちゃん——のお——せえ、し——ちよお、らあい——ツ!!」

——ぐにゆつ、と思いつき乳房がサオを搾り

——ジャンヌの舌が尿道をほじり

——オルタの舌を裏スジへ掘り込んだ

その瞬間、肉棒が大きくビクンツ、と跳ね、腰が抜けるほどの射精感と共に先端から精液を噴き出した。びゅるっ、びゅるっ、と痙攣と連動し噴き出した精液はジャンヌの舌を、頬を、髪を白く染めていく。そして横にあつたオルタにも、同じように熱く白い精液を吐き出し続ける。

腰が抜けるような快感に体を震わせ、二人が汚れていく様を眺める。恍惚とした表情で、いまだ痙攣し精液を吐き出す肉棒を愛しそうに舐め続けるジャンヌとオルタ。髪や頬に精液が掛かろうが、お構いなしだ。

「あちゅ、いの、があ——れろつ——ちゅ——あん——どろ、ど

ろっ——れすう——んんっ——じゆるっ——ぢゅっ——ッ!!」

「ふああ——びゅうっ、れ——しゅご、ひ——くしゃい、のがあ——
ああ——ましゆたあ、ちや——のお——せあし——んっ——じゅっ——
ぢゆるっ——ちゆ——えあ——あむ——ッ!!」

射精を終えた肉棒は、いまだ乳房に挟まれたまま痙攣を繰り返していた。しかし二人は構わず、乳房へ溢れ、相手の顔中へ付着する精液を吸い、舐め取っていく。その度に、二人の唇が、じゆるっ、ぢゆるっ、と生々しい音を響かせた。

それだけに止まらず、ジャンヌとオルタは互いに口内へ溜めた精液をキスで共有し始める。吐き出された精液を、相手の唾液を味わうような濃厚で激しい口付け。時おり喉が跳ね、ごくんと精液や唾液を飲み込む音が聞こえてきそう。

「——じゆるっ——あ、む——おる、た——ひや——んむっ——ぢゅっ——
ちゆる——つぶあ——はっ——んちゆ——」

「——ちゆ、む——じゆるっ——んっ——きた、にやい——のにい——
あた、ま——しびれ、へ——ばかに、なりゆう——ッ——んあ——はあ
ん——」

ぢゆるっ、じゆるっ、とキスしていた二人はベッドの上で身動きした。いつしかオルタがマウントを取り、下でジャンヌが仰向けに転がる。そして、数分が過ぎた頃、ようやく彼女達が唇を離す。唾液の糸を引きながら、二人が流し目を送ってくる。悩ましげな、切なそうな、それでいて期待しているような瞳。

重なった二人は、示し合わせたよう臀部を向けてくる。ドロドロになった下半身を恥ずかしげもなく左右へと開き、ヒクヒクと卑猥に蠢く秘部を見せ付けてくる。おそらく、意趣返しのもりなのだろう。

——熟しきった2輪の花弁が

——物欲しそうに荒い息を吐くジャンヌの瞳が

——期待と羞恥に赤面するオルタの瞳が

——”欲しい”と告げている

「——はやくう——ましゆたあ——ここ、れすう——」

「——つぎはあ——ここ、にい——びゅびゅ、れ——してえ——」
上と、下。重なる2つの秘部が、臀部ごと揺れる。
その誘惑に、抗えるはずもなく——

↓「入れるよ、ジャンヌ……」

「〔無言でオルタへ肉棒を挿入する〕」

聖女達の饗宴（4）

身を乗り出し、いまだ固いままの肉棒を向けたのはオルタの秘部。唾液を垂らすように割れ目から愛液の筋を垂らす秘部へと亀頭を当てがい、一気に挿し貫く。その時、停滞なく肉棒が飲み込まれ、じゅぶつ、と響く生々しい音。肉棒が膣壁を掻き分ける感覚にオルタの背筋が、ゾワツ、と総毛立つほどの快樂が襲ってきた。

オルタの臀部を掴み固定すると、きゆうつ、と締まってくる膣壁を肉棒越しに感じながら腰を打ち出す。愛液がまとわり付く圧迫感に負けず、ずりゆんつ、と肉棒が膣内を擦っていくと、快感に耐えかねた雌が甲高く啼いた。

「——あ” あ” ——んっ——イツ——ああッ——ツ!!」

ぱんっ、と腰を彼女の臀部へ打ち付けるとオルタが背中を反らし、勢いよく秘部からぷしゃあつ、と潮を吹き出し絶頂した。同時に、きゆうつ、と不規則に締め付けてくる膣壁。ゾクゾクと背筋を震わせながらも、迫ってくる欲求のままに腰を振る。

ぱんっ、ぱんっ、と鳴る腰とオルタの臀部。膣を貫く肉棒が容赦なく膣壁を擦り、亀頭が子宮口を叩く、その度に潮が吹き出てくるのは彼女がイキツ放しになっているため。

「——んおっ——ひ、い——あ” あ” ツ——んんっ——う、あ——い

——あんっ——ひっ、て——りゆ——と、とまら——にや——い”、いい——ツ!!」

だらしなく口を開き、蕩けた表情を浮かべ、悲鳴のような喘声を上げるオルタ。それを羨ましそうに、どこか悲しそうに見上げていたジャンヌは身を捻り、腕をオルタの乳房へと伸ばす。

むにゆつ、とオルタの乳房へ指を埋めていくジャンヌ。密着しているせいで上手く揉めないのか、揉むというよりは掌で乳首を潰しているだけに近い。とはいえ、その愛撫はオルタの快樂を煽るのには充分らしい。コリコリとした感触の乳首を掌で転がしながら、ジャンヌの瞳が羨望に揺らぐ。

「ああ——オルタさん——すごい顔——」

「や、んう——みな、いれ——わら、ひ——が——いつ、ひえ——あんっ——イツて、りゅ——ところお——みないれえ——やあ——ひっ——あん——うあ、あ——ひいい——んんっ——ま、ら——ひ、ぐうう——ッ!!」

ぐちゅっ、ぐちゅっ、と音を立てるオルタの下半身。肉棒が出たり入ったりを繰り返す度に潮とも愛液とも判別できない体液が飛び散り、ベッドシートへ大きなシミを作っていく。

と、そこで気付いた。肉棒が出入りする秘部の直上で、小さな菊門、蕾がヒクヒクと卑猥に伸縮する様に。なんとも官能的で、卑猥で、まるで誘ってくるように伸縮性している。嗜虐心に促されるまま、臀部を掴んでいた手を滑らせ、故意に蕾を親指で引っ搔いてみる。

「あひい——そ、こ——はあ——おひ、り——っ——ッ!!」

蕾を親指で引っ搔いた瞬間、これまで以上に膣壁の締めまりが強くなった。蕾への愛撫で、無意識に力が入ってしまうのだろう。たとえ、締め付けが強くなった膣壁が、先ほど以上に激しく肉棒を擦ることになるうとも。

「ひ、う——やら、やら、やら——やらあ——き、きたにやい——からあ——そこ、やめッ——おひり、はあ——んんう——あ——いつ——ふっ、うう——んっ、んんッ——ッ!!」

オルタは腰を振り指から逃げようとするが、がっしりと掴み離脱は許さない。蕾のシワを指先でなぞり、その度に蕾からも、とろっ、と体液が溢れてきた。愛液と腸液で、すでに蕾の周りは充分に湿っている。その気になれば、指を埋めることができそうだ。

ふと、誰かの視線に気付く。見ればオルタが首を曲げ、こちらを見上げていた。おそらく、こちらの意図を察したのだろう。その瞳は未知の感覚への恐怖に揺らぎ、いやいや、と力なく振られる。懇願するような瞳、よく見れば目の端には涙の粒が見て取れる。

そんな目で見上げられたら、もちろん——

「ひぎっ——あ、ああ——ひろ、がっ——やあ——やああッ!!」

親指へ力を込め少し強引に蕾を払げる。さすがに指を入れるのは

躊躇われたが、このくらいならば大丈夫だろう。微かに口を開けた蕾は、呼吸と呼応し伸縮を繰り返す。と、同時に肉棒の締め付けが強まったのを感じる。

このままオルタをいじめたい欲求もあったが、どうやらジャンヌも限界のようだ。オルタをいじめるのに夢中になりすぎていたせいで、お預け状態のままオルタの痴態を見せ付けられていた彼女が泣き叫び始めた。

「やああ——わらひ、も——えぐっ——ほし、のにい——きもち、よく——ひて、ほし、のにつ——えう——はやくう——おねがひ、れす——ひつく——ましゆたあ——きてええ——ツ!!」

その言葉と同時に、腰を引きオルタの秘部から肉棒を抜く。蕾への刺激によつて強まった膣壁の締め付けのせいで、一気に引き抜いた瞬間に射精してしまいそうだった。なんとか絶頂には耐えることができたが、盛りきった雌のようなジャンヌは休む暇など与えてくれない。

ずりゆっ、という音と共にオルタの秘部から抜いた肉棒は、真っ白な体液で汚れていた。それを、ジャンヌの秘部へ突き付ける。ドロドロ口になっている亀頭をジャンヌの秘部へ押し当てると、まだ入れてもいないのにヒダと入口が吸い付いてきた。

「——きてえ——ましゆたあ——わら、ひの——そこお——おもひ、きりい——ぐちゆ、つれえ——なかあ——ぐちやぐちや、に——ひてええ——ツ!!」

彼女の願い通り、腰を出し肉棒を埋めていく。徐々に肉棒を呑み込んでいくジャンヌの膣内は、待ちに待った挿入を受け入れようと伸縮を繰り返す。きゅっ、きゅっ、と小刻みに感じる締め付けは、おそらく達したことの証。

ずずっ、と彼女へと侵入していく肉棒に、何かが引つ掛かった。それは彼女の貞操、男性を拒む最後の砦。いつものジャンヌならば、多少の躊躇いはあったかもしれない。でも、今の彼女には——待ち望んでいた性交、犯される背徳感、抗えない欲求を求める一人の雌ジャンヌには悦びしかない。

「あああ、んっ——きてえ——きてえ——ましゅたあ——ツ!!」

——わずか一瞬の停滞

——彼女の願い通りに、腰を全力で打ち出すと

——ジャンヌの体を激痛と、圧倒的な快楽が襲う

「んあ——ひ、ぐう——んんんっ——はあ、ん——ひ、た——ひ
た、ひ——のにい——ん、い——お、かし、ひ——ひたひ、のにい——
——わら、ひ——た、たっ——ひ——ちゃ——ツ——ん、あああ——ツ
!!」

初めて男を迎えた秘部、破られた最後の砦。ジャンヌを襲うのは破瓜の激痛と、意識を失いそうなほどの快感と、天にも昇るほどの幸福感。その感覚に体は耐えきれず、彼女の秘部から盛大な潮を吹かせた。

ぶしやつ、ぶしゆっ、と背中を仰げ反らせる彼女の痙攣に合わせて、秘部から潮が吹き出してくる。そのせいか腰は血と、潮と、愛液が混ざった体液で汚れていく。

だが、構わない。処女幕を突き破った肉棒がジャンヌの子宮口をノックし、腰と彼女の下半身が密着しても、相変わらず絶頂しながら潮を吹くジャンヌ。その様を見下ろしていたら、もう理性など吹き飛んでしまう。腰を引き彼女の膣壁を、カリで引っ搔いていく。

「ああ——ま、しゆ——あああ——ん、う——ああ——や、あ——
——でれ、っひや——やああ——んい——ああ——こ、れえ——あん
——あッ——あああああ——ツ!!」

呂律が回らないどころではない、だらしなく口を開き唾液を溢しながら喘ぎを上げるジャンヌは、まるで獣そのものだ。下半身、膣壁を擦られる感覚に身震いし声にならない声をあげる雌。そこに、もう聖女などいない。ジャンヌは待ち望んだ快楽を得て悦びの雄叫びをあげる、一匹の雌へと堕ちた。

止まらない。腰を引きカリがジャンヌの秘部から顔出すと、すぐさま突き入れていく。ぶじゆっ、と生々しい音を響かせ埋もれていく肉棒。あとは、欲求のままに腰を振るだけ。その度に、ぱんっ、ぱんっ、と腰とジャンヌの下半身がぶつかる音が響く。

「あはっ——ひどい、かお——いまの——あなた、とてつも——ぶざま、よ——ほら、ますたあ、ちゃんに——なにを、いれて——もらったの？」

気付けば蓄を刺激していた指先から逃れていたオルタは、ジャンヌの頬を挟むように両手を添えた。くすつ、と口の橋を歪めるオルタ、彼女が浮かべた侮蔑の笑みをジャンヌは明滅する視界で捉えている。焦点の合わない瞳へ、涙を溜めながら。

「——ぺ——ぺにす、れす——ああ——わら、ひ——も、らめ——れすう——もお——ましゆ、たあ——のお——ああん——ひ、か——いりま、へん——あ、こ——れえ——しゆきい——ぐちゆ、ぐちゆ——きもち、い——んあッ——ッ!!」

「——ちがうわ、おちんちん、でしよ——ちやんと——いわないと——わたしが——もらつちやうわよ?」

荒い息を吐くオルタが、言葉を切らしながらジャンヌを責め立てる。どうやらオルタはジャンヌの体だけではなく、心まで墮とすつもりらしい。今この時だけは、彼女が聖女ではなく、ただのジャンヌ雌で居られるように。

ジャンヌの思考回路は、すでに焼き切れている。何が駄目で、何が良くて、何を言おうとしているのか自分でも分からない。唯一、彼女が理解できたのは——オルタの言葉に従わなければ快感を失う、盗られてしまう、ということだけ。

「——やあああ——おちん、ちん——おちんちん、れすう——ましゆ、たあ——のお——んいっ——おちん——ちんっ——わらひ、のお——なかあ——あ、ひっ——ぐちゆ、ぐちゆっ——ひ、てえ——きも、ち——ひい——しゆ、ごい——のお——あ、んんっ——んんんっ——ッ!!」

ジャンヌの言葉にゾクゾクと背筋を震わせたオルタが微笑む。運命に導かれ、人々に求められ、すべてを他人に捧げたジャンヌ。そんな彼女が、すべてを投げ打ち、恥も外聞もなく、求めるがままに卑猥な言葉を口にした。

その結果に満足そうな笑みを浮かべたオルタは、首を曲げ見上げて

くる。幸せそうな、それでいて満たされないと主張するように、瞳は劣情で揺れていた。

「わたしにも、きて——おちんちんで——きもちよく、して?」

そう言つて、オルタは臀部を落とし下半身をジャンヌと密着させる。じゅぶつ、じゅぶつ、と肉棒を出し入れするジャンヌの秘部、その直上へオルタの秘部が重なる。

——物欲しそうにヒクヒクと蠢くオルタの秘部を見て

——腰を揺らす度に襲ってくるジャンヌの膣内なを感じて

——辛うじて繋がっていた理性の糸が、ぷつりと切れた

ジャンヌの子宮口を亀頭でえぐってから一気に引き抜くと、すかさずオルタの秘部へと肉棒を突っ込む。ぶじゅつ、と生々しい音が聞こえたような気がした。だが、腰は止まらない、止められない。すぐさまオルタの臀部へ腰を打ち付け、肉棒を最奥めがけて叩き込む。

「——やあ——おちんちん——ぬい、ちゃ——やあ——ツ!!」

「——ひ、んっ——きたあ——おちん、ちん——わらひ、のっ——なかあ——ごりっ、れ——きたああ——ツ!!」

こつんっ、こつんっ、と亀頭でオルタの子宮口を何度も叩く。ドロドロになったオルタの膣壁なをえぐり、擦り、高まっていく射精感を強引に耐えながら腰を振った。じゅぶつ、ぶじゅつ、と生々しい音を響かせて。貪るように、オルタの膣内なを蹂躪する。

先ほどのキツく絞めてくるジャンヌの膣内なとは違い、肉棒へ吸い付いてくるような、絡みついてくるように伸縮するオルタの膣内な。無意識のままに、肉棒が跳ね上がってしまう。

その頃、息も絶え絶えなオルタは肉棒によつて与えられる快感のままに、だらしなく涙と涎を垂らしていた。それを見ていたジャンヌも、切なさや羨ましさに涙を流している。そして、どちらとも言わぬまま、示し合わせたようにキスを交わす。

「——ふう、んっ——あ——れろっ——おる、た——しゃん——ツ!!」

「——んうっ——んん、あっ——あむっ——ああ、ん——ひ、うう——い——あああ——ツ!!」

昂つていくままに唇を重ねる二人を見ながら、最後の一突きと共に

腰を引いてオルタの膣内から肉棒を抜くと、高まる興奮と射精への欲求を抑え、再び停滞なくジャンヌを貫いた。再びきゅっ、きゅっ、とキツく絞めてくる狭いジャンヌの膣内。

まったく違った反応を肉棒へ感じながら、さらに昂っていく。限界まで膨張した肉棒で、何度も何度も二人の秘部を渡り突く。そのうち、オルタとジャンヌも同じように昂っているのを感じた。果てたいと主張するように腰を、背中をビクンツ、ビクンツ、と痙攣させ始めた。

「んああ——おちん、ちん——あ、ひっ——お、つきく——ああ——こわれ、りゅ——んんっ——ひいっ——しゅご、ひ——のお——あんツ——っ——ああ、ん——しゅ、ごひ、の——がああ——く、くりゅうう——ツ!!」

——ジャンヌが獣のような雄叫びを上げる

「んんんっ——あ、ひっ——ごりっ——ごりっ、てえ——おちんちんっ——きもち、ひい——ひ、いくう——せえし——ほひ、い——のおびゅびゅ、れ——な、かあ——ぶち、まけ——てえ——いっば、ひ——しゃ、せえ——してええ——ツ!!」

——オルタが悲鳴のような喘声を上げる

彼女達の喘声、必死な懇願を耳にして肉棒が限界まで膨張し、耐えきれなくなった欲望が白い塊となって飛び出そうと肉棒の中を駆け巡る。そして、オルタの秘部へと肉棒を叩き付け子宮口を押し開いた瞬間、欲望の塊を解き放った。

びゅーっ、と、驚くほどの勢いで亀頭から迸っていく精液がオルタの子宮へ注がれていく。その感覚、子宮が精液に犯されるのを自覚したオルタはビクツと身を震わせ、絶頂も共に背中を大きく仰け反らせた。

「んんう——き、きたああ——せえし、があ——なかあ——びゅうっ——れ——きたあ——ああ、しゅご、ひ——どぶ、どぶっ——れ——ああ、ら——めえ——イクう——いくうううツ!!」

だが、まだ終わりではない。いまだ精液を吐き出す肉棒を引き抜き、今度はジャンヌの秘部へと突っ込む。きゅうっ、と締め付けてく

る膣壁が、射精し続けている肉棒を擦っていくだけで意識が飛びそう
だ。

だが、なんとか意識を保ちながら肉棒はジャンヌの最奥へと到達
し、精液を吐き出し続ける肉棒、亀頭で子宮口を抉じ開けた。瞬間、
ジャンヌも子宮を蹂躪してくる精液に背中を震わせ、腰を跳ね上げ
た。

「——しゅごひ、のお——きたあああ——おちん、ちん——があ——び
くん、びくんっ——あ、ん——しゆる、とお——どくんっ、どくんっ
——れ——な、か——にいい——あ、らめ——くるっ——んんっ——
しゅご、ひ——の——ッ——ひっ——ひっくうう——ッ!!」

びくんっ、びくんっ、と二人の体が痙攣していた。だが途方もない
解放感と射精感に思考を焼かれているのか、視界が明滅していてよく
分からない。ただただ、快感が突き抜けていく腰の感覚と、魂さえ
持っていかれそうな感覚に体が震える。

そして、とうとう射精の終わりを感じた。ビクンッ、ビクンッと痙
攣していたものの、もう突き抜けるような感覚は襲ってこない。代わ
りに、ものすごい倦怠感が、体を支配し始める。

「——んう——んっ——ま、しゅ——たあ——」

「——はあ——はあ——ん、ましゅ、たあ——ちや、ん——」

——薄れいく意識、明滅する視界

——どこか遠くにオルタとジャンヌの声を聞きながら

——緩やかに襲ってくる倦怠感と睡魔に身を委ね

——彼女達へ折り重なるようにして

——ゆっくりと、意識を、手放した



”あの夜”から数日が経過した今、今日も今日とてカルデアは平

穏、いつも通りの日々を送っている。まあ、いきなり謎のヒロインXが乱心したり、モードレッドが暴れたり、ゴルゴン三姉妹が暗躍したり、と忙しいこともあるけど。

うん、毎回、巻き込まれる方の身になってくれとも思う。

”あの夜”の出来事は、まるで夢のようだった。あれを機会にオルタとジャンヌが仲良くティータイム、なんてことが起こるかもしれない。少なくとも、天下の往来で口喧嘩を始めるようなことは、もう無いだろう。

「そう思ってた時期が僕にもありました」

「今日という今日は許しません、毎度毎度、貴女ときたら——迷惑を被るのはマスターなんですよ、いい加減にして下さいッ!!」

「はいはい、相変わらずの優等生な対応、お疲れ様。でも聖女様に言われる筋合いはなくてよ、私こそ毎日毎日、同じような説教ばかりで——いい加減、飽きてきちゃうわ」

バチバチ、と視線の火花を散らせる二人を尻目に盛大な溜め息を吐き出した。そう、”あの夜”の出来事は夢のようだった。それこそ、ホントに夢を見てたんじゃないかと思うくらい。相変わらず顔を会わせる度に口喧嘩を始めるオルタとジャンヌを眺めると、泣きたくなってくる。

なんて、泣き言は言ってられない。とりあえず二人を止めなきや。

「やめなって、二人とも…」

「いい加減にしなさい、二人とも」

声を掛けると、二人がこちらを向いてくれた。と思つた瞬間、いきなりオルタが腕に抱きついてきた。あまりにも突然のことに、わけもわからないまま直立不動で硬直してしまう。

「はい、止めてあげたわよ、マスターちゃん——」

腕を絡めてくるオルタがジャンヌに対して、ニタアと不敵に微笑んだ。ああ、これは挑発ですな分かります。というか、分かりやすいつてレベルじゃない。なのに、なんて顔してらっしゃるんですかジャンヌさん？

「ぐぬぬ」と唸るジャンヌ、彼女の肩が震えているのは怒りによるものだろう。やれやれ、やっぱりこうなるわけか。なんて思ってたなら、つつつ、とジャンヌが躊躇いがちに距離を詰めてきて——

「——う”う”——」

顔を真っ赤にしながら、反対側の腕へ手を回してきた。

なんでさ？

「あら、嫉妬したの？ 可愛い——」

「な”ッ!?! ちち、違いますからッ!! マスターが貴女に誘惑されたらいけないので、私が引き留めようと——ッ!!」

ジャンヌさん、その反応は肯定と同じです。ついでに言うと、貴女も腕を組んできたなら、誘惑を引き留めるどころか逆効果です。柔らかい双丘に両腕を挟まれたら、健全な男の子だと——

「あら、マスターちゃんったら元気ねえ——」

「——っ——ッ!!」

クスクス、とオルタが、わざとらしく少しだけ膨らんだズボンをまさぐってくる。絶対、確信犯だ。狙ってやったとしか思えない。そしてジャンヌさん、掌で顔を覆うのはいいけど、指の間からバツチリしっかり見てるのバレバレです。

「じゃあ、今から部屋で——ね?」

耳元へ顔を寄せ、オルタが囁いてきた。吐息が耳に当たり、ゾクツと背筋へ寒気が走る。おまけに股間をまさぐる彼女の手が心地よくて、下半身へ血が巡っていくのを止めることができない。

「——あ、その——わ、たし——も——」

赤面し、顔を伏せていたジャンヌがボソツと呟く。恥ずかしいのか、腕へ抱きついてくる彼女の腕が、さらに強く双丘へ押し付けられてきた。ジャンヌは確信犯じゃない、よね。うん、きつとそうだ、むしろそうであって下さい。

もはや、逃げることは不可能だ。

諦めの意思表示に、もう一度だけ溜め息を吐き出し――

「……………はいはい、分かりましたよ、性女様方」

と、答えてやった。ニュアンスの違いに頭へ疑問符を浮かべていたオルタとジャンヌが抗議の声を上げてくる、が、その抗議には耳を貸すことなく自室へ向かって歩き出した。そして、もちろん――

――このあと無茶苦茶セックスした

〈END〉

桜色の劣情（1）

（あ、れ——ここ、は？）

セイバー、沖田は目が覚めると自分がベッドで仰向けになっていたことに驚き、首だけを巡らせて周りを見回した。そこは白い天井と壁、少ない調度品が置いてある部屋。見覚えがある、ここは彼女のマスターの自室。そう思い至った彼女は、頭へ疑問符を浮かべる。

（たしかアルトリア・オルタさん、スカサハさんと修行をしていた、と思うのですが——ああ、もしかして私、倒れちゃったんですかね？）霞が掛かったような意識で、なぜ自分がマスターのベッドへ寝ていたのか、その経緯を思い出す。彼女が思い出したのはアルトリア・オルタの愛馬に引きずり回されたこと、スカサハに追い掛け回されたこと、この二つだ。

この二人を選んだのはマスターだが、もう少しなんとかならなかったのか、と沖田の口元へ苦笑が浮かぶ。実際スキルが強化できたのか、強くなったのかは甚だ疑問だった。

（——起きられ、なくはないですね）

しっかりと指まで違和感なく動かせるし、目を覚ましたおかげか意識もハッキリしてきた。おそらく、彼女が起きようと思えば起きれるだろう。だが、彼女は起き上がろうとしない。

ベッドで仰向けになったままの彼女は、体へ掛かっていたシーツを引き上げ顔を埋める。シーツを頭から被り、彼女が身動きするたび、呼吸するたび、太陽の匂いに紛れて鼻先をくすぐる匂いに恥ずかしくなつて赤面してしまう。

（すう——はあ——んっ、マスターの、におい——）

無意識に、顔が綻んでしまう。マスターと共に居ると彼女自身も体験したことがない感情、淫らな想いが沸き上がってくる。もっと近くに寄りたいという想いや、触れたいという欲求が。だからこそ、この状況は沖田にとって抗えない。

（——だ、抱きしめられてるみたい、です）

シーツ、ベッド、枕、いま彼女を包む全てのモノが彼女を欲情させていく。呼吸する度に一つ、また一つと彼女の理性が剥がされていく。そして、その欲求は、ついに彼女の想いと体へ矛盾を生んでしまう。

駄目だ、と頭で分かっても体は動いてしまう。手は下半身へ伸び、内腿をなぞり、衣服を潜っていく、徐々に核心へと迫っていく。つつつ、と自分の指が脚を這うと、言い様のない感覚にゾクツと背中が震えた。

（だ、駄目、です——こんな、こと——ツ——）

駄目だ、駄目だと意識するが自制が利かない。指が内腿を這い上がっていき、脚の付け根を過ぎ、下着越しに秘部に到達してしまふ。指先に力を込めると、くにゅつ、と下着と、それに隠された自分の秘部が卑猥に歪む。

マスターへの想いは欲求、欲望へと質を変える。罪悪感と背徳心までもが、今の彼女には興奮を煽る要素でしかない。しゅつ、しゅつ、と布地を通して秘部へと感じる快感とも呼べない微弱な刺激が、彼女を襲う。

「——んっ——あ——は、あ——」

熱い吐息が、沖田の口から漏れる。昂っていく興奮は彼女の呼吸を激しくさせ、肺は酸素を欲してしまった。それは空気と同時に、彼女にとっては欲情の毒とも言えるマスターの香りをも取り込んでしまふ。匂いを取り込んだ鼻、罪悪感が頭を甘い痺れが犯す。

「——んっ——だ、め——ひっ——あ——」

耐えきれなくなった彼女の口から、喘声が始める。熱い吐息に混ざり漏れる喘ぎ、普段の自分とは違う声質は抑えることができないう。彼女は下着の上から秘部を押すと、ずぶつ、と指が沈み込むのを感じる。布地が秘部を、ヒダを擦る感触に彼女の背中へ、ぞわつ、と粟立っていく感覚が心地よい。

「ひう——んんう——やあ——うん、ん——」

とうとう、漏れてくる喘ぎに耐えれなくなった沖田は体を捻り体の

位置を変えた。横を向き、顔を枕へと押し付け制御できない指先が体を、秘部をまさぐる感覚に耐えようと試みる。

だが、それは彼女にとって失策だった。枕へ鼻先を押し付けると、シーツとは比べ物にならないほどハッキリ、想い人の香りに鼻孔を犯される。意図せず、その香りは彼女を興奮させてしまった。

(ああ、マスターのにおい——こ、れ——だめえ——)

止まらない、止められない。

指先に込められた力が、徐々に強まっていく。ぐにゅつ、ぐにゅつ、と下着を何度となく秘部へ押し付け快感を貪る。枕へ顔を埋めたことにより困難になった呼吸は興奮を煽り、愛撫を強める潤滑油となる。

愛撫を強めれば強めるほど大きくなる喘声、それを抑えようとするために枕へ鼻先を押し付ける、鼻孔を想い人の香りに犯される、それは一種の機関。快感を貪るため、彼女が無自覚のままに行う卑猥な連鎖。

「んんっ——あん——はあ——い——ら——めえ——」

いつしか、彼女はうつ伏せになっていた。顔を枕へと押し付け、腰を持ち上げ、股間へ手を這わせる。彼女の格好に合わせてシーツが持ち上がってしまったているが、今の沖田には気にすることができない、そんな余裕はなかった。

ついに、下着では十分な快感を得ることができなくなったのだらう。秘部を覆っていた下着の脇から、指先が侵入していく。そして湿りを帯びた周囲を過ぎ、割れ目へと到達した瞬間——

「——んん——ッ!!」

彼女の秘部から、くちゅつ、と小さな水音が鳴る。昂った体、彼女の秘部から漏れてきた愛液が指先に触れたのだ。その量は湿っている、どころではない。唾液のようにトロトロと割れ目から漏れた愛液は下着へ大きなシミを作っており、太股まで垂れてしまうほどの量。

汚れてしまう、など彼女は考えることができない。指先に絡む愛液を、割れ目とヒダをなぞるように這わせた。上へ、下へと動く度に秘部から、くちゅつ、くちゅつ、と淫らに響く水音は彼女の耳に届かな

い。

「んっ——あん——っ——はあ、ん——ひっ——」

臀部を持ち上げ秘部をまさぐり、枕へ鼻先を押し付け、彼女は自慰に耽る。その脳内で、ここには居ない誰かのことを思いながら。優しく、それでいて素早く、自身の秘部を触っているのが”彼”であることを思い浮かべながら。

（ああ、マスターの、指が——私の、大事なところを——）

もう、彼女の理性は半壊してしまっている。徐々に秘部を擦る指の動きは早く、激しくなっていく。くちゅっ、くちゅっ、と音が鳴る度に沖田の腰が、背中が震えてしまう。貪るような感覚は、とうとう核心へと至る。

自己主張を始めた彼女の陰核、そこへ指が伸びる。愛液が付着したそれが、陰核を撫でた瞬間、言葉では言い現せない快感が彼女の全身へ走った。

「んあ——っ——ひい——っ!!」

ぞぞっ、と全身を走った快感に震え、とうとう沖田は理性を手放した。指先は陰核を押し、擦り、潰す。その度にビリビリと彼女の体は反応し、ハッキリしていた意識に霞をかけていく。

枕へ顔を押し付けていた彼女の顔は、快樂に歪んでいた。視界は揺れ、瞳は欲情のままに揺れ、だらしなく開いている口の端から唾液の糸を引いている。ただ快感を、快樂を、暴走する欲情のままに求めた。

「んっ——ひう——ん、あ——こ、れえ——ああ——ます、たあ

——や、らめっ——くちゅくちゅ——やめ、なきや——だめ、なの——にい——っ!!」

割れ目、ヒダへ指腹を擦り付ける度に、くちゅっ、くちゅっ、という音を響かせ、指先が陰核を突き、潰す度にコリコリとした感触を感じる。ビリッと脳髓へ電気のような快感が走っていく感覚に、彼女は耐えれない。

焼き切れていく思考、抑えきれない欲求、火照っていく体。とうとう、沖田は着ている衣服に手を掛けてしまう。シートへ包まれたまま上も、下も、自身の身を覆う衣服を脱ぎ捨てる。純白の下着を脱ぎ払

い生まれたままの姿になった彼女は、もう止めようとするのを諦めた。

「——ああ——きもち、い——ふう、ん——ま、すたあ——の——ゆびい——んんつ——ああ、ますたあ——すご、い——れすつ——ふあ、ん——ひつ、う——ます、たあ——」

彼女自身、なぜ脳裏へ”彼”が浮かぶのか理解できない。きつとベッドや枕などから漂う彼の香りに当てられたのだろう、と無理やり納得させてしまっしかなかった。激しく、荒々しく秘部と陰核を擦り上げる度に腰を揺らす沖田、もう声を抑える気もない。

「——ますたあ——んんつ——もつ、とお——んあ——ますたあ——しゅ、きい——あん、う——ま、しゅ、たあ——ますたあ——ツ!!」

想い人を呼び続け、割れ目と陰核を擦り上げる。熱に犯された頭、欲情する心、快感を求める体は彼女を自慰に熱中させる。それ以外に、何も考えられないほどに。だから気付かない、気付けない。

——部屋の扉が開き

——部屋の主が、入室してきたことさえ



アルトリア・オルタとスカサハへ説教を終え、自室へ沖田の様子を見に戻ってきたはいいが、どうにも様子がおかしい。部屋へ入ると、ベッドの上で涙が入り交じった声で自分を呼ぶ沖田を見付けた。

シーツに包まれていたので、何をしているのは分からない。ただ病弱な彼女のことだ、もしかしたら何か体に異変が起こっていても不思議じゃない。そう思ったら居ても立ってもいられず、ベッドへと駆け寄った。

「だ、大丈夫——ッ!？」

「ど、どうしたんだ——ッ!？」

ベッドへ駆け寄ってみると、沖田は荒く呼吸を続けながらうつ伏せになっていた。顔を苦悶に歪めており、その表情は何かに耐えているように見える。痛むのか、気分が悪いのか、判断することができない。顔を寄せ、彼女を覗き込むと——ようやく、といった様子で沖田は虚ろな瞳を向けてきた。

「あ——ます、たあ——」

沖田の頬は朱に染まり、荒く呼吸し、目は虚ろ。だが、唐突に彼女の顔から血の気が失せていく。顔どころか耳まで真っ赤にして、シーツを被ったまま、ガバツ、と起き上がった。

「ちちち、違うんです——ここ、これは——ツ!!」

自分の体へシーツを巻き付け、ベッドの上で正座する沖田。あまりにも唐突な彼女の奇行に、頭へ疑問符が浮かんでしまう。どういふことか、と視線を巡らせると——ベッドの上へ、無造作に脱ぎ散らかされた衣服を見付けた。そして、下着まで。

記憶に間違いがなければ、ベッドへ脱ぎ散らかされた衣服は寝かし付けた時まで彼女が着ていたものはず。なぜ服を脱いでいたのかという疑問が浮かぶが、それよりも、今の彼女の格好を予想し赤面してしまう。衣服と下着が転がっているのなら、たぶん、今の彼女は——

「う——ぐすつ——ひぐつ——ふええ、う——」

と、そこまで考えていると、いきなり彼女が泣き出してしまった。シーツを自分の体へ巻き付けたまま、顔を伏せてボロボロと涙を流す沖田。もう、何が何だか、と頭を抱えなくなる。

「——ごめ——えぐつ——なき、い——ひぐつ——ごめんな、さい——
うう——う、え——ふええ、ん——」

子供のように泣き始めた彼女に、困ってしまう。謝罪しているところを見ると、何やら怒られるようなことをしたのだろう。まったく身に覚えはないが。とりあえず泣き止まして、話をしないとラチが明かない。

彼女の頭へ手を差しのべて、綺麗な白髪を撫でる。サラサラと肌触りの良い髪を指先に感じながら、なるべく優しく撫で続けた。その甲斐あってか、徐々に沖田の嗚咽が小さくなっていく。

「——ひっ、く——ますたあ——」

ようやく沖田が落ち着いたところで、ベッドへ座る。何があつたのか、何をしてたのか。なるべく彼女を刺激しないよう、言葉をオブラートに包みながら聞いてみた。最初は俯いていただけの沖田も、意を決したように顔を上げると——

「そ、の——え、と——あう——ッ——」

ギシッ、とベッドを軋ませ沖田が寄ってくる。そして、ベッドへ膝立ちになった彼女は、自分の体を覆っていたシーツを掴み、ゆっくりと左右へ広げていく。

豊満な乳房の頂点で、ぴんっ、と自己主張する乳首。

しっとり滑らかな腹部。

太股まで伝うほどの愛液を垂らす秘部。

真つ正面、至近距離で見た沖田の裸体は美しいの一言だった。スレンダーな肢体は少しだけ震えており、羞恥から顔中を真つ赤にし、力いっぱい目と口を引き結ぶ彼女は淫靡で、目を離すことができない。

「わ、たし——マスターのベッドで、その——欲情、してしまつて——駄目だつて、わかつてるのに——止められなく、て——っ——マスターに抱かれる、のを妄想、して——うう——じ——自、慰を——して、まし、た——」

独白する沖田の声には、また涙声らしき質が窺える。ガクガクと脚を震わせ、自分の痴態を明かす。羞恥と後悔、嫌われるかもしれない、という恐怖が彼女の胸中を占めていく。だが体は、そんな彼女の想いとは裏腹に、欲情を求め続けていたようだ。

かすかに開かれた脚を震わせる、その根本。彼女の股間、秘部から、とろおっ、と愛液が垂れていく。粘性を帯びた愛液は秘部から溢れると、糸を引きながら落ちていき、ベッドへと吸い込まれていった。

「——ひ、つく——わ、たしのこと——きらい、にい——ならないでえ——ひ、ぐっ——や、だあ——ますたあ、に——きらわれる、の——

やああ——」

堰を切ったように、沖田が泣き出した。つまり淫らな行為をしてしまった罪悪感と、痴態を見られて嫌われるかもしれないという恐怖が、彼女を責め立てたのだろう。どこか儂げで、壊れそうな彼女が涙ながらに訴える”嫌われたくない”という想い。

そんなこと、あり得るはずがないのに、と苦笑が浮かぶ。むしろ気になっていた女の子の痴態を見て、聞いて、嫌える男など居ないだろう。安心させようと手を伸ばす、途中、ふと思った。

泣きじやくる彼女に対して、嗜虐心が沸いてしまう。このまま彼女を安心させてやるのも手だが、苛めたいという欲求が思考の邪魔をする。

「——ひっぐ——ごめ、なき——ひ——ますたあ——えっ、ぐ——ゆる、ひて——くだ——っさ——ふええ——う、うっ——おね、が——しま、すう——」

——意図せず彼女の泣き顔に興奮してしまい

——ズボンの下で固くなった欲望を感じながら

——彼女へ向けて放つ言葉は

↓「大丈夫だよ。君のこと、好きだから」

「許してあげてもいいけど、まずはお仕置きだね」

桜色の劣情（2）

↓「大丈夫だよ。君のこと、好きだから」

「許してあげてもいいけど、まずはお仕置きだね」

ベッドへ乗り、沖田をシートごと抱き締める。ふわっ、と花のような甘い匂いが漂うのを鼻先で感じながら、彼女の背中へ手を回し上半身を密着させた。彼女の顔が肩先へ押し付けられ、熱い息が掛かるとくすぐったい。ふるふると腕の中で小動物のように震える沖田を安心させるため、何度か背中を優しく叩いてやる。

「あ——んっ——ましたあ——」

背中へ彼女の手が回されたかと思うと、ぎゅっ、としがみついてきた。肩先や首筋へ頭や頬を擦り付けてくる彼女は、本当に小動物のようだ。くすぐったさと愛しさのまま抱き締める腕の力を強めてやると、彼女の柔らかい肢体、密着している部分が熱を帯びていった。

「——あ、あの——マスター、その——」

もごもご、と歯切れ悪く呟く沖田。もしかして呼吸が難しかったか、調子が悪くなったか、と心配して腕の力を緩める。が、それは杞憂だったようだ。彼女は体を離すと、膝立ちのまま背中へ掛けていたシートを取り払う。体を覆い隠す全てを取り払い、生まれたままの姿になった彼女は頬を朱に染め微笑みながら——

「わ、わたし——マスターと、ひとつに、なりたい——です——」

絞り出すような声で、呟いた。

その願いに、応えたいと思った。衣服を全て脱ぎ捨て彼女と同じ格好になると、急に沖田は「あわわっ」と微笑みを消し慌てだす。その視線は、すでに起立し膨張した肉棒へと注がれている。彼女の裸体を見て、彼女の股間から垂れる愛液を見て、泣き顔を見て、求められて——我慢など、できるはずがない。

膝立ちのままだった彼女へ、顔を寄せていく。仄かな甘い花のよう

な匂いに吸い込まれるまま、震える沖田の唇を奪う。すると、まだ唇が触れただけなのに、彼女は面白いほど、ビクツと肩を跳ねさせた。

「んっ——っ——」

彼女の両手が、肩へ乗せられた。羞恥と緩やかな快感によるものか、沖田の脚はガクガクと揺れている。辛うじて膝立ちできている、といった様相だ。今すぐにでも倒れたい、倒れてしまいたい、と揺れながら訴えてくる太股。

それを見て、嗜虐心がそそられた。

沖田の腰へ手をやり、つつつ、と指先を這わせる。愛撫とも言えない、くすぐる程度の接触。にも関わらず彼女は、面白いほど体をビクンツ、と跳ねさせた。その反応が面白くて、淫靡で、愛しくて、触れるか触れないかという微妙な愛撫を続けていく。

「んっ——ふう、あ——んん、う——や、ん——ます、たあ——」

彼女は何か訴えたいらしいが、開こうとしている口はキスによって塞ぐ。唇へ甘く噛み付き、舌で唇をなぞり、唾液を交換していくと、間近にある彼女の顔は蕩けた表情へと変わっていった。太股だけではなく、腕や腰もガクガクと揺らし始めたのは必死に耐えようとしている証。

トドメ、とばかりに糸を引き唇を離し、耳元で囁いてやる。先ほどまで彼女が行っていたと独白した自慰、誰かを想い、何かを想って耽っていた自慰、その”相手”と”内容”。誰に、何をされているのを妄想したのかという疑問を口にする。

「——や——そんな、のお——」

すると、彼女は羞恥からか顔どころか耳まで真っ赤にして、力いっぱい目を閉じた。いやいや、と首を振る彼女の耳へ吐息を浴びせ、教えて、と告げる。ゾクゾクと身を震わせる沖田は熱に犯されるまま、自慰に耽っていた時の思考を赤裸々に語り始めた。

「——あ——う——そ、のお——ま、ますたあ——に——や、さしく——あ、そこ——さわって、もらうの——を——そうぞ——してま、した——」

あまりの羞恥に泣き出しそうな彼女は、顔を俯かせてしまった。恥

ずかしい、嫌だと訴えながらも最後は妄想を口にしてしまう弱々しい姿を見ると、本当に沖田は素直な、良い子だと思う。だからこそ、嗜虐心が刺激されてしまう。

腰へと這わせていた手を、彼女の股間へと滑り込ませる。すると、粘性の高い水気の感触が掌を伝った。それは、彼女の秘部から垂れる愛液。溢れてくる熱くドロツとした愛液を掌ですくい、そのまま秘部を覆うように添えた瞬間、くちゅつ、と大きな水音が鳴る。

「——んっ——んんん——っ——ツ!!」

割れ目へ掌を重ね、溢れてくる愛液へ蓋をする。だが、漏れてくる量は指の隙間を、とろつ、と溢れていってしまふ。先ほど以上に漏れ出てくる愛液を掌に載せながら、ゆつくりと割れ目へ添って掌を前後へ動かすと——くちゅつ、くちゅつ、と愛液が混ざる音が耳につく。

押し出すたびに、引くたびに、彼女は腰をビクンツ、ビクンツと跳ねさせる。ガクガクと震える脚、ビクンツと跳ねる腰、もはや彼女は自分の意思で体を制御できていない。肩へ手を載せることで、辛うじて今の態勢を保っているだけ。

「——うあっ——ます、たあ——そ、れえ——らめ、れす——も——た、って——られ、な——ツ!!」

手を載せられた肩へ、沖田の頭も載ってきた。力が入らない脚、跳ねる腰は支えにならない。唯一の支えである肩へ体重をかけることで、秘部を浮かそうと試みているのだろう。いつまで保つか、と無意識のうちに口の端が歪む。

指を折り、わざと凹凸を付けた掌を秘部へ当て前後へ往復させ、くちゅつ、くちゅつ、と卑猥な音を響かせていると、たまに指腹へコリコリとした感触がある。それは、自己主張を始めた彼女の陰核。

「——やっ——そ、こ——だ、め——れす——あ、っん——しげ、き——つよす、ぎい——てえ——あ、ああツ——くう、んっ——あ、たま——びり、びり——つてえ——ツ!!」

叫びと喘声を上げる沖田は、霞がかかっていく思考と、秘部から登ってくる快感に理性を焼かれていく。思考、口にする想いとは裏腹に、快楽を貪り始める自分の体。自分でさえ制御できない体は、掌の

往復へ応えるように、震える腰を前後へ振り始めた。

くちゅつ、くちゅつ、と鳴る彼女の股間。快感に突き動かされるまま前後へ振り、陰核を押し付けてくる腰。自分のものとは思えない、勝手に動いてしまう腰に困惑を隠せない彼女は声を張り上げる。

「——やああ——ちがつ、のお——こ、しい——とまら、にや——ひい——あ、ん——くり、くりつ——れえ——きもち、つ——よ——しゅぎ、てえ——ああんつ——や、らめつ——く、るうう——ツ!!」

ぞぞつ、と彼女は自分の背筋へ走った悪寒に全身を震わせた。だらしなく口を開け涎を垂らしながら、きゅつ、と肩へ置いた手を握り、一心不乱に腰を掌へ押し付けてくる。沖田は、下半身からせり上がってくる絶頂への予感に恐怖した。

絶頂への予感、秒読みを察したら、あとは導くだけだ。先ほど以上に掌を秘部へ押し付け、固い部分が陰核を擦れるように角度を変えてやる。すると彼女は腰のストロークを早め、ぐちゅつ、ぐちゅつ、と陰核を自ら擦り付け始めた。

ビクンツ、ビクンツ、と体を跳ねさせながら、快楽に向かって登り詰めていく沖田。言葉にならない喘声を張り上げながらも、彼女は——ついに、達してしまった。彼女の全身がゾワツ、と粟立ち、次の瞬間、彼女は大きく背中を逸らし絶叫した。

「——ひっ——あつ——ああん——ううつ——あ、いつ——くう——んんっ——っ——あ——ああああ——ツ!!」

ぷしゅつ、という音が聞こえると、掌に愛液とは違う生暖かい体液が噴き出てきたのを感じる。絶頂と共に噴き出た潮は、掌などでは収まらない。噴き出す彼女の潮が、びちや、びちやつ、とベッドシートを汚していくのを眺めていたが——

「——あ——あ、っ——ああ——あ、んう——ああ——」

絶頂によるものか、うわ言を繰り返しビクンツ、ビクンツ、と体を痙攣させていた沖田が、背中から後ろへ倒れていくのを見てしまった。慌てて空いた方の手を背中へ回し、抱き止めてやる。荒く呼吸しながらビクンツ、と体を跳ねさせる彼女の顔は、ぐちゃぐちゃだった。目は虚ろで、口端から涎を垂らすほどに。

「あ——ま、す——たあ——」

くたあつ、と寄り掛かってくる沖田を抱き止め、ベッドへ腰を下ろした。あぐらをかき、その上へと沖田が座れるように。すると、股間の肉棒へ、何やら熱いモノが押し当てられたことに気付く。凶らずも、愛液と潮でドロドロになった彼女の秘部、割れ目が肉棒を押し潰すような形となってしまうていた。対面で座り、互いの性器を押し付ける形に。

態勢を変えようとするが、脱力した沖田を無理に動かすことを躊躇してしまふ。おかげで彼女の秘部、ヒダに肉棒を挟み込まれてしまつた。愛液と潮が、固くなつた肉棒へと垂れていく。

「あ——ま、すたあ——ますたあ——」

その時、沖田はベッドへ後ろ手を突くと、密着した腰を押し付けてきた。しかも、かすかに揺らしながら。上へ、下へ、彼女が腰を揺らすと肉棒が割れ目と擦れ合う。ぐちゅつ、ぐちゅつ、という音と共に。たつぷりと愛液、潮で濡れたヒダが肉棒の裏スジを擦ると、腰が抜けそうな快感が下半身へ走つた。沖田が上下へ腰を揺らすたびに、ずりゅつ、ずりゅつ、と生々しい音を立て秘部が、ヒダが肉棒を舐めていく。

「ふ、あ——ますたあ、の——あ、つい——」

愛液と潮を潤滑油にして、秘部が肉棒へ吸い付いてくる。ヒダはシワを使い、肉棒を擦り上げる。陰核が、時おり亀頭とぶつかり形を歪ませる。性器を押し付けあっているだけなのに、その快感は頭を突き抜けていくほどに強烈なもの。

目の前で後ろ手を突き、卑猥に腰を振る沖田の姿に目が離せない。ずちゅつ、ずちゅつ、と性器が擦れ合うたびに鳴る淫靡な音に耳を犯される。密着した股間から、むあつ、と漂ってくる雄と雌の二オイに鼻を焼かれる。

無意識のうちに肉棒はビクンツ、ビクンツ、と痙攣を始めた。彼女も無意識で行う快楽を貪る行動、頭を突き抜けていくほどの快感は、あつという間に理性を半壊させ絶頂、射精への欲求を即発させる。

「ああんつ——ま、すたあ——のお——ひ、つう——おちん、ちん

——あちゆ、いい——ふああ——んっ——きもち、いい——あんっ——うっ、ああ——しゆ、ご、ひ——のお——こ、ひ——とまら、な——ッ!!」

悲しそうな、切なそうな絶叫が上がる。自分が何を言っているのかさえ分からぬまま、体が求めるままに腰を振り続ける沖田。一心不乱に秘部を肉棒へと擦り付けて、昂つていく本能に従って欲求を貪っていく。

もう、我慢できない。彼女が腰を上下に揺らすのに合わせ、腰を跳ね上げる。押し付けられるまま、擦られるままではなく、互いに性器を押し付け合った。ぐぢゅっ、ぐぢゅっ、と股間から響く音は大きくなり、お互いの体が痙攣し始めたのに気付く。

「——んっ——んんんっ——ましたあ——もお、ら——め——れ、すう——あん——もお——ましたあ、のお——おちん、ちん——しかあ——かん、がえ——られ、なひい——やん——ひっぐ——あ——ご、め——な、ひや——いい——ごめ、ん——なひやいい——ッ!!」

瞬間、ごりっ、と裏スジへ陰核が押し付けられた。

ゾワッ、と腰が震え、痙攣する肉棒が膨張していくのを自覚する。中を駆け巡っていく欲望は、もう止まらない。明滅する視界、吐き出したいという欲求のままに肉棒が一際激しくビクンッ、と跳ねると——

「——んい——あ——っ——あ、あああああ——ッ!!」

びゅーっ、と、肉棒から、白い欲望が噴き出した。勢いよく飛び出した精液は、びちゃびちゃっ、と彼女の秘部といわず腹部といわず下半身へと降りかかっていく。同時に絶頂を迎えた彼女も、ぷしゅっ、と二度目の潮を吹いた。

意識まで飛びそうな射精感、虚ろな視界で沖田が後ろへ倒れていくのが見えた。手を伸ばしても今度は、抱き止めることができない。背中からベッドへ倒れ込む沖田、彼女へ追い討ちが掛かる。いまだ勢いが収まらない射精、迸る精液は弧を描き彼女の胸、顔まで飛び散っていく。

「——あ——あっ、いい——こ、れえ——ましたあ——の——」

程よい大きさの乳房だけでなく、髪や頬まで飛んだ精液が沖田を汚していく。だが、彼女に嫌悪感はない。むしろ頬を上気させ、うつとりと、どこか恍惚とした表情で降りかかる白濁を見上げていた。

長い長い射精が終わるが、いまだビクンツ、ビクンツと痙攣する肉棒を自制しつつベッドへ仰向けに倒れた彼女の様子を伺う。すると全身をピクンツ、ピクンツと痙攣されていた彼女の、虚ろな瞳が揺らいだ。

「あ——ま——す、たあ——」

かすかに口を開け垂れている涎もそのままに、虚ろな瞳へ涙を溜め、荒い息を吐く彼女の姿は、惚げだった。だが、その瞳は“まだ足りない”と物語っている。体を跳ねさせながらも、彼女は両脚を左右へ開いていく。すると精液と、愛液と、潮が混じり合って白く濁ってしまった体液。それが付着する秘部を見せ付けるように、かばあつ、と彼女は両脚を開け放った。

その姿は、まるで降伏した犬のようだ。股間から漂ってくる獣の二オイが、その姿を連想させてしまう。あまりにも淫靡で、卑猥な沖田の姿。だというのに、彼女はさらに両手を秘部へと近付け——

「——きて、え——ますたあ——」

くばあつ、と秘部を開いて見せ付けてくる。奥でヒクヒクと物欲しそうに蠢く膣壁を、白く濁った体液を、欲望に誘われるまま痴態を晒してくる。精液にまみれドロドロになった彼女が、絶頂した余韻のまま、一つになることを望んでいる。

——彼女の膣内へ、挿れたい

——彼女の膣内で、果てたい

——鎌首を上げた欲求、欲望に抗えない

——誘われるまま彼女へと近付くと

——ゆっくり、包み込むように

——沖田へと、覆い被さっていく

桜色の劣情（3）

「——あ——っ——え、えへへ——」

沖田へ覆い被さり、頭を撫でてやる。すると彼女は恥ずかしそうな、それでいて嬉しそうに口元を綻ばせた。何とというか、愛らしいと
うか愛くるしいと
うか、本当に彼女は犬か猫なんじゃないかと思
うくらい可愛らしい。

開かれた沖田の秘部へ、龟头をあてがう。ドロドロになつた秘部
が、くちゅっ、と音を立てるのを聞きながら顔を寄せていく。する
と、沖田は目を閉じ薄く唇を開けて迎えてくれた。唇を重ね、感触を
確かめる。ちゅっ、ちゅっ、と、つえばむようなキスで徐々に昂つて
いくのを感じた。

「——んっ、あ——きて、ください——ますたあ——」

するっ、と彼女の両手が背中へ回る。よく見れば彼女も腰を揺ら
し、龟头へ秘部を、くちゅっ、くちゅっ、と擦り付けてきていた。彼
女も昂り、興奮に理性を削られており我慢の限界なのだろう。

ぐっ、と腰に力を込め、肉棒を彼女の秘部へ埋めていく。狭い入口
を龟头で強引に押し開いていくと、ヒダの感触と膣壁の伸縮を感じ
た。ゆっくりと挿れている分、腰からせり上がってくる緩やかな快感
は、一気に突き入れたい、腰を振りたいという欲求を煽ってくる。

「——ん——あっ——ま、すたあ——の——はい、って——」

押し留めてくれたのは、沖田の声と表情。異物が体内へ侵入してく
る未知の感覚は、無意識のままに彼女の表情を歪ませている。苦しそ
うな、辛そうな、何とも言えない表情。それを見てしまったら、気遣
わずにはいられない。

なるべく彼女に負担を掛けないよう、少しずつ、少しずつ、腰を前
へ前へと押し出していった。ずずっ、ずずっ、と肉棒が侵攻する度に、
まわりついてくる膣壁がキツく、何度も締め上げてくる。

だが、その時、こっんっ、と龟头が何かにぶつかった。

それは、彼女が“少女”である証。

「んっ——はあ——き、きてください——おく、まで——え、つと——わたしの、はじめて——もらって、ください——またあ——」
背中へ回された彼女の手に、力が入る。さらに開かれた両脚は、腰へと絡み付いてきた。ぎゅうつ、と抱きついてくる彼女は、少しだけ震えている。間違いなく訪れる痛みを耐えようとしているのか、口を引き結び、ぎゅうつ、と目を閉じている沖田。

止めるわけにはいかない、そもそも止まれそうにない。
求められるまま、本能に従うまま——

——ぐいつ、と、腰を彼女めがけて動かし

「っ——ひっ——ぐ、ううう、んっ——ッ!!」

亀頭が感じていた抵抗が、ぷつり、と消える。その瞬間、背中へ回されていた手、指先の爪が肉に食い込んできた。突き立てるように、引つ掻くように。もしかしたら、血が出ているかもしれない。けど、痛みだけなら、たぶん彼女の方が何百倍も痛いと感じているはず。

背中が熱くなるのに耐えろ、痛みを無視しろ。絶対に、表情へ出しではいけない。少しでも彼女を、不安にさせてはいけない。苦悶に顔を歪め、固く閉じた目の端へ涙を溜める沖田の様子を窺いながら——さらに、奥へ、肉棒を侵入させていく。

「はあっ——は、あっ——あ——お、く——に——」

こつんつ、と再び肉棒が何かにつつかつたのを感じて、腰を止める。ふるふる、と密着させた体を震わせる沖田の顔を覗き込むと、彼女は潤んだ瞳でこちらを見上げてきた。いまだ痛みを感じてはいるようだが、その表情は嬉しそうで、幸せそうな微笑。

「頑張ったね……」

「偉かったね……」

「——え、えへへ——ますたあ、が——やさしく、してくれた、から——おもったより、へいき——でした——」

荒い息を吐きながら沖田は呟くと、はにかむように笑った。真意は分からないが、そう言われると嬉しさが込み上げてくる。純粋な愛しさのあまり、組み敷く彼女を抱き締めてやる。

そして、そのまま、どちらも動こうとしなくなった。

抱き締めた時に潰れた彼女の大きな乳房の奥、どくんつ、どくんつ、と脈打つ心音を聞きながら、それと連動して伸縮する膣壁の動きを肉棒越しに感じる。どれくらい、そうしていたのかは分からない。しかし不意に沖田が、どこか恥ずかしそうに呟いてきた。

「あ、の——もう、だいじょうぶ、です——だ、から——そのお——い——いっばい、うごいて——きもち、よく——してください——」

間近で見た彼女の顔は、真つ赤だった。込み上げてくる笑いを噛み殺し、彼女の願い通りに、ほんの少しだけ腰を引いてやる。ずずつ、とカリで膣壁を擦りながら、ゆつくりと肉棒を引き抜いていく。

緩やかな動きは膣壁の締め付けを、膣内なかの熱さを、些細な動きのせいか明確に伝わる快感を、ダイレクトに脳髄へ叩き込んでくる。ゾクゾクと背中が、腰が震えてしまう。

「——んんっ——あ——は、あ——こすれ、てえ——」

腰へと回されている彼女の両脚が、ぴくんつ、と跳ねる。どうやら彼女も、同じような感覚に驚いているようだ。ゆつくりと、緩やかな速度で訪れる快樂。問題なのは快樂が体を襲ってくる速度ではなく、密度だ。動きが緩やかな分、ハッキリと、明確に敏感になっている性器を通して快感が襲ってくる。

半ばまで抜けた肉棒を、再び押し込んでいった。緩やかな出し入れから得られる緩やかな快感、それは互いを昂らせ興奮を煽っていく。最奥の子宮口へ亀頭が到達したら、ゆつくりと引き抜く、ひたすら、その行為の繰り返し。

「——んんっ——あんっ——はあ、ん——ああ——い——ふ、あ——」

徐々に、沖田の声が喘ぎへと変わっていく。ずりゆ、ずりゆ、と結合部から卑猥な音を聞き、緩やかな刺激は痛覚を麻痺させ、絶頂への扉を開かせた。徐々に腰の速度を上げて、沖田へ苦しそうな様子は見られない。

だが、それは唐突だった。

「ふあ、ん——ッ——けほっ——こほっ——ッ!!」

いきなり沖田は背中へ回していた手を放すと、両の口で口元を覆う。何度も大きく咳をする彼女の口元を覆った掌の指の間から、つつつ、と赤い滴が漏れてくる。それを見てしまい、無意識のうちに腰は止まってしまっていた。

自分の気遣いのなさに、自己嫌悪した。彼女が、沖田が病弱なのは分かっていたはずなのに、と後悔の刃が胸へ突き刺さる。彼女のためにも、もう止めないと。そう思い至り腰を引く——が、離れることができない。

その理由は、腰へ回された彼女の両脚。彼女から肉棒を抜こうとしたのを察してか、先ほどよりも力強く脚が腰へと絡み付いていた。ななで、と疑問が浮かび彼女を見下ろしても、沖田は首を振るだけ。

「んっ——んんっ——んっ——ッ!!」

ふと見れば彼女の喉が、何度か揺れているのに気付く。それを見て察した。彼女は、吐いた血を呑み込もうとしている。心配かけまいとしてか、行為を止められることを恐れてか、その真意は分からない。だが、血を呑み込むたびに彼女の細い首、喉が揺れるのを黙って見ているのは——耐えられなかった。

口元を覆う彼女の腕を掴み、口元を露にする。その行動に驚いた表情を見せる沖田の頬は、少し膨らんでいた。構うものか、と彼女と唇を重ねる。強引に舌で唇を開かせると、奥からドロツとした液体が口内へ流れ込んできた。

「ん——んう——んっ——ん、んん——」

流れ込んでくる勢いに負けず、その液体を飲み込んでいく。苦くて、飲みにくい。でも、どこか甘い鉄の味。喉を通っていくたびに熱で焼けそうだったが、それさえも苦には思わなかった。ごくんっ、ごくつ、と喉が鳴り続ける音だけを聞く。

「ん、ちゅっ——んう——っ——んんっ——」

数分後、ほぼ全てを飲み終えたのか、もう口内で鉄の味はしなくなった。だが念のため、舌を彼女の口内へ振り込み残りを探す。舌を

絡め、齒の裏まで調べ尽くした。そして、唇を離すと——桜色の糸が、舌と舌を繋げていた。

「——ふあっ——あ——ひっ、ぐ——ます、たあ——」

糸が切れるのを尻目に、彼女を見つめる。口端から桜色の涎を垂らし、大粒の涙を流す彼女は、いま何を想っているのだろうか。それを知る術は、ない。だからというわけではないが、頭を撫でてやる。できる限り優しく、安心させてやるように。

「——えぐっ——ます、たあ——しゆき、れす——だいしゆきい——ますたあ——ますたあ——ふええ、っ——うわあ、あ——ひつく——ます、たあ——」

彼女の腕が、首筋へと回される。堰を切って溢れる涙をそのままに、号泣し始める沖田。子供のように泣きじやくる彼女を宥めるように、何度も何度も頭を撫で続けてやる。

すると嗚咽混じりに、彼女は——

「——ますたあ——うぐいて——くだ、さい——えんりよ、しないれ——くら、さい——ますたあ、の——ほしいです——いっばい——いっばい——ますたあ、の——なか、に、くださいい——」

必死に、懇願してきた。まだ不安ではあったものの、涙ながらに必死で懇願してくる彼女の想いを、拒否したくなかった。ただ分かった、とだけ告げると、再び腰を前後へと動かし始める。

少し停滞していたせいか、キスのせいかは分からない。だが、確実に水気を増した結合部が、ぐちゅっ、ぐちゅっ、と大きく生々しい音を鳴らし始めている。それに加え、肉棒へ絡まってくる膣壁が淫靡に蠢き、先ほどとは比べ物にならない快感を伝えてきた。

「——あんっ——あ、あっ——ます、たあ——しゆ、きい——あん——な、かあ——きもち、い——はあんっ——んんっ——んうっ——ま、す——たあ——あ、はあ、ん——ひ、う——うう、ん——ツ!!」

上半身を密着させたまま、一心不乱に腰を振る。ぱんっ、ぱんっ、と彼女の下半身へ腰を打ち付ける音を響かせているうちに、徐々にではあるが、射精への欲求がせり上がってくる。

こつんっ、こつんっ、と亀頭が子宮口を叩くたびに、階段を登るよ

うに欲望がが腰を通過し肉棒へと駆け巡っていくのを感じた。もう、長くは保たないだろう。それを察すると、絶頂へと向かって一気にスパートをかける。

「——ひうつ——ああんつ——ます、たあ——あんつ——ふああん——しゆ、きい——んう——あ——いつ——きもち、い——のお——んう——ああッ——ひい——つくうん——ツ!!」

ぱんつ、ぱんつ、ぱんつ、と素早く腰を彼女の下半身へ叩きつけ、膣壁を幾度となく擦り、最奥の子宮口へ何度もノックする。次第に肉棒は膨張していき、中で白く濁った欲望を充満させていく。

そして——
「——ん、あ——ひつ——ああんつ——つ——ます、たあ——らし、て——いっばい——いっば、い——らしてえ——あ、ん——しゆき、れす——ますたあ——だい、しゆきい——しゆきい——ます、たああ——ツ!!」

彼女の言葉、絶叫とも取れる告白と同時に腰を打ち付け、子宮口へ龟头を押し付け欲望を解放した。びゅーつ、と勢いよく飛び出していく精液が、絶頂したばかりの彼女の子宮を満たしていく。

どぶつ、どぶつ、と子宮へ精液が注がれるのを自覚した沖田は体を震わせながら、その感覚に酔いしれる。びくんつ、びくんつ、と背中を、腰を、脚を跳ねさせる彼女の表情は、恍惚と絶頂の余韻で歪んでいた。

「——あ、あん——つ——れて、る——だい、しゆき——な——ます、たあ——の——せえ、ひい——ああ——しあ、わせ——れすう——つ——う、あ——い、いっば——いい——んんつ——ふああ——」

ぶるつ、と身震いすると、射精が終わったのを感じた。いまだに痙攣する肉棒を抜こうと腰を引くが、またもや、それは彼女の長くしなやかな両脚によつて阻まれた。どうやら、もうしばらくは放してくれそうにない。

まあ、いいか。そう納得すると、彼女の背中へ腕を潜り込ませ抱き締めてやる。せめて彼女が満足するまでは、こうしておいてあげよう。きゅつ、と腕へ回された彼女の腕に、力が加えられる。

——こうして、しばらくの間、ベッドの上で重なり
——互いの体温を、心臓の鼓動を共有し合い
——緩やかな、余韻に浸っていた



行為に疲れ、そのままベッドへ倒れ込んだ。ぼふつ、と柔らかいベッドの感触が、とても心地良い。あとは眠るだけ、そう思っていたら、ふと視界から沖田の姿が消えていることに気付く。どこへ行ったのか、と首を巡らせようとした時、生暖かい何かが背中を這う感覚に、ゾワツ、と全身が粟立った。

ワケもわからず跳び跳ねようとしてしまったが、それは背中へ重ねられた手によって制止される。首だけを曲げて見ると、そこには申し訳なさそうな沖田の姿。

「これ、私のせいですね——ごめんなさい、マスター」

沖田が見つめるのは、彼女の処女を奪ったときに付けられた爪痕だ。よほどの力が込められていたのだろう、幸いにも出血は止まっているが、肌を傷付けられ爪の形に痛々しい傷が入っている。

どうってことはない、沖田が責任を感じる必要はない、と言うも彼女はバツが悪そうに眉根を寄せた。いくら気にするなど言っても、彼女は理由や経緯はともかく、自分が傷付けてしまったという事実を負い目を感じているらしい。

「——じゃあ、せめて——さっきのお返し、です——」

それだけ言うと、沖田は傷口へ顔を寄せていく。何をするのかと思っていたら、再び先ほどの生暖かい何かが背中を這う感覚が走る。そこで気付いた、この生暖かい何かが、彼女の舌であることに。

「——んっ——れろっ——ぺろっ——っ——はぁ——れろっ——ちゅっ——あ、ん——ぺろっ——」

唾液を載せた舌が背中を、傷口を這うたびにゾクゾクと背中が震え

る。お返し、と聞いて納得した。行為の最中、彼女の口元を垂れた血を飲んだ件、あれのお返しだと。

「れろっ——んっ——どお——れふ、か——？」

どう、と言われても、気持ちいいとしか答えられるはずがない。しかし沖田は、その返事に満足したのか「えへへ」と微笑むと傷口を舐め続ける。次第に背中を舌が這う感覚に慣れてくると、不本意だが眠気が襲ってきた。

うつら、うつら、と舟を漕いでしまう。

——まどろみに身を任せようとした時

——こちらが睡魔に負けそうなのを察知したのか

——沖田が小さく、呟いた

——「おやすみなさい」と

くおまけ（後日談）く

ふと廊下を歩いていると、遠巻きに誰かと誰かが言い争っているのが見えた。止めなければ、と思い近付くと、言い争っている二人が沖田と信長なのに気付く。言い争いするのは構わないけど、せめて仲良く喧嘩してほしいものだ。

やれやれ、今回はどんな話題で言い争いを——

「——う、嘘を申すでないッ——ま、マスターと、まぐわった、などと——ッ!!」

——おや？

「まあ、信じれないなら信じなくて結構ですよ。アナタが信じようが信じまいが関係ありません、だつて事実ですし——ああ、配慮が足りませんでした。こんな話、”生娘”なアナタには過ぎた話ですよ、忘れてください」

——沖田さん、ドヤ顔である

「——なっ——なああ——っ——ッ!!」

まわれーっ、みぎ。

見なかったことにしよう、そう決め込んで踵を返す。なにやら背後で爆発音とか、銃声とか、刀が空を斬る音が聞こえたような気がするけど、きつと幻聴だ。喧嘩が終わったら信長が「わしとまぐわえッ!!」って突撃してくる光景が見えたけど、あいにく未来視能力なんて持つてません。確実に気のせいです。そんな万能トンデモ能力を持つてるのは、セーラー服を着たお嬢様学校へ通う猫っぽい後輩だけで充分。

誰へともなく吐いた溜め息は、天井へ吸い込まれていった。

〈END?〉

アルトリア・ペンドラゴン（槍）編

嵐の王の秘め事（1）

特に目的もなくランサークラス達が割り当てられた一角を歩いていると、ふと誰かの部屋の扉が開きつ放しになってるのに気付いた。いくら見知った人しか居ないカルデアとはいえ、不用心すぎると苦笑が漏れる。

誰の部屋かは分からないが、開けっ放しは良くない。どうせクー・フリーンかスカサハ辺りが閉め忘れたんだろう、そう思い至って扉へ近付くと——その部屋の中は、驚きの光景だった。

どこへ目を向けても、ぬいぐるみ。調度品の上、棚の上、ベッドの上、ありとあらゆる場所へ、所狭しとぬいぐるみが座っていた。遠目だったので確信はないけど、ぬいぐるみは動物のものが多く見受けれる。パツと見、ライオンだけが少し多いような印象だろうか。

このファンシー具合から察するに、エリザの部屋だったのかもしれない。やれやれ、気を付けて欲しいものだ——と、苦笑混じりに扉を閉めようとした瞬間。

「——見たな？」

冷たい、凍えるような呟きが聞こえ背中がゾクツ、と震える。あまりの威圧感に振り向くことも出来ずにいると、いきなり腕を誰かに掴まれ、ぬいぐるみの巢——もとい、ぬいぐるみが大量に置かれた部屋の中へと連れ込まれてしまう。

「いったい誰が、と首を巡らせると——」

そこには黒の鎧を身に纏う騎士王、いや、暴君が居た。彼女はランサー、アルトリア・ペンドラゴン。厳格そのもの、王者の風格を漂わせる佇まいは、対峙した者に畏怖を与える頼もしくも恐ろしいサヴァントの一人。

ん、いや待て、なぜ彼女が”この部屋”へ入ったんだ？

睨み付けてくる彼女から視線を外し、周囲を見回す。すると見えるのはもちろん、ぬいぐるみ。どこを見ても、ぬいぐるみ。あっちも、こっちも、ぬいぐるみ。うん、ここはたぶん、エリザの部屋だ。それ以外に考えられない。

連れ込まれた勢いで、投げられる。その先にはベッドと、すごく大きなライオンのぬいぐるみ。背中からベッドへ着地するも、痛みはない。どうやらライオンのぬいぐるみとベッドが、うまく衝撃を和らげてくれたようだ。

——抗議しようとアルトリアへと視線を向ける

——だが彼女は俯きながら、絞り出すような声で呟いた

「——見てしまったな——」私の部屋を」

「……………は？」

「……………え？」

彼女は言った、”私の部屋”と。つまり、ぬいぐるみに占拠されてしまっているこの部屋の主は、アルトリアだということ。なんとも可愛らしい趣味だな、と思う。普段の彼女も凛々しくて素敵だが、そのギャップは無意識に顔を綻ばせる。

と、いきなりアルトリアが鎧を脱ぎ始めた。あまりにも突然のことに、頭がついていけない。止めようとするが、言葉を発することができなかった。鎧を外し、衣服を脱ぎ捨てていく彼女の姿が、あまりにも官能的で、淫靡に見えたから。

そして、とうとうアルトリアは最後に残った下着をも脱ぎ捨てた。露になった豊満な乳房と股間の前へ腕をやり、明後日の方へ真っ赤になった顔を向ける彼女は、まるで彫像のような美しさだった。

「こ、このことは、誰にも言うな。本来なら何か対価をもって乞うべきなのだろうが、あいにくと今の私は貴様のサーヴァント。条件に見合った対価を提示することが出来ん。だ、だから——この身を、差し

出そう」

彼女が何を言ってるのか、すぐには理解できなかった。このこと、というのは、たぶん「この部屋」のことだろう。つまり普段の彼女からは想像できない自室、ぬいぐるみに囲まれた部屋で寝起きしていることを秘密にしたい、のか？

そして、対価という彼女の言葉。交換条件ということなんだろうけど、体を差し出すというのは、その、それこそ見合っていない。たかだか部屋、趣味趣向を秘密にするだけなのに。

「——だ、誰かに言えば——命は無いものと思え——」

なんて思考を巡らせていたら、アルトリアがベッドへと乗ってきた。そして、有無を言わずベルトへ手をかけ始める。かちやかちやつ、とバツクルから金属音を鳴らし、ズボンへ隠されていた下着を露にされた。

そこは、すでに固くなり始めている肉棒が下着を押し上げ不自然な形に盛り上がっている。いきなりとはいえアルトリアの裸を見てしまったのだから仕方ない、とは言えるはずもなく。

「——んっ——」

アルトリアの顔が、股間へと寄ってくる。そして、下着越しに重ねられる唇。どこか上気した表情で唇を押し当ててくる彼女は、そのまま腰を落としていく。ぴくんっ、ぴくんっ、と下着の中で跳ねる肉棒に添って上から下へ。途中、彼女が下着に噛み付くと、腰を落としていく動作に合わせて下着が下へとズレていく。

ものの数秒で、ズレた下着から肉棒の先端が顔を覗かせた。まだ少し皮を被っている亀頭がアルトリアの吐息に触れるたび、ぴくんっ、ぴくんっ、と小刻みに揺れる。むあっ、と雄のニオイが彼女の鼻を犯すと、アルトリアは恍惚の表情を浮かべていた。

「——すごい異臭だぞ、ちゃんと洗っているのか主よ。まあ、大きさは及第点といったところだが——味の方は、どうかな——？」

アルトリアの口から、赤い舌が覗く。それは肉棒の先端へと近づき、触れ合った瞬間、ぴちやつ、と唾液を鳴らせた。ゾクッ、と背中が震えるのを感じながら彼女を見下ろすと、アルトリアは不敵な笑み

を浮かべるだけ。こちらの視線を無視し、彼女は少しでも露出した亀頭を中心として、円を描くように舌先を這わされていく。

それだけでは飽き足らず、彼女は半ばまで亀頭へ被っていた皮を指で摘まむと強引に引つ張り、皮と亀頭の間へ隙間を作ってきた。それだけでも、かすかな痛みと快感に腰が浮いてしまう。

「れろっ——んう——ぺろっ——あむっ——れろお——」

だというのに、アルトリアの舌先が肉棒と皮の隙間へと潜り込んできた。普段は刺激されることのない皮の内側と敏感な亀頭へ、ザラザラとした舌が擦られていく。グリグリと奥までほじられ、溜まる恥垢を執拗に、丹念に舐め取られていく快感は凄まじいものだった。

彼女が這わしていた舌を浮かせると、その先端辺りに真っ白な恥垢が付着しているのが見えた。停滞なく、舌を口内へと収めたアルトリアは——くちゅっ、くちゅっ、と、わざとらしく大きな音を立て口の中で恥垢を転がした。

そして、たつぷり数秒ほど恥垢を味わい尽くしたアルトリアは、ごくんっ、と大きな音を立て口内へ取り込んだ恥垢を唾液と共に飲み込んだ。

「——んっ、ぷあっ——ふむ、悪くない——んっ——マスターとしての力量は見極めたつもりだったが、こちらは予想外だ——ふふっ、嬉しい誤算だな——」

舌舐めずりで唇を濡らす彼女が、うっとりとした表情で、もはや限界まで起立しきった肉棒へ頬擦りしてくる。滑らかな頬が裏スジやサオを擦るたびゾクゾクと背筋が震え、身の毛がよだってしまう。

こちらの心情を知ってか知らずか、妖艶な雰囲気醸し出すアルトリアは肉棒の根元へ手を添え固定すると大きく口を開け——肉棒の先端、亀頭へかぶりつく。

「——あ、んむっ——れろっ——んじゅっ——ぷあっ——んっ——むっ——んんっ——んむっ——あん——ふっ、う——えあっ——んっ——んっ——んっ——ツ!!」

彼女の頭が、素早く前後へ揺れ始めた。亀頭が彼女の唇に擦られ、唾液が溜まる口内で蹂躪され、舌先が裏スジを撫で、サオへと吸い付

き絞ってくる。アルトリアの口内へ亀頭が飲み込まれるたび、しゃぶられるたび、じゅぼつ、じゅぼつ、と卑猥な音が大きく響く。

彼女の頭が揺れるたび、ビリビリと腰から抗えない快感がせり上がってくる。肉棒どころか、腰ごと吸いとられそうなアルトリアの口淫。我慢すればするほどに溢れてくる先走りも、あつという間に舐め取られ、吸いとられる。

「——んっ——んんっ——ぶ、はっ——ふふっ、こんなにビクビクさせるなんて、感じやすいのだな——だが、まだ果てるなよ。どうせなら、こちらの方が良いだろう——？」

アルトリアが肉棒から口を離すと、ねとおつ、と先走り唾液が糸を引く。彼女の言う通り、びくんっ、びくんっ、と跳ねる肉棒。もはや昂りは最高潮、いつ爆発してもおかしくないほどに膨張した肉棒が——柔らかい、大きな弾力性のある塊に挟まれた。

むにゅっ、と肉棒を挟むように押し付けられたのは彼女の豊満な乳房、形の良い大きな乳房はやすやすと肉棒を包んでしまう。

「——んっ——あ、つい——な——」

両脇から肉棒を包む乳房を掌で押すアルトリアの体が、上下へ揺れ始めた。すると、にゅるっ、にゅるっ、と先走り唾液を潤滑油にして擦り上げられる。

乳房が上へ跳ねると肉厚で柔らかい乳房が亀頭を擦り腰が跳ね、肉棒を搾るように圧迫してくる乳房が下へ動く亀頭が顔を覗かせ擦られるサオを通して寒気が背筋を震わせる。

「——んっ——ふっ、う——んん——さあ、好きに果てると良い——っ——その袋へ詰まった汁を、解き放つてしまえ——」

ずりゅっ、ずりゅっ、と徐々に乳房が肉棒を摩擦する速度が上がっていく。見れば、アルトリアも頬を朱に染めこちらを見上げていた。彼女の言葉は呪詛となり、腰から肉棒へと欲望が流れ込んでいくのが分かる。

肉棒の根本から、内部を欲望が駆け巡っていく。それに伴いドクンツ、ドクンツ、と脈打つ肉棒は膨張し痙攣し始める。もう、我慢など、できない。射精したいという欲求に突き動かされるまま、アルト

リアの頭を両手で掴んだ。

「——っ——んぶっ——んんっ——じゅっ——んう——んんんッ!!」
肉棒の先端をアルトリアの口へと押し付けると、射精の前兆を察してくれたらしい。口をすぼめた彼女は、亀頭へと吸い付いてくる。ぢゆうっ、と卑猥に音を立てながら、その時を待つてくれた。

そして、肉厚な乳房が、ぎゆうっ、と肉棒を締め付けてきた瞬間、駆け巡った欲望が、亀頭の先端から絶頂と共に勢いよく噴き出した。我慢に我慢を重ねたせい、びゆうーっ、と噴水のように勢いよく噴き出す精液。それは吸い付いてくる彼女の口の中へと、一気に撃ち込まれていく。

「——ん——んんんっ——んっ——じゅっ——じゅるっ——んっ、く——んっ——じゅっ、ずうっ——んっ——ッ!!」

精液はアルトリアの細い首、喉の奥へと直接流し込まれていく。だが、その量と濃度は彼女の予想を遥かに越えていたらしい。最初こそ停滞なく飲み下せていたようだが、とうとう彼女の口内の許容力を越えてしまったらしい。

「——んっ——ぶあっ——っ——けほっ——ご、ほっ——あ——すご、い——ああ、くさいの、が——こほっ——んっ、く——ふあ——あ——ああ——」

びちやびちや、と精液が生々しい水音を立てて咳き込むアルトリアの顔を、髪を、頬を汚していく。どろおっ、と顔中に付着した精液が垂れると、糸を引きながら肉棒を挟む乳房へと溢れていった。

びゅっ、びゅっ、と射精が収まっていくと、機を見て再びアルトリアが亀頭へと吸い付いてきた。ずぞぞっ、と勢いよく空気を吸い込む音は、彼女が肉棒のへ残った最後の一滴まで吸い尽くす音。

「——じゅっ——じゅ、じゅるっ——ず、ずずっ——ん、ふっ——んん——ぶあっ——ん、あ——ひっぱ、ひ——れた、ら——」

ちゅぽんっ、と音を立て肉棒から唇を放したアルトリアは、大きく口を開け見上げてきた。すると、真っ白な精液が彼女の口内、舌へ載っているのが見えた。だが、それも一瞬。口を閉じたアルトリアは、くちゅっ、くちゅっ、と口内で精液の味を確かめ——

——ごくんっ、と飲み下した

「——えあ——ふふっ、臭いうえにドロドロで飲みにくい——」

飲み下したのを証明するためか、アルトリアは再び大きく口を開けた。すると、先ほどまで口内へ大量に残っていた精液は一滴も見当たらない。本当に一口で、すべての精液を飲み下したらしい。

そして今度は、びくんっ、びくんっ、と痙攣する肉棒に付着した精液を舐め取り、綺麗になったサオの部分へ頬擦りしてくるアルトリアは——挑発的な笑みを浮かべながら、見上げてきた。

「ふふっ、貴様に感化されたせいだろうな。少しばかりではあるが、私も昂ってしまっつてな——もう一回くらいは、できるだろう？」

——精液で顔中を汚すアルトリアの瞳は

——欲情と快楽への期待に揺れていた

——むあっ、と雄のニオイが漂うなか

——焼き切れた脳髓、理性は

——拒絶、拒否を否定する

——いまだ興奮冷めやらぬ本能のままに

——無意識のままに、首を縦に振ってしまっていた

嵐の王の秘め事（2）

ベッドの上で衣服、下着を脱ぎ全裸になると、待つてましたとばかりにアルトリアが体を寄せてくる。それと同時に彼女は顔を胸板や鎖骨へと寄せ、唇を這わせていく。ちゅっ、ちゅっ、と唇が鳴り無意識に体が跳ねてしまう。

「——んっ——ちゅっ——れろっ——ちゅ、ん——」

甘い香りを漂わせ体中へキスを散らしてくるアルトリアから逃げないように身を捻るも、すらっ、と長く細い彼女の腕が体へ絡まり逃亡を許してくれない。辛うじて動く首だけを巡らせると、ふと枕元のほうに不思議なものを見付けた。

枕元へ転がっているのは少し大きめなライオンのぬいぐるみ、その背中へ隠れるように転がっているのは動物ではない。手足があり、顔もある、それは人型のぬいぐるみ。周りは全て動物のものなのに、それだけは人の形をしていたのが——とても、不自然に感じた。

「——ふあ、んっ——ちゅ——うん——は、あ——」

アルトリアは体へのキスに必死の様子、これなら気付かれることはないだろう。体を捻り逃げるフリをして、ぬいぐるみへと手を伸ばす。ふわふわと、柔らかい感触のソレは間違いなくぬいぐるみだ。ただ、その、形というか、見た目、妙に親近感がある、というか——

——動物とは違う手足に、白い服、逆立った黒髪

——これ、もしかして、”自分”の

「——んっ——ッ!? ふあッ!? なな、なぜッ!!」

いきなり、持っていたぬいぐるみを引たくられた。さっきまでの淫行そっちのけ、ぬいぐるみを胸に抱えて顔どころか耳まで真っ赤にするアルトリア。ぎゅうっ、と両手で抱き締められているぬいぐるみが歪んでいるのを見ると——何故か、すごく痛そう。

「う”う”」と羞恥のためか顔を背けていた彼女が、顔を俯かせてしまった。ぬいぐるみの頭へ顔を埋めるようにして、赤くなつた顔を見られないようにしているんだと思う。その姿は、さっきまでのアルト

リアとは違い初々しく可愛らしい。

「……こ、これは——あの、その——ち、違いますからね。たまたま、偶然にも主に似ているだけのぬいぐるみです。ええ、決して貴方ではありませんとも。勘違いしないでもらえますか？」

雰囲気が緩んだのもあるが、もごもごと、歯切れ悪く口元をぬいぐるみで隠しながら呟く彼女。口調も先ほどまでの尊大な口調ではなく敬語に変わっており、完全に素が出てしまっていた。

——そこで、疑問が生まれた

勝手に部屋を見てしまったからアルトリアは怒っている、そうだとばかり思っていた。だからこそ彼女は殺気を当ててきたり、尊大な口調で脅してきたんだとも。けど、この様子だと怒っているようには見えない。

——何かが、おかしい

思い返してみれば、不自然なのは今この状況じゃない、部屋へ連れ込まれるより前からだ。アルトリアは部屋を見られたくないはず、なのに扉を開け放しにしていたという矛盾。仮にそれが事故であったとしても、黙っている代わりに性行為へ踏み切るという行為は、まったくもって彼女らしくない。

まさか、とは思ったが、聞かずにはいられない。

「……もしかして、最初から？」

「……罫に嵌めたね？」

「——っ——」

追求を耳にしたアルトリアの肩が、びくんつ、と跳ねる。ぬいぐるみに顔を押し付けているせいで表情を見ることはできなかったが、ふるふるつ、と彼女が体を揺らし始めたのを見て確信した。つまり、これは最初からアルトリアが仕組んだ、でっち上げだということ。

たぶん部屋の扉が開け放しだったのは、わざと、故意だった。そし

て中を確認させてから部屋へ連れ込み、こちらに非があると思い込ませた上で、交換条件云々と並べ立て性行為に及んだのだろう。

違うか、とアルトリアへ問い掛けると、首を振るのが見えた。

「——その通り、です。私も主に——か、構って——ほしくて——つ——でも、自分から言うことが、できなくて——このような策を——」
もはや観念したのか、ぬいぐるみを抱いたアルトリアは全てを白状した後、背を向けてしまう。凹凸のない滑らかな背中と、少し前屈みになっているせいで強調されている臀部の割れ目がとても卑猥だった。

それにしても、アルトリアに「構ってもらいたいのに素直になれなかった」なんて言われたら怒るに怒れない。無意識に浮かぶ苦笑を噛み殺しながら彼女の背中へ近付くと、腕を回し抱き締めてやる。

「——あ——っ——」
すると突然のことに驚いたアルトリアの手元から、ぬいぐるみが滑り落ちた。ベッドの上へ転がるぬいぐるみを一瞥し、彼女の耳元へ顔を寄せる。途中、絹のようなサラサラとした肌触りの髪が頬を撫でながら。

彼女の耳元へ鼻先を近付けると、甘い匂いが鼻孔をくすぐっていく。その香りと、体を震わせるアルトリアの反応に、胸の奥底から沸き上がってくる嗜虐心。それに突き動かされるまま、軽くアルトリアの耳へ噛みついた。

「——っ——ひゃんっ——ッ!!」

柔らかい彼女の耳を、上下に挟み込んだ歯で擦る。逃げようと首を逸らすアルトリアだったが、背後から回した腕は逃亡を許さない。歯と、唇と、舌で、丹念に彼女の耳を蹂躪する。

わざと唾液を跳ねさせ、くちゅっ、くちゅっ、と大きく音を立てて彼女の耳孔を犯す。歯が耳の形を変え、唇が緩やかな刺激を送り、舌が音をもって耳を犯す。たかだか、それだけの行為。なのにアルトリアは、どこか恍惚とした表情で、甲高い喘ぎを上げてしまう。

「——ひっ——う、あ——ひゃ、あっ——んう——」

堪らなくなったのか、彼女が首を曲げ頭だけで振り向いてきた。と

ろんっ、と覇氣のない瞳は、悲しそうに、切なそうに揺れている。ふと気付くと、彼女の掌に手首を押さえられていた。促されるままに腕を体から剥がされるが、彼女へ導かれるままに腕が降りていく。

彼女に導かれる腕、その指先が柔らかい何かに当たると、視線を向けると、指先が触れていたのは彼女の下腹部。背中と同じように滑らかなで、しっとりとした感触。それは、彼女の無言のおねだり。

「——っ——」

視線を合わせると、そっぽを向かれた。たぶん恥ずかしかったのだろう、表情は確認できなかったが耳が真っ赤、本当に素直じゃない。下腹部を指先で撫でるたびに肩を揺らす、そんなアルトリアの反応を楽しみながら太股へと掌を這わせた。

肉厚なアルトリアの太股を撫で、根元、内腿、核心部の周囲を撫で回した。温かい肌、少し汗ばんだ彼女の下半身は掌が動くたびにピクツ、ピクツ、と反応してくる。緩やかな刺激、核心を避けた愛撫にアルトリアの興奮が徐々に高まっていくのを感じた。

「——んっ——あ——はあ、っ——うん——あ——ちが、っ——んうっ——こっ、ち——さわ、って——ッ——ほし——ッ!!」

手首を掴んでいる彼女の手が、促すように引っ張ってくる。引っ張られた手が滑り込んでいったのは、彼女の股間。つつつ、と指先が太股に閉じられた根元を過ぎると、明らかに汗とは違う水気を感じた。

アルトリアの肩へ顎を乗せ視線を落とすと、少しずつ閉じられていた太股が左右へ広げられていくのが見えた。隙間へ、掴んだ手を導こうとするアルトリアは羞恥のためか力いっぱい目を閉じ、唇を引き結んでいる。

「——ふ、う——んん——っ——あ——あんッ!!」

彼女に導かれるまま掌が股間へと侵入した瞬間、くちゅっ、と水音が鳴る。ドロドロした熱い愛液が指先へ絡んでくるのを感じ、不意打ちによって彼女が上げた甲高い喘声を聞き、不覚にも昂っていくのを感じた。

指を曲げると、柔らかい割れ目とヒダを見付ける。愛液が付着したそれを指先でなぞり、指腹で擦る。先ほどまでの甘く緩やかな刺激と

は違う強烈な快感は、アルトリアの腰を跳ね上げるには十分な威力。

背中を反らせてくる彼女と上半身を密着させ、ふと視界で揺れる豊かな双丘を持ち上げるように下方から手を添えた。むにゅつ、と柔らかい弾力のある乳房に指を埋め、力の入れ具合を変えると卑猥に形が歪む。

「んっ—ひゃ、ん—あ、あつ—ふあ—んんっ—き、もち
—いっ—ああん—ひ、う—こ、れえ—ひと、りで—する
の、つと—ぜんぜんっ—ちが、つ—っ—んああ—ツ!!」

秘部、ヒダや割れ目へ這わせた指へ力を入れ、徐々に速度を上げてやる。くちゅ、くちゅ、と漏れ出てくる愛液を塗りつけるように優しく、時おり強めに押しつけ強烈な快感を与えようと激しく。

同時に乳房のほうにも、刺激を与えていった。

指を動かすたびに乳房は卑猥に形を変え、むにゅつ、むにゅつ、と押し返してくる。途中、乳房の頂上へ自己主張を始めた乳首が指先に当たった。固くなったそれを指先で転がし、軽く爪を立て、弾いてやると、面白いほどアルトリアは体を何度も跳ねさせる。

それにしても、と絶やさず愛撫を続けながら彼女の耳元で囁いた。喘ぐアルトリアが溢した言葉、「一人ですの」という失言の意味を問い掛ける。分かりきっている意味、それを彼女の口から聞きたくて。

「んい—それ、はあ—んうっ—じ、ぶんで—なぐさめ、る
—ツ—よりの—あんっ—きもち、よく、つてえ—ああ—
やあ、つ—あた、ま—おかし、く—なっ—ツ—ふあ、んっ
—ツ!!」

乳房と秘部から登ってくる快感は、彼女の理性を焼いていく。もはや自分でも何を言っているのか分からない彼女は霞が掛かる頭、焼き切れる思考で本能のまま、羞恥という堰を切つて溢れ出る欲望を言葉に乗せた。

「—ある、じ—の—ゆびい—あッ—いい、のお—いじつ、
て—もらうのお—いいっ—あつ—あんっ—あつ—うん
—ひ、う—あ、つ—らめえ—ひ、つ—くう—ツ!!」

絶頂へ駆け上がっていくアルトリアは、ぞぞつ、と粟立つ背中を弓反りにして短く喘ぐ。登り詰めた、絶頂したい、という彼女の欲求を察知し秘部の上部で固くなった陰核を指先で押し潰した。

さらなる量の愛液が、物欲しそうにヒクつく割れ目から溢れてくるのを感じる。それと同時に、乳房を搾り上げ、起立しきった乳首を指先で摘まみ捻り上げた。痛みを感じるほどの、強烈な刺激。だが理性が焼き切れている今のアルトリアには痛覚すら絶頂を促す要因、快感の一つにしか感じれない。

「ふああつ——お、つばい——もお——あ、そこ——もお——んんつ——らめつ——も、がまつ——でき、な——つ——ふあ、んんつ——ひ、ぐうつ——くりゆ、つ——すご、ひ——のお——つ——くりゆうう——あつ——んんつ——い、くつ——つ——ああ——いつ——つ——くううう、ん——ツ!!」

瞬間、アルトリアは背中を反らせ腰を跳ね上げた。

迎えた絶頂は、彼女の股間から盛大な潮を噴出させた。ぷしゅつ、ぷしゅつ、と体の痙攣に合わせて噴き出てくる潮を掌へ感じながらアルトリアの横顔を覗き込むと、恍惚とした表情のまま、口端から唾液をこぼしながら荒く息を吐き出していた。それは、なんとも淫靡で、扇情的な表情。

摘まんでいた乳首から指を外し、掌や指を乳房へと埋め優しく揉みしだく。同時に、愛液と潮でドロドロになった掌で彼女の股間を優しく撫で回した。乳房へ緩やかな刺激を与えつつ、大量の体液を割れ目や脚の付け根へ塗りつけ、絶頂の余韻に浸るアルトリアを労るように。

「あ——う、あ——はあ、ん——ああ——あ、る——じ——はあつ——つ——わら、ひ——んう——たつ、ひた——の、にい——た、りな——ひい——んんつ——ほし、ひ——のお——ずぼずぼ、つ——してえ——わら、ひ——お——つらぬ、ひて——くだ、ひや——いい——」

脱力し弓反りになっていたアルトリアが、するつと拘束から抜け出していく。向かったのは、大きなライオンのぬいぐるみ。それへ抱き

付いた彼女は四つん這いに似た格好となつて、臀部を持ち上げ、見せつけるように揺らしてきた。

愛液と潮が混ざった体液が、ドロドロな秘部から涎のように、とろおつ、と垂れ落ちベツドシートを汚す。むあつ、と雌のニオイを漂わせ、臀部を左右へ揺らし懇願してくるアルトリアの方へ向き直ると

——肉厚で柔らかそうな臀部へと手を添え

——手淫と彼女の喘ぎ声によって昂り興奮し

——再び固さを取り戻した肉棒で割れ目をなぞる

「あつ——き、て——くださ、ひ——そのお——たくま、し——の
でえ——わら、ひ——を——つらぬひ、てえ——ぐちやぐちや、にい
——きもちよく、ひてえ——おねが、ひ——しま、しゅう——」

龟头から裏スジ、サオまでをアルトリアの割れ目へ擦りつけ愛液と潮で肉棒を濡らし性交の準備をしていた最中、ぐいつ、ぐいつ、と彼女も臀部を肉棒へと押し付けてきた。もう我慢できないのだろう、早く、早くと食欲に求めてくる。

こちらも昂りは最高潮、今すぐにでもアルトリアの膣内^{なか}へ肉棒を埋めてしまいたい、何度も腰を振り快感を貪りたい、彼女の膣内^{なか}へ欲望を吐き出したい。その、欲求に、耐えられない。

でも、まだ想いを伝えていない。

背後から、彼女の耳元へと顔を近付けていく。

そして——

「……好き、だよ」

「……愛してる」

「——っ——ッ!!」

——囁くと彼女は、身を震わせ息を飲んだ

——もう、止まらない、止めるつもりもない

—— 求められるまま、求めるまま
—— 肉棒を彼女の秘部へと突き付け、腰を打ち出した

嵐の王の秘め事(3)

アルトリアの臀部へ腰を押し出していくと、亀頭が割れ目へと停滞もなく埋まつていく。愛液にまみれたヒダを擦り、膣壁を搔き分け、ドロドロとした膣内は熱く、狭い。侵入を果たした肉棒が膣内へ、きゅつ、きゅつ、と締め付けられる快感は背筋が粟立ち、腰が震えてしまう。

「——んん——っ——き、っ——たあ——ッ!!」

自身の膣内へと侵入してきた異物感にアルトリアはライオンを抱きしめ、臀部を突き出したまま背中を丸めた。そして、せり上がってくる快感によって恍惚と性欲に破顔した彼女は、ライオンのぬいぐるみへと顔を押し付け絶叫。びくんっ、びくんっ、と一定感覚で訪れる軽い絶頂に理性が吹き飛ばされてしまう。

「——ひ、う——う、あ——あああ——たく、ま——しいのでえ——わ、らひ——っ、つらぬ——かれ——てえ——ッ!!」

ずぱんっ、とアルトリアの臀部へ腰を打ち付けると、彼女の膣内^{なか}の最奥、子宮口を亀頭が叩いた。すぐにでも腰を振り快感を貪りたいところだが、あえて耐える。代わりに腰で円を描き、ごりっ、ごりっ、と亀頭を子宮口へ押し付け扉をえぐってやる。

最奥、子宮口をえぐられるごとにアルトリアは、腹の底を擦られる感覚、熱い肉棒が体内で蠢く感覚に蹂躪されるがまま快感に耐える。だが、ビリッ、ビリッ、と何度も脳髓を叩いてくる快感の電流は容赦がない。堪え忍ぶアルトリアを昂らせ、理性を壊し、彼女を本能に忠実な雌の体へと変えていく。

「——ん、ぐう——ご、りっ——ごりっ——しゅ、ご——っ——ひ、れす——こん、な——のお——がま、っ——れき——なっ——あああ、っ——ッ!!」

あつという間に絶頂を迎えた彼女の体、膣内《なか》は伸縮を繰り返し潮を、ぷしゅつ、ぷしゅつ、と噴き出した。密着させた腰は彼女の温かい潮に濡れ、ふと見れば肉棒をくわえる割れ目からは、じゅ

わあっ、と白く濁った愛液が溢れてくる。

結合部がドロドロと溶けていくような錯覚に陥りながらも、たまたまなくなつた腰は前後への律動を開始した。千切られそうな膣壁の締め付けに耐えながら、肉棒を引き抜きカリで膣内なかを擦り上げる。背筋が震えるほどの快感と戦いながら結合部を見ると、カリによつて掻き出された白濁がベッドシートへ吸い込まれていった。

「——んっ、ああ——れ、て——るう——あるじ、の——たく——ま、ひいの——にい——い、やら、ひい——お、しる——ふああっ——かき——だされ、てえ——ああんっ——いいっ——しゅ、ごっ——きも、ち——いい——れすう——ッ!!」

ずるうっ、という音と共に引き抜かれた肉棒には、彼女の膣内なかで熟成された白濁が付着していた。その卑猥で生々しい光景に、こちらも昂つていくのを抑えることができない。腰を出し、再びアルトリアの膣内なかへと肉棒を押し込んでいく。

ぎゅうっ、と異物の侵入を阻むように伸縮する膣壁。それを無理やり掻き分け進む途中、こちらの意図を察したアルトリアが臀部を押し付けてきた。互いに腰と下半身を押し出したことで、膣壁の抵抗も虚しく肉棒は、ずりゆっ、と音を立てて埋没する。

もう、互いに止まらない。アルトリアは肉棒の挿入に合わせ腰を前へ、後ろへと振り始める。まるで、獣のように。ずぱんっ、ずぱんっ、と肉が肉を打つ音が大きく部屋の中へ響き渡る。

「——んお、っ——あ——ひあ、ん——あっ——くう——ん、ひい——ああ——ひ、う——ああ、しゅ——ご、ひい——あああ——も、らめえ——ああ、っ——んん——っ——も、っとお——もっとおお——ッ!!」

何度も腰を打ち付けるていた最中、腰に響く悪寒に上半身が折れた。腰と下半身を密着させながらアルトリアの背中へ、のしかかるように。だが彼女の顔には、苦しみなどない。むしろ下半身だけでなく、背中と胸板で体温を共有していることに、さらなる興奮に煽られてしまったようだ。

「——ああ、っ——あ、るじい——ごっ、ちもお——おっ、ぱっ——ひい——せつな、ひ——のお——おねが、っ——れすう——ごっち、もお

——おっぱ、ひ——もお——いつ、ぱひ——いじめ、て——くらす、
いい——ツ!!」

首を曲げたことで見えた彼女の顔は、ひどいものだ。涙と鼻水と涎で顔をぐちゃぐちゃにしながら、大きく口を開けだらしく舌を覗かせていた。必死の懇願に、嗜虐心と欲望が刺激される。

片手をベッドへ突き、空いた手をアルトリアの胸元へ回すと、ぶら下がっていた彼女の豊満な乳房を掌で持ち上げる。力も加減せず掴んだ指は、むにゅつ、と乳房へ埋まり、掌で充血した乳首を押し潰す。

「——ああっ——お、ぱ——ひい——こり、こり——しゅきい——あ、あっ——あそ、こもお——おつ、ぱひ——もお——ぶり、ぶり——ひてえ——く、くるう——おかひ、く——なりゆうう——ツ!!」

肉棒を通して感じる快感、耳を犯すアルトリアの喘声、掌から伝わる乳首の感触、もはや我慢の限界だった。頭の中は欲望に支配される。貪りたい、という思いのままに腰と下半身を密着させると——乳房を持ち上げる勢いと共に体重を後ろへ掛け、ベッドへと腰かけた。

アルトリアは突然のことに驚くも、体を支えてもらっていたライオンのぬいぐるみが離れていくのを見た。後ろ側へ倒れ込むことはなかったが、今はそれを気にする余裕はない。全体重が一点、繋がった下半身へ集約されてしまったから。

ベッドへ座る時に組んだあぐら、その上へアルトリアが座る形。背後から抱き止め、乳房を掴み固定し、自身の膝上へ乗るアルトリアは——下方から突き上げてくる肉棒と、自分の体重によって先ほどとは比べ物にならない程の圧迫を子宮口へ感じ絶頂を迎え叫びを上げた。

「——んぎ、い——あ、ああああっ——こ、れえ——ん、あああ——し、きゅ——がああ——ご、ごりつ、れえ——あああ——しゅ、ご——ひい——つ、ぶれ——ちや——あつ——ああ、つ——お、なかあ——ひび、くう——ああっ——こんな、のお——がま、んんつ——でき、な——あああああッ!!」

びくんつ、びくんつ、と彼女が絶頂に震えるのを感じながらも、下半身とベッドのバネを利用して、膝上へ乗るアルトリアごと跳ねる。何度も、何度も、彼女は下から突き上げられる肉棒を、自身の体重を

掛けて受け入れる。そのたびに子宮口は、ごりっ、ごりっ、と亀頭にえぐられ体中へ快感を撒き散らす。

その衝撃と絶頂のためか、アルトリアの股間からは、ぷしゅっ、ぷしゅっ、と絶えず体液が噴き出てくる。おそらく彼女は、いま自分がどこへ座っているのか理解できていない。ただ肉棒が突き上げるたびに響く秘部、子宮口への快感に溺れるだけ。

「——ひぎっ——お、あ——つぶれ、りゅう——つらぬ、かれ——りゅう——いああ——こわ、れ——りゆ、うう——あっ——ああ、っ——おあ——う、あああ——こ、わひ——しゅ、ご——ひ、のお——くりゅう——ああ、んっ——あああ——ツ!!」

両手で顔を覆うアルトリア、その下へ隠した顔は度重なる絶頂によつて恍惚に歪み、間もなく訪れるだろう最上の絶頂を予感し体を痙攣させ始めた。ぶじゅっ、ぶぢゅっ、と下半身から生々しい音を聞きながら、粟立つ背中を震わせ、秘部と子宮に響く肉棒の感覚にアルトリアの脳は焼き切られた。

「——ああっ——ら、してえ——ある、じい——も、むりい——あた、まあ——ひ、うんっ——まつひ、ろ——にい——ああっ——んんう——ほ、し——れすう——らめっ——ら、め——らめええ——ごりごりい——らめええ——いつ——く、ううう——あ——ツ——あっ、あ——ああああ——ツ!!」

ずばんっ、と一際強く、アルトリアの臀部と腰が衝突し肉を打つ音が鳴る。彼女の体重と跳ね落ちた勢いのままに子宮口が亀頭を押し潰してきた瞬間、これまでにない締め付けが肉棒を襲う。びくんっ、びくんっ、と彼女の絶頂に合わせて震える彼女の膣内。

腰から駆け巡ってくる欲望が、肉棒へと集約されていった。意思とは無関係に沸き上がってくる射精感アルトリアの掌と連動し、ぎゅうつ、と指先へ力を加えさせ彼女の乳房を潰さんほどに搾る。体が、腰が、肉棒が制御できない。

腰を、肉棒を駆け上がっていく欲望が、飛び出していく。

びゅーっ、と噴水のように放たれた精液は、亀頭が密着している入口を越え、直接子宮へと注がれる。精液どころか魂さえ引きずり出さ

れるような感覚に、チカチカと視界が明滅した。

「う、あ——ああ——れて、りゅ——わら、ひ——のお——なかあ
——あん——どぶ、どぶっ——てえ——あるじ、の——そそがれ、て
——あ——あああ——」

どぶっ、どぶっ、と熱い白濁が子宮を満たしていく感覚にアルトリアは背中を大きく反らせ、天井を仰ぎ見ながら最上の絶頂に身を震わせた。涎を垂らし、だらしなく舌を出し、脱力したまま背中を預けてくる。

びゅ、びゅっ、と彼女の子宮へ吐き出し続けていた精液が徐々に途切れていく。数秒後、全てを出し切ったのを確認してから、膝上へ乗るアルトリアの様子を窺う。すると彼女は度重なる絶頂と性交の疲労からか、くたあ、と膝上で崩れ落ちそうなほどに脱力していた。

体を捻り、繋がったままベッドへと倒れ込む。

ライオンのぬいぐるみをクッションにして、アルトリアと抱き合ったままベッドへ転がった。射精によるものだろう、指一本さえ動かすのが億劫なほどの疲労が襲ってくる。頭もボーッとされていて、何も考えたくない。

——そのまま、しばらくの間

——繋がったまま、アルトリアと横になったまま

——絶頂の余韻を、謳歌した



ふとアルトリアが目覚めると、隣に居たはずのマスターが居ないことに気付いた。驚きと、寂しさのままに、がばっ、と上半身だけ起こしてしまう。しかし、シャワー室のほうで物音が聞こえたのに安堵したのか、彼女は大きく息を吐き出した。

「——ふう、良かった——ん？」

ふと足元のほうへ視線を落とすと、彼女にとっては見慣れたモノが

転がっていたので拾い上げる。それはアルトリアにとって大事な、”誰か”に似た形のぬいぐるみ。白い服と跳ねた髪が特徴のぬいぐるみを持ち上げたアルトリアは、しばらくジーツと正面から眺めてみた。

一秒、二秒、三秒。

しかし、十秒が経過した頃、いきなりアルトリアは顔どころか耳まで真っ赤にしてしまった。おそらくは、”先ほどまでのコト”を思い出してしまったのだろう。

「——っ——ッ!!」

ぎゅっ、とぬいぐるみを抱き締めたアルトリアが、ベッドの上で転がり回る。いや、転がり回っているというよりは悶えている、といったほうが近いかもしれない。ぬいぐるみへ顔を埋め、声にならない悲鳴を上げているようだ。

だが、ふと動きを止めると——

「——ええ、私も——貴方を愛している——」

——と、小さく、ぬいぐるみへ向かって呟いた

くおまけ（後日談）く

「あ、見付けたぞ、マスターッ!!」

廊下を歩いてたら、ふと誰かに呼び止められた。騒がしいな、と思いつつ首を巡らせると戦闘態勢のモードレッドが駆け寄ってくる。いやいやいや、頼むから剣を振り上げながら近寄ってくれないな。

なんて内心など知ってか知らずか、モードレッドは止まる気配がない。これもう斬り掛かってくる気満々に見える、とうとう叛逆の騎士

の本性が出たか？

と思つたが、ふと彼女の後ろから何かが飛んでくる。

——弧を描いて飛んでくるのは、長い棒のようなモノ

「——マスター、覚悟しやがー——あ痛アツ——ツ!!」

突っ込んでくる途中、その飛んできた何かに後頭部を小突かれたモードレッドは勢いのあまり、ズツこけた。いくら英霊といえども、走っていた勢いのままに不意打ちを受けコケてしまつては受け身など取れるわけもない。

コケた勢いのままにモードレッドは、ずぎーつ、と足元まで滑つてくると「ぐおお」と後頭部を押さえて悶絶し始めた。勢いよく盛大にコケた上、数メートルを滑ってきたのにダメージは頭の方が大きいのか。

「無事ですね、主——お騒がせしました」

遅れてやってきたのは、アルトリア。彼女は落ちていた槍を拾い上げると、溜め息混じりに足元で絶賛悶絶中のモードレッドを見下ろす。ああ、モードレッドの後頭部に当たったのはアルトリアの槍だったのか。刺さつてたらどうするつもりだったんだ、とは怖くてツツコめなかつた。

ふとアルトリアの横顔を覗き込むと、彼女は恥ずかしそうな、それでいて申し訳なさそうな顔。というか、すごく複雑な表情をしている。色々と聞きたい、まるで状況が分からない。何事だコレ？

「あ、いえ、その、つい私が愚息に口を滑らせてしまいました——よ、要約すれば、”すでに私はマスターに貫かれ負けている”と」

「……えっ？」

「……はっ？」

「だからア、マスターが父上に勝つたつて言うなら、オレがマスターに勝てば、父上を超えたつてことになる——だからオレと勝負しろ、マ

スタートツ!!」

いまだ痛むのか後頭部を押さえ、廊下を這うモードレッドが涙目で見上げてきた。その理論は何と言うか、すごく、脳筋です。しかも貫かれて負けたってアルトリアの言葉は間違ってるないけど、誤解しか生まないだろ。

なんなの？ わざとなの？ バカなの？ 死ぬの？

むしろ、モードレッドに殺されそう。

「申し訳ありません、愚息には言い聞かせておきますので——いくぞ、モードレッド」

「あ、ちょ、父上ツ!!.. せめて立たせ——痛だだっ——ツ!!」

深々と頭を下げたアルトリアは踵を返し、寝転がっていたモードレッドの首根っ子を掴み来た道に戻っていく。その様は何と言うか、母猫が子猫をズルズルと引きずっていく光景に似ていた。なぜだろう、あの親子が、って思うと微笑ましく思えてきてしまう。

に、しても、いきなり胃が痛くなってきた。

すごくフラグが立った気がするけど、気のせいだ。

ああ、そうさ、気のせいだ——きつと——

影の国の女王は乙女の夢を見るか (1)

全てが寝静まる丑の刻。カルデアの一角、サーヴァントの憩いの場として設けられたエントランスに彼女は居た。ソファーへ腰掛け、細く長い脚を組み、どこへともなく紅の瞳で虚空を見つめる長髪の女性。彼女はクラス、ランサー。スカサハである。

(なぜ、まだ私は、ここに居るのだ——?)

召喚に応じ今のマスターと契約を交わしたのは、かなり前のことだ。それからは共に死線を潜り、共に戦場を駆け抜け、共に楽しんできた。だが、それは彼女の願いではない。彼女の本当の願い、それは”死ぬ”こと。

数多の神々を殺してきた彼女は、もはや”死”という概念を超越してしまっていた。もはやスカサハという存在は、永遠、永劫、美しく死に花を咲かせることもなく、無様に朽ち果てるでもなく、ただ消えるのを待つだけの存在へと成り果ててしまっている。

かつてはあったかもしれない”人としての心”は、すでに死んでいる。サーヴァントとして召喚されてからも、それは変わらない、変わるはずがない。

——そう、思っていた

“奴”はここに居る、さっさと貫かれて、終わればいい。手段など、どうとでもなる。死ねば消える、それに至るまでの経過や後のことなど知ったことか——そう、死ねば消えることができる。なのに——)

この時、いや、彼女が願いを叶えようとした時、考えている時、何かか頭へ浮かんでしまう顔がある。悲しむだろうか、怒るだろうか、と余計なことを考え始めると、もう踏み切ることができなくなる。

——願いを叶えたい、死にたい、消えてしまいたい

——それが願いのはずなのに、求めているはずなのに

——その衝動が、縛られたように凍りつく

(分からない、理解できない——)

遙かな時を超えて死んでしまった心は、その思考が理解できない。求めているのに、踏み切れない、踏み切ることができなくなる。自分が縛られているような錯覚、解放を望んでいるはずなのに、望みに反して束縛されている感覚を嫌悪することもなく受け入れてしまっているという事実。

——彼女は、ただただ、答えの出ない問答を続ける

「——へえ、珍しいこともあるもんだな」

「——っ——」

その時、暗がりから声が聞こえた。辺りは暗闇、どうやら誰かがエントランスを訪れてきたらしいが、その接近に気付けないほど思考に没頭していたスカサハは舌を打つ。

「——よっ——」

「貴様か、何の用だ——？」

暗がりから出てきたのは、彼女にとって縁深い英雄。青を強調したスウェットスーツのような衣服に身を包む青年、彼はスカサハと同じくランサー。真名は、クー・フリーン。彼はソファーへ座るスカサハの脇を通り過ぎると、どかつ、と彼女の対面へと腰掛けた。よく見えないが、その手には瓶が握られている。

「用ってほどのことじゃねえよ、アンタがんな顔してるのが珍しいっただけの話だ」

「顔？ 意味が分からんな。平和ボケか？ 老眼か？」

「いや、老眼はそっちだ「あ？」——ナンデモナイデス」

睨み付けてくるスカサハの視線から逃げるように、クー・フリーンは手にしていた瓶を傾けラッパ飲み。そんな相手の言動に呆れ果てたのか、スカサハは盛大に溜め息を吐き捨てる。それから、互いに沈黙。エントランスへ、静寂が訪れた。数秒、数分、十数分が経過した頃、何度目かのラッパ飲みの後にクー・フリーンが、口を開いた。「あー、なんっつーか、新鮮だったんだよ。俺アいつも仏頂面か無表情、あとは悪魔みてえなニヤけ面しか見たことねえからよ——そういう悩んでるっつーか、迷ってる顔は見たことねえ」

「私が、悩んでいる？」

「ああ、この世の終わりにみてえな面だったぜ。昔つからアンタは、何を
するのも唐突だった。ガキの頃からアンタは迷いとか悩みは縁遠い
モンなんだろうな、って思ってたが——そりゃ間違いだったってこつ
た。いやはや、お互い長生きはするもんだ」

ククツ、と笑いを噛み殺しながら、再び酒瓶を傾けるクー・フリー
ン。いつもなら、スカサハは彼へ槍両手に襲いかかっていただろう。
だが、今夜は違った。彼に指摘されたことを、頭の中で反芻させるだ
け。

（私が、悩んでいる？ 迷っている？ 心が死んでいるのに？）

無表情のまま、スカサハは驚愕していた。悩むこと、迷うこと、そ
れは生きているという証だ。自分は死にたいが死ねない身。かつて
は残っていたかもしれない人間らしい心など、とうの昔に磨耗し切っ
て無くなっている。今さら悩むなど、迷うなど、あり得ない。

だが、目の前の男は悩んでいる、迷っていると言う。

そして、前ほどまでの思考を思い出した。死にたいはずなのに、思
考を遮るように”誰か”の顔が浮かび、”誰か”のことを想ってしま
うと、もはや踏み切るどころか死にたいと考えることもなくなってい
まうことを。

（ああ、無くなっていたと思っていた。すり減って消えたと思ってい
たよ、今の今まで。そうか、私は迷っていたのか、悩んでいたのか——
——まるで、人間のように——）

ふふっ、とスカサハは沸き上がってくるままに口の端をつり上げ
た。その微笑みを暗闇から覗き見たクー・フリーンは「へえ」とだけ
呟くと、座っていたソファから腰を上げた。

どうやら彼は、彼女が浮かべた表情を見て全てを察したらしい。だ
が何も語る気がないのか、そのまま歩き去ろうとした——その時、ふ
とスカサハが呟いた。

「——おい、馬鹿弟子」

「——あん？」

「悪いな、もう消えていたはずの私の心臓は、すでに殺されていたらし

い——貴様に渡せるのは、もうしばらく先。それも中身がない、空っぽの心臓になりそうだ——」

「ハッ、せいせいすらア。心臓ハートを殺されたってんなら、とつとと責任でも何でも取ってもらえ。その時まで小僧——じゃなかった、マスターに心臓は預けておいてやる。いつかアンタの心臓ハートに穴が空いた、その時は——その空っぽの心臓、俺が貰い受けてやる」

ひらひら、と手を振りながらクー・フリーンは闇の中へと消えていく。

そう、彼女が無くしたと思っていた、消えたのだと思っていた”人としての心”は、無くなつてなどいなかった。忘れていただけ。そして彼女自身でさえ自覚のないまま、凍っていた心、死んでいたはずの心は、すでに一人のマスターに殺奪われていた。

それを自覚できたスカサハは、去つていくクー・フリーンを黙って見送った。その胸の中へと沸き上がっていた罪悪感、彼が残した言葉に掻き消される。もはや彼女に迷いはない、悩みもない。あるのは、想いだけ。

——死んでいた心は、マスターへ

——心を失った空っぽの心臓は、クー・フリーンへ

——それが、自分スカサハの結末だと決めた

——いてもたっても、いられなかった

「——っ——」

弾けるようにソファアから飛び上がったスカサハは、クー・フリーンが向かった方とは違う方向へ走り出した。その身を一陣の風として、一刻も早く、”あの人”の元へと向かいたかった。闇の中、自分の心の中へと在る確かな想いを胸に——彼女は、堪えられない微笑みを携えたままに廊下を疾つていった。



眠気に誘われるまま床に着いて、もう十数分が過ぎた頃だろうか。あとは意識を手放せば夢の世界へ旅立てる、という頃合い。ふと傍らで、風が吹いたような気がした。それと同時に鼻先へ、ふわっ、と甘い香りが漂ってきたのも。

窓が開いてるわけがないから、風が吹くのはおかしい。それに、この鼻先をくすぐってくる香りも妙だ。あと、何か体が重いような気がする。具体的に言うなら、仰向けになつてるところへ横から抱きつかれてるような感覚。

ものすごく嫌な予感がする、むしろ嫌な予感しかしない。

少しだけ目を開けてみると、そこには――

「――ああ、起こしてしまったか」

すぐく、見知った顔。相も変わらず能面のような無表情のスカサハの顔が、間近にあった。もう少しでキスができるほどの距離にあるスカサハの端正な顔立ちは、起き抜けに見るのは心臓に悪い。

おまけに、どうやら彼女は横になって抱きついてきているらしい。体を密着させていることで、彼女の普段着であるウェットスーツを通して体のラインを肌越しに感じられた。なんだ、何事だ、と疑問に思っても、寝ボケた頭は上手く思考をまとめられない。

「ひたすらに沈黙を貫くスカサハ。」

意を決して、彼女へ問い掛けてみる。

「こんな時間に、どうしたの……？」

「あの、これはどういうこと……？」

すると、スカサハは少しだけ視線を逸らした。どこか言い澀んでいるような、戸惑っているような、あまり感情を表に出さない彼女にしては珍しい反応だ。しかも、その頬は微かではあるものの桃色に染まっただけ――すぐく、抱き締めたい衝動に駆られた。

「私は永遠に近い時を生きてきた、多くの神々を殺してきた、ケルト最強の美少女として名声を欲しいままにした。だが、その代償に私は人としての心を失った——ハズだった」

さらに体を密着させてくるスカサハは、額をくつつけてきた。彼女の長い髪が頬を撫でていく感触と、至近距離から受ける吐息に頭の中がグラグラと揺れ始めてくる。油断すれば、彼女の真っ直ぐな紅の瞳に吸い込まれてしまいそう。

「私は心を失ったわけではなく、忘れていたんだよ。死を願い、終末を渴望するほどに長い時の中で——そして、私が忘れていた”人としての心”を殺したのは、貴様だ、マスター。その責任、取ってもらうぞ——」

鼻先と鼻先が触れ合うほどの距離、視線を絡めていた彼女の紅の瞳が、ふと揺れた気がした。欲求の熱に焼かれ、甘い香りを漂わせながら、自分の心を奪った責任を取れと迫ってくるスカサハ。

彼女の意図が分からない、何を考えているのか分からない。そんな内心を、彼女は察したのだろう。彼女にしては珍しく優しげな微笑みを浮かべると、そのまま——

「そう難しいことではない。私が、お前に惚れただけさ、マスター」

——唇を、重ねてくる

柔らかい唇の感触は、一度だけではない。ちゅっ、ちゅっ、と、つばむむように何度も唇を押し付けてくるスカサハ。あまりにも必死で、優しくない、ただ相手を求めるだけの行為。だが、破壊力は凄まじいものがあった。

「——んっ——ちゅっ——んう——あ——はあ——」

熱い吐息と唾液の湿り気を、唇を通して感じる。甘く噛まれ、唇を唇が撫でる感覚に酔いしれた。その時、いきなり生暖かいモノが口内へ侵入してきた。それは、スカサハの舌。別の生き物のように唇を割り、ずるっ、ずるっ、と突き進んでくる。

口内を蹂躪されると、唾液が混ぜられると共に思考まで掻き混ぜられていくように錯覚する。呆とする快楽は脳髓を焼き、侵入してきたスカサハの舌を迎え撃とうと絡ませてしまう。呼吸困難になった体

は意思に反し、スカサハの腰へと腕を回し密着させてしまう。もう、頭が真っ白になっていく、何も考えることができなくなっていく。

「んう——れろっ——ちゅ、んっ——ふ、あ——はあ——ぶ、はっ

——あ——ああ、それでいい——今は、ただ——求めてくれ——そして、求めさせてくれ——」

——スカサハの弦きが、闇へと紛れていく

——布擦れの音を聞きながら

——求めるまま、求められるまま

——唇を重ね、舌を絡め合った

影の国の女王は乙女の夢を見るか (2)

一糸纏わぬ姿になったスカサハが、再び横へ寝転がり体を寄せてきた。頭が、肩が、腕が、密着した部分が熱を持つていく。同時に鼻孔を甘い香りに犯され、頭が回るような錯覚に陥ってしまった。

——だが、それも構わずスカサハは顔を寄せてきて

——躊躇うことなく、唇を重ねてきた

自室に、ぴちやつ、ぴちやつ、と唾液が跳ねる音が響く。口内を蹂躪してくる舌へ反撃するように侵入してきた舌へ吸い付いてみると、じゆるっ、じゆるっ、と音は大きく激しくなっていた。

「——っ——ふ、あ——ちゆ、っ——えあ——れろっ——ちゆ、あ——んむっ——ん、んっ——んんう——」

キスに必死になっていたせいで、気付くのが遅れた。いつしか着ていた衣服は乱され、胸板をスカサハの手によって晒け出されていた。彼女の腕が衣服を避け、艶やかで細い指先が胸板をまさぐってくる。愛しそうに、優しい手付きで。

その微弱な快感に、体が震えてしまう。だが、一方的にやられるのも癪だ。彼女の邪魔にならないよう気を付けながら腕をスカサハの後頭部へ伸ばし、固定してやる。そして、こちらもしっかり唇を押し付けた。

「——んう——っ、んっ——ふ、あ——れろっ——あ、ん——うう、っ——え、あ——ちゆっ——じゆる、っ——んむ、んっ——んんっ——っ——はあ——んっ——んん——ツ!!」

唇を押し当て、スカサハの唇へ吸い付き、舌を絡めザラザラとした感触を確かめるように巻き付かせた。甘い唾液を舌で味わい、唇へ吸い付き、取り込んだ唾液で喉を潤していく。

媚薬にも思える唾液の交換が行われていた頃、スカサハは呼吸困難に陥りながらも次の行動に移っていた。胸板をまさぐっていた掌は脇腹を、下腹部を経由し下半身へと伸びていく。そして、ズボンと下着の拘束を解くと——すでに勃起し切った肉棒を露出させ、亀頭から

根元までを優しく撫で回してきた。

「ん、う——ぷはっ、あ——ん、はあ——もう——こんな、に——
は、あっ——あっ——い——ん、あ——れろっ——ペろっ——ちゅ、っ
——ちゅう、っ——ん——」

不意打ちで訪れた下半身からの快感に、スカサハの頭を固定していた腕の拘束を緩めてしまった。唾液の糸を引きながら顔を離した彼女は荒く息を吐き、いつもと変わらぬ無表情のまま頬を朱に染めている。

だが、表情を確認した直後、スカサハは顔を俯かせ肩口へ顔を寄せてくる。何をするのか、と油断していたら彼女は、鎖骨を生温かい舌先でなぞってきた。薄皮一枚を隔てた鎖骨に、ザラザラとした彼女の舌腹が這っていく。

「れろっ——えあ、っ——ペろっ——んっ——あむっ——ちゅ、っ
——れろっ——ん、ちゅ——あ——うんっ、む——れろっ——うう、ん
——れろっ——」

体を這っていくスカサハの舌から感じる微弱な快感もさることながら、少しずつ動きが激しくなっていく肉棒への愛撫に吐息を漏らしてしまう。しなやかで、細い彼女の指が龟头を包み、掌でサオを撫でてきた。それぞれの指はまるで別の意思を持っているかのように、肉棒へと絡みついてくる。

びくんっ、びくんっ、と跳ねる肉棒の反応を楽しむようにスカサハの指は敏感な部分を執拗に責めてきた。カ리를引っ搔き、龟头の先端をほじり、裏スジを揉む。一つ一つの愛撫に腰が、肉棒が痙攣してしまふ。

「ん、れろ——は、あ——も——もう——がまん、できん——」
緩やかな快感に耐えていると、スカサハの呟きが聞こえた。瞬間、彼女は頭を肉棒の方へとやり、がばっ、と大きく片脚を持ち上げた。寝転んだ体、顔の上へ跨がってきた彼女。互いが互いの性器を、目の前にする態勢。

——呼吸に合わせて開閉させ、涎のように愛液を垂らす割れ目が
——きゅっ、と閉まった菊に似た蕾が

——目の前に、広がった

あまりにも卑猥な光景に、息を飲んでしまう。ドロドロ口になった割れ目から、むあつ、と漂ってくる雌のニオイが間近の鼻を焼いてきた。こんなの、我慢できるはずがない。両手を彼女の臀部へと添え、顔を割れ目へと近付け、一気にむしやぶり付く。

ぶじゅつ、と愛液が跳ねる音が聞こえた、顔が汚れようが知ったことか。割れ目を、ヒダを唇で挟み吸い付く。ツンとする雌のニオイに鼻孔を刺激されても、彼女の秘部への口淫は止めてやらない。ぴちや、ぴちや、じゅるつ、と音を立て愛液に溺れていった。

「ひ、う——ん、あ——そ、こお——い、い——ああ——わ、たし——も——あん、むつ——じゅるつ——じゅつ——んあ——れろつ——あん、つ——じゅつ、じゅるつ——ぷあ、ひゃんつ——あむ、んつ——じゅ、じゅ——じゅるる——つ——ツ!!」

だが、スカサハの反撃を受けて、つい口を離してしまう。大きく口を開けた彼女は一口で龟头を包み込むと頭を上下へと揺らし、舌と唇で肉棒へとむしやぶりついてきたのだ。じゅぼつ、じゅぼつ、と彼女が口をすぼめ吸い付いてくるたびに卑猥で生々しい音が響く。舌で丹念に舐め回され、唇で吸い付き、頭の前後運動により歯が擦られるたびに肉棒は大袈裟にスカサハの口内で、びくんつ、びくんつ、と跳ね回る。

腰が抜けるような快感に身を震わせ、こみ上げてくる射精感に耐えながらこちらにも攻撃の手を強めた。唇でヒダを擦り、舌を割れ目へと振じ込み、時に陰核を舌先で押し潰す、どろおつ、と溢れてくる愛液で顔が汚れるのも構わずスカサハの秘部を味わい責めてやる。

「んっ、あ——じゅるつ——んうっ——ぷ、はっ——ああんつ——れろつ——きもち、い——ひっ——あむつ——んっ——じゅるるつ——じゅつ、ん——ふあ——ツ——あ——ら、らすのふあ——せえ、ひ——れそう、なのふあ?」

びくんつ、びくんつ、と肉棒がスカサハの口淫による強烈な快感に屈して大きく何度も痙攣し始めてしまう。射精への秒読みを察知したのか、スカサハは唾液と先走りの糸を引きながら肉棒から口を離す

と——ぐりつ、ぐりつ、とザラザラとした感觸の舌腹を先端へ押し付けてきた。

ぞぞつ、と背中が粟立つ、もう射精への欲求に耐えるのは不可能だ。無意識に彼女の臀部を掴む掌に力が入り、しつとりと肌触りの良いスカサハの臀部を歪ませてしまうほどに。

だが、自分だけ絶頂を迎えるわけにはいかない。

口を開け、スカサハの陰核を目掛け、甘く噛み付いた。口内へドロドロとした愛液が流れ込んでくるのを感じながらも、舌と唇で陰核を攻め立てる。

「——えあ——っ——れろ、れろっ——あ、んっ——わら、ひ——もお——ひい、う——ああんっ——ひ、つくう——もっ、ろ——んぶっ——んっ——え、ああ——ちゅ、む——ら、せえ——らせえ——びゅびゅ、れ——せえ、し——らしてえ——ッ!!」

たまらない、とスカサハが叫びを上げた瞬間、唇で陰核を思いつきり挟み擦り上げた。すると彼女の腰が跳ね、同時に勢いよく割れ目から潮を噴き出てくる。ぷしやあつ、と出てきた潮が口内へ流れ込んでくると本当に溺れてしまいそうだ、容赦なく口内へ溜まっていく潮は飲み込んでいくしかない。ごくつ、ごくつ、と潮を飲み込むたび喉が焼けそうになる。

一方で、下半身のほうも限界だった。

腰を跳ね上げると、無理やり亀頭をスカサハの口に押し込み、溜まりに溜まっていた欲求を爆発させた。びゅーっ、と肉棒の先端から噴出した精液が、彼女の口内へと注がれていく。

「——あ、い——つく——ッ——ぶう、っ——ん、っ——んんっ——ん、んっ——んう——ん、ん、んっ——っ——げほ、っ——あ——れて、る——あっ、っ——んんっ——ッ——」

絶頂と同時に口内へ肉棒が突っ込まれたスカサハは驚いた様子を見せるも、容赦なく流し込まれてくる精液の味と熱さに体を震わせた。最初こそ涙を目端に溜め、嗚咽を漏らしながらも口内の精液を飲み込んでいく彼女だったが——注がれていく精液は、彼女の小さな口の許容量を、あつという間に振り切ってしまう。

じゅぽっ、と音を立て、たまらずスカサハが肉棒を口から放した瞬間、射精直後と変わらぬ勢いで噴き出る精液が彼女を汚していく。唇へ、舌へ、頬へ、髪へ、顔中に撒き散らされる精液を見る彼女の表情は——妖しく、淫靡に歪んでいた。

「げほっ——あ——んんう——あ、つつ——あん——あついの、が——
つ——ああ、もつたいたい——んっ——じゅ、ずっ——じゅるっ——
じゅるる——っ——んくっ——っ——ん、んっ——れろっ——
ふ、あ——ちゅ、じゅるっ——」

少しずつ射精の勢いを緩めていく肉棒へ、今度は自らの意思でしゃぶりついてくるスカサハ。顔へ付着した精液そのままに、亀頭から迸る精液を口内で転がし飲み込んでいく。それだけに飽き足らず、サオを垂れていく精液、腰や袋に付着したもののさえ愛しそうに舐め回してくる始末。

と、どうやら満足したらしい。

彼女は、ちゅぽっ、と肉棒から口を放すと、再び片脚を上げ、ベッドへと座り込んだ。それにしても、自分の顔中へ付着した精液を指ですくい、口へと運んでいくスカサハの姿は——とても、卑猥だ。

「——んっ——ぺろっ——れろ——あ——たりな、ひ——な——も、ろお——もっ、とだ——」

表情こそ無表情、普段と変わらないように見えるが、彼女の瞳は劣情と欲情に揺れている。精液が付着した自身の指を舐め回すスカサハは、うっとり、瞳だけで恍惚を訴えてきた。

彼女と同じようにベッドへ座ると、かすかに赤くなつた彼女の頬へと掌を添える。そして、彼女が指ですくい切れなかつた精液を指に乗せ、唇へと持っていてやった。

「——んあ——ん——れろっ——あむ——んう——」

口元まで指先を持つていつてやると、掌がスカサハの両手に包まれた。愛しそうに差し出してやった掌を支え、指先の精液を舐め取り、しゃぶってくる。ぴちゃっ、ぴちゃっ、と指先に彼女の舌が這わされる感覚が心地いい。柔らかく熱い彼女の舌へ指腹を押し付け、つまみ、擦つてやると——無表情だった彼女の顔が、とろん、と蕩けたよ

うな気がした。

「——ん、う——れろっ——えあ、む——ゆ、びい——ごっつ、ごっつ——ひてて——ん、ちゅ——あ、っん——ひあ、わへ——れえ——」

そのまま数秒ほど後、ようやく満足したのかスカサハはしゃぶっていた指から口を放すと、再びベッドへと寝転んだ。仰向けになり、整った形の乳房を揺らし、ベッドへ乱れた長く艶やかな髪を撒き、こちらを見上げてくる。

と、いきなり彼女が片脚を持ち上げ始めた。膝裏へ自身の手を回し、脚の付け根、その奥でヒクヒクと開閉する割れ目を見せ付けるように。上気した頬、荒い息を吐きながら、欲情に染まる紅の瞳——いつもの無表情のはずなのに、纏っている雰囲気は別物だ。欲情と劣情に瞳を揺らすスカサハは、卑猥で、淫靡な、ただ快楽を貪るケモノとなっていた。

「——は、やくう——き、てえ——も、がまん——できん——お、まえの——はや、く——ここにい——」

もう止まらない、止めるつもりもない。彼女が掲げた脚を取ると肩へ添え、もう一方の脚へ跨がる。むっちりとした彼女の太股の感触を臀部越しに感じながら、腰を前へと出していく。

龟头から、とろおつ、と先走りが垂れている。それを割れ目へと押し当てると、スカサハが小さく喘ぐ。貫かれるのを待つ彼女の体は震え、触れ合う生殖器同士は互いに大きく、びくんっ、びくんっ、と跳ねていた。

——そして、掲げられた脚を、さらに広げ

——腰を前へと出し、肉棒で一気に

——スカサハの秘部を、貫いた

影の国の女王は乙女の夢を見るか (3)

一気にスカサハを貫かん勢いで、腰を下半身へと打ち付ける。亀頭がヒダを、割れ目を掻き分け埋もれていくと彼女は体を震わせ大きな悲鳴にも似た嬌声を上げた。

「ひっ、あ——ん、っ——んんんっ——は、はい——っれ——きたああ——あ、あ、あ——ひ、ぐう——こ、こんな——のお——し、らなひ——やらっ——こん、つなあ——がま、っん——れき、な——ひんあああ——ツ!!」

ずぶずぶっ、と肉棒が埋まる代わりに、じわあっ、とスカサハの秘部から潮が漏れてくる。生温かい体液が肉棒を伝い、腰を伝い、彼女の太股を伝い、最後はベッドへと吸い込まれていく。一定間隔で漏れてくる潮は、止まる気配がない。

愛液だけでも十分なのに、加えて潮まで噴き出してくれば停滞などあってないようなもの。膨大な量の体液を潤滑油として、腰を前後へ振り打ち込んだ肉棒を抜き、挿す。何度も何度も肉棒を出し入れし、亀頭とカリでスカサハの膺壁を擦り上げた。

「ひぎっ——あああ——ん、うう——あ——ず、ぼっ——ずぼお——きも、ち——ひいつ——あ、ひっ——い、きゆ——のおお——とまら、にや、ひ——んおっ——ああ——ひあんっ——う、あ——あひっ——ふっ、うん——ああっ——んん——ツ!!」

ずちゅ、ずちゅ、と肉棒がスカサハの膺内^{なか}を擦るたびに全身を痙攣させ、快感の大波が理性を押し流していく。ぎゅっ、と両手でシーツを握るスカサハは、涙と唾液の筋を流しながら成すがまま。

スカサハが頭を振り乱すたびに長い髪が暴れ回るも、それは制止の要因足り得ない。むしろ興奮を煽り、昂るだけ。いつしか彼女の能面のような無表情は崩れ、快感に脳髓を焼かれたせいか恍惚と劣情に歪んでいた。

「——やあああ——ちん、ぽお——いい——これ、らめっ——あああ——くる、う——あたま、おかしく——なっ——あ——あああ——んっ——ひ、あ——きもち、ひいつ——ひや、んっ——うああっ——じゅ

ぼ、じゅ、ぼお——くせになりゆうう——ば、ばかにい——なりゆうう——ツ!!」

もはや、スカサハが上げているのは嬌声ではない。本能のままに、求めるままに彼女が上げる喘ぎはケモノのそれだ。卑猥な言葉を恥ずかしげもなく口にし、唾液を飛び散らし、髪を乱れさせ、何度も全身を震わせる絶頂の快感を貪る様は雌そのもの。

ぶじゅっ、ぶじゅっ、と音を立て肉棒で秘部を責め立てる。途中、思いつきり腰を打ち出し、ばちんっ、と下半身へ腰を叩きつけてやるとスカサハは面白いほどに背中を反らせ、びくんっ、びくんっ、と体を跳ねさせる。

本能のままに相手を貪り、責め立て、絶頂へと駆け上がっていく様は性交というよりケモノの交尾に近い。

「んああ——いぐっ——しゅ、ごひ、のお——くりゆうう——あ、ひっ——ずぼずぼっ——いいい——い、くっ——いくっ——いくっ——いッ——ッ!!」

だが、物足りない。

たしかに普段とは違うスカサハを本能のままに貪るのは征服感を煽ってくるし、興奮する。だからこそ、もっと、もっと、彼女を快樂の虜にまで墮としたいと思った。そう思い至ると、腰を引き彼女の割れ目から肉棒を抜き放った。

どろおっ、と粘液にまみれた肉棒が顔を出すと、愛液、潮、先走りなどが混ざり合った体液が糸を引きベッドへと溢れシミを作っていた。

「あ——いや、だ——なん、れ——すご、ひのお——いけそうら、らったの——にい——やああ——ぬくなああ——もっとお——もっと、ずぼずぼしてええ——おま、へ——のでえ——おもい、つきりい——いきたい、のにい——ッ!!」

ベッドへ腰を下ろすと、スカサハは体を反転させ、すがるように抱きついてくる。火照った体を、乳房で膨らんだ乳首を押し当てながら、涙と唾液で顔を汚し、だらしなく舌を覗かせながら懇願するように見上げてきた。

いつも見ていた無表情、能面のような顔は跡形もない。今のスカサハが浮かべているのは肉欲に溺れ、本能のままに男性器を求める発情期の雌そのものだ。今にも泣き出しそうな彼女の表情は嗜虐心を刺激し、ぶるつ、と背中を震わせた。

「——うああつ——ちん、ぽお——はや、くう——はやくうツ!!」

と、いきなりスカサハの両腕が肩口を掴んできて、押し倒された。肩や胸板へ手をついた彼女は、そこを支点にして器用に腰をくねらせ、割れ目で肉棒を探し始める。脚の付け根や太股に亀頭が押し付けられると快樂が襲ってくるが、それも束の間。どうやら彼女の割れ目が、亀頭を見つけたらしい。

ヒダを亀頭へ擦り付け、雌孔との照準を合わせて——

「——あ、ん——っ——ん、いつ——あああんっツ!!」

スカサハは腰を思いつきり落とし、ずぶつ、と雌孔で肉棒を根元まで一気に飲み込んだ。ぎゅうつ、と肉棒が膣壁で締め付けられ、ドロドロな膣に飲み込まれる快感は無意識に腰を震わせてしまう。亀頭が彼女の意思で腰を下ろし雌孔で肉棒を飲み込み、体重ごと子宮口を押し潰そうとしてくるのは今までに感じたことのない刺激だった。

「——はひっ——は、ひっ——ん、ああ——す、ごっ——あああ——きもち、い——ふ、ああ——んう——んっ——あ、んっ——なかあ——びくん、びくん——はねて、りゅうう——」

だらしなく舌を覗かせ、雌の顔をしているスカサハが腰を前後へ振り始めた。どうやら彼女は肉棒の出し入れではなく、膣壁で挟み込んだまま腰を振り、捻り、膣壁や子宮口へ亀頭、肉棒を擦り付けることで快感を貪っているようだ。

過呼吸気味に短く浅い呼吸を続けながらスカサハが腰を振るたびに結合部からは、ぐぢゅつ、ぐぢゅつ、という音。腰に生暖かい水気が感じられることから、またもや彼女は潮を噴いているのかしれない。

そこで、ふと彼女が腰を振るたびに目の前で揺れる乳房が目が行ってしまった。程よい大きさの乳房が上下に揺れるのを見てしまったは、放っておくことはできなかつた。両の乳房を、掌で持ち上げるよ

うに添えた。

「ん、ああ——おっぱ、い——ああんっ——そこ、もお——ふああ
——きもちいい——んああっ——あそ、こもお——おっぱ、ひ——も
おお——か、かんじっ——すぎ、てえ——ッ!!」

柔らかい乳房へ指を埋め、指先で弾き、摘まみ、指腹で擦るとスカサハは快感に背中を反らせた。下半身と乳房を同時に刺激される彼女は背中と共に首まで反らし、天井を仰ぎ見ながら快楽に溺れる。

結合部である互いの腰を擦り合い、性交、いや、交尾によつて昂りは最高潮へと到達していく。腰を前後へ振り膣壁へ肉棒を擦り付けたスカサハは、ガクガクと震える脚を立て——腰を浮かし、今度は上下に腰を振り始めた。

「ん——っ——あああっ——わらひ——のお——し、きゆ——ひ、ぎい——ふああ、っ——ひび、くう——ごりっ、っ——れえ——っ、らぬかれ——りゆう——ああ、いい——こわれ、りゆ——くあ、んっ——ひ、ぬう——こ、れえ——ひんじゃ、うう——ッ!!」

スカサハが腰を上げ、落とす。そのたびに彼女の体重と共に勢いよく叩きつけられる下半身が、ずぱんっ、ずぱんっ、と鳴った。腰ごと持っていかれそうな快感に、つい仰向けになったまま、ふと視線を下半身へ向けてしまう。すると、大きく左右へ股を開いた彼女との結合部が飛び込んできた。

ずっぽりと肉棒をくわえこんだ雌孔、スカサハが腰を落として下半身がぶつかるたびに、愛液とも潮とも分からぬ体液を飛び散らせる。まるで、犯されているような錯覚だった。

「う、あああ——しゆ、ごひい——きもち、い——も、らめっ——これえ——おま、へのお——ちん、ぽっ——にいい——こ、ろさ——れ——りゆうう——ッ!!」

自分で動く時とは違う感覚、未知の快楽は無意識に腰を跳ね上げさせた。スカサハが腰を落とすのに合わせて突き上げ、亀頭を彼女の子宮口へ叩きつけ、肉棒で膣壁を擦り上げる。

まだまだ続きたいという思いもあった、彼女の乱れた姿が見たかった。だが、そろそろお互いに限界が訪れようとしていた。スカサハの

膣^な内で膣壁の締め付けが千切らんほどに強くなり、子宮口が龟头へ吸い付いてくるような感覚。

——びくん、びくん、と肉棒が痙攣し始めている

「——んああ——あ、ひっ——あ——ら、らすのか——いい、ぞ——
せえ、しい——わら、ひの——おくう——ま、まつひ、ろ——にい——
——そ、そめ——え——くれえ——ん、あ——ひっ——あああ、っ——
い、っ——くうううんっ——ッ!!」

スカサハの絶叫が、引き金となった。

ずばんっ、と彼女が思いつき腰を下ろし、肉棒を最奥まで飲み込んだ瞬間、腰が震え欲望が肉棒へ収束していく。締め付けてくる膣壁の圧迫をもとせず、肉棒の中を駆け巡ってきた熱い塊を——解き放った。

龟头から噴き出していく欲望、精液がスカサハの子宮口を越え、内部へ直接、叩き込まれていく。びゅーっ、と勢いよく噴き出た精液が子宮の中で跳ね、びちやびちやと溜まっていく感覚に彼女は背筋を凍らせた。

「——んっ——あああああ——れてるっ——れて、るう——おま、へ——
——のお——せえ、しい——ふ、ああ——びゅ、びゅっ——れ、え——
——おお、っ——あ——うあ——ひきゅ、う——よろこ、んで——りゅう
——せあ、し——ごく、ごくっ——つれえ——のん、で——りゅうう
——」

彼女が言う通り、龟头と密着している子宮口は伸縮を繰り返した放たれる精液を迎え、まるで全てを飲み干さんと吸い付いてきていた。びくん、びくん、と互いの性器は痙攣し、絶頂の余韻に浸る。

だが、長い長い射精が終わると、跨がっていたスカサハは脱力し、くたあつ、と前方へ倒れ込んだ。乳房から手を放すと胸板へ顔を押し付けてくる彼女、その顔は蕩けきつており、だらしなく舌を覗かせ、唾液を垂らし、痙攣する背中を丸めて荒い呼吸を続けている。

「——は、あ——はあ——うあ——んっ——ひあ、わへえ——あんっ——
——ふ、あ——あ、っ——あああ——」

自由になった両手を、スカサハの背中へ回す。いまだ彼女の脳内を

占める絶頂の余韻と、子宮内へ精液を注がれる幸福感。互いの呼吸を、体温を共有するように繋がったまま上半身を密着させる。

——彼女が理性を取り戻すまで

——いつもの無表情を取り戻すまで

——優しく、包み込むように、抱擁し続けた



「——おい——」

ベッドへ仰向けになると、体を密着させ寄り添っていたはずのスカサハが胸板へのしかかってきた。細く女性的な彼女の体のラインを体越しに感じながら目を向けると、相変わらず能面のような無表情と、突き刺すような紅の瞳と目が合った。

表情からは分かりにくいのが、声質から察するに怒っている、または非難している、のかもしれない。とりあえず謝っておこう、と口を開くが——彼女は何も言わぬまま、顔を寄せてきた。

「——まだ、聞いてないぞ——」

怒っているようには見えない。

非難している、いや、雰囲気からすれば——不満そう、か。

と、そこで気付いた。ああ、そういえば行為に及ぶ前、彼女に惚れたと言われたな、と。つまりは、彼女は自分だけが想いを告げたのが気に食わないということだ。纏っている雰囲気や表情は普段通りなのだが、中身が伴っていない。

「おい、何か言ったらどうだ——」

——スカサハの頭へ手を伸ばし、長い髪を指ですくう

——そのまま掌を彼女の頬へと当て添えると

——少しだけ顔を寄せ、彼女だけに聞こえるように

「……好きだよ」

「……愛してる」

——と、呟いた

「……………」

すると、最初は無表情のままだったスカサハの頬が、言葉の意味を理解するにつれて赤く染まっていく。最終的には耳まで赤くして、顔を俯かせ胸板へ額を擦り付けてきた。時おり「う”う”」と唸るような可愛らしい声が聞こえたが、誰かさんの名誉のために聞こえないフリ。

——このまま、しばらく、抱き合っただまま過ごした

——体温を共有し、相手の吐息を感じながら

——行為の余韻と幸福感を、味わいながら

——眠気、睡眠欲に意識を奪われるまで

くスカサハがとても病んでた場合の後日談（IF話）く

エントランスでソファアールへ腰掛け、思案を巡らせる。

最近、どうにもおかしい。

何がおかしいって、いつもなら呼んでないのに見えない尻尾を振ってくる沖田や、唐突に抱きついてくるジャンヌ・オルタ、それどころかマシユでさえ近付いてこない。一言で現すなら、避けられている。

「ん？ どうした、一人か？」

そんな時、ふと声をかけられ顔を上げる。すると、そこにはスカサ

ハが立っていた。相変わらずの無表情で、こちらを見下ろしてくる。他のサーヴァント達とは違う普段通りの反応を見せる彼女へ、すこし不安はあるものの避けられているという悩みを打ち明けてみることにした。

——何故か最近、女性サーヴァントに避けられている、と

それを聞いたスカサハは、意味深に微笑みながら隣へ腰を下ろしてきた。あれ、何故だろう、すごく嫌な予感がしてきた。キリキリ、と胃も痛み始めた、なんでき。

「ああ、それか。なあに、いくらマスターが神の目を潰せるほどの愛らしさを持ち、いかなる難敵にも立ち向かう勇士であるとはいえ、色目を使おうと画策する不屈き者が多くてな——おまけに、あろうことか嬉しげにマスターから求められ体を重ねたとほざいてくる命知らずも居たのでな、武力行使で黙らせて平和的に話し合っておいたぞ」

——ん？

あれ、今すごく不穏な言葉を聞いた気がするぞ？

「なに、心配するな。英雄色を好む、と言うだろう。別にお前が誰を抱こうが抱かれようが構わん、だが最後に選んでくれるのは私でなければ——嫌だぞ？」

顔を寄せてきて、小さく囁いてきたスカサハ。その声音は普段通りではあったのだが、最後の言葉だけは妙な威圧感と背筋が凍るほどの冷たさがあった。威圧感というか、むしろ殺気じゃないですかこれやだー。

——これ、だめなやつ

意味深な微笑みのままに、隣へ座っていたスカサハが体を寄せてくる。本来なら嬉しいし、誰かに見られるかも、と離れるところなのだが——体が硬直してしまって、動くことも喋ることもできない。

——蛇に睨まれた蛙、まさに、この状態

——体が震えてきた、冷や汗が背中を伝った

——それでも、逃げるできない

「ふふっ、お前は神殺しでありケルト最強の美少女騎士である私の心を殺したのだ。たとえ相手が神であろうとも、お前を傷付ける者、た

ぶらかす者には容赦しない。いつ、いかなる時でも私はお前を生かそう——途中で力尽きるのは許さん、私の心臓ある限り、な」

——視界が、ぐらっ、と揺らぐ

——どうやらスカサハに、ソファアへ押し倒されたらしい

——近付いてくる彼女の紅い瞳を見上げ

——色々と終詰わんつただのを自覚しながら

——唇を、重ねてしまった

〈 B A D E N D 〉

お年頃な叛逆の騎士（1）

夕方、カルデアへ帰還したモードレッドは一人、エントランスでソファーへ寝転がりブーツと天井を眺めながら思考に耽っていた。考えているのは、自分の感情、自分でも良く分からない”引っ掛かり”について。

（クソツ、父上が変なコト言うから、こんなことに——）

先日、モードレッドは父であるアルトリアから、マスターに負けたという話を聞いた。その時はカツとなつて、マスターを倒す、なんて先走つたものの——実は、その言葉の真意は別にあつた、というのを先ほど知つてしまう。

『私は夜の床で、主に女として抱いて頂いた。敬愛する主に、全てを捧げたいと思つたが故にな——我が心は奪われた、つまりは主に敗れたということに他ならん』

——そう、アルトリアから聞いてしまった

あまりにも衝撃的な事実には、モードレッドは以降の話を聞くこともなく逃げてきた。聞きたくなかつた、と言つた方が正しいかもしれない。たしかに彼女は父のことが嫌いだった、それは間違いない。だが同時に父を意識の奥底で、自覚のないまま認めていた、愛していた。

（父上が誰に惚れようが、オレの知つたことじゃねえ——なのに、何なんだよ、この胸の奥がモヤモヤした感覚は。あー、クソツ、イライラする）

乱暴に頭を掻きむしり、モードレッドは身を起こす。心中にある霧のような感覚は、彼女の心を乱していく。何も考えず暴れたい、走り出して叫びたい、と思うほどに。しかし、それは叶わない、故に彼女

は苦悩する。

浮かぶのは、アルトリア父のこと。

そして、マスターのこと。

(何で、マスターのことなんか考えてんだよオレ。アイツこそ関係ない、父上が惚れた相手ってだけだろ——この胸の奥のモヤモヤも、何のこともかサツパリだ)

自身の胸へと手を当て、モードレッドは歯噛みする。色々な思考の糸は彼女の頭の中で絡み合い、ぐちゃぐちゃだ。だが同時に、”らしくない”と自嘲した。彼女は自分でも考えるところという行為は苦手だと思っているし、実際その通りだったりする。

「あれ、モードレッドさんじゃないですか」

と、そこで誰かが声を掛けてきた。

まったく気配に気付かなかったモードレッドは顔を上げ声を掛けてきた誰かへ視線を向ける、そこに居たのは自分と同じクラス、セイバーの一人。真名は、沖田総司。

「——は、母上?」

「いやいや、その母上つてのは止めて下さいって言ってるじゃないですか——それよりも、どうかしましたか、胸が痛むとか?」

言われてモードレッドは、自分が胸を押さえていたことを思い出した。手を下ろす途中、「いや」と呟いた直後、ふと思った。もしかしたら沖田なら、自分の胸の奥にあるモヤモヤしたもの、の正体分かるかもしれない、と。

どうせ一人で考えていても答えは出ないのだ、聞いてみて分かれば儲けもの。アルトリアの痴態を晒すようで心苦しいとも思ったが、あえて気付かなかったフリをした。

「あ、あのさ母上、実は——」

「——はい?」

それから十数分をかけて、モードレッドはアルトリアから聞いたことと、今の自分の状態を包み隠さず沖田へ伝えた。何故かイライラする、胸の奥のモヤモヤの原因、それが何なのか分からない、と。

それを聞いた直後の沖田は、「あはは」と愛想笑い。実を言えば沖田

も、すでにマスターと肉体関係を持っていたからだ。アルトリアのことは初耳だったが、バツが悪いというか何とというか、複雑な心境である。

「——でき、母上、何か分かる？」

申し訳なさそうに眉根を寄せ見上げてくるモードレッド、その問いかけに対して沖田は、わざとらしく腕を組み唸る。余談だが沖田がモードレッドへ抱く印象は、父が大好きすぎて、つい反抗してしまう、いわばお年頃な直情型の元氣娘。

たぶんアルトリアへの反抗心やらマスターへの想いやらで、うまく思考がまとまらないのだろう。そう予測した沖田だったが、ここで無責任なことを言うのも、後が怖い。悩んだ末に沖田は——

「——それはそうと、モードレッドさんは、どうしたいんですか？」

「——え、オレ？」

モードレッドの意思を、聞いてみた。

言われたモードレッドはといえば、心の中では即答していた。アルトリアに勝ちたい、認められたいと。そこまで思い至って、モードレッドはハツとする。何を悩んでいたのか、と自嘲の笑みを浮かべてしまった。

そう、考えるだけ無駄だったのだ。理由も、御託も、矜持も要らない。父アルトリアに勝ちたい、認められたいというのが自分モードレッドの願いなのだから。目標が父アルトリアからマスターに変わったただけだ、難しいことじゃない。

同時に、勝負のためにはマスターへ抱かれる必要があるということにも気付く。そして、それがモードレッド自身も嫌ではないということにも。それが恋心である、という自覚が無いのは実に彼女らしい。

「——ん、ありがとな母上。オレ、行ってくるッ!!」

「ふえ？ あ、はい——」

踵を返し走り去って行くモードレッドを見送る沖田は、ポカンとした表情。だが彼女は去り際に見たモードレッドの笑顔を思い出したのか、誰へともなく苦笑した。何とも騒がしいことだ、もし自分に子供が居たらこんな心境のかな、とは心の中だけで呟く。

それにしても、と溜め息を吐き出した沖田が「むむむっ」と困り顔

で腕を組んだ。おそらくマスターの元へ向かったであろうモードレッド、そして、そこで起こるであろうコトを予測してしまったが故に。

（——もしかして私、新しいライバル作っちゃいましたかね？）

うーん、と本気で思い悩む沖田。モードレッドに自分もマスターと肉体関係にある、というのを明かさなかったとはいえ、自分の言葉が悩んでいた彼女を突き動かしたのは明白である。不本意ではあったがアルトリアもマスターと体を重ねたという事実を知ってしまったことも、沖田の感情を煽る要因の一端。

（まあ、マスターの正妻は私ですけどね——ツ!!）

ふんすつ、とドヤ顔で胸を張る沖田。その根拠はどこから来るんだ、と気になるがエントランスには彼女一人。ツツコミ不在のまま、高笑いし始めた沖田は有頂天。彼女の高笑いは、信長がエントランスを訪れ「うわつ、一人で馬鹿笑いか気持ち悪っ」と声を掛けるまで続いたそう。



いきなり部屋を訪れてきたモードレッドは、彼女にしては珍しく覇気のない、どこか浮わついた様子だった。とりあえず、立ち話も何だから椅子にでも座れば、と言おうとした矢先、彼女は足早にベッドへ近付き腰を下ろす。相変わらぬ傍若無人ぶりである。

悩み事か何かだろうか、と思つて声は掛けなかった。モードレッドと同じくベッドへと腰掛け、彼女が話すのを待った。

「マスター、オレと勝負してくれ——」

あ、そっちデスクか。そういえば前にも言われたことがあるな、と思ひ出した。前は剣を片手に襲ってきたけど、今回は違う。ふと見れば顔を俯かせ、頬を朱に染めるモードレッドの横顔が見えた。おまけに、かすかではあるが、ふるふるつ、と肩を揺らし震えていた。

これは、たぶん、そういうこと、なんだろうな。アルトリアから全部、聞いてしまったんだろう。となればモードレッドが言う勝負つてのは、いわゆる性交と見て間違いない。

「オレは父上に勝ちたい、認めさせたい。だから床の中とはいえ父上に勝ったマスター、お前に”参った”って言わせたい——オレも、その、お前のコト嫌いじゃない、し——”そういうこと”するのに抵抗は、ないから、さ——」

そこで、モードレッドが顔を向けてくる。真っ直ぐな瞳には、ただならぬ決意が見て取れる。この目は、本気だ。その一方で”そういうこと”に抵抗がないと言いつつ、顔を真っ赤にさせ視線を逸らす彼女は——とても、魅力的だった。

つい、モードレッドの頭を撫でてしまう。すると彼女は驚いたのか、びくつ、と肩を揺らす。撫でられたのが気に入らないのか、目線を向けてきて抗議しようとして口を開いてくる彼女。しかし、思い直したかのように視線を逸らすと口元を引き結んでしまった。なんとも珍しいことだ。

「じ、じゃあ——する、か——いいか、”参った”って言った方が負けだからな——ツ!!」

するつ、と頭を撫でていた掌から逃げるように頭を振ったモードレッドが、体を寄せてきた。そのまま彼女は額を胸板へ押し付け、腰へ手を回してくる。ぎこちない動きだが、ぎゅつ、と抱き付いてきた姿は小動物のような可愛らしさがあった。

ぐりぐり、と胸板がモードレッドの額で擦られると、くすぐったくて身を捻ってしまいそう。だが、その衝動に耐え彼女の背中へ腕を回す。細身で小さな背中へは、力加減によっては、そのまま折れてしまいそう。

「——ん、う——えっと、この後は——どうすりや良いんだ——?」

とりあえず抱き付いてみたは良いが、その後のことなど考えていなかったらしい。腕の中でモードレッドが身を捻り、慌てだした。初々しい反応に嗜虐心が刺激され、つい悪戯したくなってしまった。

少し強引に頭をモードレッドの肩へと寄せていき、剥き出しの肩口

へ口付けた。いきなり肩口へキスされたことに驚いたのか、腕の中で「ひっ」と息を飲む声が漏れてくる。当たり前だが、これだけでは済まさない。唇で彼女の華奢な肩口を甘噛みし、擦り、舌を這わせた。

「——ひっ——う——く、くすぐった——おまつ——なにし、て——」
肩口から感じる刺激から逃れようと、モードレッドが腕の中で身を捻る。だが背中へ回した腕の力を強め身動きを取れなくしてから、今度は肩口へ吸い付いてやった。その感覚に、モードレッドの背中が、ぞわっ、と粟立つ。未体験の刺激、快感には程遠い微弱な刺激だが、彼女には抗う術はない。

ひたすら刺激に耐える、それしか彼女には打つ手が無い。

「——んんっ——っ——ふあ——はあっ——こ、こんなもん、かよ——
た——ただ、くすぐりたい——だけ——じゃねえか——」

ハッ、と鼻で笑うモードレッド。とはいえ、いま行っているのは前戯でさえない。これは、あくまで緊張を解すための行為、これから与えるであろう快感という感覚に備える前準備といったところ。

「余裕、余裕」とモードレッドが腕の中で呟いたのを聞いてから、ベッドへ押し倒してやる。ぼふっ、と背中から仰向けに倒れたモードレッドは、いきなりすることに少し戸惑っているようだ。

「——うわっ——おま——あぶねえだろ——」

聞く耳を持たず、彼女へのしかかり体を密着させる。ついでに足を絡めて、満足に動けないように固定して準備完了。そのまま肩口から二の腕までを丹念に舐め上げる。唾液を舌へ乗せ塗り付けていくように、ぴちやつ、ぴちやつ、と大きな音が出るよう、わざと大きく、激しく舌を動かしてやった。

肩口、二の腕を堪能し終えたら、次は反対側だ。

同じように丹念に、執拗に舌を這わせ、唇を擦り付け、吸い付く。そろそろモードレッドも刺激に慣れてきたのだろう、当初ほど大きく体を跳ねさせることもなくなった。ふと目線を上げて顔を覗き込むと、ふふんっ、とドヤ顔を向けられた。

「——ハッ、この程度かよ——大したことねえな——」

その余裕がどこまで保つか、楽しみだ。

モードレッドの背中から腕を抜き、代わりに腕を掴み上げさせると、その開いた脇腹へ強引に顔を押し込んでやる。すると蒸せた二才イが鼻孔を刺激してくるが、逆に興奮してきた。

「う、あ——そこ——やめっ——かお、いれるなあ——ツ!!」

脇へと顔を押し込まれたことに驚いたのか、モードレッドは真つ赤にしてしまう。またもや逃れようとしているが、先に足を固定した上に腕を取って拘束しておいたのが功を奏した。彼女は逃れることができず、せいぜい身動きするのが精一杯といったところ。

さらに腕を上げさせ、大きく開かれた彼女の滑らかな脇へ口付け。吸い付き、舌を這わすと舌先が、ぴりっ、と痺れた。これは、おそらく汗の味。

「う、あ——やめ、なめ——つなあ——そ、こお——きたね、え——からあ——ひっ——やめろっ——てえ——ツ!!」

びくんっ、びくんっ、とモードレッドの体が跳ねている。くすぐったさ、微弱的な刺激に加えて羞恥まで感じ始めた彼女の体は、少しずつではあるが準備が整っていく。だからこそ、ゆっくり、焦らすように昂らせてやる。

脇と脇腹を、つーっ、と舌で舐め回す。彼女が着ている服の剥き出し部分を目掛けて、柔肌を味わい、ねぶり、しゃぶり、微弱的な刺激を与え続けてやる。まだまだ核心部分は、あえて刺激しない。肩を、腕を、脇を、腹を、責めて、責めて、責め抜いてやる。

「——う、あああ——やめ——なめ、んなあ——ひ、あ——ん、う——あ、うんっ——う——うううっ——こ、の——へんた、い——があ——ツ!!」

勝負を持ちかけてきたのは、彼女の方だ。

そう、これはモードレッドが耐え切るか、堕ちるかの勝負。

——どうせ、時間制限はないのだ

——だったら、あえて長い時間をかけて

——彼女の全身を味わって、焦らしてやる

——そして最後に、絶対、”参った”と言わせてやる

お年頃な叛逆の騎士（2）

モードレッドの体へ舌を這わせてから結構な時間が経ったが、いまだに彼女は荒い呼吸を続けながらも耐えていた。だが徐々にではあるものの、確実に彼女の理性は剥ぎ取られている。引き結んでいる口の端には唾液の跡が見え、その瞳は度重なる刺激に揺れていた。

「——はあっ——は、あ——も——おわり、か——は、っ——あ——こ、こんな——の——たえる——くら、い——らくしよ——だ——」

とはいえ、まだ減らず口を叩く余裕はあるらしい。本人は不敵に笑っているつもりなのだろうが、その表情や荒い呼吸から察するに余裕が無いのはバレバレである。それはあえて指摘せず、再び愛撫へと戻ろうとすると——

「——え？　ま、まだ——やる、き——かよ——っ——」

モードレッドが、明らかに動揺した。また微弱な刺激を与えられる、辛うじて抗えていた刺激が再び訪れる。それを察した彼女は恐怖している。行為そのものではなく、微弱な刺激によって自分でも理解できない感情、性的な欲求が沸き上がってくることに対してだ。

ふるふるっ、と震えるモードレッドの腹部へ顔を埋める。そして舌を出して円を描くように舐め回し、ぴくっ、ぴくっ、と返ってくる反応を楽しみながら目標へと近付いていく。向かう先は、腹部の中心、小さな腹孔。

「——っ——ふわっ、あ——おま——そ、こお——ちよ、やめ——ほ、ほじん、なあ——う、ひいっ——っ——ん、んん——や、やめ——ろっ——てえ——ッ!!」

モードレッドが初めて、たまらず声を張り上げた。腹孔を舌でなぞり、その中心部へ舌先を突っ込む。ぐりっ、ぐりっ、とほじっただけなのに、彼女は不意打ちで叩きつけられた知らない感覚の波に揺さぶられる。

両手で、ぎゅっ、とシーツを握りしめ、足の指を丸め、目を力いっぱい閉じて知らない感覚の荒波に耐えようと試みるモードレッド。

しかし、その感覚には抗うことができなかつたらしい。彼女の意識とは関係なく、自分のものとは思えない甲高い嬌声が口から出してしまっていることに驚いた様子。

「ひゃ、んっ——こ、こえ——おか、し——なん、でえ——こん、な——あんっ——こんなのお——お、れ——の——こえ、じゃ——な、っ——ああっ、ん——っ——んんっ——ツ!!」

刺激から逃げようと、いまだにモードレッドは身を捻り離脱を試み続ける。諦めの悪いことだが、組み伏し責めていることからすれば反応が楽しく、興奮する。腹孔のシワの一本一本を確かめるように、丹念かつ執拗に舌先を押し付ける。

唾液が溜まった腹孔へ舌先を押し込み、ぐりっ、ぐりっ、と何度もほじる。腹孔から溢れた唾液など気にせず、ただ、ひたすらに、何度も何度も。

「ひ、いい——んんっ——はあ、あ——や、め——ろお——も、やだっ——これえ——あんっ——やだあ——は、ら——も——なめ、んっ——なああ——ツ!!」

そろそろか、と彼女の腹部から顔を離す。すると突き出した舌先と彼女の腹孔を繋ぐ唾液の糸が、ぷつりと切れてモードレッドの滑らかな腹部へ落ちていく。彼女の方を見ると、表情を確認することはできなかった。

両手を顔の前へ交差させ、見られないようにしている。だが、かすかに覗く口元は荒い呼吸を繰り返し、唾液を垂らしているのが確認できた。先ほどの反応から察するに、あと一歩といったところだろう。

今度は腹ではなく、剥き出しになったモードレッドの太股へと顔を寄せる。震える肉厚な彼女の太股へ口付け、同じように吸い付き、舌を這わせてやる。

「っ——や、やだっ——そこ、だめだ、って——ッ——あ、あああっ——ひい、ん——うああっ——んうっ——あんっ——ツ!!」

露になっている太股から膝、ふくらはぎ、足首までを衣服の上から舐め回す。途中、蒸れたニオイに昂りを感じながら。その流れで、ブーツとソックスを脱がし向かうは足の先端。彼女の足裏へ手を添

え持ち上げると、指と指の間へ舌を差し入れた。細い指を味わい、ねぶり、しゃぶる。

「う、あッ——や、やだ——やだ——や、だあぁ——ッ!!」

モードレッドの知らない感覚、快感が足の指や足の甲から上がってくるたびに彼女は背中を逸らせた。おそらく無意識だろうが、彼女は力を入れて足指を丸めようとしている。だが、たつぷりと唾液が付着した舌は、指の間を滑っていく。

たつぷり時間をかけてモードレッドの足先までを、満足するまでしゃぶり尽くしてから体を起こす。相変わらず仰向けにそのまま腕で顔を隠している彼女を見下ろしながら——指先を、っっ、と彼女の太股から腹部までをなぞる。

もう降参かな、と問い掛けると——

「ま、だ——だ、あ——ひ、う——ま、だ——」

まだ足りないそうだと、ここまで強情だと呆れを通り越して感心してしまう。だが同時に、愛しさが込み上げてきた。アルトリアを超えるため初めてであろう性交へ踏み切り、核心を刺激してはいないとはいえ必死に耐える彼女の姿は淫靡で、愛しくて、美しかった。

「……………ここまで、かな」

「……………頑張ったね」

「……ふえ？」

彼女の体から離れ、ベッドの上へ座る。これ以上の勝負は、これこそ後戻りができなくなるだろう。見たところモードレッドは嫌がっている様子だし、これ以上は苦痛なだけだろう。それくらいなら、こちらが負けを認めてしまったほうがいいと思った。

だが立ち上がろうとした時、手首を掴まれる。ふと目を向けると、どこか困惑した表情のモードレッド。止められたというのは分かるが、彼女の意図が掴めない。少し考えたら、おそらく“参った”とい

う言質を取りたいのだと思ひ至る。

だが、モードレッドは手首を掴んだまま――

「――お前、勘違いしてるぞ。たしかに勝負は勝負だけど、お前に――だ、抱かれん、のは――その――嫌じゃ、ねえ――あ、やつ――違うな――たぶん――オレ、お前に――惚れてん、だよ――好き、なんだよ――その――触られたり、舐められて――う――嬉しかったから、さ――た、たぶん――だけど――」

歯切れ悪く、そこまで告白すると、モードレッドは顔どころか耳まで真っ赤にして俯いてしまう。だが、それでも、勝負は勝負だ。嫌がってるワケじゃないのは嬉しい限りだけど、これ以上、苦しませたくないという思いの方が強い。

それを伝えると、モードレッドは「あー」とか「うー」と、頭を揺らして唸りだす。だが、顔を上げた彼女は頬を朱に染めながら自嘲の笑みを浮かべて――

「――なら、”参った”のはオレだ、勝負はオレの負けでいい。だから、こつからは勝負と関係なく――オ、オレと――シてくれ――つ――えつと――実は、もう――我慢も限界だったし、な――」

白旗を、上げた。

実は、と言われるまでもなく限界だったのは察してはいたのだが、あえて突つ込むことはしなかった。代わりに無意識のうちに浮かんでくる苦笑を噛み殺しながら、掴まれてない方の手でモードレッドの頭を撫でてやる。

すると、むつ、と頬を膨らませたモードレッドは掌から逃れると掴んでいた手首を放し、いきなり着ている服を脱ぎ始めた。こつちが慌てることなど気にした様子なく、彼女は素早く一糸纏わぬ姿になると再びベッドへと倒れ込んだ。

「――い、痛くしたら、ぶつとばすからな――その――や、優しく――シてくれ、よ――?」

腕で乳房と股間を隠しながら、ベッドへと仰向けに寝転がるモードレッド。その表情には、もはや苦痛などない。羞恥に頬を染め、これから行おうとしている行為、訪れる快感に期待している顔。

ここまでされては、退けるわけがない。優しく、というのは無理かもしれない。これほどまでに彼女の淫らな姿、表情を見てしまったら、自制できる自信はない。心の中だけでモードレッドへ、先に謝っておこう。

そして彼女と同じように着ている衣服を全て脱ぎ去ると、そのまま仰向けのモードレッドへ覆い被さる。そのまま口付けようと顔を寄せると、彼女はハツとした表情の後に目を閉じた。

ちゅっ、と触れるだけのキス。相手の唇の形を確かめるように、吐息を共有するような、優しい口付け。それと同時に、少しだけ膨らんだモードレッドの乳房へと手を這わせる。

「——ちゅっ——ん——っ——んんっ——」

唇を重ねながら、控えめなモードレッドの乳房、その先端を探すと、指先へ固い感触を感じる。先の前準備の成果だろう、もはや充血しきった乳首は、ぷっくりと膨らんでいた。その乳首を指先で突き、捻り、擦り、弾く。

そのたびにモードレッドは体を跳ねさせ先ほどまでの快感とも呼べない刺激、それとは比べ物にならない感覚に理性を持っていかれそうになる。乳首が弄ばれるたびに彼女の脳へ電流にも似た快感が、ビリッ、ビリッ、と駆け巡った。

「——んんっ——ぷはっ——あ——ん、あ——な、んだ——これ、え——びりびり、して——あんっ——ツ——ん、う——ん、んんっ——」

先ほどと同じようにシーツを掴み、快感の波に耐えようとするモードレッド。その表情を楽しみたくもあつたが、昂った本能は、もつと彼女の甲高い喘ぎを聞きたいと体を突き動かしてくる。

指は乳首から腹、脇腹を経由し股間へ向かわせる。その間に顔を放し、首筋や鎖骨へキスを散らしていく。すると先に到達したのは、指先の方だった。モードレッドの両足の付け根へ掌を滑り込ませると湿り気と共に、くちゅっ、という水音が聞こえた。

「——ひ、ああんっ——っ——そ、こ——やめ——ツ!!」

焦ったように声を張り上げたモードレッドの制止は無視し、指を曲げ指を割れ目に沿って擦り付ける。と同時に、目の前で真っ赤に充血

した乳首が来ると、舌を出して押し付ける。

下半身からは愛液が跳ねる、くちゅつ、くちゅつ、という音が。乳首からは唾液を塗りつけるたびに、ぴちゃつ、ぴちゃつ、と唾液が絡む音が鳴る。二ヶ所を同時に責められたモードレッドは快感に煽られるまま背中を反らし、卑猥な水音に耳孔を、脳を犯されていく。

「う、わあああ——なん、つ——これえ——しら、なひ——こんな、のお——あ、あつ——ひい、んつ——お、とお——やだあ——つ——あんつ——ぞくぞく——つてえ——あああ——や、らつ——なんか、くる——くるう——ツ!!」

びくんつ、びくんつ、と何度も体を跳ねさせるモードレッド。彼女が我慢の限界、と言ったのは本当のようだ。先の刺激で昂った体は、敏感な部分を責められ快感に成すがまま。あつという間に、上り詰めていく。

とどめとばかりに乳首を甘噛み、指腹を割れ目と、その上の陰核を押し潰してやる。するとモードレッドは、これでもかというほど背中を、腰を跳ねさせて全身を襲ってくる快感のままに絶頂した。

「う、あつ——ひあ——んんつ——あ——ああああ——ツ!!」

絶え間なく襲ってくる快感に痙攣で応えるモードレッドの体は、割れ目から潮を噴き出す。ぷしゅつ、と噴き出た潮は指を、掌を汚しつつベッドへ大きなシミを作っていく。温かい潮を受けるも、気にはしない。そのまま、今度は指だけでなく掌で彼女の秘部を労るように優しく撫でてやる。

甘く噛み付いた乳首からは唇を放し、代わりに舌先で舐め回してやった。こちらは、ねつとりと。乳首だけではなく乳輪や、その周囲を円を描くように。

「あ——う、ああ——な、んかあ——れ、たあ——あああ——こ、れ——つ——あ、ん——あ、たまあ——まつ、しろ——で——んんつ——ふわふわ、して——」

まだ絶頂の余韻に浸り、痙攣を続けていたモードレッドの太股へ肉棒を押し付ける。引き締まった彼女の太股へ亀頭を、裏スジを擦り付けると、ぞくぞく、と快感が背中を震わせた。

少しだけ亀頭から漏れた先走りがモードレッドの太股へ付着し、ぬちやつ、ぬちやつ、と小さく鳴っている。すると彼女はシートから手を放し――

「――あ、つつ――こ、れ――おまえ、の――あつい、な――う、あ――や、ば――も、だめ、だ――ああ――おれの、からだあ――つ――これ、ほしがって――うああ――もお――がま、ん――できな、ひ――」

そつ、と挟み込むように頭を掴んできた。

上からのしかかり、密着していた体を離す。すると眼下のモードレッドの顔は、とろんつ、と蕩けた表情になっていた。瞳は絶頂の余韻に力なく揺れ、口の端には垂れた唾液の跡を残し、かすかに開いた口からは熱い吐息を吐き出している。

ふと、彼女の片足が広げられる。すると、むあつ、と周囲へ雌の二オイが漂ってきた。たまらない、我慢できないと足を広げる、その行為はモードレッドの、無言のおねだりだ。

「――ます、たあ――ここ――はや、くう――つ――」

――ベッドの上で身動きし

――開いたモードレッドの足を掴み

――彼女の両足の間へ、体を入れる

――求められるままに、肉棒を、亀頭を

――雌孔へと押し当て、照準を合わせると

――ゆっくりと、腰を前へと押し出していった

お年頃な叛逆の騎士（3）

モードレッドの両膝裏へ掌をやり広げ、腰を前へと押し出していく。すると肉棒、亀頭が愛液に濡れたヒダを擦り、掻き分け、雌孔へ呑み込ませた。彼女の膣内は狭く、熱い。異物の侵入を阻もうと絞まる膣壁を強引に掻き分け、ずぶぶつ、と少しづつ少しづつ埋まっていくと——肉棒を通して、ゾクゾクと快感が上ってきた。

「——ん、んんっ——はい、って——きた、あッ!!」

モードレッドの両手が、シーツを掴む。異物が自分の膣内へと侵入してくる感覚に耐えようとするたび、彼女は逃げられない快感に煽られ、無意識にシーツを握る手へ力を込めていく。

快感にゾクゾクと震え、わずかに背中を逸らす。そんな彼女を見下ろしていると、前へと押し出していた腰を止めた。いや、充分に準備は済ませたはずだが、彼女が痛みを感じるかもしれないという恐怖に腰を止めてしまったと言った方が正しい。

膝裏から手を抜き、上半身を折り、少しだけ近付いた彼女の頭を撫でてやる。サラサラとした髪に指を絡めていると、それに気付いたモードレッドは目の端に涙を溜めながら訝しげな表情で見上げてきた。

「——ん、あ——へへっ、さつき、いったこと——きに、すんなよ——べ、べつに——なぐつたりしねえから——いたく、ても——その——がま、ん——するから——」

——モードレッドがシーツから手を放すと

——涙の玉を浮かべ、無理やり笑顔を作って

——大きく、両手を広げてくる

普段のモードレッド、いつも強気で生意気な彼女も魅力的だが、いま目の前で横たわる彼女の姿は、それ以上に魅力的だった。そして、とても可愛く、愛しかった。誘われるままに彼女へと覆い被さり、抱き締める。

驚いた様子のモードレッドが、すこし躊躇いがちに背中へ手を回し

てきた。キスができるほど顔を近付けてしまう結果となったが、彼女の様子から嫌悪感を抱かれているわけではなさそうだ。それどころか目を閉じ、薄く口を開けて口付けを待たせてくれている。

「——っ——んっ——ん、う——ちゅ——ちゅっ——」

モードレッドの顔を寄せ唇が触れると、びくっ、と彼女は肩を跳ねさせる。吐息を口付けて交換し、熱を共有し、想いを通わせる、ついでに優しいキス。少しでも彼女の緊張が和らげば、と思い、柔らかな甘い彼女の唇を味わう。

ちゅっ、ちゅっ、と音を立て唇を重ねつつ、再び腰を前へと動かし始める。ずずっ、ずずっ、と徐々に雌孔への侵入を果たしていく肉棒。そして到達する、モードレッドが“少女”である証。龟头が壁にぶつかったのを感じ、腰を止める。

「——っ——あ——い、から——その、まま——きて、くれ——」

——ぎゅっ、と背中へ回っていたモードレッドの手に力が込められた

——同じように抱き返しながら、ゆっくりと

——腰を前へと押し出し、肉棒を、押し込んだ

「——ッ——んんっ——っ、っう——ッ!!」

モードレッドの顔が苦痛に歪んだのを間近で見ってしまう、だが罪悪感を感じながらも腰は止めない。龟头が膜を破り、さらに深く彼女の膣内へと侵入していく。すると、程なくして最奥の子宮口に到達した感触、こりこりとした少し固い感触を龟头へ感じた。

腰がモードレッドの下半身と密着し、互いに痙攣を共有する。なるべく負担を掛けないよう心掛けたつもりだったが、やはり痛みは彼女の想像を絶していたようだ。顔を覗き込むと、モードレッドの目端に溜まっていた涙は、ぼろぼろと溢れてしまっている。

「——ん、んんっ——あ——わる、い——ちよつと——この、まま——ッ!!」

力いっぱい目を閉じ、唇を引き結び荒い息を吐くモードレッド。彼女に言われた通り、下半身は密着させたまま動かさない。代わりに彼女を労るように、優しく頬や目端の周囲へ口付ける。滑らかな彼女の

頬や目頭、鼻先を唇の先で感じ続けた。

そして、繋がったまま微動だにしないまま、数十秒ほどが経過した頃だろうか、モードレッドは少しだけ目を開けると、苦笑とも自嘲とも取れる笑みを浮かべてきた。まだ痛みがあるのか、その表情に余裕は感じられない。

「ん、う——ちよ、つと——なめて、た——すごく——いつ、てえ——ッ——け、ど——なんだろ——あたま、ふわふわして——え、へへ——なん、か——うれしいん、だ——んう——は、あ——も——だいじょうぶ、だから——う、うごいても——いい、ぞ——」

この時、モードレッドの胸中は幸福感で占められていた。破瓜の痛みよりも、勝負のことよりも、いま目の前に居る自分のマスターと身を重ね、繋がり、一つになれたことが嬉しくてたまらなかった。それが恋愛感情だという、自覚のないまま。

だが、そんな彼女の内心は理解できない。というよりも下半身、肉棒を締め付けてくる彼女の膣内が、せり上がってくる快感と、さらなる快楽を求めたい欲求が、考える余裕と理性を打ち砕いていく。モードレッドの言葉と欲望へ突き動かされるままに、腰を引く。すると龟头が子宮口から離れ、カリが膣壁を擦る快感に背筋が震えた。

「ん、んっ——う、あ——あ、ん——んんっ——は、っ——」
ずちゅっ、ずちゅっ、と股間から音が鳴る。

腰の前後運動に連動して肉棒がモードレッドの膣壁を擦ると、組み伏している彼女の顔が歪んでいく。ただ、歪む原因は痛みだけではない。喘声を発する彼女の口の端からは唾液が零れ、熱に犯された目は感覚に揺れていた。

そう、いつしかモードレッドは痛みの他に、快感も感じ始めていた。無意識のうちに締めてしまう膣壁から直に伝わってくる、肉棒の熱さと摩擦による感覚は彼女の体内を駆け上がってくる。

「ん、あんっ——っ——ふ、あっ——こ、れえ——おか、ひ——いた、かっ——たの、にい——ああ、んっ——も、これえ——や、あ——ひうっ——あ、らま——ぞく、ぞくっ、てえ——く、るう——ッ!!」
モードレッドの蕩けた表情を見てしまつては、腰を動かす速度に拍

車が掛かる。絶頂への欲望に駆られるまま、腰を律動させる速度を上げていく。すると、ぱんっ、ぱんっ、と肉が肉を打つ音を聞きながら、お互い昂っていくのを感じた。

亀頭で子宮口を叩き、えぐる、カリで膣壁を擦る、引っ搔く。もう止まらない、ひたすら腰を振る。何度も何度も、モードレッドの体内へ肉棒を突き立てた。

「——ん、あ——ま、まつ、れ——おね、がつ——こ、れえ——つ——ああんっ——ぞく、ぞくっ——とま、ら——にや、っ——う、ああ——で、でりゅ——ま、ら——でりゅうう——ツ!!」

モードレッドが、大きく背中逸らす。快感に煽られ続けた彼女は、もう限界だった。自制が利かない体、昂っていく心は無意識に彼女の体を跳ねさせる。肉欲に導かれるまま、女としての本能が彼女の思考を奪っていく。

モードレッドの脚が力強く腰へと回ってきた、肉棒をもつと奥へと導くように、密着させた下半身同士が離れないように。その行為に、こちらの興奮も煽られた。さらに深く、強く肉棒を彼女の膣内へと叩き込む。

「——ん、あああっ——こ、れえ——おく、がああ——ひ、うっ——ん、あ——な、かあ——びく、びく——つてえ——はね、て——りゅ——あ、んっ——あひっ——も、らめ——おかひく、なりゅ——あた、まあ——うああ——ま、しろ、に——なりゅううう——ツ!!」

ぎゅっ、と背中に回ったモードレッドの手に力が入る。

もう絶頂までは秒読みだ、それを察すると腰の律動にスパートをかける。ばしんっ、ばしんっ、と激しい音を立てながら彼女の子宮口へ亀頭をぶつけ、びりびりと響く快感を貪った。

その時、一際モードレッドが大きく体を跳ねさせた。ぞわっ、と背中へ走る快感によつて大きく逸らした体は、彼女が絶頂した証。それと同時に、彼女の膣内^{なか}が大きく伸縮する。ぎゅうっ、と急激に伸縮した膣壁は、限界間近だった肉棒を容赦なく締め付けてきた。

「——ん、い——あ——ああ——っ——あああああッ!!」

その締め付けに負けぬよう腰を思いつき打ち出し、肉棒を子宮口

へと押し当てる。同時に玉袋が、きゅつ、と収縮し欲望を肉棒へと駆け巡らせる。そして、最後に――駆け巡ってきた欲望が、肉棒の先端から解き放たれた。

噴き出た欲望、精液は龟头と密着していた子宮口を、その奥の子宮へと注がれていった。白く濁った精液がモードレッドの子宮口を蹂躪し、痙攣に合わせて、どくんつ、どくんつ、と流れ込んでいく。そのたびに子宮は悦びのままに龟头へ吸い付き、精液を迎え入れてきた。

「――う、あ――つつ、い――は、はら――の――なか、にい――あつ、い――のが――ん、っ――ああ――これ――や、っぱ――あ――ああ――」

子宮へ流れ込んでくる精液の熱さと感覚にモードレッドは、身を揺らし感受する。熱いものが体へ入り込むだけではなく、溜まっていく。だが彼女に嫌悪感はない。むしろ悦び、幸福感が胸の内を占めていく。

数秒ほど、びゅつ、びゅつ、とモードレッドの膣内へ注いでいた精液、その全てを吐き出し終えた頃。間近にある彼女が、どこか寂しそうに見上げてくる。「むー」と頬を膨らませる、その表情は――

「――おい、おまえ――から――なにも、きいてない、ぞ」

その言葉で、ああ、と思い出した。そういえば彼女から告白してみたことを言われたが、こちらから返答をしていないことを。それにしても、順番がバラバラだ。勝負だと迫ってきて、告白されて、体を重ねて、返事を求めてくるなんて。

だが、それもモードレッドらしい、と言えるかもしれない。勝ち気で負けず嫌い、でも本当は優しいくせに悪ぶってる女の子、なんて本人に言ったら殴られてしまうだろう。だからこそ今は、求められたことにだけ答えるでしょう――

「……………好きだよ」

「……………愛してるよ」

——と



行為の後、体中がベトベトして気持ち悪い、と言い出したモードレッドがシャワー室を貸してくれと言ってきた。もちろん快く貸そうとしたのだが、行為を終えたばかりの彼女は千鳥足。ふらふら、と頼りない足取りを見てしまい、その結果——

「あー、もう。なんで連いて来るかなあ——」

一緒に入る、と相成った。

モードレッドは断固として拒否してきたが、転びでもしたら目も当てられない。ましてや、彼女が”そんな状態”になった要因は自分にもある。故に、こちらも退かなかった。話は平行線だったが、幸いにも彼女が先に折れてくれて助かった。

「——気にし過ぎだったの、まったく。まったく——」

せつかくだからと溜めた湯船に浸かりながら、恥ずかしそうに体を洗うモードレッドの様子を窺ってみた。普段は束ねている髪を下ろしているせい、少し雰囲気違って見える。なんというか、すごく可愛い。

それに、さつきから語気の強い言葉で文句ばかり言ってくる割には微笑んでいる。というか、ニヤけている。何だろう、嬉しくて嬉しくてたまらなくて、ついつい頬が弛んでしまっている、といったところか。

と、不覚にも顔を眺めているのに気付かれてしまう。見る見るうちにモードレッドは顔を真っ赤にすると、手にしていた体洗い用のスポンジを投げてきた。ぼふっ、と柔らかい感触が顔面に当たり、ボディソープが目には滲みだした。

「——ばばば、馬鹿、ジロジロ見てんじゃねえツ!!」

モードレッドの照れ隠しだと思っただけ、手痛い報復だ。投げたのが体洗い用のスポンジで幸いだった、これがもつと硬いモノだったらと思うとゾツとする。もしかしたら顔潰れてたんじゃないかな、くわばらくわばら。

洗剤を落とそうと湯船の水で洗い流していると、何やら柔らかいモノが触れる。かすかに痛む目を向けてみると、いつの間にかモードレッドが湯船の中へと入ってきていた。こちらへ背を向け、寄りかかってくるように。

「——ふんっ、狭い風呂だな。ほんと、最悪——」

ちやぶん、と湯船へ張った湯が跳ねる。

そんな中、胸板へ寄りかかってくるモードレッドを背後から抱き締めめた。すると彼女の後頭部が、肩口へのせられる。温かい湯船の中、体を密着させ——しばらく、そのままだった。

——密着したことで頬を撫でる彼女の髪から漂う

——鼻孔をくすぐる柔らかい匂いと

——柔らかいく肌触りの良い彼女の体に触れたことで

——無意識のまま肉棒が固さを取り戻してしまったのを

——彼女に、気付かれるまで

お年頃な叛逆の騎士（4）

「ど、どんだけ盛ってんだよ、このスケベ——」

湯船に浸かりながら背中を密着させてくるモードレッドが、腰に固いモノが押し付けられているのに気付く。腕の中で体を捻ろうとしている辺り、おそろく逃げようとしているのだろう。だが、腰に回した手で彼女を拘束しているので逃げられない。逃がすはずもない。

モードレッドを抱き止めていた腕を、彼女の股間へと滑り込ませる。すると明らかに湯とは違う、粘性を帯びた何か指先へ触れるのを感じた。指を折り彼女の割れ目へと指を這わせると、さらに明確に粘つく感触は強くなる。

「——んっ——こ、の——バ、ツカ——」

罵りながらも、モードレッドは強引に振りほどいてこない。おそろく無意識のうちに彼女の体は、先の行為で知った快感を期待しているのだろう。その緩やかな抵抗は、嗜虐心を刺激した。本来なら止めることなく愛撫を続けるところだが、あえて、彼女の言葉通り愛撫を止めてやる。

指を彼女の股間から放し、代わりに下腹部や腰回りへ掌を乗せ撫で回す。すると核心部へ感じていた快感が逃げていったことに気付いたモードレッドは、「あ」と小さい呟きを吐息と共に吐き出した。

ちやぷんっ、と湯船の水面を揺らしモードレッドが振り向いてくる。肩口、キスができる程の距離から見上げてきた彼女の表情は切なそう、劣情に揺れていた。頬を撫でる彼女の吐息は熱く、火傷してしまいそう。

「——お、おい——やめちまう、のか——?」

心の底では止めるつもりはないのだが、ここは、あえてモードレッドの問い掛けに肯定で返す。嫌がることはしたくない、と心にもないことを添えて。すると彼女は狭い湯船の中で、脚を大きく開いていく。

何やら思うところがあり悩んでいるようだが、言葉が出てこないら

しい。頬を朱に染め、視線を湯船の中へと移す。そこには彼女の下腹部を撫でる腕。決して核心部には触れず、その周囲を撫で回す掌があった。

「——れ、よ——」

ぼそつ、とモードレッドが囁く。でも、その眩きは湯船の湯が跳ねる音に掻き消された。だいたい何を言ったのかは想像できるが、聞こえないふり。よく聞こえない、と間近にある彼女の耳先で呟いてやる。すると羞恥に顔と耳を赤くし、腕の中で震える彼女は——もう一度、体を震わせながら囁いた。

「——だめ、じゃねえから——っ——その——い、じっ、れよ——」

バカだのスケベだの人を罵っていたくせに、と嘲るような囁きをモードレッドへ返す。言葉遣いがおかしい、人にモノを頼む態度じゃないよね、と付け加えて。すると不意に腕の中で彼女が、ぶるっ、と身を震わせた。湯に浸かっているから、寒さのせいとは考えにくい。

つまるところ、耳元で罵られて背筋へ寒気が走ったのだろう。湯の熱、言葉の熱、体の熱はモードレッドから判断力と理性を削ぎ落としていた。こちらの言葉にいちいち可愛い反応を見せる彼女は——顔を逸らし、視線を逸らし、ベッドの時と同じように緩やかな刺激に我慢できず、さらなる快楽を求め始めた。

「——っ——お、ねが——さわ、つれえ——いじ、れ——よお——も、がまん——できねえんだ、つてばあ——た、たの、む——からあ——ツ!!」

どこか嗚咽も混じった、彼女のおねだり。先の性交で快感を知ってしまったモードレッドにとって、この緩やかな刺激は、もう満足できる快感ではないのだろう。ともあれ彼女が、ここまで羞恥に耐えながらも求めてきてくれたのだ。その望みを、叶えないわけにはいかない。

湯船の中でモードレッドの両脚を持ち上げ少し浮かせると、腰を彼女下へ敷くように態勢を変える。そして、固さを取り戻し上を向く肉棒の先端を彼女の股間へあてがい——拘束を、解いた。

「——ひい——っ——う、あああ——ま、ら——はい、っへ——きたあ

——しゅ、ごっ——ん、っ——うああああ——ッ!!」

水の浮力があるとはいえ、緩やかに沈んでいくモードレッドの体。彼女の股間に当てがった亀頭が、沈み込んでくるままに雌孔へ導かれ、ちゅぷつ、という音と共に呑み込まれた。心地よい湯の熱さとは違う、火傷しそうな熱をもつ膣へ肉棒を受け入れた彼女は——異物を挿入された瞬間に、達してしまっている。

湯船の中なので分かりにくいだが、明らかに湯とは違う粘性を帯びた体液が漏れ出てくる、それは潮だ。モードレッドが噴いた潮は、湯船と混ざり溶けていく。その様子を見届けながら、抱えた彼女を湯船の中で持ち上げ、下ろす。その動作と連動して、彼女の膣内^{なか}を何度も肉棒で擦るように。

「——う、ああっ——んっ——ゆ、つく——りい——あんっ——れ、たり——はい、った——りい——ふあ、っ——きも、ち——ひっ——んっ——あ——しゅ、ご——ひい——ッ!!」

湯船の中で、ずぶつ、ずぶつ、と肉棒をモードレッドの膣内^{なか}へと打ち込み、膣壁を擦り上げ、快感を貪る。その動きは激しさを増していき、次第に湯船の水面が波立っていく。彼女を動かすたび、自分が腰を捻るたび、ばしゃっ、ばしゃっ、と湯船が跳ねる。

と、そこでモードレッドの表情を盗み見る。ベッドの上とは違い、今の彼女の表情は、普段とかけ離れたもの。覇気に満ちていた瞳は劣情に揺れ、喘ぎ声を上げる口からはだらしなく舌を覗かせ、熱い吐息を吐き出す。その姿は——どこかで、見たことがあった。

下半身を揺らしながら思考に耽ると、はたと思い出した。そうだ、今のモードレッドの顔は、アルトリアとよく似ている、と。乱れたアルトリアと、乱れたモードレッド、二人の表情は瓜二つだ。

「——ちち、うえ——とお——おれ、にて——っ——あんっ——し、し——らにや、い——に、にてねえ——ああんっ——にて、りゅ——わけえ——っ——な、いっ——だ、りよ——ッ!!」

どうやら無意識のうちに先の思考を口にしてしまっていたらしい、アルトリアと瓜二つと聞いたモードレッドは不服そうに眉をひそめた。彼女が否定しているけど、本当によく似ていると思う。たまらな

い、欲しい、と訴えてくる、淫靡で脆そうな表情。

いけない、と理解していても、嗜虐心が顔を覗かせる。必死に似てないと主張するモードレッドへ、事実を突き付けてやりたくなかった。アルトリアが快楽に溺れた時に見せた顔が瓜二つだと、自分もアルトリアと同じように快感に溺れてしまう一匹の雌であるということ——彼女へ、見せたかった。もう止まらない。

湯船の中で彼女の両脚、その膝裏へと腕を入れ——

「んあつ——ちよ、ます——たつ——ツ!？」

下半身で繋がったまま湯船から立ち上がる、そして少しだけ体の向きを変えた。その真つ正面、壁へ備え付けられている全身が映り込むほどの大きな鏡に——性器と性器が繋がったままの、二人が映るように。

「——う——あ——あああ——」

モードレッドが鏡を通して見てしまったのは、ほかでもない自分の姿。恥ずかしげもなく左右へ大きく脚を広げ、股間の雌孔で太く大きな肉棒を易々と呑み込み、結合部から涎のように愛液を垂らす姿。

——淫らで、卑猥な、モードレッドの姿を

だが、見せるだけでは飽きたらない。

そのまま浴槽から出てモードレッドの脚を下ろし立たせると、性器同士で繋がったまま鏡へと歩み寄る。突然のことに驚いた彼女は震える脚で何とかバランスを保とうとしていたが、背後から臀部を掴まれ、肉棒ごと腰を打ち付けられると——つい両手を鏡へ突き、至近距離から覗き込むような格好になってしまった。

「——これ——お、れ——?」

白く霞むモードレッドの思考、快感に揺さぶられる彼女が鏡の向こうへ居る自分モードレッドを直視した。恥ずかしげもなく唾液を口の端から溢し、だらしなく舌を見せ、熱い吐息を吐きながらも、どこか幸せそうに顔を歪ませるモードレッドの姿を。

瞬間、きゅつ、と肉棒を挟む膣の締め付けが強くなった。どうやら自分が犯される顔を見て、昂つたのだろう。あいにくと、こちらも動

かずにいるのは限界。射精したい、という欲求に抗えない。

「——こ、ん——なあああ——うああっ——お、れ——ますたあ、の——
——つつこまれ、て——こんな、かお——してえ——あんっ——や、や
らっ——これ、ちがっ——おれ、じゃ——な、ひっ——こんな、の——
——ち、がっ——ッ!!」

モードレッドが上半身を鏡へ押し付けてしまうほど強く、臀部を両手で固定し腰を振る。ばちんっ、ばちんっ、と生々しい肉打つ音を聞きながら彼女は、うわ言のように「ちがう」と言い続けていた。泣きそうな声と喘ぎ声は、どんどん興奮を煽ってくる。つい背を丸めて彼女の耳元で、可愛い、と囁いてしまうほどに。

亀頭が、肉棒がモードレッドの膣内^{なか}を擦るたびに絶頂への欲求は加速する。じゅぷっ、じゅぷっ、と漏れ出てくる愛液を雌孔へ押し戻すように、塗りつけるように、激しく何度も彼女の雌孔をほじった。

「——ち、がっ——かわひ、くっ——な、ひ——ちがうっ、のおお——
やああっ——やらっ——こん、なっ——のおお——おれ、じゃ——な
ひっ——やああ——や、らあああ——ちがうっ——ちが、う——つて、
ばあ——っ——かわひ、つて——いわれ、へ——うれし、く——なん、
かっ——ああんっ——ち、が——ああっ——ッ!!」

鏡へ手を突き、必死に首を振るモードレッド。彼女は肉棒が膣内^{なか}を行き来するたびに押し寄せてくる快感に抗いながら、否定し続ける。だが、彼女も限界だったらしい。ガクガクと脚を震わせる彼女の膣壁^かが、急速に伸縮し肉棒を締め上げてきた。

ゾクゾクと昂っていくまま腰を振り続け、トドメとばかりに腰を激しく打ち鳴らして彼女の臀部へ押し付けた。瞬間、玉袋から迸った欲望は腰を駆け巡り、肉棒を膨らませながら突き進み——びゅーっ、と勢いよく亀頭から大量の精液を噴き出す。

「——っ——まら、きたあ——あ、つい——のお——んんうっ——
ああ、っ——ます、たあ——ッ——ます——た、あ——やああっ——
ますたああああ——ッ!!」

膣内^{なか}で蠢く肉棒が奥まで挿し込まれた瞬間モードレッドは絶叫と共に再び絶頂し、子宮口の扉を開け放ち亀頭の先端を吸い始めた。す

ると間もなく、迸った精液が子宮口の吸引に合わせて、ごくんつ、ごくんつ、と注がれていく感覚に全身が震わせる。

肉棒の痙攣に合わせて吐き出される精液を、子宮口は膣壁の痙攣に合わせて吸引する。どくんつ、どくんつ、と亀頭が震えるたびに意識が飛びそうだ。ぐいつ、ぐいつ、と腰をモードレッドの臀部へと押し付けた、精液を全て子宮口へ吸わせたい、一滴残らず注ぎたい、という欲求のままに。

「う——あ——ああ、つ——う——」

呻きにも似た声漏らすモードレッドは、鏡を通して絶頂した自分モードレッドを直視する。涙や唾液、鼻水などの体液に汚れた、ひどい顔。なのに、不思議と嫌悪感はない。それは、きつと、その顔には幸福感が満ちていたからだろう。

だが、それも一瞬。

全ての精液をモードレッドの膣内なかへと注げたのを見計らって、肉棒を引き抜く。すると肉棒と共に、どろおつ、と精液や愛液が雌孔から溢れ、にちやつ、と糸を引きながら床へと吸い込まれていった。それは、なんとも卑猥な光景。

「——あ——あつ——ま、すた——あ——」

不意に、モードレッドの脚が折れる。

絶頂の余波でガクガクと太股まで揺らす脚は、もはや体を支えることができなかつたのだろう。ずるずる、とモードレッドは上半身を鏡へ押し付けたまま、床へ膝をついた。もちろん、いまだ雌孔からは精液や愛液を漏らしたまま。

——射精の虚脱感が体を襲ってくる

——そのまま倒れ込みたい欲求もあつたが

——このままでは風邪を引いたり、逆上せるかもしれない

——そう思い至つたら、悲鳴を上げる体に鞭打ち

——自分から動こうとしないモードレッドを抱き抱えると

——浴場を、後にした



「——おい、早く入れろよ」

ベッドへ寝転がりシーツを被っていると、傍らまで来たモードレッドがジト目で見下ろしてきた。シャワーを浴び終えて戻ってきたのだろう、いまだに彼女の髪や額には水の玉が見て取れる。にしても、ベッドへ入れるときたか。てつきり服を着て、そそくさと部屋を出ていくんだとばかり思っていたから油断した。

少し横へ寄り彼女が入れるだけのスペースを作っていると、シーツを持ち上げた。するとモードレッドは、なんの躊躇いもなくベッドへと潜り込んできて——ぎゅっ、と抱き付いてくる。

「——何だよ、文句あんのか?」

いえいえ、滅相もございません。

体を寄せてくるモードレッドが可愛くて、つい抱き締め返し頭を撫でてやる。「むう」と不満そうな声が聞こえたかもしれないが、聞こえないフリ。それにしても、柔らかな彼女の肢体へ体を密着させると、シャワーを浴びたばかりのせいかな少し熱い気がした。

「あのさ、オレ、やっぱ——お前に、惚れてる」

——モードレッドの頬が、胸板を撫でてくる

「お前に抱かれて、こうやって一緒に寝てみて、思い知った——」

モードレッドが顔を上げ、真っ直ぐ見つめてきた。どこか不安そうに、もしかしたら泣き出してしまうのでは、と思うほどに弱々しい表情で。

「ずっと一緒に居たい、いつまでも一緒に戦いたい。え、っと、たまには、こうやって可愛がられたい——」

視線が、わずかに揺らぐ。気恥ずかしそうに腕の中で顔を背けたモードレッドだが、「あ——」と唸りながら胸板へ額を擦り付けてきた。自分の発言に自爆して耳まで真っ赤になるくらいなら言わなければいいのに、とツツコむのは無粋か。

「騎士としても、その、”女”としても三流かもしれねえが——それで

も、いいか？」

もぞもぞ、とモードレッドが身動きして顔を寄せてきた。額をくっ付け、鼻先を擦らせ、首へ腕を回してくる。どこか頭の冷静な部分が、これっでもしかしてプロポーズじゃ、と疑問符を浮かべた。とはいえ、自爆しながらも言ってくれた彼女の言葉は、何より嬉しかった。

——モードレッドの背中へ手を回し

——抱き寄せながら唇を近付けていく

——彼女の言葉に対する返答は、もちろん…

小さな魔王の二度目の恋（1）

深夜、ベッドへと仰向けで寝転んでいると、何やら物音が聞こえてきた。ゴソゴソと何かが動くような、どこか耳に障る音と、しゅるつ、という布擦れの音。出所は枕元ではなく、もっと遠くの方からだ。

気になったが、あえて確かめるまでもないと無視を決め込んだ。薄い膜が張ったような心許ない意識の中、今度は下半身が柔らかいモノの感触を訴えてくる。ほんのりと熱を持ったモノが、爪先から登ってくるような感覚。

その不思議な感覚が辿り着いたのは、下腹部だ。むず痒い感覚は、履いていたズボンと下着を脱がされる感覚。解放された肉棒が外気に触れると、言い様のない悪寒が寝ボケた脳を叩いてくる。

いや待て、ちよつと待て、脱がされた？

明らかに、下半身に蠢くモノがある。それがズボンと下着を脱がしたとくれば、黙ったまま寝てなどいられない。途端に覚醒した意識が、今度は肉棒へ何か柔らかいモノが触れたのを感じる。それは複数の箇所を這い回る、暖かくて、滑らかな感触。

すごく、嫌な予感がした。

ハッキリした意識で目を開けると、闇の中で被っていたシートが不自然なほど盛り上がっているのが見えた。さらに言えば、露にされた肉棒が生暖かいモノへ触れ快感が走るのに合わせて、盛り上がりも動く。

この状況下、答えは一つ。問題は、誰か、だ。

そつ、とシートを持ち上げてみる。すると、やはりというか何というか、すごく見知った顔がいた。どこか幼さを感じさせながらも整った顔立ちの少女は、黒く長い髪を片手で纏めながら、空いた掌で肉棒を優しく撫でていた。

「……………あの」

「……………おい」

「おお、目が覚めたか……………」

こちらの視線に気付いた少女、織田信長アーチャーが生まれたままの姿で、肉棒を撫で回しながら上目使いで見上げてきた。

勝手にベッドへと潜り込んできたのを叱りたいが、さすがにシーツを被ったままでは苦しいだろう。そう思つて、被つていたシーツを剥ぎ取つてやる。すると、信長は待つてましたとばかりに肉棒から手を離し、上半身を滑るようにして顔を寄せてきた。途中、程よい大きさと弾力の乳房が腹や胸板を滑つていく感覚には、不覚にもゾクツと背中を跳ねさせてしまった。

「んふふっ、そう怒つた顔をするでない。せつかく、わしが夜這いに来てやったというのに……………」

顔を寄せてきた信長は、猫のように首元へ頬を擦り寄せてくる。すると彼女の髪や肌から漂つてきた甘い香りが鼻孔をくすぐつてきて、叱ろうとしていた意識を抑え込まれてしまった。

さらには、抗議しようと開いた唇を信長に塞がれる。小さな唇が甘く噛み付いてきて、舌先にねぶられ、そのまま口内へ侵入してきた。焼けるような彼女の舌が口内、歯や舌の裏までを丹念に這つていくと意思とは無関係に体が跳ねてしまう。

「……………じゅるっ……………んっ……………ちゅっ……………ぶ、あ……………ふう、ん……………れろっ……………」

信長が満足するまで口内を蹂躪され、唾液を交換したことで舌や歯茎が甘く痺れるような錯覚に陥つてしまうと、昂つていくのを抑えれない。唾液の糸を引きながら顔を離れた信長が、そのまま首筋や鎖骨へキスを散らしてきた。

微弱な刺激は絶え間なく首筋や鎖骨を襲い、いつしか信長の頭は下半身へと向かつていた。唇や舌への刺激と飲み込んでしまった彼女の甘い唾液、それに加えて首筋や鎖骨への口付けで興奮し——すでに

固く勃起した、肉棒へと。

「ノリが悪いのう、わしとの同衾が、そんなに嫌か？」

だが、信長の頭が腹部へ差し掛かった頃、ふと彼女は顔を上げ見下ろしてくる。いつもの自信満々、不敵な笑みではなく、不満そうな、それでいて寂しそうな形容し難い表情。だが彼女に伝えないといけない、こんな形でしたくない、と。

前々から信長は顔を合わせるたびに体を求めてきた、それは彼女が”そういう時代を生きていた人”だから仕方ないことだろう。もちろん彼女ほどの可愛い女の子に求められるのは純粹に嬉しいし、出来ることならば応えてやりたいとも思う。

それでも彼女を拒み続ける理由がある。それは、夜這いに行き着くまでの過程、動機だ。簡単に言えば、沖田への当て付け、嫌がらせ。それだけのために、抱いてくれとせがんできている。どうしても、それだけが割り切れない。好意でもなく、ただ既成事実だけを得ようとする心ない行為が、嫌なのだ。

それを聞いた信長はポカンとした表情、だが不意に「あー」と困ったように頭を搔くと、視線を逸らした。その隙を見逃さず、露になっ

ている自分の体を隠そうともしない彼女を尻目に上半身を起こす。

「あー、その、なんじゃ……お主、勘違いしとるぞ……」
傍らへ座る信長は、あぐらをかきながら流し目で見つめてくる。頬が赤いような気がしたが、まさか恥ずかしいとでも言うつもりか——言葉をかけようとした瞬間、いきなり彼女が腰の辺りに抱き付いてきた。

腹部に信長の頬が押し付けられる柔らかな感触と、彼女の長く艶やかな黒髪が擦れてくすぐったい。だが、それ以上に、彼女が頬擦りのまま囁いた吐息が熱く、くすぐったさよりも快感が走った。

「たしかに、記録でのわしは^{織田信長}20人の子を成しただの、女を囲っておつただのとロクでもない逸話が伝わっておろう。それに此度の件、沖田が発端なのは言うに及ばずじゃ、それは否定せん——じゃが、信じてほしい。わしは本気で、お主を好いておる。離れとうない、嫌われとうない。こんな気分になったのは、お主で”二人目”じゃ」

腰の辺りに腕を回していた信長が、見上げてきた。すがるような、今にも泣き出しそうな顔で。その表情に、どくんつ、と心臓が跳ね上がってしまった。早鐘を打つ心臓の鼓動を悟られぬよう、努めて平静を装って彼女の言葉の意味を問いかけてみる。

すると信長いわく、生前の彼女が本気で愛したのは一人の女性だという。その女性は生意気で、口やかましくて、口喧嘩が絶えなかったらしい。だが、それでも信長は、その女性を愛していた、とも――

「久しく忘れていたぞ、このような気分は……じゃから、その、お主が言うようなこと、というか……体だけ、とかじやのうて、その……つ……あ、あい、して……ほしい、んじや……ッ……」

わずかに視線を逸らしながら呟いた信長は、自分の発言によって恥ずかしくなったのか、「わああ」と奇声を上げてから腰へ回していた手に力を込め、再び腹部へ顔を押し付けてきた。なんだ、この可愛い生物。

信長の言動から察するに、きつと今のが彼女の本心なのだろう。今夜のように夜這いという手段を慣行したのも度重なる告白「抱いて！」を無視されたから実力行使に打って出た、その考えに至るのは仕方ないのだが――不器用すぎる、というか順番が滅茶苦茶だ、と苦笑が浮かぶ。

いまだ腹部へ抱き付いてくる信長の小さく細い背中へ腕を回すと、彼女だけに聞こえるように囁いてやる。気持ちは分かった、その上で何をしてほしいのかと――

「……っ……分かっておるくせに、意地が悪い奴め……う……む……そ、のお……わしは、お主が……す、好きじや……ッ……わ、わしを……抱いて、くれ……」

ここまで言われては、断るわけにいかない。
求められるなら、応えたい。そう思った……



ベッドへとあぐらをかいて座ると、脚の上へ信長がのしかかっていた。柔らかな彼女の肢体、肌の感触が心地いい。のしかかった方である彼女は、どこか蕩けたような、呆とした表情を浮かべる顔を――すでに起立し、わずかに痙攣している肉棒へと近付けていった。

「……………う、あ……………触っておった時より……………お、大きい、の……………っ……………あ、んむっ……………ちゅ……………ちゅるっ……………っ……………ふ、あ……………く、くひに……………え、あ……………はい、ひ……………ひら、ぬ……………」

びくんっ、びくんっ、と跳ねていた肉棒へと手を添えた信長が、ソレに口付ける。だが亀頭は、すばませた唇で吸い込まれていくも、その全てを彼女の小さな口の中へ呑み込むことは叶わなかったらしい。辛うじて亀頭と、肉棒の半分を呑み込むのが限界。

少し申し訳なさそうに信長が上目遣いで見上げてくるが、彼女の心配は杞憂だ。敏感な亀頭は呑み込まれ、唇がサオを擦るたびに頭へ快感が突き抜けていく。

「……………んむっ……………ん……………ぷあっ……………すまぬ、な……………かわりに……………こう、ひてやりゅ……………っ……………ちゅ……………れろっ……………えあ……………ぺろっ……………ちゅうっ……………ちゅ……………れろっ……………ん……………ん、ちゅ……………ぺろっ……………れろっ……………」

ちゅぽっ、と音を立てて肉棒から唇を離れた信長は、そのまま首を捻り、亀頭、サオ、裏スジといわず、敏感な箇所へ舌を這わせ、時おり強く吸い付いてきた。熱い舌は亀頭を舐め回し、カリへ隠れた恥垢を舐め取り、裏スジから根元まで丹念に舌を滑らせてくる。

ザラザラした舌腹で肉棒全体を擦り、舌先が敏感な部分を的確にほじり、最後は労るように舌裏で撫でていく。一つ一つの動作が、凄まじい快感を叩きつけてくる。無意識のまま肉棒を跳ねさせ、先端から先走りを滲ませてしまうほどに。

「……………れろっ……………ぺろっ……………あ、ん……………ちゅう……………っ……………ふふっ、もれできおるぞ……………かんろ、かんろ……………あむっ……………じゅるっ……………ちゅうっ……………っ……………はっ……………れろっ……………えっ……………あ……………ぺろっ……………ふ、う……………ん……………」

先端から漏れた先走りは肉棒へと垂れていく、だが垂れていくたび

に信長は舌腹で、舌先で、即座に舐め取っていく。時には喉を、こくつ、という音と共に揺らしながら。いつしか肉棒は先走りと、彼女の唾液で濡れに濡れている。舌が這うと、ぴちゃ、ぴちゃ、と水音が跳ねるほどに。

さらには、添えていたはずの信長の掌が肉棒のサオを優しく包むと、緩やかに上下運動を始める。痛いとは感じない、程よい強さで肉棒を包む彼女の指は、それぞれが意思を持っているかのように妖しく蠢く。

舌による愛撫に加えて、信長の指が肉棒を擦る。扱かれるたびに、くちゅ、くちゅ、という生々しい音と込み上げてくる快感は興奮を煽り、射精したいという欲求に火を着けた。

「……じゅる……ちゅっ……う、ん……はあ……れろっ……っ……びくびく、ひておる……あむっ……ひっ、でも……よひ、ぞ……おぬひ、の……こ、だねえ……はな、つぶ……ふあっ……よ、ひ……んっ……じゅっ……じゅるっ……ッ……じゅっ、んっ……じゅるるっ……っ……はあ……れろ、れろっ……っ……はて、へ……しま、へ……」

肉棒が大きく、びくんっ、びくんっ、と跳ね始めた。その反応が射精までの秒読みと察したのか、信長は亀頭の先端部を頬張ると頭を振り、長い黒髪を振り乱し、自身の口内へ亀頭を出し入れし始めた。

さらには肉棒を扱っていた指先にも少しだけ力が込められ、サオやカ리를擦っていた動きは徐々に速度を上げ、激しさを増していった。ぐちゅっ、ぐちゅっ、と今まで以上に大きな水音が響いてくる。

「……じゅるるるっ……んっ、んっ、んんっ……っはあ、ん……えあ……れろっ……ちゅうっ……ッ……ん、んんっ……んむっ……ぷ、あ……ら、へえ……こ、だね……んっ……れろっ……ひ、る……わ、ひ……の……く、ひ……にっ……ああ……あ……」

先の口淫よりも大量に漏れてくる先走りを信長は口内と舌で受け止め、亀頭が出入りする勢いは先走りや唾液を彼女の小さな口内から溢れ落ちベッドシートへシミを作っていく。

そして、トドメとばかりに彼女は体液の糸を引きながら唇を離し、ザラザラした舌腹を亀頭や裏スジへ押し付けてくる。同時に素早く

サオの部分を抱いていた彼女の小さな掌が、きゅっ、と握ってきた。

瞬間、ゾクツ、と背中が震える。凄まじい快感に登り詰めた体は、玉袋へ溜まりに溜まった白い欲望を押し流していく。射精したいという欲求のままに、玉袋から肉棒の中を駆け巡った欲望は龟头まで到達すると一気に解き放たれた。

びゅうーっ、と勢いよく噴き出した精液は押し付けていた信長の舌で爆発し、それだけでは飽き足らず彼女の口内へと勢いよく注がれていく。ドロドロとした精液は彼女の小さな舌を、唇を、口内を汚していった。

「……………ふあっ……………こ、だねえ……………あん……………れ、たあ……………う、あ……………んぶっ……………じゆるるっ……………ちゅううっ……………んっ……………えあ……………んっ……………んんっ、んっ、んっ……………っ……………けほっ……………あ……………ん……………れろっ……………ちゅっ……………じゆるっ……………」

飛び出していった精液は信長の口内を、あっという間に白く染めてしまう。それを彼女も何とかして受け止めようとするも、喉に絡みつく精液の全てを収めることは叶わない。最後には咳き込み、顔を離してしまった。

だが必死な信長など関係なしに、噴き出した精液は容赦なく彼女を襲う。口内だけではなく彼女の頬や髪までも、びちゃびちゃ、と生々しい音を立てて精液が降り注いでいった。

ドロドロと粘性を帯びた熱い精液が信長の口を、頬を、黒く長い髪を濁った白へ染め上げる、すると途端に充滿していく獣臭いニオイが鼻につく。だが、彼女は顔中を熱い精液へ犯され、鼻を獣臭いニオイに焼かれ、それでも表情に嫌悪感はない。むしろ恍惚とした表情で、降り注いでくる精液を愛しそうに眺めていた。

「……………ふ、あ……………ああ……………もったひ、なひ……………んっ……………じゆるる……………ちゅっ……………じゆるっ……………ん、んっ……………じゆるる……………じゆるっ……………ぷ、あ……………れろっ……………あ、む……………ちゅううっ……………んっ……………ん……………っ……………っは、あ……………ぺろっ……………れろっ……………れろっ……………」

いつしか射精は止まっており、肉棒は痙攣するだけ。しかし信長は、自身の口から溢れてしまった精液を、腰や下腹部へ溜まっていた

ソレを舌と唇で吸い取っていく。その光景を眺めていたが、射精直後の虚脱感が体を襲ってきた。

明滅する視界のなか、腰や下腹部へ感じる微弱な刺激を受けベッドへ背中から倒れ込んでしまう。どこか遠くで信長の声が聞こえたような気がするが、よく聞き取れなかった。

背中にベッドの柔らかさを感じると、いきなり強烈な眠気に誘われる。だめだ、と頭では理解しているし、寝るわけにはいかないと眠気に抗おうとするが――

――その強烈な眠気は容赦なく脱力した体を包み込み

――緩やかに、まるで沈むような感覚と共に

――意識を、刈り取っていった

小さな魔王の二度目の恋（2）

誰かに呼ばれたような気がして、目を覚ました。体は倦怠感で鉛のように重く、寝起きの締まらない思考と相成って、どこか夢心地だ。霞がかった記憶を引き出してみると、信長に口淫されて彼女へ精液を浴びせてしまったところまでは覚えてる。

「おお、気が付いたか。しかし口淫程度で気をやっておるようでは、この先が心配じゃのう……」

ふと、艶やかな声が聞こえたほうへ視線を向ける。足元のほう、ちようど股間の辺り。そこには、見覚えのない女性の顔があった。いや、見覚えがないというのは語弊があるな、彼女の存在は記憶にないが、彼女を構成するパーツ、纏った雰囲気、面影には覚えがある。

——立っていれば腰まで届くであろう長い黒髪

——禍々しい覇気に満ちた紅の瞳

——年長者を思わせる尊大な口調

——特徴だけならば、先ほどまでは“少女”であったはずの

——織田信長アーチャイに酷似していた

「……………えっと、もしかして……………」

「……………そ、その姿は……………？」

「おお、気付いたか、愛の力じゃな……………そう、織田信長 わしじゃ」

クスツ、と含み笑いした自らを織田信長と名乗る美女は、形の整った唇から舌を覗かせ、目の前で力なく垂れていた肉棒を舐め始める。ザラザラとした長い舌は力なく垂れた肉棒を舌で絡め、先端部を舌裏で擦った。

長くザラザラとした舌が肉棒を這い、巻き付き、滑るたびに快感が込み上げてきて腰を浮かせてしまう。その情け容赦のない卓越した

口淫は、記憶の中にある彼女と同じ——いや、さらに洗練されていたように思う。

「……んあ……れろっ……ふふっ、やはり”こっち”の姿の方が動きやすいのう……ほれほれ、油断しておると、また気をやっってしまうぞ、主よ……あ、んっ……じゆる……ちゅっ……えあ……れろっ……あ、ん……ぺろっ……れろ……れろっ……」

仰向けになっていた上半身を起こそうとするが、肉棒を通じて叩きつけられる快感で力が入らない。せいぜい腰を浮かせるのが精一杯、体どころか手足さえ満足に動いてくれない。なのに、信長の舌は容赦なく舌で肉棒を刺激し続けてきた。

再び血が肉棒へ集束していく感覚は、固さを取り戻していく証。さして時間を掛けることもなく、力なく垂れていた肉棒は、あつという間に戦闘態勢へと導かれてしまう。快感を得ようと、貪ろうと、意思とは無関係に、びくんっ、びくんっ、と痙攣する肉棒は、おぞましい形へと変貌を遂げた。

「……んんん、ぷあっ……ちゆるっ、ん……まあ種明かしすれば、”この姿”はわしのスキルによるものじゃ……あの幼子の容姿も気に入っておったが、お主も”この姿”、嫌いではなからう？」

そう、いま目の前にいる彼女は、間違いなく織田ア、チャ信長なのだ。蛇を思わせる細く長い腕、自信と威厳に満ち爛々と輝く真紅の瞳、はち切れんばかりに実った豊満な乳房、しなやかなで肉付きの良い脚が否定していても。

だが、こちらの心境など意に介さず、信長は微笑を浮かべ、のしかかってきた。少女の姿では感じれなかった豊満な乳房が、胸板で潰されて卑猥に歪んでいるのが肌越しに感じられる。柔らかい乳房が形を歪ませてしまうほどの圧迫は昂りを呼び覚まし、反応した心臓は早鐘を打ってしまう。

「……ん、う……ふふっ、お主も”その”気になってきたようじゃな……よい、わしに任せよ……”この姿”になったのも、すべてはお主に満足してもらいたい故……っ……あ、いや……違っ……ッ……言わせるでないわ、恥ずかしい……」

いや、最後の発言は自爆だろう。
でも、どこか納得した。

はち切れんばかりに実った豊満な乳房が胸板へ押し付けられても、細く長い腕が背中へ回ってきても、しなやかな脚が下半身へ絡まってきても——自爆発言によって真っ赤になった顔を首筋へと押し付け、見られないように隠そうとする可愛らしい反応を見てしまつては嫌でも納得してしまう。

——たとえ姿が違つていても

——この美女は、織田信長だ。

首筋へ頬擦りされると、甘い匂いを漂わせる長く艶やかな黒髪が頬を撫でていく。くすぐったさと込み上げてくる愛しさを堪えながら、彼女の背中へと腕を回して抱き締めてやる。途中、羞恥によるものか「うう」と唸り声が聞こえたような気がしたが、聞こえなかったフリ。

「……ええい、笑うな……ツ……も、もうよい……こうなつたら”この姿”で、お主を骨抜きにしてくれる……今に見ておれ……」

と、羞恥に耐えられなくなつたのか信長が拘束から逃れると、上半身を持ち上げ跨がるような態勢となつた。下腹部へ当たる彼女の股間は熱く、水気も感じられた。視線を向けてみると、そこには小さな水溜まりが見て取れた。どうやら、信長も準備は整つていたらしい。絶え間なく股間から垂れてきた愛液で、下腹部へ小さな水溜まりを作るほどに。

視線に気付いた信長だったが、隠すようなことはしない。むしろ頬を朱に染めながらも彼女は腰を浮かせ、股間と下腹部を繋ぐ愛液によつて出来た透明な糸が引く卑猥な光景を見せ付け、にちやつ、という生々しい音を響かせてきた。

「……ん、つ……も、がまん……なら、ん……ふ、あ……」

そして信長は浮かした腰を下ろしながら、捻り始める。おそらくは、肉棒の先端を探しているのだろう。だが上手く見付けることができないのか、何度も何度も下腹部や腰を掠めていく秘部は、くちゅつ、くちゅつ、と卑猥な音を響かせるだけ。

焦らされるような感覚のせい、次第に信長の表情が切なそうに歪んでいく。昂った体は快感を求め、そこへ辿り着けない。快感を貪りたい、求めれば求めるほどに強くなっていく性欲は——彼女から余裕、羞恥、理性を削っていく。

「……………んんっ……………やああ……………はや、く……………っ……………あ……………な、ぜ……………みつか、らん……………の、じゃああ……………やあ、はよお……………ほ、しっ……………んう……………ど、こお……………ッ……………どこじゃああ……………」

このまま放っておいても、と思ったが、少し可哀想になってきたので助け船を出してやることにした。仰向けのまま身動きし、腰を沈めたり、浮かせたり、捻ってやる。すると、ついに信長の雌穴が、肉棒の先端を捉えた。

ぐちゅっ、という音と共に、ほんの少しだけ亀頭が雌穴へと呑み込まれる。すると頭上にあつた信長の表情が、一気に変わった。つい先ほどまでは泣きそうな表情だったくせに、今の顔はといえば——だらしなく舌を出し、口端から唾液を垂らし、快感に期待する瞳は揺れている、完全に蕩けきった雌の顔。

「……………っ……………あ……………ッ!!」

そして、ついに——

雌穴と照準が合った肉棒を支点として、信長が腰を下ろしていく。ずぶっ、と瞬時に呑み込まれていく肉棒を視界へ収めつつ、彼女の膣内の熱さと、締め付けてくる膣壁の凄まじい圧迫に背中が震えた。

あまりの快感にそのまま欲望を吐き出しそうだったが、なんとか堪えることができた。あまりにも強烈な快感に明滅してしまつた視界が、根元まで深々と肉棒を呑み込んだ彼女の秘部と、結合部からダラダラと愛液が漏れる卑猥な光景を捉えてしまう。

「……………あつ、ひい……………んんっ……………は、いつ……………てえ……………あ、ん……………よ、ひ……………う、ああ……………きもち、い……………も、つとお……………ッ……………あんッ……………ああ……………もつとお……………ッ!!」

下半身に繋がつたまま信長は大きく背中を反らすと、後ろ手にベツドへと手を付いた。それと同時に、彼女は勢いよく腰を前後へと振り始める。伸縮を繰り返す膣内へ呑み込んだ肉棒を膣壁へと押し付け

るように、擦り付けるように。

「ごりっ、ごりっ、と亀頭が膣壁を擦るたびに、ゾクゾクと沸き上がってくる快感に震える信長。もう彼女は自分の意思で腰を揺らしていない、本能の赴くまま、快楽を貪りたいという性欲に従うまま。ひたすらに腰を振り回し、時に捻り、結合部から全身を駆け巡る快感に酔いしれる。

「……ああ、んっ……これ、しゅきい……わ、ひの……なかあ……ますたあの、っが……ごりごり、りい……ひいう、ん……こしゅ、れっ……あんっ……あ、ひっ……うああ……た、たくましいのがあ……っ……びくん、っ……れえ……はね、とる……っ……うううんっ……っ!!」

ぐぢゅっ、ぐぢゅっ、と結合部から水音が鳴る。まったく遠慮のない、気遣いのない、ただ貪るだけでしかない信長の腰遣い。だが肉棒越しに感じる膣内の熱と圧迫、裏スジを擦ってくる膣壁、時おり子宮口に引っ掛かれる先端、そのどれもが強烈な快感を与えてくる。

射精したいという欲求を押さえ込み、快感を得たいという欲求を満たそうと、こちら腰を跳ねさせる。信長の腰遣いに応えるように下半身を跳ねさせ、時には逆らって無理やり肉棒を膣内で暴れさせ——彼女と同じように、ただただ快感を貪った。

だが、その途中、ふと視界へ信長の顔が映る。

「……あああ……いい、いい……きもち、いいっ……ごりごりっ、きもちいい……ふ、あ……とまら、ぬ……らめ、なの、にい……んあ……わひ、がっ……ますた、あ……お、お……きもち、よく……せね、ばっ……あ、ひいんツ……なら、んの……にいい……す、まぬ……ます、たあ……すま、ぬう……あ、んっ……ツ……ゆる、ひ……てえ……っ!!」

長く艶やかな黒髪を乱舞させ、豊満な乳房を揺らし、快感に翻弄されるまま紅の瞳からは涙を溢し、だらしなく開いた口元から舌を覗かせ、無様に唾液を飛び散らし、本能のまま快楽を貪ってしまうことを、うわ言のように詫び続ける雌。

その姿は扇情的で、淫靡で、吸い込まれそうだった。

無意識のまま、揺れていた信長の豊満な乳房へ手を伸ばす。下方から掌を押し当て、弾力ある乳房へ指を埋めた。むにゅつ、むにゅつ、と指腹へ力を込めていくと卑猥に歪む乳房を堪能しながら、指先を頂点へとズラしていく——向かうは、乳房の頂点で自己主張する赤い蕾。「……………ひびぎつ……………あつ……………ら、め……………あんつ……………そこお……………らめ、じゃ……………うう、んつ……………も、あたま……………まつ、ひろ……………でええ……………なに、も……………かんがえ、れぬ……………あ、あああつ……………きもちいい……………きもち、い……………ます、たつ……………ますたあ……………ツ!!」

乳房の頂点で自己主張する蕾、乳首を指先で転がすと信長は、さらに背中を大きく反らした。下半身と乳首から与えられる快感は彼女の理性を焼き付くし、羞恥と思考を破壊していく。

そして、ついに信長の昂りは頂点へ差し掛かる。肉棒を呑み込む膣内^{なか}が、わずかに痙攣し始めた彼女の体と連動して激しく伸縮した。激しくなっていく彼女の腰遣いは、絶頂への秒読みとばかりに荒々しくなっていく結合部から、ぐぢゅつ、ぐぢゅつ、と体液を混ぜる音を響かせる。

その動きに、音に、熱に、肉棒は耐え切れなかった。彼女ごと持ち上げてしまうほど腰を跳ねさせた瞬間、最奥の子宮口へと亀頭を押し付けたと同時に——全身を震わせるほどの射精感が、玉袋から欲望を押し流していく。

「……………んいつ……………あんつ……………ひつ……………う、んつ……………あああ……………ツ……………あ……………く、りゅ……………しゅぐ、ひの……………がああ……………やつ……………んつ……………な、か……………でつ……………ふくらん、でつ……………ああつ……………くる、くるうう……………ますたあ、のお……………こ、だね……………くるううう……………ツ!!」

腰だけで持ち上げられ、子宮口へ亀頭を押し付けられた瞬間、信長は、ぞぞつ、と身の毛がよだつ程の快感に全身を震わせ絶頂へと登り詰める。それと同時に肉棒を駆け巡ってきた欲望、精液が勢いよく亀頭から解き放たれた。

子宮口を抉じ開けた亀頭から、びゅうーつ、と勢いよく解き放たれた精液が注がれる。痙攣に合わせて断続的に、どくんつ、どくんつ、と飛び出していく精液が信長の子宮を満たしていく。

煮えた鉄のような熱さの精液が子宮内を叩き、満たしていく感覚。その圧倒的な快感と幸福感を、絶頂を迎えた直後の信長は、びくんつ、びくんつ、と全身を激しく痙攣させながら受け入れていた。

「……………う、あ……………どくん、どくんつ、へ……………ましゅ、たあ……………の……………こだねえ……………そそがれ、てえ……………あ、ひつ……………ひう……………つ……………んんつ……………ああ……………つ……………ひ、あわせ……………じゃああ……………」

どくんつ、どくんつ、と信長の腔内^{なか}へ精液を注ぎながらも上半身を起こす。本当は指一本でさえ動かしたくなかったが、恍惚とした表情の彼女は今にも背中から倒れてしまいそうだったから。

信長を性器同士が繋がった下半身へ乗せたまま、彼女の腔内^{なか}へ精液を注ぎ続けること数秒、ようやく射精感が終わりを告げようとした頃——突如として、肉棒が違和感を訴えてきた。

「……………ツ……………しまつ……………つ……………だめじゃ、いまは……………ツ!!」

見れば信長は先ほどまで恍惚の表情を、驚愕と困惑に歪めている。何事かと思いい掛けようと口を開くが、言葉を吐くことはできなかった。その理由は下半身、いまだ彼女の腔内^{なか}へ呑み込まれたままの肉棒を襲った異常。

行為の最中とは比べ物にならない、千切られそうなほどの締め付けが肉棒を襲う。放ち損ねたはずの、肉棒内へ残っている精液すべてを搾り尽くされそうなほどの強烈な締め付け。

さらに、異常はそれだけではない。

下半身へ乗る信長の体が、小さくなっている。

——しなやかで、細く長かった手脚は縮んでいき

——はち切れそうだった丰满な乳房は徐々に萎んでいき

——妖艶な雰囲気も携えていた顔は、どんどん幼くなっていく

そして、数秒もしないうちに——

先ほどまで性器同士が繋がったまま下半身へ乗っていたはずの信長の姿が、いつもと変わらない見慣れた姿、見慣れた顔付きへと変わってしまった——いや、戻ってしまったというべきか。

「……………つ……………ぐ、うつ……………んんつ……………つはあ……………は、んんつ……………ツ!!」

そこで、すべてを理解した。おそらく行為が終わったことで、信長

は気を抜いてしまったのだ。だから彼女は姿を保っていられなくなり、意図しないまま元の姿へと戻ってしまったのだろう。

さつきから肉棒を千切らんと膣壁が締め付けてくる理由は、彼女がやっていることではなく、不可抗力に過ぎない。締め付けが強くなったのではなく、単純に信長の膣内なが狭くなっただけなのだから。

「……………んうう……………つ……………くる、ひ……………ま、すたあ……………ぬい、へえ……………」

元の姿へ戻ったことで信長の顔が近くなった、だから彼女の表情が明滅する視界でも充分に見える。膣内なを肉棒が圧迫してしまい苦しいのだろう、ぼろぼろと涙を流し、だらしなく隙間の開いた口の端から唾液を垂らし、すぎるような瞳で彼女が見上げてくる。

——その表情に、ゾクツと背中が震えた

——駄目だと理解しているのに、嗜虐心が鎌首を上げる

救いを求めてくる彼女を、もつと犯したい、もつと汚したい、もつと欲しいと思ってしまった。加えて肉棒を痛いほどに締め上げてくる彼女の膣内なが、意識を失いそうなほどに気持ちいい。

下半身から伝わってくる快感と、幼い姿の少女織田信長と性交しているという背徳心が興奮を煽ってきた。もはや理性というブレーキは焼き切れている、止めようにも止まらない、むしろ止める気にならない。

「……………んんっ……………く、う……………ます、た……………つ……………ん、むっ……………」

本能に突き動かされるまま、強引に唇を奪う。すると勢いが良すぎたのか、信長を背中からベッドへ押し倒してしまい、その反動で彼女の雌孔から肉棒が抜けてしまった。どろおっ、と彼女の雌孔から白く濁った体液が溢れ、獣のニオイが漂ってくる。

——強引に舌を振り込み、信長の口内を蹂躪した

——ただただ彼女を、信長を求めた

——その時、ふと見た彼女は、微笑んでいたように思う

——そして、キスの合間を縫って

——信長は小さく、涙を混じらせた声で囁いてきた

「……………つ……………あ、愛しておる、ぞ……………マスター」

—
2

小さな魔王の二度目の恋（3）

どこか遠くで信長の声を聞きながら、ベッドへ組み伏し、覆い被さる彼女の小さく細い腰へと手を添え固定する。途中わずかに視線を落とし、つい先ほどまで肉棒を呑み込んでいたはずの雌孔、彼女の股間部を確認した。

吐き出したはずの精液が垂れてくる信長の割れ目の位置を確かめ、腰を揺らし肉棒の先端で雌孔を探す。と、難なく見付けることができた。愛液と精液が十分な潤滑油となっているおかげで、あとは腰を出すだけで肉棒で彼女を挿し貫けるだろう。

だが、違和感がある。

それも当たり前前だ、先ほどまで馬乗りになり腰を振っていた信長と、いま組み伏せている信長は、あまりにもサイズが違いすぎるのだから——比べ物にならないほど小さくなってしまった彼女の雌孔は、肉棒を受け入れることができるのか、という不安が過る。

「……ん、う……………」

そんな不安をよそに、組み伏せていた信長が身動きする。腰を浮かせてみたり、捻ってみたり。ごそごそつ、と動いているが、何をやるのだろうか——と考えていた次の瞬間、彼女は大きく股間を腰へと押し付けてきた。

すると雌孔へと照準を合わせたままだった肉棒が、ずぶつ、と呑み込まれてしまう。凶らずも雌孔へと侵入を果たした龟头は、凄まじい圧力で締め上げてくる膣壁をモノともせず愛液と精液を潤滑油として、奥へ奥へと進んでいった。

「……………ひっ、ぐうっ……………お、ぬし……………つが……………は、よお……………あ、くつ……………せん、か……………ら、っ……………じゃああ……………ッ……………わ、ひに……………かまう、なっ……………ん、ぐうう……………っ……………はあ、はあ……………うご、けえ……………わひ、おお……………おぬし、のっ……………ものっ……………にいい……………ッ!!」

下腹部から感じる異物感に、信長は顔を歪める。わずかな痛みと異物感、そして再び訪れようとしている快感を、彼女はシーツを握るこ

とで必死に耐えているようだ。力いっぱい目を閉じ、ぼろぼろと涙を流し、歯を食い縛り、荒く呼吸する彼女を見て――

小さく狭い雌孔へと潜り込ませた肉棒、亀頭を通じて込み上げてくる快感。そして幼い見た目の信長を犯そうとしている背徳感と、今すぐにも果てたいという性欲に促されて――

――もう、歯止めが効かない

信長の腰を掴む手に少しだけ力を入れ固定するとベッドへ膝立ちになり、腰を前へ前へ、ゆっくりと打ち出していく。ぎちつ、ぎちつ、と異物を排斥しようとする蠢く彼女の膣壁を亀頭で強引に掻き分け、ゾクゾクと這い上がってくる快感に耐えながら肉棒を膣内へと埋めていく。

「……………ん、ぐうううつ……………き、とるう……………おぬし、の……………がああ……………つくあ……………はあ、つ……………は、はいつ……………てつ……………きとるう……………ぶつ、といの……………がああ……………ひい、れつ……………き……………ツ……………ああ、ぐ……………ううう……………が、あつ……………ひ、ぎいつ……………ツ!!」

ゆっくり、少しずつ、ずぶずぶと埋まっていた肉棒が最奥の子宮口へ到達したところで、慌てて突き出していた腰を止める。半ばまでしか入っていない肉棒が、膣壁の圧力で千切られてしまいそうだ。その代償に、身動き一つできない程の快感が全身を叩いてきた。

だが、止めることはできない、止められない。

素早く腰を引き彼女の膣内から肉棒を引き抜く、強烈に締め付けてくる膣壁へカリが引っ掛かり背中がゾクツと震えるが構わない。そして亀頭が少し覗いたところで、再び腰を落とし肉棒を雌孔へ埋めていく。

「……………ふう、んつ……………あ……………な、かあ……………かき、だつ……………され……………んひい……………あ……………ぞくぞく……………すりゆうう……………ひ、あ……………んんつ……………よ、よい……………わひ、に……………かまう、つな……………つい、てえ……………こしゆ、れえ……………ずぼずぼ、つ……………ひてえええ……………ツ!!」

信長がシートを掴み手をバタつかせると、ベッドが乱れていく。何度も何度も、先ほど彼女の膣内へ放った精液を掻き出すように、ひたすら肉棒を出し入れする。ぐちゅつ、ぐちゅつ、と音を立て始めた結

合部から体液が溢れていくのを見下ろしながら。

すると、徐々に信長の膣内^{なか}を行き来する肉棒が、スムーズに滑り始めた。ようやく、彼女も慣れ始めたのだろう。それを確認できると、沸き上がってくる性欲のままに腰を振った。

「……………あ、っ……………ああああっ……………い、い……………きもち、いい……………も、つとお……………もつと、じゃああ……………あんっ……………はあ、っ……………ッ……………ましゅ、たっ……………んううっ……………う、んっ……………ましゅたああ……………ぎゅ、って……………ひ、てえ……………あひっ……………んっ……………ましゅたああ……………ッ!!」

涙を流し、瞳を性欲に揺らし、だらしなく口を開き、シートから手を離し首へ手を回して懇願してくる信長。それに応えようと首へ回された腕に導かれるまま上半身を折り、彼女の腰から手を離して背中へ回す。

だが、足りない。

もつと彼女を感じたい、深く繋がりたいという欲求に抗えない。欲望へ突き動かされるまま、彼女の背中へ腕を回した状態で、一気に背中を反らす。ベッドへ膝立ちになり、上半身を密着させ、下半身で繋がったまま、小柄な彼女を持ち上げた。

「……………っ……………あ……………ッ!!」

瞬間、信長の体重が一点へ集中した。

深々と膣内^{なか}へと侵入していた肉棒、その先端へ。

支えは彼女の小さな子宮口、度重なる亀頭のノックによって緩んだ子宮口。下から突き上げられる肉棒の衝撃と、上方から降りてくる体重による圧迫、それは半壊していた子宮口を強引に抉じ開けてしまう。その結果、亀頭は——ついに彼女の最奥、子宮まで到達する。

「……………う、あ……………が、っ……………わひ、の……………こぶく、ろお……………あ、へえっ……………かんら、く……………ひたああ……………ッ……………わ、ひい……………ましゅ、た……………にい……………かんじえ、ん……………こうりや、く……………され、へ……………もう、たあ……………」

本来ならば不可侵である子宮まで犯されたというのに、信長の顔に嫌悪感はない。むしろ、だらしなく隙間を開けた口端から唾液を垂らし、焦点の定まらない瞳を揺らし、歪んだ笑みを浮かべている。その

蕩けきつた顔は、さらに嗜虐心を刺激してきた。

膝立ちのまま下半身を密着させ、信長の小さくハリのある臀部へ手を回す。そのまま腰を揺らし膣壁へ肉棒を擦り付け、子宮をえぐる。ごりつ、ごりつ、と固い子宮内の感触が龟头からダイレクトに伝わってきた。

「……………あ、ひい……………ごりごりい……………しゅご、ひい……………もお……………ひ、ぬう……………あ、ん……………ましゆた、あ……………の、れ……………ひん、で……………ひま、うう……………んおお……………ツ……………しようて、ん……………しゆりゆうう……………ツ!!」

ゾクゾクと這い上がってくる凄まじい快感に体を震わせ、全身を痙攣させる彼女の腰を捻り、揺らす。彼女が上げる獣のような狂おしい喘声と、ギシツ、ギシツ、とベッドの軋む音を部屋へ響かせながら。もつと、もつと、と昂りのまま腰を押し当てる。

気付けば結合部からは愛液でも精液でもない、サラツとした体液が溢れてきていた。太股を伝っていく体液がベッドシートを汚していくが構ってなどいられない、今にも爆発しそうな肉棒へ待ったを掛けるのも限界間近。信長の膣内^{なか}で暴れる肉棒が膨れ、びくんつ、びくんつ、と大きく何度も跳ね始めた。

「……………あああああつ……………びく、びくつ……………し、とるう……………ま、ら……………い、ぐう……………わひ、のお……………こぶ、くろお……………おぬ、ひ、の……………れえ……………いっば、ひ……………にいい……………まつ、ひろ……………ツ……………につ……………してえええ……………ツ!!」

びくんつ、と体を痙攣させた信長が背中を大きく反らし絶叫と共に達した。それと同時に、肉棒も我慢の限界を振り切ってしまう。玉袋から一気に迸った欲望が、あつという間に肉棒を駆け巡り——彼女の子宮を犯していた龟头の先端で、爆発した。

勢いよく噴き出していく精液が子宮を叩くたびに、彼女は体を跳ねさせた。それと同時に体内で、どくんつ、どくんつ、と脈打つ肉棒を、彼女は無意識のまま膣壁を伸縮させ精液を搾り取ってくる。その動き、肉棒に走る快感は魂ごと持っていかれそう。

「……………あ、へえ……………わ、ひ……………の……………こぶくろお……………につ……………ちよく

せ、っ……そそがれ、へ……るうう……ふ、ああ……ましゆたあ……
のお……あちゆ、くてえ……はね、て……りゆ……んっ……あ……ッ
……ふあ……あああ……」

どろおつ、と結合部から、ドロドロに濁った精液が溢れてきた。お
そらく信長の小さな子宮、膣で全てを受け入れることができなかつた
のだろう。粘性を帯びた体液がベッドへ墜ちていくなか、いきなり彼
女の体が脱力した。

腕に回されていた腕が解かれ、くたあ、と力なく寄りかかってくる
信長。そんな彼女を負擔が掛からぬよう臀部を支点に支えながら、
ゆっくりと寝かせてやる。そして、ゆっくりと腰を引き肉棒を彼女の
膣なか内から引き抜いた。

どろおつ、と糸を引きながらベッドへ垂れていきシミを作る体液に
構わず、全身を痙攣させる彼女の頬へと口付けた。いまだ絶頂の余韻
に浸っているのか反応はないが、心なしか嬉しそうに見える——の
は、気のせいだろうか？

——そこで緊張の糸が切れてしまい、信長の隣へと寝転がった

——ベッドシートを変えなければいけない

——シャワーも浴びたい

——だが、体が動かない

——もう後でいいか、と全てを諦め

——寝転がり行為の後の倦怠感に、身を任せることにした



ベッドへ腰掛けて、正面から胸板へ顔を擦り付けてくる信長の頭を
撫でてやる。彼女の髪、額、頬、鼻先が胸板や肩口を掠めていく感触
は心地よいし、漂ってくる甘い匂いはいつまでも嗅いでいたいと思
う——だが、かれこれ数十分は続けている今、早く満足してくれない
かな、と思わなくもない。

むしろ、いい加減にしてくれ。そんな内心を察知したのか、信長が不意に顔を離し見上げてくる。どこか不満そうに頬を膨らませ「むう」と唸る姿は、小柄な彼女の見た目と相成つて凄まじい破壊力だ。

「先に沖田へ手を出した上、わしが此奴に煽られたまま話を区切ったじやろ。さらには話をアゲる順番を入れ替えられてオレっ娘に先を越された挙げ句、丸々一ヶ月くらい焦らされたのじや、コレくらいでは満足できるはずもなからう。それにい、わしの登場を今か今かと股間へテント張つて待ち望んでおつた者達も居るはずじや——分かつておるのか、ん？」

ナニイツテルノカワカンナイナー。

流し目はやめなさい、どこ向いてるの？

というか、唐突なメタ発言はやめろください。

「ま、冗談はさておき……んふふっ、まだ夜は長いぞマスター、今夜は寝かせんから、そのつもりでおれよ——ん、むうううツ!!」

抱きついてきたまま顔を上げた信長が、悪戯っぽく笑う。色々と言いたいこともあつたが、まずは生意気な口を叩く唇を奪い強引に閉じさせる。手足をバタつかせ逃げようとするが、背中へ手を回し拘束してやった。

——この口の悪い猫には、まだまだ躰が足りないらしい

——唇を重ね、そのままベッドへ信長を押し倒した

——じっくり、たっぷり、主従関係を教えてやるとしよう

〈後日談〉

「何が正妻じゃ、たかだか一度だけ愛してもらったくらいで正妻気取りとは片腹痛いわっ……マスターに幾度となく愛してもらったのはわし、つまり正妻はわしじゃ。貴様には、”妾”くらいがお似合いというワケじゃ——ふぁーっはっはっはッ!!」

右腕へと抱き付いてくる信長は高笑い。

「……………ッ……………」

左腕へと抱き付いてくる沖田は仏頂面。

またか、またこのパターンなのか。

いつか見たことのある光景を再び目の当たりにしてしまつた虚脱感と絶望に、ついつい天井を仰ぎ見てしまう。信長と肉体関係を持つた時に”こうなること”は予想はしていた。ただ予想してはいたが、ここまで颯爽と、華麗に、素早くフラグを回収しなくてもいいと思うんだ。

エントランスへ来るや否や、信長と沖田に両腕を極められた。逃げることもできず、振り払うこともできず、立ちぼうけのまま口論する二人の間へ挟まれること数分——そろそろ泣きそうだ。

「のう、マスター、負け犬のことなど放っておいて、部屋に行かぬか？」

「なああッ、だだだ、誰が負け犬ですってえ——ッ!!」

——とてもつらい

もうコイツ等に仲良くしろと言うのは止めよう。いや、言いません。だから、せめて、善良で健全な男の子を巻き込んだり、天下の往來エントランスで生々しい会話を大声で交わすのは止めて下さい、(社会的に)しんでしまいます。

——そんな願いも虚しく、二人は一向に喧嘩を止めない

——なにやらフラグが立った気がするが全力でヘシ折ってやる

——そう心に誓った、とある日の一時

ジャンヌ・オルタ編 第二章（仮名）

吼え立てよ我が劣情（1）

「——ねえ、ちよつといいかしら？」

夕方、特に目的もなく自室へと向かっている途中、誰かの声に呼び止められる。振り返ってみると、そこには黒い衣装を纏った女性、ジャンヌ・オルタが立っていた。にっこり、と、見たことのない満面の笑みを浮かべて——そんな彼女はドス黒い煉獄の炎を、背中から立ち登らせつつ近付いてくる。

——殺られる

本能が、全身で警笛を鳴らす。頭の中で「逃げろ」という言葉が何度も反芻する。だが、もう遅い、声を掛けられたことで、彼女のほうへ振り返ってしまったている——すでにこちらを捕捉し、一步、また一步と近付いてくるオルタからは、逃げられない。

「最近、沢山の仲間達と楽しそうに羨ましいわあ——
少し調子に乗りすぎじゃない私の相手もして下さらないかしら？」

——いや、むしろ死刑宣告だコレ

にっこり、と満面の笑みを浮かべ、靴音を高く響かせながらオルタが近付いてくる。その時、ふと背中に何か硬いモノが当たった、それは廊下の壁。おそらく、彼女が発するプレッシャーのせいで、無意識のまま壁まで後ずさってしまったのだろう

もはや四面楚歌、逃げ場などない。そもそも前方から近付いてくる喜色満面のオルタが逃がしてくれそうにない、逃がしてくれるはずがない。持ち上げられてく彼女の右腕、こちらを向く掌。

終わった、そう思った瞬間——

バアンツ、と指先が耳を掠めて、オルタの掌が壁へ叩きつけられた。寄りかかっている壁が彼女の掌底撃によって震えているのを背中越しに感じながら、いつしか至近距離まで寄ってきていた彼女の顔が、視界いっぱいに入り込んでくる。

——あれ、これ俗に言う壁ドンってやつか？

——でも普通は逆じゃない？

——普通は男が女の子にやるものじゃないの？

とは、思ったが、口に出すことはできなかった。

「どうせなら私も騒いでやろうかしら、マスターに押し倒されて無理やり膣内射精なかしされましたあ、って——いい子ちゃんだで善人な優しいマスターちゃんにとっては、それってとても困るわよねえ？」

つい先ほどまでの喜色満面な笑顔をニタアと邪悪に歪め、キスができる程の距離でオルタが囁いてくる。その内容こそとんでもないが、彼女が言うことは事実だから弁明しようがない。加えて、先日の信長の一件もある、もうどうにでもな—れ、と投げやりになってしまいうのも仕方ない。

だが、そこまで考えて、違和感を感じた。

何故いきなり、オルタが”こんなこと”を？

「ちよ、ちよつと、冗談よ。自分の恥を言つて回ることになるじゃない、しないわよそんなこと。だからそんな顔するんじゃないわよ、アంతラあらしくな、い……っ……あ……もお、調子狂うわねホント」

なんて考えていると、いきなり間近にあつたオルタの顔が困惑と焦燥に歪み、さらに彼女は自分の失言に気付くと頬を染め顔を背けてしまった。目の前で表情をコロコロと変える彼女の言動には、まったく一貫性がない。

最初は怒っている様子で脅してきたくせに、いきなり心配してみたり、恥ずかしがってみたり、と忙しそう。そして今、至近距離にあるオルタは赤面し、わずかに視線を逸らしながら「う”う”」と悔しげに唸るだけ。そんな彼女を尻目に、この奇行の理由を考えてみた。

——他の女性と仲良くしてる、という行くだりに始まり

——言い振れて回るぞ、という脅しにも思える言葉

——そのくせ、何故か途中で掌を返して心配してみたり

——赤面して、何やら言い淀んでいる様子

まさか、とは思ったが——

「……………もしかして、妬いてる？」

「ああ、なるほど、嫉妬してるんだ」

「——っ——ッ!!」

眩いた瞬間、オルタは顔どころか耳まで真っ赤にして絶句、なんとも分かりやすい反応だ。反論しようと口を開くが、言葉が出てくることはなかった。「あ」とか「う」と蚊の鳴くような声は漏れてきたが――

と、その時、壁へ手を突いたままのオルタは空いた方の腕で手首を掴んできた。ぐいっ、ぐいっ、と引っ張ってくるので力を抜いてやると、導かれた腕は彼女の衣服の隙間――布が擦れる感触を感じた、次の瞬間、指先に何やら湿り気を感じる。

「……………っ……………んっ……………」

腕を導かれた先は彼女の衣服の、さらに奥。しなやかな彼女の体で最も敏感な部分、下半身の中心、肉厚な脚の根元、股間部だった。ということ、いま指先が感じている湿り気、ヌルヌルと指先へ纏わりついてくるのは彼女の愛液か。

指を曲げると、指先には愛液以上に熱く、それでいて柔らかい肉、ヒダの感触。弾力のあるヒダを何度か指腹で擦ってやると、オルタが肩を震わせる。口元を引き結び、力いっぱい目を閉じ、何かに耐えるような表情は――嗜虐心を刺激してくる。

「……………あ……………んう……………っ……………あ、ひっ……………んん……………」

だが、愛撫の最中、掴まれていた腕を引かれる。おそらくは羞恥による無意識の行動なのだろうが、ここは大人しく腕を引く。なにせ時間は夕方、おまけに場所はエントランスへ程近い廊下だ――これ以上の行為は、誰かに見られるかもしれない。

「……………っ……………はあ、っ……………はあ……………分かった、でしょ……………？」

ああ、なるほど。

ようやくオルタが言いたいことが分かった。

なかなか自分を見てもらえない、だから嫉妬している、それだけだと思っていた。だが彼女が抱いていたのは、嫉妬だけではなかったの

だ。体を火照らせ、股間を濡らし、体を疼かせる。

——つまりは嫉妬すると同時に、欲情していた、と

それを指摘してやると、オルタは顔を俯かせた。もしかしたら、頷いたのかもしれない。あまりにも可愛い反応に、顔を寄せて彼女の頬へと口付けてしまった。しっとりとしていて、滑らかな彼女の頬へ唇が触れる程度のキス。

——そして、囁いてやる

——求めてくるなら、拒みはしない、と

——だから今夜、部屋へおいで、と

「ッ——」

一度だけ、ビクツ、と大きく肩を跳ねさせ驚愕の表情を浮かべたオルタだったが、その言葉は毒となつて彼女の理性を溶かしていく。言葉の意味を理解すると背筋がゾクゾクと震える体を堪え、今度こそ彼女は——

ゆつくりと、でも確かに、頷いた——



深夜、照明が落ち暗闇に吞まれてしまったカルデアへ、異音が反響していた。ひたつ、ひたつ、と微かに聞こえる異音の正体は、廊下を歩く大きな人影。黒い外套で肩口から足元までを、すつぽりと多い尽くすジャンヌ・オルタだ。

なぜ彼女が、そんな異音を生んでいるのかというところ——今の彼女は、ブーツや靴どころかソックスやストッキングの類さえ履いてない、素足のまま。ひたつ、ひたつ、という音の本当の正体は、彼女の足音だったのだ。

——脚を守るモノを、身に付けていないだけに過ぎない

——だが、それは些末なコト

——なぜなら今のジャンヌ・オルタは

——生まれたままの姿を、していたのだから

(……何が”裸で部屋まで来てほしい”よ、あの変態……っ……っ……いつそのこと、出会い頭に殺してやろうかしら……)

全身を覆う黒の外套がズレぬよう握り締め、オルタは初体験の羞恥に赤面しながら歩を進める。普段は体を守ってくれる衣服も、下着も、着ていない。衝撃や第三者の視線から彼女を守ってくれているのは、薄く頼りない一枚の外套薄布のみ。

もし万が一でも、この頼りない外套が剥かれてしまった時のことを考えると、オルタは背筋を凍らせた。もし”そのような事態”に陥った場合、もはや生き恥を晒すどころの騒ぎではない。それは人としての尊厳の消失、社会的な死、つまりは破滅へ直結するのだから。

人ではない彼女だが、羞恥心はある。それに小規模ではあるが、カルデアとはコミュニケーションの一つ。その中で”倫理に反するコト”をしたのが明るみに出たとしたら——

(……っ……ほんと、最悪……)

今の姿を第三者に見られた時のこと、その後の破滅する時のことを考えてしまうと、オルタはゾクツ、と背中を震わせる。もはや四の五の考えていられる状況ではない、今は一刻も早く目的地、マスターの部屋へと向かわなければならぬ。

そんな思考を巡らせるオルタは、自覚していない。

自分の背中を震わせた悪寒は羞恥と破滅への恐怖だけではなく、”目的地へ辿り着いた時のこと”や”バレてしまった時のこと”。つまりはマスターに抱かれるという期待、第三者から向けられるであろう冷たい視線に——自分が、興奮し昂っているという事実を。

——早くマスターに抱かされた

——早くこんなこと終わらせたい

——バレた時のことを思うと恐ろしい

——こんなの変態じゃない?

理性と本能が、オルタの心中でせめぎあう。荒くなっていく呼吸、昂っていく体。ようやく自分の状態、欲情する体にオルタが自覚できたのは、自身の股間部と、肉付きの良い内股を垂れていく水気感覚に気付いた時だった。

(…………、そ……そんな、な…………っ…………わたし…………)

外套に包まれた自分の体感じた異変に、オルタは驚愕と同時に愕然とした。そう、”このようなこと”をしているにも関わらず、彼女の体は期待と性欲に飢え、雌穴から涎のように愛液を滴らせてしまっていたのだ。

つつつ、と、ゆっくりではあるが粘性を帯びた体液が伝っていくのを、オルタは自分の指先で確かめてみる。すると指先へ、にちゃつ、という明らかな水気の間。もはや疑うまでもない、自分が興奮し、昂り、欲情していると、彼女は自覚した。

「……………んっ……………」

だが、自覚してしまったのは彼女の失策だ。

一度でも意識してしまったのは、もう無視することなどできない。さらに雌穴から漏れてくる愛液の量は激しさを増してしまい、太股へと伝ってしまう。このままでは、自身の痴態の痕跡を残してしまうかもしれない。

焦燥感が、オルタを襲う。

だが、だからといって走ることはできない。気配遮断スキルを持たない彼女は、出来る限り音を立てず、気配を殺さなければならぬからだ。ゆっくり、焦らず、一歩ずつ、闇に溶け込みながら進むしかない。

(…………む、りっ……………こんな、の…………っ……………こんなのお…………ツ!!)

意思とは無関係に、オルタの太股がガクガクと震え始めた。先を急がねばならないという焦燥感が歩みを止めることを躊躇わすが、垂れてくる愛液が彼女の足を鈍らせる。敏感になっていく彼女の体、それは豊富な乳房の頂点で自己主張を始めた真っ赤な蕾へと血を巡らせていった。

欲情の熱が体を火照らせ、理性を溶かし、オルタから判断能力を奪っていく。徐々に歩く速度を上げてしまうのを止めることができない、雌穴から漏れてくる愛液を止めることができない。

大きくなつていく足音を、気にしてられない。

——もしかしたら、愛液を廊下へ溢してしまっただけかもしれない

——もしかしたら、誰かに見られているかもしれない
そんなこと、気にしてはいられなかった。

(……はやくっ……はや、くっ……っ……っい、てえ……ッ!!)

羞恥と恐怖と焦燥感に急かされるまま、なりふり構わず歩を進めていくこと数分。ようやく、目的地であるマスターの部屋へと辿り着くことができた。安堵の息を吐き出し、備え付けのインターフォンを押す。わずか数分にも満たない道程だったが、今のオルタには、とても長い時間に感じたことだろう。

——と、そこでオルタは違和感を感じた

——部屋の中から、まったく反応がない

——出迎えに来るどころか、中からは物音ひとつ聞こえない

(……そ、そんなっ……う、そ……冗談、よね……)

もう一度、インターフォンを鳴らす。

だが、待てども待てども反応はない。

オルタの胸中へ、再び焦燥感が訪れる。マスターが約束を反故にした可能性、つまりは就寝してしまつた可能性に気付いたからだ。時刻は深夜、約束をしていたとしても関係なく襲ってくる睡魔、それに導かれ不可抗力で、ということも充分にあり得る時分。

ふと、オルタが今、自分が歩いてきた方へ視線を向けた。おそらく自分の部屋へ戻ることを考えたのだろうが、彼女の視線の先には長く濃い暗闇が広がっている。それも恐ろしいことだが、それ以上に——自分の火照った体が、欲情する心が、彼女を追い詰めていく。

(……も、もどる、の……ッ……む、むりっ……そんなのむりい……いやっ……そんなの……ど、どうしたら……ッ!?)

オロオロと、オルタが狼狽える。様々な感情や思考が彼女の脳内で絡まり、無意識のまま涙を目の端から漏らしてしまう。昂った体は、どンドン冷えていく。追い詰められていく末に彼女は、何度も何度もインターフォンを押してみたり、扉へすがり付いてみたり。

その姿は、まるで迷子になった子供のようだ。もっとも、今のオルタは全裸で、昂りのまま股間を濡らす、という生々しい姿なのだ——

——だからこそ、オルタは気付けなかった

——彼女の死角から近付いてくる人影に

吼え立てよ我が劣情（2）

自室の前で狼狽えていたオルタを背後から抱き締めた。驚いて攻撃されるのは避けたいので、耳元で囁いてやるのも忘れずに——それだけで彼女は大きく肩を跳ねさせ、「ひっ」と小さな悲鳴を上げ体を硬直させてしまうのだから可愛いものだ。

「——ッ——」
「どうやら、オルタが背後から抱き締めてくる者の正体に気付いたようだ。暗闇の中、首を曲げて顔だけで振り向いてきた彼女は、突き刺すような視線で見つめてくる。驚かせるだけのつもりだったが、どうやら彼女のお気に召さなかつたらしい。このままでは、視線だけで殺されそう——」

殺される前に、予防線を張っておくとするか。

わざとらしく口元にあるオルタの耳へと息を吹きかけてから耳裏へ舌を押し付け、柔らかい耳裏を始めとして耳孔の周囲を舐め回した。ぴちやつ、ぴちやつ、と唾液が跳ねる音を至近距離から彼女の鼓膜へ叩きつけるように。

「……………ひっ……………あ、ん……………や、め……………なめ、っ……………る、なあ……………」
だが、それだけでは止めない。唇をオルタの耳元へと寄せると、舌先を彼女の耳孔へと突っ込む。相変わらず周囲には、ぴちやつ、ぴちやつ、と小さな水音が響くのみだが——耳孔をほじられている彼女の鼓膜には、生々しい音の大合唱が響き渡る。

ぐちゅっ、ぐちゅっ、という大音量の生々しい水音が、オルタの鼓膜を犯す。逃げようとするも背後から抱き締められている彼女は、身を振るのが精一杯。舌から逃れることもできず、彼女は耳孔へ付着する唾液の熱と、生々しい水音の大合唱に鼓膜を犯され続ける。

（……………い、いやああ……………ぐちゅぐちゅって……………わたしの、みに……………はいってくりゆう……………これえ、おかしくなるう……………あたま、おかされちやつてるう……………みみの、あなあ……………ほじられてえ……………あ、ああ……………だめえ……………これえ、むりい……………ッ……………こんなの、がまん……………でき

な、ひっ……ッ!!)

オルタは必死に下唇を噛み、少しでも気を抜けば漏れてしまいそうな喘声を押し殺す。だが、そんな抵抗も虚しく耳孔、鼓膜を通して脳髄を犯されるような錯覚に陥った彼女は体を何度も跳ねさせていた。意思とは反して、びくんっ、びくんっ、と体が跳ねる。それは先ほどもまでの第三者へ見付かる恐怖によって冷えてしまったオルタの体を、急速に再燃させていく。外套一枚で隠された彼女の体は、再び欲情していく彼女の意思を、あっという間に振り切って、暴走を始めてしまった。

雌孔からは、どんどん新しい愛液が溢れてくる。

豊満な乳房の頂点、乳首は充血し固さを取り戻していく。

「……んんっ……ッ……あ……んんっ……んんん……ッ!!」

オルタの鼓膜を犯しながら、掌を外套の隙間へと忍ばせていく。左右から覆われる格好のせいで、切れ目は手探りでも十分に探し当てることができた——布の感触を越え、内側へ隠されていた彼女の柔肌を、指先でなぞる。

「……っ……や、だめ……いま、は……さわらな、ひっ……で……」

小声で訴えてくるオルタを無視し、彼女の肢体へ指先を滑らせていく。腹部から谷間を探り当て、大きな双丘の片割れを登り、その頂点へと——すると指先に、固い感触。真っ赤に充血しているであろうそれを、指先で転がしてやる。こりっ、こりっ、と指先を押し返してくる感触が、とても心地いい。

その強烈な刺激にオルタは耐えきれず——

——刺激から逃れようと無意識のまま、外套を握っていた手で

——乳首を弄ぶ腕、手首を掴んでしまった

乳首への愛撫は止まったが、その代償は大きい。決して厚くないオルタの肩幅では、大き目な外套を支えきることができなかつたのだ。放された側の外套が、するすると、自重に耐えきれず彼女の肩を滑り落ちていく。

(……っ……やっ……ッ……ああ……いやああ……ッ!!)

オルタの肩から滑り落ちた外套は、彼女の肢体を隠すことを放棄し

た。重力に引かれ垂れ下がった外套は、彼女の半身を露出させてしま
う。転がされ、ぴんつ、と起立した乳首を、荒い呼吸によって上下す
る豊満な乳房を、くびれた細い腰を、しなやかで肉付きのよい脚を――
それを見て、オルタの耳孔から舌を引き抜く。

どろおつ、と混ぜられ白く濁った唾液が耳孔と舌を糸で結んでい
るが、気にせず離れる。かわりに、露出した彼女の首筋や肩口へ口付け
た。どこか甘く、しょっぱい味が口内へ広がっていく――

「……おね、がつ……みな、ひれ……あ、つ……いやあ……こんな、と
ころでえ……みられ、りゅ……みつかつ、ちゃ……ツ……やあああ
……」

嗚咽混じりに漏れてくるオルタの喘ぎ、懇願の言葉は無視だ。その
まま捕まれている方の腕を伸ばし、彼女の滑らかな下腹部から股間
を目掛けて掌を滑らせていく――しっとりした肌触りの下腹部を越
え、股間まで忍ばせた掌が水気に濡れた。

くちゅつ、くちゅつ、と掌へ愛液を載せ、オルタの股間へ塗り込む
ように撫で回す。割れ目に添って掌の凹凸を押し当て、時おり少しだ
け固い陰核を押し潰すように。その快感に彼女は脚をガクガクと震
わせ、這い上がってくる刺激と興奮に身を捻る。

「おねが、い……ひ、う……もお……やめ、てえ……へや、に……ツ……
なかつ……はいらせ、てえ……あ、ん……な……なんでもする、からつ
……そと……ここ、はあ……いやああ……」

――その時、ぷちんつ、と何かが切れる音が聞こえた

――その音は、理性が切れた音
もう、我慢できない。

腕を引きオルタから離れると、ズボンへと手を伸ばす。ベルトを外
し、ジツパーを下ろし、下着の奥で起立していた肉棒を取り出した――
びくんつ、びくんつ、と痙攣する肉棒の先端から先走りか漏れ、廊
下へと滴っていく。だが、そんなことを気にする余裕はない。

はち切れんばかりに勃起した肉棒をそのままに、オルタの背面を

覆っていた外套をズラす。露になった彼女の背中中は少し汗ばんでいて、わずかに引かれた腰は震えていて、突き出された臀部の中心からは愛液が糸を引いていた。

「…………ちよ…………つ…………まさ、か…………やめ…………つ…………ツ!!」

オルタが体を強張らせたのが分かる。

だが、もう遅い。肉棒を握り彼女の雌孔へと亀頭を合わせると、腰を押し出し肉棒を振じ込んでいく。ずぶぶつ、という生々しい音と共に、絶えず溢れてくる愛液で勢いよく滑っていく肉棒は、あつという間に根元まで埋まってしまった。

その打ち込みは強烈で、オルタは突き出した臀部を腰に押されるまま、目の前の扉へ体を押し付けられてしまう——オルタは豊満な乳房を扉へ押し付けられ、肉と扉へ挟まれる。

「…………あ、ぐつ…………ん…………ん…………ツ…………」

臀部を強い力で押し上げる腰は容赦なくオルタの体を扉へ押し付けていく、雌孔へと侵入を果たした肉棒で子宮口をえぐりながら。すると体の奥底から登ってくる快感と、扉へ乳房を擦り付けられる快感が彼女を襲う。

びくんつ、びくんつ、と体を痙攣させ快感を受け止めることしかできないオルタは、たまらず上げてしまいそうな喘声を必死に押し殺すことしかできない。わずかに開いた両足をガクガクと揺らし、扉へ乳房や乳房を潰されながらも。

「…………ん、う…………つ…………あ…………んむつ…………ん…………」

顔を扉から背け、口元へ手をやり掌で口元を覆い喘ぎ声を飲み込むオルタ。どれだけ抵抗しても、どれだけ抗っても、漏れてくる嬌声は隠しきれないというのに——その姿は、嫌でも興奮を煽ってくる。

きゅつ、きゅつ、と肉棒を締め付けてくるオルタの腔内、その締めり具合と溶けてしまいそうな熱が心地いい——もはや完全に焼き切れた理性はその快感に身を震わせ、さらなる熱を、さらなる快感を求めてしまう。

ゆつくりと腰を引きオルタの腔内から肉棒を引き抜いていくと、力りが膣壁を擦り、巻き込んだ愛液を掻き出していく。どろおつ、と床

へ垂れていく愛液は、もう真っ白。それは彼女も、昂っている証。

(……やめ、てえ……うっ……いちゃ、だめえ……こえ、でちゃうからっ……ばれちゃうっ……これじゃ、わたしも、こいつとおなじ……へ、へんたい……じゃない……そんな、な……の……ッ……あ……でも……)

口元を掌で覆う彼女は、心の中だけで悲痛な叫び声を上げる。

——だが、熱に犯された彼女の思考が

——欲情した心が、囁いてくる

——”こんな場所”で性交して、何が悪い？

——愛する人に抱かれるのを拒む必要があるのか？

——何を我慢する必要がある？

——と

だが、その言葉はオルタの全身を襲ってくる快感に、易々と吹き飛ばされてしまう。何度も子宮口を肉棒で小突かれる快感、カリが膣壁を擦っていき愛液を掻き出される快感、亀頭が締まる膣壁を押し拡げながら入ってくる快感に。

たんっ、たんっ、と一定のリズムを刻みながら腰がオルタの臀部を叩いている。激しい動きではなく、緩慢な動作で肉棒が膣内なかを行き来する——それは彼女へ、膣壁を通して肉棒の形、大きさ、熱、それらを明確に頭へ叩き込んできた。

「……ひっ……んっ……あ……んんっ……う……ッ……んん……」

口を掌で覆っている指の間から、唾液と共にオルタの喘声あはが漏れ出てくる。指と指の間から溢れた唾液が、ぽたっ、ぽたっ、と床へと落ちていき床を汚していくが気にしない、というよりも気にしてはいらない。

絶えず雌孔を行き来する肉棒から送り込まれる緩やかだが強烈な快感は、最後まで張り詰めていたオルタの理性という糸を焼き切っていく。昂っていく体は彼女の息を荒くし、性欲のままに溺れようと強張ってしまう。

——暗闇の帳に覆われたカルデアの廊下へ

——たんっ、たんっ、と肉が肉打つ音が響く

——その音に紛れて聞こえるオルタの喘ぎは

——いくら掌で抑えても、押し殺そうとしても

——抑えることができず、むしろ甲高く、大きくなっていた

「……ひっ……ん、っ……あん……ん、んっ……ッ」

少し強めに腰を打ち出し、肉棒を深々とオルタの膣内へと突き立てる。亀頭で子宮口をえぐり、彼女の体を強く扉へと押し付けながら——腰を折り上半身を曲げ、顔を彼女の耳元へと寄せていく。

そして——

——もう欲望に耐えるのは我慢の限界だ、果てたい、と告げた

「……え……こ、は……や、らっ……ばれ、りゅ……のお……やああ……ッ」

首を曲げるオルタと、目が合った。言葉とは裏腹に欲情しきっている瞳と、指の間から唾液を溢れさせる彼女の表情は隠微で、美しく、もつと歪ませたい、と興奮を煽ってくる。そして、ぎゅうつ、と締め付けてくるオルタの膣内が、亀頭へ吸い付いてくる子宮口が——我慢の限界を、振り切らせてしまった。

射精したいという本能に促されるまま、腰を振る動作を再開させた。先ほどまでとは違い、ぱんっ、ぱんっ、と大きくなる腰と臀部がぶつかる音と、彼女の嬌声。もう長くは保たない、だからこそ大胆に、激しくなる性交は——バレてしまう、見つかってしまうかもしれないという恐怖は、ゾクゾクと背筋を震わせてしまうほどの気持ちよさだった。

「……んんっ……あっ……はあ、ん……や、らっ……っ……ひ、う……こえ、れちや、う……ッ……ばれ、る……のお……あひ……や、なのにい……きもち、い……のおお……らめ、らめっ……ら、めえ……い、ぐう……いぐ、い、つく……あ……っ……いつぐううう……ッ!!」

たまらず上げたオルタの嬌声が、引き金となる。

絶頂と共に玉袋から欲望が駆け巡ってくるのを自覚すると、思いつきりオルタの臀部へ腰を叩きつける。すると彼女の体内、子宮口を亀頭で挟み開け、きゅうつ、と締め付けてくる膣壁を擦り上げる——瞬間、欲望が駆け巡っていき膨張する肉棒が、びくんっ、と大きく跳ね

た。

びゅーっ、と飛び出した精液が彼女の子宮口へと注がれていく。どぶどぶ、と熱い精液が子宮へ溜まっていく感覚はオルタの背中をのけ反らせ絶頂を迎えた――

「……………ら、らされ、てるう……………どぶどぶ、てえ……………あ……………そ、と……………なのにい……………やあ、なのにい……………あん……………わら、ひ……………い、つて……………りゆ……………なかだ、ひ……………され、へえ……………いつ、ひやったのおお……………」

絶頂に耽るオルタは何度も体を跳ねさせ、腰によって扉へ押し付けられるがまま。いつしか口元を覆っていた腕は、脱力のまま垂れ下がっており――掌で隠されていた無様で、快楽に溺れる淫らな表情を露にしていた。

だらしなく口を開け、真つ赤な舌を覗かせ、わずかに開いた口元から唾液を溢し、大粒の涙を流すオルタの表情を見ながらの射精は、意識を失いそうなほどの快感だ。

――まだ、射精は収まらない

――いまにも飛びそうな意識を何とか持ち直すと

――彼女を支えながら自室の扉を開け中へと連れ込む

――まだまだ彼女を犯したい、抱きたい、汚したい

――その欲望に従うまま、オルタの子宮へ精液を注ぎながらベッドへと向かう

――まだまだ、彼女との秘密の相瀬は終わらない



「……………んっ……………ッ!!」

ふと朝の陽気の眩しさにオルタが目を開ける。すると、目の前へ見知ったマスターの顔があり、ボーツとした表情が一変。顔どころか耳まで真つ赤にしながら、忙しなく首を巡らせて状況を確認した。

あの後、廊下で性交したこと――

そして、”その後”のことを思い出ししてみる。

(そう、だ。あの後、ベッドで何回もシたんだっけ……廊下の時もだったけど、すごかつて……じゃなくて……ッ……ほんっと、このド変態のケダモノマスターめええ……ッ!!)

赤くなつた頬を膨らませ、昨夜のことを思い出してオルタは恨みがましく、横で安らかな寝息を立て続けているマスターを睨み付けた——嫌だと言つても、問答無用で啼かされた。これでもかど焦らされ、懇願してしまった。愛していると囁かれ、胸がいっぱいになった。

目まぐるしく、昨夜の激しい営みがオルタの羞恥を煽ってくる。だが、不思議と彼女は、それが嫌ではなかった。どちらかといえば、”そんなこと”をされても嫌悪感を感じない”自分”に腹が立つ、といつたところか。

「……あー、ほんと最悪……っ……えいつ」

オルタは横で寝息を立てるマスターの頬を摘み、軽く引つ張つてみた。むにつ、むにつ、と柔らかい頬を、彼が目覚めない程度に弄んでやる——眉根を寄せ、寝顔を歪ませるマスターを眺めていた彼女だった——

——ふと、微笑んだ

「次は、こっちはいかないから——今に見てなさい……愛しのマスターちゃん」

——夢の世界へいってしまっている彼へ、挑戦状を叩きつけると

——頬を引っ張りながら、唇を重ねた

——少しだけの怒りと、溢れんばかりの感謝と愛しさを込めて

赤王 X 白玉 編

散り乱れる白百合と薔薇（1）

エントランスを訪れたのは白いドレスのような服を纏った黒いリボンの少女、彼女はクラス、セイバー。真名は、アルトリア・リリイ。騎士王へ至るアルトリアという人物の可能性の一つ、王となるべく学び、鍛えることを選定の剣によって定められた英霊の一人である。

そんなリリイは、エントランスを訪れるなり忙しなく首を巡らせ辺りを見回している。落ち着きなく、どこか不安そうな表情だ——その表情は、目当ての人物を見つけても変わらない。

「あ、あの——ネロさん」

「ん、リリイか？ 余に話とは珍しいな……」

リリイが探していた人物は、エントランスの一角で読書に耽っていた少女。彼女は名前を呼ばれると、書物へと落としていた視線を上げた。赤いドレス、透けるスカートという特徴的な衣服に身を包む少女、彼女はリリイと同じくセイバー、我等が皇帝陛下ことネロ・クラウディウス。

「じ、実は折り入って相談がありました——」

「余に相談とな？ うむっ、聞いてやろうではないか——」

「え、えっと——」

——歯切れ悪く、どこか困惑の表情を浮かべると

——リリイは、少しずつ語りだした



間もなく就寝という頃合い、寝る準備を整えようとベッドシートを直していた時、ふと来客を告げるインターフォンが鳴った。もう深夜になろうという時間、こんな夜更けに誰が来たのだろうと頭へ疑問符

を浮かべてしまう。

軽い音と共に扉を開くと、その向こうには――

「おお、夜分にすまぬな、マスター」

「……………」

ネロとリリイが立っていた、なんとも珍しい組み合わせだ。

こんな時間にどうしたのだろう、という疑問が浮かんだが、立ち話もなんだからと部屋へ招き入れる。ネロは普段と変わらない表情と立ち振舞いだが――そんなネロの背へ隠れるようにして部屋へと入ってきたリリイの方は、どこか様子がおかしい。

俯いたまま、それでいて頬を上気させ顔を赤く染めているリリイには落ち着きがない様子。下方から顔を覗き込もうとしても、リリイは必死に目を合わせまいと首を振り回してしまう――な、なんでさ？

「マスター、話がある――大事な話故、心して聞くがよい」

苦笑を浮かべながら、ネロが間に入ってきた。やっぱり何か事情があるのだろう、ならばマスターとして聞かなければならぬ。快く承知した――すると「うむつ」と頷いたネロが、彼女の背中へ隠れるリリイへ視線を移しながら口を開く。

ネロから事情を聞くこと十数分、彼女が言う相談したいことの要点を纏めると――発端は、リリイによるもの。王になるために必要な知識や心構え、王として必要な技能を身に付けたい、とネロは相談されたそうだ。

リリイいわく、すでに^{アルトリア}ある王としての^人姿を真似たり目指すだけでは駄目だと思いつたらしい。だからこそ、様々な王や皇帝から話を聞き、見聞を広めたいとも――

そこでリリイが最初に声を掛けたのが、不本意ではあるものの不名誉な悪名を歴史に残してしまった皇帝、つまりはネロだったのだ。見本となるべき王ではなく、煌々たる覇道の裏側を――華々しいだけの歴史ではなく、もつと薄汚れた部分や語られなかった事実を求めたが

故に。

「——で、ここからが本題なのだが……おい、これ以上は余が言うては意味がなからう、さっさと腹を括らぬか……ッ!!」

「うむむ」と額に指を当て唸っていたネロが、自身の背中へ隠れていたりリイを引つ張る。すると慌てながらもネロの隣へ立つたりリイが——頬を朱にそめながら、見上げてきた。だが、彼女を見つめると、何やら困惑した表情を浮かべているリイに視線を外される——

数秒の沈黙、だが、いきなりリイが逸らしていた視線を戻すと——いきなり、抱き付いてきた。彼女の細い腕が背中へ回り、胸元を密着させ、額を擦り付けてくる。

そして——

「わ、私、マスターの、こと……す、好きでしゅ……ッ……ッ!!」
しゅ? も、ものすごい噛み方だな。

後ろで控えていたネロも、リイの噛み方が面白かったのだろう。ぶはっ、と息を吹き出すと顔を明後日の方へ向け、掌で口元を覆い笑いを噛み殺そうとしている——が、「ぶくくっ」と漏れてる漏れてる、めっちゃ漏れてる。

で、とんでもない噛み方をしたりリイはといえば、耳を赤くして胸元へ顔を覗き埋めてくるだけ。「ううう」と唸り声が聞こえてくるけど、たぶん羞恥によるものだろう。

とはいえ、その言葉の深意というか、いきなりの告白には驚いた。泣かれても困るし、とりリイの頭へ手を回してやり撫でながら——この状況とりリイの奇行、その原因について問い掛けようとネロへ視線を移す。

「ん、コホンッ、つまりな——」

さらに詳しい話をネロから聞いて納得した。

どうやら、ネロがリイへ色々教えていく過程で、ついつい情事の話になってしまったらしい。英雄色を好むと言うし、伝わる話では近親相姦も珍しくないらしい。つまり話題が情事に移ってしまうのは、必然といえれば必然なのだ——

つまるどころ、ネロはリリイへ教えてしまつたらしい。”王として生きるならば好みでない男や女と同禽することも必要になるし、決して断れぬ相手から求められることもあるだろう”と——それを聞いた時のリリイは、世界の終わりを見たような表情だったという。

「ここまで言えば、もう話の核心を理解できよう?」

王を指しているリリイは事実を知った、知つてしまつた。それは彼女の純粋な心を澱ませ、王になると決めた決意に二の足を踏ませてしまうほどの驚き。だが彼女は、同時に”あること”を決意した。

——良くも悪くも、今のリリイは王ではない

——故に心が揺れる、少女としての在り方に引つ張られる

そう、王たる前の彼女は、まだ年端もいかない少女。

だからこそ、想つてしまう。願つてしまう——

「私は、マスターのことが好きです。だから、私が王になる前に……いえ、王となる決意のために……私の初めてを、捧げたいんです。どうか、私を……ッ……抱いて、下さいませんか?」

胸元へ頬を寄せながら、リリイが見上げてきた。気恥ずかしそうに頬を赤くしながらも、切なそうで、不安げな表情。その言動は、こちらの心臓を跳ねさせると同時に、密着した彼女の肢体を嫌でも意識させてしまう。

柔らかく暖かいリリイの体、程よい大きさの乳房が押し当てられ、か細く折れてしまいそうな腕を回し、必死に抱き付いてくる感覚——それは抗えることのできない誘惑、むしろ拒める者など居るはずがない。

——分かつた、と胸元で震えるリリイへ囁いてやる

「うむっ、これにて一件落着。では——」

すると、今まで沈黙を保っていたネロが歩み寄つてきて——

——リリイと同じように、抱き付いてきた

「……ッ……ネ、ネロさん……ッ!」

「んふふっ、どうせなら余も仲間に入れよ。もちろん、タダとは言わぬぞ——リリイよ、うまくいけばマスターを虜にできるやもしれぬ性技、知りたくはないか、ん?」

その豊満な乳房を押し付けてきながら、ふふふつ、と不敵に口の端を持ち上げるネロ。その表情は何というか、彼女が”暴虐”と言われる原因の一端を垣間見た気がした。まったく、リリイがそんな甘言に首を縦に振るわけが――

「ぜ、是非ッ!! 教えて下さい、先生ッ!!」

――あるえー？

「うむっ――ふふつ、今夜は眠れると思うでないぞ、マスター?」

「……ね、寝かせ……ません、よ?」

――どうしてこうなった、と思わなくはないが

――密着するネロとリリイ、二人の肢体を感じて

――下半身に熱が巡っていくのを、止めることはできなかった



明かりの落ちた部屋の中、着ていた衣服を剥ぎ取られベッドの上へ座らされると、これまた一糸纏わぬ姿となったネロが放り出した下半身へのしかかってくる。途中、彼女の滑らかな頬や髪がが内股を撫でていき、ゾクゾクと背筋が震えてしまう。

そんな彼女が顔を寄せていく先には、すでに固くなり始めていた、そそりたつ肉棒。びくんっ、びくんっ、と跳ねるソレを見たネロは恍惚とした表情を浮かべ――躊躇うことなく、口付けてきた。

「……んっ……ちゅ、っ……んん……れろっ……ッ……ん、ちゅ……れろっ……ペろっ……ん、んあっ……ちゅ……ちゅっ……ふ、うっ……ん、あ……ッ……え、あ……れろっ……」

唇が先端に触れたかと思えば、間髪入れず舌が龟头を這い回る。円を描き、線を描き、たっぷりと舌へ乗せた唾液を塗り付けるように。その快感は耐えがたく、不本意にも腰を跳ねさせてしまうほど。

這い上がってくる快感に耐えていると、いつしかリリイが体を寄せてきていた。下半身へ乗り肉棒を口で愛撫しているネロの邪魔にな

らぬよう、ベッドの上で膝立ちになった彼女は体を密着させ——熱に犯されたように目を茫然と揺らし、顔を寄せてくる。

「愛して、ます——私の、マスター」

視界いっぱいにはリリーの整った顔が見えた頃、唇が重ねられる。それと同時に密着する彼女の細い肢体、程よい大きさの乳房を肩口へ感じた。控えめな、唇を当てるだけのキスは初々しくて——逆に、興奮を煽ってくる。

「……………んっ……………ちゅ……………ちゅっ、ん……………ん……………ッ……………」

悪戯心で舌を覗かせてやると密着していたリリーは背中を反らせ逃げようとするが、彼女の腰へ腕を回し逃げられないようにしてやった。逃げ場を奪い、舌で彼女の唇をノックすること数回——恐る恐るではあるものの、彼女も応えてくれる。

舌尖同士を触れ合わせ、先端へ付着していた唾液を混ぜる。ザラザラとした舌尖同士が擦れるたびに混ぜられた唾液をが、ぴちゃっ、ぴちゃっ、と音を立てた。その音は、興奮の呼び水——ずるっ、と一気に彼女の口内へ、舌を押し込んでやる。すると昂った彼女の体は素直すぎるほど本能に従い、激しく舌を絡めてきた。

「……………んっ……………あ……………ちゅ、っ……………ん……………れろっ……………う、ます……………たあ……………ちゅっ……………ぺろっ……………あ、ん……………じゅるっ……………ちゅう……………れろっ……………っ……………れろっ……………」

リリーと激しく舌を絡め唾液を交換している途中、不意に凄まじい快感が下半身から巡ってきた。そちらへ意識を向けると、亀頭が柔らかいモノに包まれる感覚——リリーの口内を蹂躪しながら目だけで下半身を見下ろすと、ネロが肉棒の先端、亀頭を口内へ呑み込んだのが見える。

「……………んっ、んっ、っんう……………じゅる、ん……………じゅる……………ッ……………ぷはっ……………っ……………可愛い顔しとるくせに……………なかなか凶悪な一物を持っておるではないか……………良い、実に良い……………嬉しい誤算、というやつだなっ……………」

クスクス、と悪戯っぽい笑みを浮かべながら、ネロが上目遣いに見上げてくる。漏れ出てきた先走りと彼女の唾液でドロドロになった

肉棒へ頬擦りする彼女は、どこか恍惚とした表情。その様は皇帝には程遠く、まるでどこかの娼婦を思わせるほどに淫らだった。

リリイとのキスで、ネロの口淫で、あつという間に理性が半壊していき、興奮は高まる一方だ。堪えようと思っても、下半身と口からゾクゾクと快感が走ってくる。甘い痺れに翻弄されていく理性は肉棒の先端から先走りを漏らし——昂っていく本能はリリイの口内を蠢く舌の動きを活発にさせていく。

——リリイの口内を舌でねぶり、しゃぶりつく

「……………ん、んんっ……………ちゅ……………あむっ……………っ……………れろっ……………ちゅうっ……………ずずっ……………んっ……………え、あ……………ペろっ……………ちゆる、っ……………んんっ……………ッ!!」

——腰を浮かせ、ネロの内頬へ亀頭を擦り付ける

「……………ん、むうっ……………じゆるっ……………ず、ずっ……………じゆるる……………んんっ……………ぶ、あ……………お、ぐっ……………ん、んっ、んん……………はっ、あ……………ちゆるっ……………じゅっ……………じゆるる、んっ……………ん、ん、ん、んんっ……………ッ!!」

ネロの口内へ呑み込まれた肉棒が、大きく跳ねる。すると彼女は射精の予兆を察知したのか、スパートを掛けるように素早く、強く肉棒へ吸い付きながら頭を前後へ振り始める。すると、じゅぼっ、じゅぼっ、と彼女の口内で溜められた唾液を肉棒が混ぜるたびに卑猥な音が響く——

その口淫は凄まじい快感をもって、下半身を蠢いていた欲望の塊を押し流していく。その反動で腰が跳ねてしまうが、ネロは構わずグロテスクな肉棒すべてを呑み込みサオへ舌を絡ませてきた。

「……………じゆるっ……………じゅっ、じゆるっ……………んんっ……………んっ……………ん、じゆる、ん、う……………ッ……………ん、っんんん……………ッ!!」

——絶頂と共に玉袋から、欲望の塊が駆け巡っていく

——腰が抜けるほどの快感に押し流されていった欲望は

——ネロの喉奥で、文字通り爆発した

亀頭の先端から、欲望が迸っていくのが分かる。噴水のように、びゅーっ、と勢いよく噴き出した精液は容赦なくネロの口内を、舌上を、喉を白く染めていく。

粘性を帯びた異物が喉へ絡んでいるのに、口内で生臭いケモノのニオイの体液が暴れているというのに、ネロの顔に嫌悪感は微塵もなかった。むしろ、それを恍惚の表情で受け止め——最後の一滴まで出し尽くせ、と言わんばかりに吸い付いてくる始末。

「……ん、ぐう……っ……ん、くっ……んっ……んんっ……んく……じゆる、っ……ぢゅうっ……ちゅ、うん……んくっ……ッ……んん、っ……じゆるるるっ……じゆる……」

そんな彼女の表情通り、肉棒から噴き出した精液、そのほとんどをネロは飲み干していた。彼女の口内へ残っているのは射精を終えた肉棒の中へ残っていた最後の一絞り、最後の最後まで溜まっていた濃厚な精液のみ。

その快感に腰が抜けてしまい、リリイと口付けるのを忘れていたのを思い出す。どこか切なそうな、物欲しそうな表情の彼女を視界へ収めながらも体が言うことを聞かない。強烈な倦怠感のままにリリイから腕を放し、背中からベッドへと倒れ込んでしまった。柔らかい布団の感触を背中へ感じながら、朦朧としていく意識と視界。

——どこか霞が掛かった視界、夢見心地のまま二人へ目を向けると「……んっ、あ……ちゅっ……じゆる、んっ……ちゅっ……れろっ……ちゅう……ろう、ひゃ……ましゅ、たあ……の……せえし……の……っ……んちゅ……あ、じ……はっ……」

「……ん、うっ……じゆる……どりよどりよ、れえ……あ、ん……しゅご、ひ……におひ……れす……じゆる、っ……れも、ひゃ、ら……な、ひっ……ちゅ……んんっ……じゆる……れろっ……」

彼女達、ネロとリリイは口付けを交わしていた。それだけではなく、先ほど肉棒から吐き出されたばかりの精液を、口内で共有しているのではないか。たまに覗く二人の真っ赤な舌へ、時おり白が混ざっているのは——どちらも呑み込むことなく、ひたすらに味わっているからだろう。

目を逸らすことも、声を掛けることもできない。

——それほどまで、その姿は淫靡で、卑猥で、とても美しかった

散り乱れる白百合と薔薇（2）

ベッドへ足を放り投げるようにして座ると、腰の辺りへネロとリイが顔を寄せてくる。小休止のおかげで固さを取り戻した肉棒を見つめる二人の瞳は、鼻孔をツンと刺激するケモノのニオイによって劣情に揺れ動いていた。息荒く勃起した肉棒を前にした彼女達は、まるで発情期を迎えた雌。

「余の動きを真似よ。ただ、間違っても歯は立てるでないぞ、コレは男にとつての急所故、な——」

「は……はい、せんせえ……」

ネロとリイの熱いら吐息が肉棒の先端に当たり、身震いしてしまう。だが、それも束の間。ネロが亀頭の先端へ口付けると、それに習いリイも同じように口付けてくる。左右から唇に挟み込まれる肉棒は、びくんつ、と大きく跳ね先端から先走りを漏らしてしまう。

ゾクゾクと背筋が凍る感覚に耐えながら、二人の様子を見下ろす。互いが邪魔にならないよう努めながら、それでいて同じ箇所を協力して刺激してきたり、時には互いの頬を擦らせ奪い合うように——その様はとても官能的で、卑猥で、現実味がない光景だった。

「……ちゅ、んっ……えあ……れろっ……ペろっ……こ、これっ……こっちは……よ、の……りよう、ひ……ら……がっ、つくで……なひ、わ……」

「……んちゅ……れろっ……ペろっ……ら、らつてえ……こ、のお……にお、ひい……んう……く、しゃいの、に……あら、ま……ぼおつと……ひ、て……きてっ……れろっ……ちゅう……ペろっ……ペろっ……」

どうやら肉棒から漂ってくるケモノのニオイが、すでにリイの理性を崩壊させつつあるようだ。彼女は強引にネロの頬を押し退け、我先にと亀頭全体へ舌を押し当ててくる。ザラザラとした舌腹、滑らかな舌裏を用いて丹念に先走りを舐め取られていくのが分かった。

暴走し始めているリイに亀頭部分の占有権を譲るハメになった

ネロは不満そうに「むう」と頬を膨らませたが、いきなり玉袋へと甘く噛み付いてきた。油断していたこともあって、その感覚に腰が跳ねてしまう。

「……………んっ、んう……………んっ、あ……………じゆるっ、んっ……………んっ、んっ……………ふ、う……………」

玉袋の片割れを口にふくみ、ネロの口内で転がされた。袋皮に吸い付かれ、中身の玉を唇で揉まれ、舌でねぶられると、かすかな痛覚と未知の感覚が股間を中心に下半身へと広がっていく。びくんっ、びくんっ、と意思とは関係なく跳ねる肉棒と腰が制御できない。

「……………んあ……………ちゆうっ……………ん、う……………えあ……………れろっ……………ましゅたあ、のお……………すご、ひ……………におい……………れすう……………ペろっ……………それにい……………へん、なあじい……………っ……………あん……………れもお……………これえ、しゅきい……………ちゆ、んっ……………れろっ……………」

さらに漏れてくる大量の先走りがリリイの唇を、舌を汚していく。だが彼女は気にした様子はなく、むしろ先走りの熱、ニオイ、味を恍惚とした表情で受け止めていた。もはや理性は半壊し、暴走のままに肉棒を貪る彼女。

そして、とうとうリリイの小さな口が亀頭の先端を包み込んだ。唇へカリが引つ掛かり、たっぷりと唾液が溜まった口内で尿道を舌先でほじられる。じゆるっ、じゆるっ、と吸い付かれる感覚は、先走りを根こそぎ吸い尽くされそうな勢い。

「……………あ、むっ……………んんっ……………じゆるっ……………ぢゆううっ……………ちゆ、んっ……………れろっ……………え、あ……………ん、んっ、ん、う……………じゆるっ……………ちゆっ……………じゆ、っ……………じゆるるるっ……………っ、はあ……………んっ……………」
「……………ちゆ、んっ……………ぷ、っは……………おお、吹っ切れたか……………良いぞ、そのまま入るところまで男根を頬張ってみよ……………喉に当たって少し苦しいやもしれぬが止めるでない……………」

「……………ん、っ……………じゆるっ……………っ……………あ……………ふあ、い……………せん、せえ……………」

いつしか玉袋から口を放したネロが、亀頭をねぶっていたリリイへと顔を寄せていた。じゆるっ、と卑猥な音を立てて唾液が充満する口

内へ肉棒を呑み込んでいくリリイ。喉へ感じる異物感のせいか目端に涙を溜める彼女を、まるで労るように頬や目端に口付けるネロ。

肉棒が少しずつではあるがリリイの口内へと埋まっていく、ヌルヌルと生暖かい彼女の唾液が、舌が、内頬が、喉が、どれも緩やかだが抗いがたい快感を伝えてくる。おまけに二人の痴態まで目の当たりにしてしまつては、そう長くは保たないだろう。

「限界まで呑み込んだら、舌や唇で男根をしゃぶりながら頭を前後に振れ、あとはそれを繰り返すだけで良い。己の性器が貫かれておるのを想像してみよ、性交しておるのを想像してみよ——」

「…………う、うう…………ふあ、い…………んっ、う…………じゅ、っ…………じゅるっ…………じゅぶ、う…………うん…………じゅるっ…………んっ、…………ん、う…………ん、ん、んっ…………ツ…………お、んっ…………じゅるっ…………ツ!!」

こちらの事情など露知らず、リリイはネロの指導通りに頭を引き、呑み込んだ肉棒へ吸い付きながらしゃぶり上げ、間髪入れず再び舌や唇を龟头やサオへ這わせながら呑み込んでいく。じゅるっ、じゅるっ、と唾液を跳ねさせながら頭を前後にストロークし始める彼女は脳内で、自身が貫かれているのを想像しながら。

(ああ、これえ…………このマスターの…………たくましくて、かたくて…………すごい二オイがするので…………わたしの、あそこを…………あああ…………なん、でえ…………ちがうのに…………つらぬかれてるの、くちななのに…………すごく、きもちいい…………ほ、しい…………これえ、ほしい…………ツ!!)

意識して、想像してしまつと、もう止められない。自らの口へ頬張る肉棒に抱く劣情と疼く体、もはや熱に犯されたりリイの思考は歯止めが利かない。疼く体、疼く膣、疼く子宮、制御不能となった彼女の体は刻一刻と理性を焼き切っていく——男を受け入れたことのないリリイの雌孔から、人知れずヒクヒクと愛液の涎を垂らすほどに。

もうリリイには恥じらいなどない、羞恥を感じるはずの理性は粉々だ。今の彼女にあるのは自身の口を犯す肉棒に、己の雌孔を貫かれるのを想像し自慰を行う——ただの雌と、成り下がってしまう。

「…………そろそろ、お互い準備も整つたな…………」

卑猥な妄想に耽りながら必死に肉棒をしゃぶるリリイだったが、そ

の下半身、自らの割れ目を掌で擦り、ぐちゅっ、ぐちゅっ、と生々しい音を立て慰めている様子を見て——ふとネロが、満足そうに囁いた。

するとネロはリリーの肩を掴み、共々、背中からベッドへと倒れ込む。瞬間、ちゅぽんっ、とリリーの口から肉棒が抜ける小気味良い音が聞こえた。よほど熱心に吸い付いていたのだろう——ともあれ、肉棒から登ってくる快感から解放された。導かれるままに上半身を起こすと、柔らかいベッドへ背中を預ける二人が——

「……………ん、ああ……………ま、しゅ……………たあ……………やああ……………ほ、しっ……………はや、く……………はやくう……………」

——自らの掌、指で股間を、雌孔を、陰核を弄り

——ぐちゅっ、ぐちゅっ、と音を立てる秘部を見せ付けてくるリリー

「……………ん、う……………っ……………よも、じゅんび、は……………よい、ぞ……………」

——仰向けになったリリーの隣へ俯せに転がり

——臀部の片割れを拡げ、奥で濡れる雌孔を見せ付けてくるネロ
その光景は、あまりにも魅力的で、誘われるがまま、導かれるままに二人へと体を寄せていく。彼女達へ体を寄せると、花のような香りに紛れて生々しい、獣臭が周囲へ漂っていることに気付く。三人分の体液から登る獣臭は、その場に居る者達の本能を呼び覚ましていき——

もう、こちらにも我慢の限界を振り切ってしまう。

まず覆い被さったのは、ネロの方。

ベッドへ俯せとなつている彼女の背後から臀部を掴み、拡げ、その奥で呼吸するように伸縮する雌孔を目掛けて——肉棒の照準を合わせる腰を押し出し、亀頭を一気に挿じ込んでいく。

「……………ん、っ……………お……………き、たああ……………あ、つぐう…………………………ん、い……………ふと、ひっ……………の、がああ……………よの……………なか、にいい……………っ……………あんっ……………す、ごっ……………ずぶずぶ、っれ……………はい、って……………ッ……………んああ……………ッ!!」

「……………ッ……………やああ……………やらっ……………やらやら……………っ……………やああ……………」

ましゆたあの……ほしいの、にい……ッ……わらひ、も……ましゆたあ、のお……ほしかつたああ……ッ!!」

ずぶずぶつ、とネ口の雌孔へ肉棒を埋めていく途中、彼女の隣へ仰向けで寝ていたリイが、狂おしいほどの叫びを上げる。涙を流しながら必死に懇願してくる彼女を抱き締めてやりたい衝動に駆られるが、今は構ってやるとができない。

なぜなら挿し貫いたネ口の膣内なかは熱くて蕩けそう。だが、それ以上に、侵入したはずの肉棒を舐め上げてくるような未体験の快感にゾクツと背筋が震えてしまったからだ。

程よい強さで肉棒を締め付けながら幾本もの小さな舌のような突起が舐め上げてくるネ口の膣壁は、今まで感じたことのないほどの快感を与えてくる。その快感は強烈で、気を抜けば今にでも果ててしまいそうなほどの刺激。

「……ん、ぐう……どう、ら……よ、の……から、だ……っ……は……あんっ……こうてえ、まん、こ……の……あじ、っ……ん、うっ……たっぷり、と……あじ、わう……が……っ……よ、ひ……ッ!!」

首を曲げ、顔だけで振り返ってくるネ口。

肉棒で雌孔を貫かれて蕩けた表情をしているくせに、いやに挑発的な視線と言い回し。ならば、と——お望み通りに堪能してやろう、という嗜虐心が沸き上がってきたても仕方のないことだろう。

手加減なし、気遣いなし、容赦なし。ぱんっ、と腰が柔らかく弾力あるネ口の臀部を叩くが、止まってやらない。一気に腰を引き、渾身の力で打ち出す。腰のストロークを全力で行い、肉棒を締め上げてくる膣壁を力りで激しく引つ搔いてやった。

「……ひっ、ぎ……ああ、っ……ひいっ……ちよ、まへ……いき、なり……はげし、すぎっ……ッ……んおおっ……ま、へ……まつへえ……こわれ、りゆ……よ、のっ……だいじ、などこお……おま、んこお……こわれ、っ……ひあっ……んおっ、っ……ひっ……あ、あ……んっ……あっ……ッ……ひっ……ひぬううう……ッ!!」

逃げようと体を振ったり、腕を振り乱すネ口。だが臀部を掴み、結合部へ体重を掛けているせいで身動きが取れないようだ。今が好機、

と快感に耐えながら肉棒を素早く、何度も最奥まで雌孔を突き入れる。

すると、ベッドシートへ世界地図が浮き上がってきたのに気付く。ネロの潮か、黄金水により形作られたのだろう。広がっていくシミを顎で示してやりながら指摘してやると——彼女は、激しく頭を振り乱して絶叫した。

「い、やああああ……みる、にや……みるにやああ……ずぼずぼお……され、へ……こうてえ、まんこお……ひかさ、れっ……ッ……ん、おおっ……やつ……あんっ……とまら、にゅ……とめられ、っ……なひ……んんっ……あ、ひい……ッ!!」

ゾクゾクと背中が震える。

芸術を尊び、戦場では華麗に、雄々しく戦う皇帝ネロが、肉棒で雌孔をほじられただけで潮吹き、または失禁したという事実に興奮が高まっていく。ばちんっ、ばちんっ、と臀部を腰で叩くたびに面白いほど反応する彼女を責め立て続けようとした——

だが、ふとネロの隣へ寝転び、涙混じりに見上げてくるリリイと目が合った。物欲しそうに蕩けた目は、涙と劣情に揺れている——放つたらかしというのも可哀想だと思い、空いていた方の手を差し出してやる。

するとリリイは起き上がり、差し出してやった腕へ跨がってきた。二の腕へ彼女の股間が当たると、にちゃっ、と粘性を帯びた熱い愛液の感触。少し持ち上げてやり、前後へ動かしてやると、その動きへ呼応するように彼女は腰を揺らし始める。

「……うっ……ぐすっ……やああ……これ、ちがうう……ひ、つく……ほしい、れすう……ましゅたあ、のお……たくま、しいの……でえ……ずぼずぼ、ってえ……ッ!!」

欲しい、欲しい、と連呼しながら腕へ跨がつて腰を振り陰核と割れ目を二の腕へ擦り付けてくるリリイ。柔らかいヒダと、時おり固い陰核の感触を楽しんでいると——彼女が腰を折り、体を寄せてくる。そして、そのまま密着し、程よい大きさの乳房が肩口へ触れ、頂点で真っ赤に充血した乳首を押し付けてきた。ぐにつ、ぐにつ、と強引に押し

付けられた乳房と乳房が、卑猥に形を歪めていく。

おあずけを喰らったことで、火照った体を持て余しているのだろう。こちらから促してやったとはいえ、躊躇いもせず腕と肩を使って自慰を始めたリリイへ恥ずかしくないのか、と指摘してやると――

「……………やああ、いじわる……………やあ……………ひ、つく……………ましゆたあ……………だいき、れすもん……………ほしかつたん、れす……………えぐつ……………からだ、もお……………あたま、もお……………ふわふわ、して……………なにも……………かんがえられな、ひ……………ん、れす……………ツ……………きらわ、ないでえ……………ましゆたあに……………きらわれる、のお……………やああ……………ツ!!」

少し、いじめ過ぎたかもしれない。リリイは、ぼろぼろと涙を流し泣き始めてしまう。おそろく性欲に流されるまま求めてしまい制御できない自分の体と、不本意ながらも自らの痴態を見せてしまう羞恥や嫌われたくないという思いの葛藤によるもの。

もちろん、リリイのような可愛い娘のエッチな姿を見たからといって嫌うはずがない。安心させるように囁いてやると、彼女は泣いてはいるものの安堵するような表情へと変化していく。

「……………ましゆたあ……………すきい……………だい、すきつ、れす……………み、て……………くださ、ひ……………わらひ、の……………えっちな、ところお……………ましゆたあ、で……………きも、ち……………よくなつてゆ……………ところ、つろお……………みて、つ……………みて……………ツ……………みてええ……………ツ!!」

リリイに残っていた最後の羞恥は、完全に消え去ったようだ。涙の筋を残しながらも、もはや蕩けきった悦びの表情、雌の顔のまま――激しく腰を振り回し、力強く腕へ雌孔を、肩口へ乳首を擦り付けてきた。

と、その時――

いつの間にか、ネロを責め立てていた腰が止まっていたことに気付く。相変わらず肉棒はネロの膣内へ埋没し、彼女の体が跳ねるのに合わせて締まる膣壁の圧迫を楽しんでいたのだが――リリイも絶頂に向けてスパートへ入っているし、このままネロの膣内へ放ってしまう。

思い立つと、再び腰を振る。

「……ッ……ひ、ぐうっ……ま、ら……うぐ、きつ……あんっ……ら、めえ……も、むりっ……これ、いじよ……はっ……こわ、れ……りゅっ……あ、ひい、んっ……お、ごっ……ああっ……んんっ……あ、あっ……あっ……こうてえ、まん、こお……こわれ、りゅうう……ッ!!」
ばちんっ、ばちんっ、と再び激しく衝突する腰と臀部。ベッドに形成された世界地図の上で俯せになったネロを、本能のままに蹂躪する。膣壁を亀頭とカリで何度も刺激を与え、最奥の子宮口を肉棒で押し潰す。

それと同時に、リリーの体を持ち上げる勢いで腕を彼女の股間へ押し付けてやった。膝立ちになっていた脚を揺らす彼女は、持ち上げられる力にも負けることなく腰を振り続ける。ぐちゅっ、ぐちゅっ、と愛液が撒き散らされベッドを汚すが、気になっている余裕はない。

「……ん、いい……し、きゅ……ごりごり、せめ、られ……て、りゅうう……む、むりっ……これ、たえ、れ……な、ひっ……おち、りゅ……こおてえまん、こっ……ましゅたあの……ちん、ぽっ……でええ……おちっ、りゅうう……ッ!!」

——思いつきり腰を押し出し、肉棒をネロの子宮口へ押し付ける

——瞬間、固かった子宮口が亀頭によって抉じ開けられた

「……ましゅたああ……ッ……ん、う……ましゅたああ……も、らめっ……れすう……がま、っ……でき、なひっ……で、りゅ……な、にかっ……くりゅうう……すご、ひの……がああ……っあん……ひ、い……くりゅうう……ッ!!」

——ベッドへ着いていたリリーの膝が、わずかに持ち上がる

——こりっ、と陰核が腕の凹凸によって、卑猥に潰れた

ネロとリリーの喘声、絶叫が引き金となる。

我慢の限界を振り切った肉棒が、少し膨れた。散々というほどに責められた玉袋からの報復、煮えたぎる欲望が勢いよく腰から肉棒へと駆け巡っていくのを感じた、次の瞬間——抉じ開けたネロの子宮口、その奥へと欲望を爆発させる。びゅーっ、と噴き出した欲望、精液が肉棒の痙攣に合わせて、どくんっ、どくんっ、とネロの子宮へと注がれていく。

「…………う、あ…………そそが、れ…………て、りゆう…………お、あ…………ましゆた、
のお…………せえ、えきい…………はい、つて…………き、とるう…………ああつ…………
どくんつ、どくんつ…………みやく、うつ…………てええ…………あ、へえ…………か
ん、らく…………ひたあ…………ましゆたあ…………の…………せええき、にい…………
こおてえまんこお…………かんらく、ひたあ…………」

背中を反らせ、子宮へと注がれる精液を受け止めるネ口。その表情は普段の彼女とは、かけ離れ過ぎている。だらしなく淫らな表情で、彼女は絶頂していた。とろんつ、と蕩けた瞳を揺らし、唾液が滴る舌を出し、子宮へ注がれる精液を受け止めるたびに体を痙攣させる。どこか恍惚とした、雌の顔で――

「…………う、あ…………ああつ…………で、ちや…………ツ…………あ…………らめ、らめええ
…………みな、ひれ…………くら、さつ…………ましゆたあ…………やああ…………で、
りゆうう…………ツ…………ましゆ、たあ…………あんつ…………あ…………いやあ…………」

リリイが両手で顔を覆うと同時に、二の腕へ愛液とは違う水気を感じた。漏れ出てくるという表現は正しくない、ましてや勢いが良いわけでもない――蛇口を捻った時のように、ちよろちよると、愛液とは違う何か割れ目から流れ落ちてくる。

その液体は二の腕では全てを受け止めれないほどの量で、勢いこそないものの、滝のように溢れていく。びちやびちや、と生々しい音と共にベッドへと吸い込まれていくのを見届けながら余韻に浸る。

と、どうやら射精も終わりを告げたようだ。

絶頂によって敏感になった肉棒が、蠢くネ口の膣壁に押し出されて抜けてしまう。すると彼女の雌孔からは、ごぼつ、と白く濁った体液が漏れ出てきて――彼女が作り上げた世界地図の上へ、どろお、つと落ちていく。

――その光景をよそに、いまだ嗚咽を漏らすリリイを見つめ

――泣き声を、嗚咽を遮るように唇を押し付ける

――そして、そのまま倒れ込むと

――ネ口とリリイへ挟まれる形で、ベッドへと横たわった

――誰のとも言えない体液で濡れたベッドが、下半身に当たる

――色々とやらなければいけないことがあるが、倦怠感で体が鉛の

よう

——今は、このまま

——ネロとリリイと、余韻に浸りたかった

——再び劣情の炎が、燃え盛るまで

散り乱れる白百合と薔薇 (3) くえつくすとらく

ベッドへ倒れ込んでから数分、ある程度ではあるものの体が回復したの見計らってから上体を起こす。三人分の体液で汚れたベッドから漂ってくる獣のニオイを嗅ぎながら、眼下で荒い息を吐くネ口とリリイを見下ろす。

「……………ん、う……………あ……………ますたあ……………もお、がまん……………れきま、せん……………つ……………わらひ、の……………はじめ、て……………もらって、くださ……………ひい……………」

すると、こちらの動きを察したりリイは体を捻り仰向けになると両膝を曲げ抱えた。Mの字に細く長い脚が広げられた中心、彼女の股間で物欲しそうに開閉する雌穴を見せ付けてくるように。

ヒクヒクと蠢き、とろおつ、と白く濁った愛液を涎のように垂らす雌穴を直視してしまつては、抗うことなどできない。吸い込まれるようにリリイへ覆い被さると、彼女の痴態によつて不本意にも固さを取り戻したばかりの肉棒を当てがう。

「……………ん、う……………あ……………ツ……………きてえ……………ますたあ……………わら、ひ……………を……………あなた、の……………モノ、に……………してえ……………」

誘つてくるリリイを尻目に、いまだに横たわつたままのネ口の様子を窺うと、荒い呼吸を続け焦点の合わない瞳で虚空を見つめているのが分かる、まだ絶頂の余韻に浸っているのだろう——となれば、あとは、全力でリリイを相手するだけ。

気合いを入れ直しリリイの細い腰へ両手を添えると、首筋へ彼女の腕が絡み付いてくる。程よい力加減で引かれるままに上体を落とし、導かれるままに間近へ迫ってくる唇へ口付けると同時に腰を押し出していく。

ずぶつ、と体液にまみれていたリリイの雌孔は、何の抵抗もなく龟头を呑み込んでいく。膣壁が蠢き貪欲に肉棒を奥へ奥へと引き込んでくるような感覚は、それ自体が意思を持っているかのように肉棒へと吸い付いてくる。

「……………ん、っ……………ちゅっ……………ちゅ……………ッ……………ん、い……………あっ……………き、たあぁ……………ますたあのおお……………ッ!!」

待ちに待った肉棒が雌孔へと埋没し始めると、重なっていた唇を放したリリイは、ようやく性器同士で繋がれる悦びからか狂おしいほどの絶叫を上げる。すると首へ回る彼女の腕に力が入り、腰へ両脚が絡まり——あつという間に体は密着してしまう、胸板も、腰も。

途中、おそらく処女膜らしき抵抗を亀頭が感じたのだが、止めることができなかった。リリイに抱き締められるまま、引かれるまま、彼女が乙女である証を破ってしまった。氣遣う暇も、余裕もないままに——だが、彼女の顔に破瓜の痛みは歪んでいない。むしろ恍惚とした、蕩けたような表情。

「……………んうう、っ……………あ……………しよじよ、まくう……………やぶられ、た……………のお……………あ、ひっ……………わら、ひ……………ますたあ……………にい……………はじめ、てっ……………くう、っん……………うばわれ、って……………あ、ん……………うれしく、ってえ……………ッ!!」

両腕を首へ回し、両脚で腰を固定し、ぎゅうっ、と抱き付いてくるリリイ。それは痛みからではなく、胸中を埋めていく幸福感による無意識の行動。それに応えるように彼女の背中へ腕を回してやると、なんとも嬉しそうな笑顔が目の前に広がった。

心が繋がる喜びと体が繋がる悦びを得たリリイの脚が、さらに腰を密着させようと揺れる。さらには腰を振り、貪欲に自身の雌孔で肉棒を奥へ奥へと呑み込もうとしてくる始末——もう彼女は完全に、性欲と独占欲の虜。

「……………とめちや、やあぁ……………んっ、い……………ますたあ……………うごい、てえ……………ッ……………おちんちん、れっ……………わらひ、に……………あ、ひっ……………くしやく、て……………あちゆい、のお……………いっば、ひ……………いっばひ、そそいでえ……………ッ!!」

——見上げてくるリリイの表情に、昂ってしまう

——劣情のまま、熱に犯されるまま、焦点の合わない瞳を揺らし

——整った口元から、まるで犬のように舌を覗かせ

——あらゆる体液で汚れた顔を歪ませ

——恥ずかしげもなく、卑猥な言葉でおねだりされては

——我慢など、できなかつた

覆い被さつたまま、リリイへ抱きつかれたまま、腰の律動を開始した。じゅぷつ、じゅぷつ、と肉棒の先端辺りで彼女の膣内、その入口を拡げるように。すると膣内へ溜まつていたであろう白く濁つた愛液が、カリへ引つ掛かり掻き出されてくる。

卑猥な音と共に亀頭が雌孔へ埋まり、吸い付いてくる膣壁に扱かれながらも抜けば掻き出されてきた愛液が溢れてきてベッドシートを汚す。何度も何度も、リリイの膣内を擦り上げ——ゾクゾクと背中へ悪寒を感じた頃、一気に腰を彼女の股間へ叩きつけた。

「……………あ、ひつ……………んう……………お、あ……………ツ……………い……………あ”あ”あ”つ……………お”ち”ん”、ち”ん”……………ふが、いい……………ごりつ、れつ……………わらひ、の……………お、ぐう……………お、ごつ……………あつ……………ひつ……………いい……………ずぼずぼお……………ぎも”、ちつ……………いい”い”い……………ツ!!」

力強く腰を押し出し、リリイへのしかかりながら股間を密着させる。すると亀頭が彼女の子宮を押し潰し、固く閉じられた子宮口を強引に押し拡げた瞬間、ぎゅうつ、と膣壁が不規則に肉棒を締め付けてきた——どうやら、その一突きで彼女は絶頂してしまつたらしい。

だが、まだ終わりじゃない。

締め付けに負けじと、再び腰を引く。絶頂前とは比較にならないほど狭くなつたリリイの膣内を、圧迫してくる膣壁を、カリで擦りながら肉棒を引き抜いていく。

「……………ん”、い”い”い”……………ツ……………お”ち”ん”ち”ん”つ……………ごずれで、りゆう……………あ、ひつ……………う、あ……………つ……………お、ごつ……………わらひつ……………いつ、でりゅつ……………の、にいい……………お”ま”ん”、ごお……………まらつ、いぐつ……………ひ、ぐうつ……………んんつ……………ツ……………あ”つ……………いぐつ、いぐつ……………い、ぐつ……………つ……………いぐうう……………ツ!!」

リリイの股間、結合部から、ぶしゅつ、と潮が噴き出してきた。温かい彼女の潮を下腹部に感じながら、半ばまで引き抜いた肉棒を再度、彼女の膣内へと埋めていく。そして再開される、腰のストローク——じゅぶつ、じゅぶつ、と大きく、激しくなつた水音を聞きながら、

腰へ欲望が溜まっていくのを自覚した。

快感に腰が震え、絶頂の前兆を感じるとリリーの背中へ手を回す。肩口を密着させ、互いに耳元を寄せる格好。彼女の絶叫にも聞こえる喘ぎを至近距離で聞きながら、ラストスパートに入った。

「……………あ、あ、あ、っ……………お、ち、ん、ち、ん、っ……………ふくらん、でっ……………きたああ……………らし、てっ……………くら、さひっ……………ツ……………あんっ……………いく、のお……………とまら、にやい……………えっち、な……………お、まん、こっ……………にいっ……………おしお、きっ……………ひてええ……………ツ!!」

——ばちんっ、ばちんっ、と激しく鳴る肉打つ音を聞き

——ぶしゅっ、ぶしゅっ、と一定間隔で噴き出す潮の温かさを感じ

——リリーと密着し、体温を共有しながら

——絶頂と共に、トドメとばかりに

——腰を思いつきり彼女の股間へ、押し付けてやる

「……………あ、っ……………あ、っ……………あ、あ、っ……………すご、い、のっ……………ぐりゅうう……………お”がじ、ぐっ……………な”っ、ぢやっ……………ツ……………あ”あ”あ”あ”っ……………しゅ、きい……………あ、ひっぐうう……………あ……………だ、いつ……………しゅっ、きいい……………ツ!!」

瞬間、首へ回るリリーの両腕と腰へ絡む両脚が、すごい力で締め付けてくる。密着した体越しに彼女の体温を感じると同時、腰が抜けるような感覚と共に肉棒へ溜まっていた欲望が押し流されていくのを感じた。そして、そのまま——あらん限りの力で子宮口へキスしていた亀頭から、びゅーっつと精液を迸らせた。

びゆるっ、びゆるっ、と痙攣に合わせて一定間隔で射出される精液が、容赦なくリリーの子宮を満たしていく。それはイクっ放しであった彼女へ規格外の快感を与え、これまでで最大級の絶頂を叩き付けた。

「……………い、ぎゅっ……………ひぎっ……………あ……………あっ……………う、ああ……………」

もう、言葉を吐くことさえリリーには困難だったようだ。絶頂の余波で暴走した彼女の体は痙攣を続け、体内へ射出される精液の子宮越しに感じながら、うわ言のような声にならない声を上げていた。

間近にあるリリーの顔は恍惚に歪み、涙を始めとした唾液や鼻水で汚れている。しかし、とても幸せそう、嬉しそうに見えたのは気のせいではないと思いたい——と考えていた時、いきなり首へ回っていたリリーの両腕、腰へ絡んでいた両脚が外れたのに気付く。いまだ抱き締めている彼女の体は痙攣を繰り返していたが、完全に脱力してしまっただろう。

「……………あ……………つ……………ま……………す、たあ……………ツ……………しゆ、きい……………」

だらんっ、と両手両脚を投げ出し痙攣を続けるリリーの背中から腕を外し、徐々に腰を引いて最奥まで突き入れていた肉棒を抜く。すると愛液なのか精液なのか潮なのか分からないほど白く濁った体液が、一緒に雌孔から溢れ出てきた。

その体液の行く末を見届け、ベッドから降りる。毛怠く重い体が全力で就寝しろと訴えてくるが、今は一刻も早くシャワーを浴びたい。誰のモノかも分からない体液でベトベトした体を綺麗にしたいという欲求、そつちを優先したいから。

——だらしなく四肢を放り投げているリリーの態勢を整え

——ベッド端へと追いやられていたネロを助け出し

——仲良く寝息を立てる二人を残し、風呂場へと向かった



ふとネロが目を覚ますと、そこにマスターの姿はなかった。性交による気怠さで体が鉛のようだったが、体に鞭打ち上体だけでも、と起こしてみる——と、隣で安らかな寝息を立てているリリーを見つけ。なんとも幸せそうで、微笑んでいる彼女を見ると慈愛にも似た感情がネロの胸中へ浮かんできた。

「マスターは……………ああ、湯浴みか」

耳を澄ませば、遠くで水音が聞こえてくる。光が漏れている部屋の

方、おそらく洗面所、または浴室からだろう。できればネロも自身の体に付着した体液を落としてしまいたい、ここは風呂場へ突撃か、と考え始めた頃――

「んう……っ……あれえ、ますたあ……？」

どうやらリレイが起きてしまったようだ、彼女はネロと同じように上体だけを起すと、力なくキョロキョロと頭を巡らせる。だが探し人が見つからないことに業を煮やしたのか、隣へ座るネロへと視線を向けた。

「マスターは湯浴み中らしい、すぐに戻って来よう」

「そう、れふかあ……えへへ、せんせえ……ますたあがもどってくるまで……いつしよにい、きもちよくなりましょ……？」

「まだスイッチが入ったまま、か……やれやれ、清純な者ほど乱れれば激しい傾向があるとは良く耳にするが――まさか、此奴も」その類いの者、であったとはな

すり寄り、抱き付いてくるリレイの頭を撫でるネロは苦笑を浮かべる。嬉しそうに、楽しそうに頬を擦り寄せてくる彼女の背中へネロが腕を回した、その瞬間――ふと、どこかで小気味良い物音が聞こえた。

マスターが居るはずの方向から、ではない。

出所は、部屋と廊下を繋ぐ扉から。

「……………え？」

――不意に扉が開き、部屋へと入ってきた

――青を強調した衣服に、短いズボンと

――アホ毛が突き出た帽子がトレードマーク

――自称セイバーこと、謎のヒロインXが

「……………あ、赤……リレイ……」

剣こそ持っていないが、ヒロインXはマスターの部屋へ足を踏み入れたまま動かない。鳩が豆鉄砲を喰らったような表情を浮かべる彼女の視線はベッドの上、生まれたままの姿で横たわるリレイとネロへと向けられている。

ああ、これは誤解されてしまうな。

この状況、2人が裸でベッドで抱き合う状況を見れば誰もが思い至るだろう。それだけではない、当事者であるマスターは居ないものの、複数の体液が混ざり合ったことで獣臭が部屋に充満しているのだ。言い逃れなど、できるはずがない。

(なんとまあ、間の悪い奴め——)

さて、どうしたものか、とネロは瞬時に思考を巡らせる。時間にしては数秒、だが、不意にネロの口元が弧を描き笑う。悪戯っぽい、微笑んでいるというよりはニヤついている、と言える小悪魔な笑みを。「遅かったな、ヒロインXよ。残念だが、すでにリリイは、我等”の手に堕ちた。今宵より、此奴の師(ただし情事に限る)は余となった——つまり貴様は見限られた、というわけであるな」

「……………なっ……………ッ!!」

クツクツクツ、と邪悪な笑みを浮かべるネロ。

そう、彼女が選んだのは時間稼ぎ、ヒロインXを説得できるマスターが帰ってくるまで間を保たせる作戦に打って出たのだ。本来なら日常会話でもするべきなのだが、状況が状況。一色触発の場で、とっさにネロが思い付いたのが、いわゆる言葉遊び、冗談の類。

だが、効果は絶大だったようだ。ヨロヨロと、おぼつかない足取りでベッドへとヒロインXが近付いてくる。このまま近付かれて、いきなり攻撃されるのはネロも好ましくない。そう思い至った彼女は、抱き付いてくるリリイを引き剥がし——

「これほどの素質を持っておりながら、放っておいたのは貴様である——ほれ、”我等”の手に掛かれば、この通りよ」

——そのままネロは、リリイを盾とするように

——背中から抱き止める体勢を取った

——そして彼女の程よい大きさの乳房と

——濡れそぼった股間へと掌を忍ばせ

「……………あ、ぐっ……………いい、っ……………んんっ……………っ……………ひう、んっ……………

ああ、っ……………おまん、こお……………くちゅくちゅ、っ……………きもち、つい……………

ひ、んっ……………あ……………ッ……………く、ううんっ……………あ、ひい……………ッ!!」

ネロの指が、リリーの雌孔をほじる。ぐちゅっ、ぐちゅっ、と膣内へ溜まった愛液を掻き出すように。すると、先ほどマスターとの性行为で子宮へと注ぎ切れなかったであろう精液が——どろおっ、と垂れていく。

ガクガクと脚を震わせるリリーの股間、雌孔から白く濁った糸が引き、それがベッドへと大きなシミを作るまでの一部始終を注視していたヒロインXだったが——ベッド端まで来ると、まるで糸が切れた人形のように膝を折った。

「……あ……ああ……」

まるでこの世の終わりだ、と言わんばかりのリアクションに、さすがのネロも驚いてしまった。少しやり過ぎな気がしてきたが、ここまですべては止めるに止められない。

すでに臨戦態勢にあつたりリリーの体は、ネロの手淫によって、あつという間に絶頂への階段を登っていく。細く長い、しなやかなネロの指腹がリリーの膣内、精液を潤滑油として膣壁を擦り、もつとも敏感な部分を指先で引つ掻かれると——

「……ん、い……せんせえのお……ゆ、びい……しゅご、ひっ……きもひ、いいところお……ぐちゅぐちゅ、っ……れっ……あ、ひっ……あ、んっ……ッ……やあっ……ひ、ぐう……いくっ、いくっ……い、つぐう……ああ、あっ……で、りゅうう……ッ!!」

ぶしゅーっ、と勢いよくリリーの股間から潮が噴き出した。度重なる絶頂、度重なる性行で混ざり合った体液ごと。噴水のように噴き出ていった潮は綺麗な弧を描き——二人の正面、ベッド脇へ座る形となつたヒロインXへと迸った。

びちゃびちゃっ、と生暖かい体液を顔だけに留まらず全身に浴びるヒロインX。白く濁った体液が彼女の帽子へ、頬へ、口元へ、全身を染めていく——だが、むあっ、と立ち上る獣臭に鼻先を焼かれ、視界を白く濁った体液で塞がれても、ヒロインXに反応はない。ただただ、リリーの痴態を凝視していた。

「……あ、っ……あ、へえ……わら、ひい……あ、んっ……ひ、ひよお……にい……そそお……ひちやい、まひたあ……ひ、あ……ごめっ

「……な、ひやいい……」

びくんつ、びくんつ、とネロに抱き止められたまま痙攣を繰り返すリリイ。そんな彼女は雌孔から指が抜かれ、拘束を解かれると、ずるつ、ずるつ、と緩慢な動きでベッド脇へ座るヒロインX近付き手を差し伸べ――

「……ん、あ……ひひよ、お……も……いつ、しよ……にい……」
「……………え？」

体液まみれのヒロインXへリリイは身を乗り出すと、いきなり口付ける。ただ、体の自由が利かないのか、そのままベッドから落ちてしまった――その様を見ていたネロは驚くも、眼下から、ちゅつ、ちゅつ、と唇が大きく吸い付く音と、唾液が交換される水音が聞こえ始めたのに安堵の息を吐く。

(少しやりすぎたかもしれんが、マスターの部屋が守れたし良しとするかの。あとはマスターの帰還を待つばかり、だ――うむつ、我ながら良い采配であったなッ!!)

――ベッドの上へ座り、むふーつ、と満足げなネロ

――その眼下、ベッド脇の床の上で

――リリイとヒロインXが抱き合い、舌を絡めている

――どうやら、もう少しばかり続きがあるらしい

――この淫靡で、淫らな、混沌とした性教育は

散り乱れる白百合と薔薇（4）　くえつくすとらく

シャワーを浴び終えて部屋へ戻ってみると何故かヒロインXとリイがベッドの上で肢体を絡め合っていた、全裸で——あ、いや、何故か帽子だけは被っている。かすかな抵抗の証だろうか？

ともあれ、それ以外の衣服。脱がされたであろう彼女の衣服やズボン、下着がベッド付近へ散乱している辺り、リイに剥かれたとみて間違いない——それにしても、ヒロインXの上へリイが覆い被さり、キスの雨を降らせているのは何とも官能的というか、とても目に毒だ。

まったく予想していない状況、急展開を目の当たりにして軽い頭痛が襲ってくる——ネロとリイをベッドへ捨て置きシャワーを浴びていた数十分の間に、いったい何があったのだろうか？

「——おお、ようやく戻ったか、マスター」

すると、ベッド脇からネロが近付いてくる。「にやはは」と、どこかバツが悪そうに微笑みながら。ものすごく嫌な予感と、かすかな怒りが込み上げてくる——が、その負の感情は、とりあえず棚上げ。たぶん“この状況”を作り上げてしまったのであろう彼女へ、にっこりと微笑みかけてやる。

「どういうことか、説明してくれるよね？」

「何か言いたいことがあるでしょ、聞聴くよけ？」

「……………う、うむ……………ッ……………実は……………」

かくかくしかじか。

つまり、ヒロインXが部屋へ入ってきて、ネロとリイが裸で抱き合っていたのを見られたのが始まり。このままではヒロインXが暴れてしまう、と思いネロは機転を利かせ——コトもあろうに、リイを寝取ってやったと嘘を吐いて時間を稼稼ごうとした、と。

時間を稼ぐなら、もつと別の話題もあったと思うのだが、もはや後の祭りだ。その事実の後始末とかヒロインXへの言い訳とか、そういうの諸々、全てが面倒になった。先のコトを考えるのは止めよう、とりあえず今やるべきコトは――

「マ、マスター、大丈夫か？ 目が据わっておるぞ？」

ああ、まずは、お仕置きが先か――

どこか怯えたようすを見せるネロの華奢な肩へ腕を回し、促すようにベッドへと歩み寄る。すると、ベッドの上で組み合っていたリリイとヒロインXが顔を上げた――上気し浮わつた瞳のリリイは淫らかな笑顔、対してヒロインXは無表情、心ここに在らずといった様子。まずは、謝らせないと。

ベッドの傍らまで導いたネロが、不安そうに見上げてくる。だが、ここは心を鬼にしなければならぬ。肩から手を放し、自由になった掌を――するつ、と彼女の股間へと忍ばせた。

「……マ、マス……っ……あ、ひい……ッ……ッ!!」

暖かく、湿ったネロの股間へ掌を滑らせ、容赦なく指先で彼女の雌孔を探る。柔らかい肉、ヒダの感触を指腹へ感じると、苦もなく卑猥な涎を垂らす下の口を見つけ出すことができた――制止しようとネロが口を開いたようだが、言葉は吐かせない。入口辺りで溜まっていた粘り気を指先へ附着させると、中指を、そのまま一気に雌孔へ突っ込む。

ドロドロとした蜜が充満し、火傷しそうなほどに熱いネロの膣内へと侵入させた指。きゅっ、きゅっ、と指を締め付けてくる膣壁へ指腹を押し付け、激しく抜き挿しを繰り返す――ぐぢゅっ、ぐぢゅっ、と膣内で溜まる体液を掻き出すように。

「……んぎい、っ……あ、んんっ……ひい、う……あっ……あ、っ……ああっ……ひい、んっ……いぎ、なりい……っ……お、あ……は、げじい……ん、あっ……いい、んっ……で、りゅう……だされ、たのお……でりゅううう……ッ!!」

立ったまま雌孔を指でほじられるネロは脚をガクガクと震わせ、雌孔から白く濁った体液を溢れさせる。愛液と精液が混ざり合った体

液が、どろおつ、と糸を引きながら床へと吸い込まれていくのを尻目に――たまらず寄り掛かってくるネロへ、努めて優しく囁いてやった。

――”嘘を吐くなんて、いけない子だ”

――”そもそも、君達は誰のモノだっけ?”

――と

そして寄り掛かってくるネロの体を、股間を起点にしてベッドへと投げ出す。すると勢いよくヒロインXとリリーの隣へ寝転がる形となったネロは、大きく片足を持ち上げ開脚――あられもなく雌孔を弄られる快感で歪む、なんとも淫らな表情を二人へ曝す。

「……………あ、ぐっ……………いいっ……………ツ……………う、ぞっ……………つい、でえ……………ん、あ……………ごめ、なっ……………ぎっ、いいい……………お、ごっ……………よ、もお……………り、りい……………もお……………ましゅ、たあ……………のツ……………なのお……………んいいっ……………ますっ、たあ……………ちん、ぼっ……………のっ……………とり、こっ……………な、のおお……………ッ!!」

ヒロインXとリリーの二人へ顔を寄せ、雌孔へ指を突っ込まれ、膣壁を擦り上げられる度にネロは喘ぎながら、うわ言のように謝罪し続ける。ぶぢゅっ、ぶぢゅっ、と愛液とも潮とも取れない体液を股間から噴き出しながら――と、その時だ。

ヒロインXへ覆い被さっていたリリーが体をズラすと、ヒロインXを挟みネロの反対側へと寝転がる。そして半身だけで振り返ると、下半身をこちらへ向けてきた。自ら膝裏へと腕を差し入れ、片足を高々と持ち上げるように――限界まで広げられた脚の付け根で、呼吸と連動し口を開閉させる雌孔を見せつけるように。

「……………ああんっ……………ネロさんだけえ、ずるい……………れす……………ツ……………わらひ、もっ……………ますたあ、のっ……………も、の……………なのお……………ますたあに、おしおきい……………されたい、のお……………ああっ……………ますたあ……………わら、ひもお……………ん、う……………わらひに、もお……………おしおき、してっ……………くだしやいい……………」

息荒く淫らな表情を隠しもせず、リリーが懇願してくる。その劣情に突き動かされるまま、愛液という涎を垂らす彼女の雌孔が、早く、早

く、と急かすように蠢いていた——リリイにはお仕置きをする必要はないのだが、求められたのなら応えるべきだろう。

幸いなことに、腕はもう一本ある。

空いていた方の手、掌を物欲しそうにヒクヒクと開閉するリリイの秘部へと当てる。入口で溜まりに溜まった愛液を掌と指に絡ませると、指先を曲げ彼女の雌孔へ徐々に、沈み込ませていく。

こちらの意思など無関係に吸い付き、呑み込もうとしてくる様は卑猥の一言。あつという間に指は根本まで雌孔に呑み込まれ、リリイの膣壁が、きゆうつ、と締め付けてくるのを感じた。

「……………あ、ひい……………ましゆたあのっ、ゆびい……………っ、きたああ……………やあ、っ……………せつ、なひっ……………やらっ、やらああ……………うぐひ、てえ……………ぐちゆぐちゆ、ひてええ……………ツ!!」

たまらず嬌声を上げたりリイが、いやらしく腰を捻り股間を掌へ押し付けてきた。その圧迫に負けじと呑み込まれてしまった指を曲げ、膣壁を引っ搔いてやる——すると彼女のザラザラとした膣壁が締め付けを強めてきたのを、指越しに感じられた。

「……………あつ……………あああ……………ぐちゆぐちゆ、い”い”のお……………ましゆたあ、のおっ……………ツ……………あひっ……………んっ……………わらひ、のっ……………おま、んこっ……………も、つとお……………いじ、めっ……………てっ……………くだ、ひやつ……………いい……………ツ!!」

「……………う、んんっ……………ああ、ひっ……………で、りゆ……………ツ……………ださ、れ……………てりゆっ……………ますたあ、のっ……………どろど、ろっ……………せえ、ひっ……………うああつ……………こお、てえ……………まん、こお……………かきっ……………ませら、れっ……………て、りゆううっ……………ツ!!」

あつという間に快感の虜となり、だらしなく淫らな表情を浮かべるネロと、リリイ。彼女達は秘部へ容赦のない愛撫を受け、雌孔をほじられ、膣内^{なか}で溜まつていた精液を掻き回され、濁った体液を掻き出される度、意識が飛びそうなほどの快楽に脳髓を、理性を焼かれていく。

——彼女達の嬌声、獣臭が漂ってくる

——その場に居合わせた者へ熱と、昂り、劣情を伝染させていく
「……………う、あ……………ます、たあ……………」

横たわり獣のように喘ぐネ口とリリイに挟まれ、ひたすらに沈黙を保っていたヒロインXが、不意に口を開く。甲高い嬌声と激しい水音に鼓膜を犯され、鼻孔を焼く獣臭を通して彼女達の快感、熱が彼女にも伝搬してしまっただろう。

ヒロインXの顔、そして首筋、乳房、引き締まった腰や腹部にさえ、リリイが刻んだと思われるキスマークらしき充血が見える。ああ、なるほど、もう準備は整っていたということか——ネ口の嘘に踊らされ、リリイに愛されたヒロインXの心境を知る術はない。だが、一つだけ、はつきりしていることがある。それは、いま彼女が、欲情しているという事実。

「……………ん、にやあああつ……………きもち、いつ……………のおお……………ツ……………こおてえ、まんつ……………こおつ……………ますたあ、に……………いじめられ、へ……………よろこんで、りゅつ……………あ、ひつ……………がまつ、んつ……………でき、にや……………ひつ……………あ、ぐうう、んつ……………お、あ……………い、いぐつ……………いぐ、いぐつ……………い、ぐうつ……………こおてえまんこ、つ……………いつ、ぐううう……………ツ!!」

そんなヒロインXを尻目に、雌孔をほじられ悶えていたネ口が悲鳴にも似た嬌声を上げた。細身な彼女の胸元で揺れる豊満な乳房、充血した乳首を自分で慰めながら、雌孔を責め立てられる快感、沸き上がってくる劣情のままに絶頂への階段を駆け上がっていく。

「……………ああ、んつ……………こ、れえ……………しゆきいつ……………ましゆ、たあ……………のつ……………ゆびい……………ながくつ、てえ……………ごりごり、つてえ……………わら、ひつ……………のつ……………あ、んつ……………な、かあ……………こすつてりゅううつ……………ん、ああつ……………しゆきい、つ……………ましゆ、たあ……………しゆきい……………もお、ましゆたあ……………じやな、ひつ……………と……………らめええ……………いぐ、のお……………ましゆたあのれつ……………いぐつ、のおお……………ツ!!」

ぐいつ、ぐいつ、と自らの股間を掌へ押し付けてくるリリイ、その行動は指どころか掌まで求めてくるかのような勢い。きゅつ、きゅつ、と伸縮し指を締め上げてくる彼女の膣壁を擦り上げていたが——絶頂への予兆を察し彼女の最奥、固く閉じられた子宮口を指先で小突いてやる。

そして、次の瞬間——

「……………んいつ……………ひつ、あ……………いぐうう……………ツ!!」

「……………つ……………あ、んんんつ……………い、つくうう……………ツ!!」

二人は、同時に達したようだ。

びくんつ、びくんつ、と体を痙攣させ絶頂の波を受け止めるネロとリリイ。千切られそうな締め付け、熱くドロドロした膣壁の感触を両の指に感じながら眼下の二人の様子を伺う――

自分の豊満な乳房へ指を埋め形を歪ませ、固くなった乳房を摘み、だらしなく舌を覗かせ、絶頂の余韻に浸り、恍惚とした表情を浮かべるネロ――その淫らな表情には、皇帝の威厳など微塵も残っていない。荒く呼吸し、快感に振り回され、絶頂の衝撃に脳を焼かれ、陸に打ち上げられた魚のように何度も体を跳ねさせる姿は、どこかケモノじみていた。

対してリリイは、ベッドシーツを握り締め絶頂の荒波を受け止めていた。ネロと同じように、びくんつ、びくんつ、と体を跳ねさせながら。残念なことにベッドへ顔を押し付けているので表情は確認できない――が、その代わり、掌へ何やら温かい水気を感じた。見れば彼女の秘部からは愛液や精液とは違う、少し黄ばんだ液体が溢れてくる。それは絶頂で弛緩した彼女の体、尿線が決壊した証。

その様子に満足し、盛大に絶頂した二人の雌孔から指を引き抜く。そして、ドロドロした体液で真っ白に染まる指、掌を用いて彼女達の秘部や臀部を労るように撫でてやると――ふと、視線を感じた。

「……………あ、のっ……………ます、たあ……………」

声の主は、ネロとリリイに挟まれる形で横たわっていたヒロインX。帽子の鏢の奥で鈍く光る淡いエメラルド色の瞳は、周囲から漂ってくる獣臭、いまだに鼓膜で反響する二人の嬌声、そして劣情と期待のせいかな僅かに揺れていた。

「……………もお、あたまっ……………まっしろ、で……………りりいのこと、とか……………あかの、こととか……………ぜんぶ、どおでも、よく、てっ……………ただ、あ、の……………ツ……………」

つつつ、とヒロインXの瞳から涙が溢れていく。”リリイをネロに寝取られた”という悲しみと、それが嘘であった安堵感、そして劣情、

あらゆる感情で彼女の思考は上手く纏まらないのだろう——そんな頭の回らない彼女が取れる行動、それは本能に従うこと。

「……わたしも……ますたあのもの、に……なりたい、です……」

ネロとリリイに習ってか、ヒロインXは腕を自身の膝裏へ差し入れると躊躇いがちに、だが、ゆっくりと持ち上げ、左右へ開いていく。そして、自ら股間を見せつけてくる——昂りのままに漏れた愛液に濡れる、自分の最も大切な隠匿すべき器官、物欲しそうに小さく口を開ける割れ目、雌孔を。

——そんな彼女の必死な”おねだり”を目の当たりにして

——誰が拒めるものか

ベッドへ膝立ちになり、彼女の脚の間へ陣取る。シャワーを浴びたことで充分とは言い難いが休息は取れた、あと一回、ヒロインXの望みを叶えることくらいはできるだろう。

ヒロインXの細く華奢な腰を両の掌で固定し、腰を彼女の股間へと近付ける。先の”お仕置き”、リリイとネロの手淫によって昂っていたのだろう。すでに固くなっている肉棒を、彼女の割れ目へと擦り付けた——裏スジへ走る快感によって漏れた先走りを、割れ目へと擦り付けるように。そして、彼女の愛液を肉棒ですくい上げるように。

「……ん、う……あ……っ……あ、っい……」

敏感な割れ目から感じる肉棒の熱さと感触に、ヒロインXの表情が変わっていく。這い上がってくる未知の感覚、物理的な快感に彼女は若干ではあるが、恐怖しているのだろう——無理をすることはない、止めようか、と提案するも彼女は首を振る。おそらく昂った心を、劣情に突き動かされる体を止められないのだろう、”お互いに”。

——腰を揺らし、亀頭でヒダに隠れていた雌孔を探り当てた

——くちゅっ、という音は、準備が整った合図

——ここから先は、もう戻れないだろうし、止められないだろう

——もう一度、眼下で震えるヒロインXの様子を伺うと

「……きて、ください……っ……ます、たあ……あい、して……ます……」

――彼女は頬を染め、少し口ごもりながら、微笑んでくれた

――その想いに応えよう、そう決心すると

――ゆっくり腰を打ち出し、亀頭を彼女の雌孔へと埋めていった

散り乱れる白百合と薔薇（5） くえつくすとらく

ヒロインXの雌孔へ亀頭の先端を当て、すでに漏れ出ていた愛液を潤滑油として徐々に埋没させていく。その感触は背中を震わせ、思いつきり腰を打ち出したいという欲求に駆られるほど強烈な快感——堪えるのも一苦労だ、気を抜けば本能の赴くままに彼女を貫いてしまいかねない。

昂り、荒ぶる本能を理性で強引に静めながら、努めて緩やかに、優しく腰を押し出していく。途中、異物が体内へと侵入してくる違和感のためか、ヒロインXが体を捻ってきた。その動きは肉棒を通して、全身へ鋭い快感を走らせる——

「……………い……………んんんっ……………ツ!!」

痛覚があるのだろうか、組み敷くヒロインXの表情は苦悶に歪んでいる。痛み、違和感から逃げてしまう無意識下の行動だろう——無理は駄目だ、そう判断し押し出していた腰を止め、逆に引いてみた。すると、ヒロインXの牝孔へ隠れていた亀頭が顔を覗かせる。

そう、まずは、慣らすことから始めよう。

再び腰を、ゆつくりと押し出す。すると再び亀頭がヒロインXの牝孔、その入口を押し抜け埋もれていく——あとは、この繰り返し。すこしだけ亀頭を埋めたら、腰を止める、すこしだけ待って、ゆつくりと引き抜く。何度も、何度も。

「……………ん、っ……………う……………い、ん……………ふ、う……………んんんっ……………ツ!!」

くちゅっ、くちゅっ、と音を立て、亀頭だけで何度も牝孔の入口を押し抜ける。緩慢で、もどかしい腰のストローク。動くたびに微弱な刺激が腰から駆け上がってくる、本能が気遣いを止め思いつきり腰を振れ、ヒロインXを犯せと訴えてくる。

だが、それは駄目だ、耐えなければならぬ。好きだと言ってくれた、慕ってくれた、そんな彼女を身勝手な欲望で蹂躪するのだけはいけない——せり上がってくる快感を、暴れ出しそうな本能を、理性だけで繋ぎ止める。

「……………あ……………し、しよお……………」

「……ん、む……」

と、そこでタイミング良く、組み敷いて痛みに抗うヒロインXの隣で氣をやっていたリリイとネロが目を覚ました。まだ先の手淫による絶頂の余韻が残っているのか、どこか二人の動きは緩慢。

しかし徐々にはあるが状況を呑み込めたらしい、妖しげな笑みを浮かべた二人は喘ぎ悶えるヒロインXの体へと絡み付いていく。四肢を回し、体へ顔を寄せ——

「……まったく、仕方のないやつめ。ここはマスターのために、一肌脱いでやるとしよう……光榮に思うが良い……」

「……ん、う……わら、ひもお……おてつだ、い……ひましゅ……」

そんな言葉と共に、二人はヒロインXの慎ましい乳房、その双丘へと口付ける。ちゅっ、ちゅっ、と吸い付くように唇を這わせ、時おり舌を覗かせ丹念に、未発達な乳房がねぶられる。

「……ん、っ……い……ああ、んんっ……ッ!!」

下半身、牝孔を肉棒で貫かれる感覚と、乳房を始めとして脇腹や腰を這い回る二つの唇、二つの舌による微弱な刺激がヒロインXの痛覚を砕く——同時に、理性と羞恥心も。

「……あ、んっ……う、ああ……あっ……こ、れえ……ぞくぞく、くっ……す、りゆう……あ、あっ……あああ……あた、まつ……おかしく、なっ……ッ……あひいつ……おねがっ、やめて……ぐだっ、さ……ッ!!」

ちゅっ、ちゅっ、とネロの舌がヒロインXの脇腹や腰を経由し下腹部を巡り、下へ下へと下りていく。それに対してリリイは乳房の中心、赤く勃起した乳房を舌でねぶった後、鎖骨や首筋を経由しヒロインXの頬を通り過ぎ耳元へと顔を寄せていく。

そんな二人の援護を得たおかげか、ひたすら亀頭のみで刺激していたヒロインXの牝孔、その入口の抵抗が緩んでいることに気付く。これならば、と思い——徐々に、徐々に、前後させていた腰を押し出していく。

みちみちっ、とヒロインXの膣内^{なか}、ぴったりと閉じていた膣壁を掻き分けながら肉棒を牝孔へと埋めていく。そして、とうとう、彼女が処女である証と亀頭が触れ合ったのを感じて察知した。

「……ん、いつ……っ……あ……」

どうやら、彼女もそれに気付いたようだ。甲高い喘ぎ声を発していた口を引き結んだかと思うと、帽子の鏝で見え隠れする彼女の瞳が揺れ——蚊が鳴くような、とても小さな声が、聞こえた。

——”ほしい”と

瞬間、腰を一気に押し出し、亀頭が感じていた引つ掛かり、ヒロインXが処女である証を強引に挿し貫いた。

「……ん、い”……あ”あ”あ”っ……お、あつ……ッ……ん、んつ……お、かしつ……いた、いのつ……なれて、りゅ……はずなのに……こ、れ……むりつ……いたつ、ひ……のにい……きもち、よくて……あ、はあつ……んんつ……しあわ、せ……れっ……んつ、い”い”………こんな、のお………こんな、のつ………しら、なつ………いい………ッ!!」

破瓜の痛み、膣内を突き進む肉棒が膣壁を擦るたびに訪れる強烈な快感、そして全身へ微弱な電流のように流れるネ口とリリイの唇と舌の刺激、その全てがヒロインXの脳を犯し、焼き切った。

振り切れた理性は、もはや沸き上がってくる衝動と本能を押さえ付けることができなかつた。ヒロインXは両手でシーツを固く握りしめ、全身を這うネ口とリリイの唇、舌の感触に体を火照らせ、膣壁を搔き分け体の奥深くへ侵入してくる肉棒の熱と快感に酔いしれる。

「……ん”い”い”い”………お、ぱいもお………お、あ………おまん、こもお………ぐちゃぐちゃ、れっ………く、るう………くるっ、ちやうう………おかひ、くっ………なりゆううっ………お、ぢるう………ッ………あひ、いつ………ましたあ、にい………おと、ざれ………りゆうう………ッ!!」

狂おしいまでの絶叫がヒロインXの口から上がる、それと同時に亀頭が、とうとう彼女の最奥、子宮口を小突く——瞬間、頭の中で理性の糸が、ぷちんっ、と切れてしまったのを自覚した。

もう、衝動を止められない。空いていた両手でヒロインXの細く余分な肉の無い腰を掴むと、一度だけ腰を思いつき打ち出し彼女の股間とぶつけ、子宮口へと亀頭を押し付けてから——その反動を利用して、一気に腰を引く。

「…………お” あっ…………ツ…………ん、あ” あ” あ” ……ツ!!」

子宮を押し潰され、ヒロインXの背中が震えた。だが、次の瞬間、引き抜かれていく肉棒から叩き付けられる快感が彼女を絶頂へと引き上げる——すでに肥大化し固くなったカリが、膣から出ていく途中、盛大に膣壁を擦り上げていったのが原因だ。

膣内^{なか}で溢れる愛液を肉棒の力りによって掻き出されると、まるでそれに合わせるかのようにヒロインXの股間から潮が噴き出してくる——ぶしゅっ、ぶしゅっ、と生々しい音が部屋へ響くが、誰も聞こえてはいない。

「…………ししよお…………あ、んっ…………ししよお、もお…………わらひたび、と…………いっしよ、れすう…………んんっ、いっしよ、にっ…………ますたあの、ものにつ…………なりまひよお…………」

ヒロインXの耳を、首筋を、頬を舐め上げキスの雨を降らせていたリリイが囁く。時おり漏れてくる嬌声は自分で自分の性器、牝孔をほじることによつて得た快感によるもの——ヒロインXの隣へ寝転がり一心不乱に自慰へ耽る彼女は、まさに発情期の牝獣。

「…………そお、らっ…………おま、へもお…………よ、やつ…………りりい、といっしよ、にい…………ますたあ、のっ…………おちんちん、のっ…………とりこ、にっ…………ツ…………そおすれば、もつと…………きもちよく、なれるやもしれん、ぞ…………」

いつしかネロが、リリイと同じようにヒロインXへ顔を寄せていく。キスができるほどの距離で囁かれたネロの言葉、誘惑。今でさえ気を抜けば意識を失いそうなほどの快感に震えるヒロインXに、その言葉は甘く魅力的すぎた——完全に蕩けきつた顔を隠そうともせず、さらなる快感を求め、ヒロインXの瞳が劣情に揺れる。

「…………なりゆっ…………なりゆううっ…………わらひも、ますたあのものになりゆううっ…………お、んっ…………おちんちん、のおっ…………とりこになりゆううっ…………おちんちん、しゆきいっ…………これなひ、とお…………いきてけなひっ…………あんっ…………お、ぢるっ…………おぢるっ…………おぢ、たいい…………おど、じっ…………てええ…………ツ!!」

リリイとネロの甘い誘惑の言葉、そして乱れに乱れ恥ずかしげもな

くんつ、と肉棒が痙攣し玉袋から欲望が駆け巡っていくのを自覚する。

そして――

「…………し、しよお…………あ、んっ…………し、しよおっ…………ツ!!」

――必死に自身を慰め、甲高い喘ぎを上げたリリイ

「…………ん、う…………じつに、よい…………よ、もっ…………いくっ…………ツ!!」

――悟られぬよう自慰をしながらも、平静を装っていたネロ

――そして、ヒロインXも

――同時に、絶頂を迎えた

「…………い、んんっ…………いぐっ、い、ぐっ…………ますたあのっ…お、あっ…………おちんちん、れっ…………いつっ、ぐううう…………ツ!!」

瞬間、ぎゅうつ、と膣壁が肉棒へ吸い付いてきた。それを見計らい、我慢に我慢を重ねた欲望を吐き出そうと、思いつき腰をヒロインXの股間へ叩き付け――肉棒を、龟头を子宮口へと押し付け、駆け巡ってきたソレを解き放った。

爆発させた欲望、龟头の先端から噴き出た白濁、精液が容赦なくヒロインXの子宮へ注がれていく。痙攣に合わせて、びゆるっ、びゆるっ、と子宮内を白へ染めていく、蹂躪していくのを感じた。

――だが、まだ終わりじゃない

子宮を押し潰すほどに打ち出していた腰を、一気に引く。龟头の先端へ吸い付いてきていた子宮口を強引に引き離し、ヒロインXの膣内を精液で白く染めながら――勢い良く、肉棒を牝孔から引き抜いた。すると、まだまだ勢いの収まらない精液が、びゅーっ、と弧を描き降り注ぐ。顔を寄せていたリリイ、ネロ、ヒロインXの元へと。

「…………ん、あ…………くしゃい、のお…………きたああ…………」

――スンスンツ、と鼻を鳴らし悦に浸るリリイ

「…………あ…………れろっ…………ん、ちゅ…………あ、んむっ…………」

――大きく開けた口内へ飛び込んできた精液を舌で転がすネロ

「…………あ…………う、あ…………ああ…………」

――浴びせられる精液を虚ろな瞳で見上げるヒロインX

精液を恍惚とした顔で受け止めた三人は生臭い獣臭に鼻孔を焼か

れ、だらしなく開けた口の奥で顔を覗かせる舌で苦味を確かめ、汚され、染められても——誰一人、その表情に嫌悪感を浮かべることがなかった。

そして数秒の後、すべての精液を放ち終えたところで身を乗り出し顔を寄せる彼女達の鼻先へ肉棒を近付けていく。むあつ、と獣臭が漂う肉棒が突き付けられると、誰からとも言わず、彼女達は舌を突き出し——

「……ますたあ、のお……くしゃいのお、すきい……れろっ……」

——片側を貪欲に、丹念に肉棒を舐め上げてくるリリイ

「……れろっ……んっ……ぺろっ……あっ……んっ……」

——ただただ、付着した精液を舌先で舐め取ってくるネロ

「……ツ……んっ……ぺろっ……っ……これ、が……ますたあ、の……」

——控えめに、熱と形を確かめるように肉棒へ舌を這わすヒロイン

X

——彼女達が仲良く”お掃除”する光景を見下ろしながら

——達成感と、罪悪感と、かすかな期待を胸に抱く

——願わくば、これからの彼女達が仲良く、いがみ合うことのない

——確かな信頼関係が、築かれていることを

↳後日談↳

あの夜を境にネロ、リリイ、ヒロインXの関係が少しだけ変わった。劇的ではない、ほんの些細な、それこそ常日頃から彼女達を注意深

く見ていなければ気付かないほどの小さな変化——それは、とても喜ばしい変化だった。

「赤、今日という今日は貴女を秘密勝利剣エックスカリバーの錆にして差し上げます、貴女が居てはリリイに悪影響が出ますから。すでに手遅れな気がしないでもありませんが、まあ、それは良いです——ぶつちやけマスターに頭を撫でてもらえる機会が減るのは嫌です、許せません、我慢なりません。赤・即・殺です」

「うむっ、そこまで言われては余も捨て置けぬぞ。余とてマスターに良くやったと褒めてもらったり、頭を撫でてもらいたい故な——代わりと言っては何だがリリイは貴様にやろう、これで全て解決ではないか」

「……………ふええ……………」

エントランスで睨み合うネロとヒロインX、そして二人の傍らで涙目になっているリリイを見付けた。それにしてもヒロインX、彼女はリリイのためにと言いながらも”マスターに頭を撫でてもらいたい”という本音がだだ漏れである。

さらに追い討ちとばかりにネロは、リリイを悩むことなく差し出した、即答である。仲裁しようとしていたはずのリリイはヒロインXとネロに即答で切り捨てられて涙目、いくらなんでも不憫すぎるだろう。

「こら、ケンカは止めなさい」

「仲良くしろ、って言ってるじゃないか……………」

リリイを不憫に思い、代わりに仲裁へ入ることにした。このままでは、エントランスが本当の修羅場になってしまいそうだったから——逆に言えば、まだ今なら事態を收拾することができると思ったからだ。

ぎよっ、とした顔のヒロインXとネロを尻目にリリイへ近づくと、

慰めの意味も含めて優しく頭を撫でてやる。するとリリイは「えへへえ」と嬉しそうに紅潮した頬を緩ませた、くそう、可愛い。

「……………むう……………」

——頬を膨らませるネロ

「……………ぐ、ぐぬぬ……………」

——悔しげに唸るヒロインX

そう、嬉しい変化の意味は”コレ”だ。

最も大きな変化はヒロインXの優先順位が変わったこと、おかげで随分と彼女は扱いやすくなった。前まではセイバーを抹殺するだの、神を殺すだのと物騒極まりないことを口走る上に止めても聞かない、まるでブレーキが壊れた暴走列車を相手にしているような虚無感に苛まれていたにも関わらずだ。

対してネロも以前に比べてトゲが無くなったというか、丸くなったというか、簡単に言えばワガママが減った。

問題、というか少し厄介な変化が起きたのはリリイだ。ここ最近、妙に嬉しそう、浮かれているとも言える。おまけに、やたらと甘えてくるようになった、頭を撫でてやっている今のよう——ともあれ、実害が無いので指摘してはいない。

「マスター、リリイばかりでは不公平だ、余も撫でよ」

「そうです、私にもなでなでを要求します……………3時間くらい」

と、いつの間にかヒロインXとネロが詰め寄ってきていた。いかにも不満そうに頬を膨らませ、スネているような表情で見上げてくる二人。よしよし、良い感じに嫉妬してきた、ここまでくれば事態の收拾は完了したも同然。

——ヒロインXとネロ、二人の顔を交互に見比べ

——最後に努めて笑顔で言い放ってやる

——”ケンカする悪い子にはしてやらない”、と

するとヒロインXとネロは、顔を伏せ肩を震わせた。嗜虐心が刺激されるが、これ以上やってしまうと後が怖い。リリイから掌を浮かせると、反省した頃を見計らって二人の頭を撫でてやる——”ケンカ禁止”と付け加えて。

「……うむっ、善処する……」

「……………はい」

やや不満そうにしながらも、二人は素直に頷いてくれた。もつとも、この”ケンカ禁止”という約束の効力は長くて数日、早ければ数時間しか保たないのだが——まあ、止まらないよりはマシと言えるので黙っておく。

——そして、この後、数時間に渡り三人へ

——滅茶苦茶なでなでさせられた

アルテラ 編

されど古の戦闘王は只人の夢を見る (1)

——ああ、これは、夢か

荒れた大地、渴いた風、どこまでも平坦で変化に乏しい無人の荒野へ立っているのは一人の少女。灰色の雲から漏れ落ちてくる儂い陽光に照らされた肌は褐色、風に靡くヴェールの下は白銀の髪。

彼女の者の名はアツテイラ、フンヌの大王にして戦士。そして神の鞭との異名を持つ彼女が手にしているのは、もはや兵器と呼ぶに相応しい大宝具、ありとあらゆる文明を破壊し尽くした軍神の剣。

——あれは、過去の私か

そう、これは夢。

彼女の心象風景、文明の終着点。

遙か空の上から自分自身を見下ろしているような感覚、その俯瞰風景を瞳に映すアルテラは、”この光景”が夢であることに気付いている。

何故なら”この光景”は、自身が持つ宝具、軍神の剣によって文明を破壊し尽くされた光景。軍神の剣を担い、その行為を繰り返してきた彼女にとっては、見慣れた光景だったからだ。

——何故、今さら

アルテラは、このような夢を見ていることに疑問を抱いた。今の彼女は、とある世界、とある時代、とあるマスターの元へサーヴァントとして召喚された身——”今”がどうであれ、”この光景”は事実であり、ただの経験に過ぎないのだから。

その時、ふと眼下、荒野に佇む自分自身へ近づく人影が見えた。白い衣服と、跳ねた黒髪が特徴的な男性——遠目ではあるがアルテラは人影、自分自身へと近づく彼を見て驚きを隠せなかった。

——あれは、マスター？

アルテラが見る男性の容姿は、彼女のマスターに酷似していた。彼

は荒野へ佇む自分自身へ駆け寄り、何やら話しかけているように見えるが声を聞くことは叶わない。その時、彼女は見てしまった——直立不動であった自分自身が、握りしめていた軍神の剣を高々と掲げるのを。

——な、何をッ!? まさか……ッ……やめろッ!!

アルテラは、これが夢であると分かっていた、理解していた。だが、目の前で起ころうとしている惨劇に彼女は声を張り上げてしまう。どうにもならない、聞こえない、止まらない、それを頭では理解していても声を上げずにはいられなかった。

初めて会った、共に居て安らげる相手。

そんな彼に向けて掲げられる、軍神の剣。

それでも、能面のような表情を浮かべる自分自身。

そして、降り下ろされる三色の凶刃。

正面から降り下ろされた三色の凶刃が、彼の肩口から腰までを斬り裂く。すると衣服の奥へ隠れる肌が、肉が、臓器が破壊された。その傷口から大量の血を溢れさせているのが、その証だ。そんな目を覆いたくなるような惨劇を目の当たりにし、斬撃を受けた彼が勢いのままに背中から倒れていくのを見てアルテラは——

——あ……あ……っ……いやあああああッ!!

その口から、絶叫を迸らせた。



「……っ……あ……はあ、はあっ……ッ……ッ!!」

悪夢から目覚めたアルテラは意識が覚醒すると同時に、溜まっていた息を吐き出した。肩で息をし、自身を掻き抱く彼女は今、自室のベッド上で壁へ背中を預けている。

熱い吐息が暗闇へ溶けていく中、アルテラは掻き抱く自分の体が震えていることに気付いた。覚醒直前まで見ていた光景、自分自身がマ

スターへ剣を降り下ろし、その命を”壊した”恐怖が彼女を襲う。

「……ッ……はあ、はあっ……あのっ……夢、は……」

悪夢を思い出して、アルテラは顔をしかめた。

数多の文明を破壊してきたアルテラは、自らの意思で命を壊したことはない。あまりにも強力な宝具の余波で望まぬまま命を壊してしまふことはあるが、それは彼女の意思ではなかった——しかし、先の悪夢、自分自身がマスターへ剣を降り下ろす光景は彼女を戦慄させた。

——あれは紛うことなく、自分

——見ていた光景こそ過去のものだが

——そこで起きた光景、剣を振り下ろしたのは

——他の誰でもない、他の誰かであるはずがない

——あれは、アツティエラアルテラの意思

「……………ッ……やはり、私は……」

アルテラは青ざめた顔で、思考する。

このままではいけない、と。

マスターと契約し、徐々にはあるが力を取り戻しているという自覚がアルテラにはあった。それが自分の力を必要としてくれるマスターの意思、だからこそ応えてきた。今の器の臨界まで、力を取り戻すことができた——だが、そんな嬉しさとは裏腹に、彼女は”このままでは自分が自分で居られなくなる”のを感じた。

「……………ッ……」

自分をアルテラと名乗っても、エッツエルと名乗っても、彼女が破壊の化身であることに変わりはない。それは、まるで呪いだ。数多の文明を破壊してきた業、とも言える——力を取り戻すたびに強くなる、アツティエラ破壊衝動という束縛は彼女を縛り付け離してくれない。だが、それは当然のこと。彼女はアルテラであり、エッツエルであり、破壊の化身なのだから。

——それを自覚したアルテラはベッドから降りると

——どこか頼りない足取りで、自室を後にした



「……………」

夜の帳が降り、あとは寝るだけという頃、自室へ誰かが訪ねてきたので迎え入れた。その訪れてきた相手というのは、アルテラ。彼女が夜中に訪れてきたというのも驚きだったが、それ以上に——普段の能力のような無表情が嘘のように青ざめた顔、強力な宝具を担う腕と肩は、まるで幼子のように小刻みに震えているのが気になった。

部屋の中へ迎え入れからアルテラは、ずーっとこの状態。直立不動のままに青ざめた顔を俯かせ、視線を合わせようとしない——普段の彼女からは考えられない、かけ離れた様子の彼女へ問い詰める。どうかしたのか、と。

「……マスター、頼む……私との契約を、破棄して欲しい」

ぼつり、と漏らしたアルテラの呟きを聞いた瞬間、ガツンと頭をハンマーで殴られたような錯覚を感じた。あまりにも唐突で、あまりにも衝撃的な一言——信じられない、信じたくないという思いのまま彼女へ詰め寄る。

何故だ、と無意識のうちに強くなっていく語気を抑えることができない。いきなり契約を破棄して欲しいだなんて、信じられない。

「……夢を見た。^{アルテイラ}私^{アルテイラ}が、お前を壊^{殺す}す夢を……ツ……この器の臨界まで力を取り戻すことができたのは、お前のおかげだ。感謝しているし、私も喜ばしいことだった。しかし、このままでは駄目なのだ——きつと、このままでは、^{アルテイラ}私はお前を壊^{殺してしま}う」

そこで、アルテラが俯かせていた顔を上げた。

「だから、^{アルテイラ}私がお前の命を壊^奪す前に、契約を破棄して欲しい。お前と……っ……離れるのは、嫌だし、名残惜しいが——大丈夫だ、私のことは気にするな。私は破壊するだけの機械、どうということはない」

彼女は独白する。

夢の中とはいえ、”マスターを殺してしまった”と。それは起こり得る未来だ、と。だから今、契約を破棄して欲しいと願い出てきたのだ。今なら間に合う、と。

しかし、そんな要求、承諾できるワケがない。

たしかに死ぬのは嫌だ、アルテラほどの英霊なら令呪があってもマスターを襲うくらいのことにはやってのけるかもしれない。だが、それでも、はいそうですか、と首を縦に振れるワケがない。

彼女は言った、大丈夫だ、と。

彼女は言った、気にするな、と。

でも、それは、きつとアルテラの本心ではないはずだ。

だって――

「それは嘘だ、じゃあ、なぜ……」

「……どうして、君は泣いているんだい？」

「……………っ……………ッ!!」

そう告げると、アルテラが目を見開いた。自身の頬を伝う大粒の涙、それを指先ですくった彼女は、信じられないモノを見たという表情――「なぜ、なんで……」と呟きながら頬を伝う涙を拭くも、彼女の瞳から溢れてくる涙は止まらない。

意識してしまつては、もう止められるはずもない。涙腺が決壊したと同時に、アルテラが強引に押さえ付けていた本心も溢れ出てきたらしい。ボロボロと零れていく涙、ぐちゃぐちゃになった泣き顔そのままに、彼女は嗚咽の混じつた言葉を吐き出した。

「……いや、だ……おまえ、と……っ……はなれるの、は……いやだ……でも、おまえが……ひぐっ……しぬ、のは……もつと、やだ……もお、どうしたらっ……いい、のか……わからない……ッ!!」

頬を流れる涙をそのままに、アルテラは自分の体を掻き抱いた。瞳

から大粒の涙を溢れさせ、細い肩を震わせ、嗚咽を漏らす彼女の姿は普段のアルテラからは考えられない。あくまで推測に過ぎないが、彼女は自分を恐れているのだ、数多の文明を破壊してきた自分自身破壊衝動を。なら、そんなアルテラへ伝えるべきなのは、言葉じゃない。安心させてやりたい、大丈夫だと伝えたい、だからこそ包み隠さず本心を語った。

——彼女には強くなって欲しいと願った

——生き残るため、世界を救うために

——でも、それはマスターとしての願いだ

——本当の願い、一人の人間としての願いは別にある

——彼女には、笑ってほしかった

——彼女には、楽しんでほしかった

——彼女には、自分を機械と言ってほしくなかった

アルテラには自分が破壊するだけの存在だと、自分のことを機械だと言ってほしくなかった。笑って、泣いて、拗ねて、サーヴァントとしてではなく、”人としての心を持って第二の人生を楽しんでほしかった”。

前に自室でアルテラから聞いた話、大王でも戦士でもない、ただの人となる夢。それを、叶えてやりたいと思った——それは彼女のためだけじゃない、マスターとしての責務でもない。彼女の隣へ立つ者として、一人の人間として胸に抱いていた、身勝手に独りよがりな願い。「……………う……………ひぐつ……………ツ……………ます、たあ……………」

”本当の願い”を告げてから、まるで子供のように泣きじやくるアルテラを抱き締めた。労るように、慰めるように、諭すように、悩み恐れる彼女を安心させてやりたいという一心で。

アルテラの腕が背中へ回るのを感じた。

アルテラが顔を胸板へ擦り付けてくるのを感じた。

そして、しばらくの間、抱き合っていた。何かをするワケでもなく、語り合うこともなく、ただただ、身を寄せていた。数分が過ぎ、そろそろ十数分が経過した頃——まだ目尻へ涙の玉を残しながらも、アルテラが顔を上げ見上げてきた。

「……すまない、少し、取り乱した……ッ……」

”少し”というレベルの取り乱し方ではなかったように思うが、彼女の名誉のため言葉には出さなかった。ともあれ、アルテラが落ち着きを取り戻してくれたことに安堵する——契約を破棄して欲しい、なんて言われたのには驚いたが、最悪の結末は回避できたように思う。「それで、だな……その……さ、先ほどの話……大王でも戦士でもない私の夢を見た、という話の続きなのだが……ッ……その願い、を……か、叶えては……くれないだろうか……？」

腕の中で、アルテラが頬を赤く染めながら見上げてくる。大王でも戦士でもない彼女、ただの女の子となる夢、それを叶えて欲しいというのは、おそろく——”そういうこと”なんだろうと、察した。言い淀んだのも、歯切れが悪かったのも、たぶん恥ずかしかったのだろう。アルテラが言いたいことは、直感的に察した。それと同時に、嬉しくなった。彼女が大王でも戦士でもない自分を望んでくれたという事実と、恥ずかしさを堪えながらも求めてくれたことが、何よりも嬉しかった。

それは一人の人間としての願いが、少しだけ叶ったことに繋がるから。自分のことを機械と呼ばず、人間らしく、羞恥に耐えながらも独白してくれたアルテラが——彼女のことが、とても愛しく感じた。

胸がいつぱいになったのを自覚しながら、分かった、とだけ告げるとアルテラへと顔を寄せていく。すると彼女は驚いた表情を浮かべた後、ゆっくり目を閉じてくれた——顔を寄せる途中、甘い香りを鼻先へ感じながら、口付けを交わす。

「……っ……んっ……ちゅっ……ん、っ……」

触れ合ったアルテラの唇、その柔らかい感触を唇で確かめる。ついでに、形を確かめるように。彼女の柔らかい唇を甘噛みし、舌でなぞると小さく体を跳ねさせ反応してくれるのが楽しくて仕方ない。

ちゅっ、ちゅっ、と互いが互いを求める優しい口付けを交わしていたが、ついつい堪らなくなつて舌先をアルテラの口内へ侵入させてしまう。硬い歯の感触を舌先へ感じながら、彼女の甘く熱を帯びた唾液

を舐め取った。

「……ッ……んうっ……っ……ちゅ、ん……れろっ……え、あ……」
舌先でアルテラの歯をノックしてやると、奥から柔らかい舌を覗かせてくれた。そして触れ合う舌先、唾液が付着する舌同士が、ぴちやっ、と小さな水音を響かせる。

どこか控えめに突き出されたアルテラの舌へ、舌を絡ませていく。舌先同士を擦り合い、唾液が載った舌腹を擦り付け、ぴちやっ、ぴちやっ、と音を立てながら彼女の舌の柔らかさと熱を堪能した——そして、ものの数分もしないうちに、舌と舌を絡ませていくうちに行うはエスカレートしていく。これでもかと唇は密着し、繋がった口内で舌を踊らせ、互いが貪るように激しさを増していった。

「……んうっ……ちゅっ……れろっ……あ、んむっ……え、あ……れろっ……んちゅ、っ……じゅるっ……ちゅっ……ん、はあっ……あ……んんっ……ちゅ、ちゅっ……れろっ……あ……れろっ、れろっ……」

どのくらいキスを交わしていたのかは、分からない。

どちらからともなく唇を離すと、絡み合っていた舌と舌が糸を引く。何度も何度も混ぜられたせい、粘性を帯びた真っ白な唾液の糸は重力に引かれるだけで、ぷつりと切れてしまう——と、そこで気付いた。間近にあるアルテラの顔、表情に。

唾液でベトベトになった口元をそのままに、かすかに開かれた口からは熱い吐息を吐き出し、唇の端からは唾液を漏らし、どこか虚ろで熱に犯され揺れる瞳。そんな蕩けきったアルテラの淫靡で卑猥な表情は、欲情を煽ってくる——もはや昂つていく本能、欲求を止められない。

- 彼女を促すように抱き合っただまベッドへ近付くと
- できる限り優しく、アルテラをベッドへ押し倒す
- 二人分の体重を受けて、ギシッ、と軋むベッド
- 組み敷く形となった彼女と視線を交わらせ
- どちらからともなく、内へ秘めた想いを伝え合った

— ”愛してる”、と

されど古の戦闘王は只人の夢を見る（2）

ベッド上へ仰向けになったアルテラが着ていた衣服を脱ぎ捨て、一糸纏わぬ姿になっていく。それを眺めていると視線に気付いた彼女は頬を染め、そそくさとシーツで裸体を隠してしまった。その仕草が可愛らしくて、初々しくて、自然と笑みが零れてくる。

こちらにも衣服を脱ぎ去ってからアルテラへと再び覆い被さり、シーツで隠しきれしていない彼女の細く滑らかな肩口へ口付け舌先を滑らせた。唾液が載った舌先が触れた瞬間、ぴちやつ、と水音を響かせて。

「……………ひっ……………」

すると、アルテラは自身の身を覆うシーツを握り締め小さな悲鳴を上げた。舌による未体験の感覚、くすぐったさ、羞恥が彼女を襲う。恐怖とは違う体の震えを舌先に感じつつ、唇を重ね、滑らせていく。向かうは、彼女の細く触り心地の良さそうな首筋。

鼻先へ彼女の銀髪が触れ、くすぐったさを感じる。その感覚と女性的な甘い匂いを楽しみながら、アルテラの首筋へ顔を寄せると甘く噛み付いた。

「…………ふ、あ…………ツ…………あんっ…………ツ!!」

アルテラの首筋へ唇を当て、時には少しだけ歯を立てて、時には吸い付いてみて、と緩急をつけた首筋への緩やかな口淫で彼女の理性を剥ぎ取っていく。逃げようと身を振る彼女を逃がさぬよう、体を密着させながら。

薄布一枚を隔てて感じるアルテラの肢体、柔らかく、熱を帯びた彼女の裸体を想像して昂ってしまう。今すぐにもシーツを剥いて、思う存分、彼女を啼かせたいという欲求が湧いてくる——が、何とか理性で押し留めた。

「…………ん、っ…………うあっ…………ます、たっ…………ツ!!」

アルテラの首筋へ赤い痣が残ったのを確認してから、さらに唇を滑らせていく。ちょうど通り道であった鎖骨、固く太いソレを、くぼんだ部分を丹念に、執拗に舐め上げながら——必要以上に時間を掛けて

いるのは、彼女の意識を逸らすため。

シーツを握り締めていたアルテラの手へ掌を重ね、指を絡めてやる。片方の戒めは指を絡めたことにより解けた、あとは空いた方の手でシーツをズラしてやるだけ。すると彼女の肢体を隠していたシーツは、いとも簡単にズレていく。

アルテラは、徐々にシーツを剥ぎ取られていることに気付いている様子がない。

「……………ん、っ……………あんっ……………ツ……………あ、はあ……………ひうっ……………ツ!!」

すでに上半身が露になっっていることさえ気付かないアルテラ、その油断を突いて、さらに唇を滑らせていく。向かうは彼女の乳房、程よい大きさの双丘と、頂点で赤く膨れた赤い蕾。

露になった乳房へ唇の感触を感じたことで、ようやくアルテラは自分の格好に気付いたらしい。握っていた手、絡めていた指を離しシーツを掴もうとしてくる。だが、時すでに遅し。早々と丘を駆け上がった唇が赤い蕾、乳房へと甘く噛み付いた瞬間――

「……………え……………そん、っ……………にやッ!!」

びくんっ、と大きくアルテラの体が跳ねた。

背中を逸らし身を捻ろうとするアルテラを自らの体重で上から押さえつけ、乳房への口淫を続行する。乳房を唇で挟み込み、転がし、時おり舌で優しく労るように舐めてやると――彼女は、まるで楽器のように甲高い喘ぎを奏で始めた。

「……………あ、んんっ……………やっ……………そ、こっ……………やめっ……………んんんっ……………あ、っ……………あつ、あ、んっ……………ひ、う……………なめ、るっ……………にやああ……………ッ!!」

ふと乳房から口を離しアルテラの様子を伺うと、羞恥で頬を赤く染めた彼女の抗議の声が降ってくる。どこか機械的な彼女が快感を得れるのか、という疑問もあったが、どうやら問題ないようだ。

アルテラの抗議を丁重に、「やだ」とスツパリ切り捨てると彼女の肢体への口淫を再開する。ぴちやっ、ぴちやっ、と音を立てながら乳房を堪能し、乳房をいじめ抜き――そこで、ふと気付いた。アルテラの肢体、褐色の肌を走る痣あざのような白い紋様。左側、右側と対照的に彼

女の肢体を縦へ走るソレに。

「……………んっ、う……………あ、っ……………ます、たあ……………う？」

アルテラの不安そうな、切なそうな声が聞こえた、いきなり口淫が止まったことに戸惑っている様子だ。だが、止めたワケじゃない。彼女の肢体を走る痣、褐色の肌を駆ける白い紋様が妙に艶かしくて、淫靡なモノに見えたから少し吞まれていただけ。

そんなモノを見てしまっただけ、無視などできるわけがない。乳房の脇を走る痣へ口付けると、アルテラの体とは違う熱を帯びているように感じた。

「……………んううっ……………い、あゝっ……………そ、こお……………ツ!!」

紋様に沿っていくように舌を這わせると、アルテラは先ほどの乳房、乳首への口淫以上に大きく体を、びくんっ、びくんっ、と跳ねさせる。痣が性感帯になっているのかと錯覚しそうなほどの乱れっぷり、感じっぷりは嗜虐心を刺激された。

かろうじてアルテラの肢体、その半身を隠していたシーツを強引に剥ぎ取った。布擦れの音と共にベッド脇へシーツが落ちていくのを見送ると、完全に露になった彼女の肢体へ文字通り、むしゃぶりついた。

「……………んんんっ……………あ、っ……………や、ああっ……………これ、え……………おっ、かし……………く、っ……………なりゆうううツ!!」

胸元から腹部にかけてを執拗に、アルテラの肢体へ唾液を染み込ませるように舌を這わせていく。そして行き着いたのは、彼女の股間部。拒絶するように力いっぱい閉じられた両脚の付け根、紋様の終着点だ。

わざとらしくアルテラが無意識のままに閉じてしまっている脚の付け根や、下腹部へ何度か口付けてから体を起こす。無理やり、というの躊躇いがあったからだ。同意を求めするため、息荒く肩で呼吸する彼女を見下ろした。

「……………はあっ……………はあ、はあ……………ツ……………あ……………ううっ……………」

こちらの意図を察したのだろう、アルテラは快感で揺れた瞳で見上げてくる。頬どころか、顔中を真っ赤に染めながら——だが、とうと

う観念したらしい。彼女は両の掌で自身の顔を覆うと、徐々にではあるが脚へ込められていた力を抜いていく。

自身の顔を見られぬように両の掌で覆いながら、膝を曲げ脚を開いていくアルテラ。ものの数秒ほどで、彼女の最も隠匿すべき場所が顔を覗かせる。まじまじと股間部で咲く花を観察すると、驚いた。呼吸に連動して、ヒクヒクと口を開閉させる牝孔。そして、そこを避けるように刻まれた紋様が透明な液体に光を反射させていた。

「……………う、ううっ……………ツ……………いやあああつ……………そんな……………まじまじとっ、みるなあ……………」

そう口では言いながらもアルテラの牝孔は物欲しそうにヒクヒクと伸縮を繰り返し、とろおつ、と愛液の涎を垂らしている。ツンと鼻を刺激する獣臭に導かれるまま、その卑猥な形の女性器へと顔を寄せ——甘く、かぶりついた。

すると、股間から駆け上がったきた快感がアルテラの体を翻弄する。意思とは無関係に牝孔を隠匿しようと彼女の両脚、太ももが左右から襲ってきた。頭を挟まれ身動きが取れないまま、顔を股間へ押し付けられてしまう。かろうじて呼吸できる状態にも関わらず、押し付けられる彼女の肉厚で柔らかい太ももの感触に昂ってしまった。

「……………ひいっ……………ツ……………ん”ん”ん”っ……………や、らっ……………そこおっ……………きた、なっ……………おね、がっ……………もっ……………ゆるひ、てええ……………ツ!!」

両手で顔を覆い隠したままのアルテラは、仰向けのまま背中を思いつきり仰け反らせた。”止めて”と懇願してきながらも脚で頭を拘束してくるといふ矛盾に彼女は気付かない、というよりも今、自分がどうなつて、何をしているのかという自覚がないのだろう。

左右から押し付けられるアルテラの太ももを掴むと、牝孔へ甘く噛み付いたまま舌を覗かせる。突き出す必要はない、すこしだけ舌を伸ばすだけでいい——たったそれだけの行為で舌は密着した彼女の性器、入口を守るヒダの感触を見つけ出すことができるのだから。

「……………あつ……………ひいっ……………やらっ……………やら、やらっ……………やっ、らああ……………ツ!!」

腰を捻り逃げようとするアルテラの体を、がっしりと掴んだ太ももで拘束する。つい数秒前は彼女が無意識のままに拘束している側だったが、牝孔への口淫が始まった途端、立場は逆転。暴れる彼女の脚を、腰を、体を固定し、ひたすら牝孔を責め立てる。

漏れ出てくる愛液の甘い味を舌先で味わいながら、ヒダへ舌腹を擦り付ける。ぴちやつ、ぴちやつ、と唾液と愛液が混ざる音と、ヒダを舐める音が口内へ響いているのを自覚した——まだ核心部である牝孔には刺激を与えていない、にも関わらず牝孔からは、すごい量の愛液が溢れてきた。気を抜けば、溺れてしまいそうなほどに。

「……………っ、ん”あ”あ”あ”っ……………こ、れええっ……………ッ……………おか、ひっ……………い、んんっ……………やめっ、らめええ……………ッ……………あ、んっ……………おねが、っ……………い、つやあああつ……………あ、っ……………あ”っ、あ”あ”っ、あ”あ”っ……………ん、いいつ……………く、うっ、んんっ……………ッ!!」

口内へ注がれるアルテラの愛液は、あつという間に許容量を超えてしまう。呼吸するために開いた口から、口端から、ぼたぼたっ、と零れた体液がベッドへ吸い込まれていく。その行く末を眺め、いよいよ、とばかりに舌先で彼女の牝孔、その入口を確かめるように踊らせる。

そして、一気に舌を、アルテラの牝孔へと撃ち込んだ。すると異物である舌を排斥しようと膣壁が伸縮し締め上げてくる、だが、その締め付けに負けじと舌を突き出し膣壁を掻き分けていく。

「……………ッ……………ひっ……………あ……………ん、っ……………あ”あ”あ”……………ッ!!」

自身の性器へ舌が入り込んでくる、そんな初めての感覚にアルテラは目を見開き絶叫。いつしか彼女の顔を覆い隠していた両の手はシーツを握り締めており、奥へ隠されていた表情が露になった——普段の能面のような表情からは想像もつかないほどに乱れ、蕩けきった表情が。

快感で全身が痙攣と弛緩を繰り返しているアルテラは瞳から流れる涙をそのままに、だらしなく開いた口元から涎を漏らし、襲ってくる圧倒的な快感に振り回されていた。

「……………あ、っ……………あ”あ”あ”っ……………ひいつ、ぐううっ……………お、

あ”っ……あ”っ、あ”、っ……あ”あ”っ、……や”あ”っ……め”っ……
ツ……んひいいっ……あら、まつ……とけ、りゅ……うんっ……
……おかひ、くっ……な、りゅう……あ、ぢゅいっ……のおおっ……い
や、っ……やああ……っ……あ、んんっ……い、や”あ”あ”あ”……ツ
!!”

限界まで舌を突き入れてから、膣壁の締め付けに導かれるまま牝孔から引き抜く。混ぜられた唾液と愛液が喉へ流れ込んできて溺れそうになるのを必死に堪え、時おり、じゅるるっ、と音を立て口内へ溜まった体液を呑み下しながら、アルテラの牝孔へ何度も舌を突き立てる。

ひたすら舌をもってアルテラの牝孔をほじっていた時、ふと上唇へ何やら固いモノが当たる感触。瞬間的に、それが彼女の陰核だと察した。度重なる愛撫、口淫による快感に彼女の体は反応し、心は昂り、興奮を煽り、そして今、最も敏感な部分が自己主張を初めている。

「……あ、っ……んんんっ……ひう、っ……んんっ……あ、あつ……
あああつ、んっ……らめっ、らっ……も、お……やめっ、てええっ……
く、りゅうっ……なに、かっ……ツ……あひっ……なに、かっ、が
ああつ……くりゅううっ……ツ!!”

アルテラが快感を得ている、という事実嬉しくなってきた。それと同時に、もつと彼女を乱れさせたい、淫らにさせたい、汚したい、という欲求と嗜虐心が沸き上がってくる。

そして――

トドメとばかりに思いつき舌をアルテラの牝孔へ突き立てる、股間へ顔を押し付けながら。すると歯が、充血し固くなった彼女の陰核へ当たる。こりっ、と歯が当たり陰核の形が歪んだのを感じた瞬間――

「……あ……ひい、んっ……ツ……あ”あ”あ”あ”……ツ!!”

ゾクツ、と今までで最も大きな快感がアルテラの全身を駆け巡る。その寒気にも似た感覚、電流のような快感は彼女の脳を、理性を焼き切り一気に絶頂へと墮とした。もはや自由が利かない彼女の体は暴走し、意思による制御ができない。限界まで背中を反らした彼女は、

欲求を堪えることができない。体の内側へ溜まった何かが迸るのを、彼女は止められない。

ぷしゅうっ、と勢いよくアルテラの股間から、潮が噴き出てきた。あつという間に口内へ溜まっていく彼女の潮。先ほどの愛液とは比べ物にならない量の潮は口内へ溜め込むことなどできない、溺れてしまいそうになるのを耐え、流れ込んでくる潮を、ごくっ、ごくっ、と喉を鳴らしながら飲み下していく。

「……………あ……………あ、あああつ……………っ……………い、やあああ……………」

絶頂の余波で体を痙攣させるアルテラは背中を反らし、自身の股間から噴き出ていく潮の感覚に耐える。自身の性器へ顔を押し付け、目の前で噴き出ていく潮を飲まれるのを何もできず眺めながら。

そして数秒の後、いきなりアルテラの両脚が力を失っていくのを感じた。脚だけではない、これでもかと仰け反らせていた背中やベッドへ着地し、シーツを力いっぱい握り締めていた手は無造作に投げ出されている。

愛液と、唾液と、潮によつてドロドロになった口元をアルテラの股間から離し、ベッドの上へ膝立ちになって彼女を見下ろす。乳房や股間を隠す素振りも見せず、くたあつ、と四肢を投げ出し彼女の姿は官能的で、扇情的で、とても綺麗に見えた。

「……………う、あ……………すまな、ひつ……………ます、たあ……………っ……………すまな、ひ……………」

どうやらアルテラは、自身が粗相でもしたのだと思っているのだろう。涙と涎と鼻水をそのままに、かすかな嗚咽を混じらせた声で謝罪してきた。安心させてやろうと頭を撫でてやっていたが、どうにも彼女に泣き止む素振りが無い。

と、その時だ、緩慢な動作で身を起こしたアルテラが腰の辺りへ抱き付いてきた。細く、しなやかな腕が腰へと回るのを感じる。だが、問題なのはそこではない。先の口淫で昂り興奮したことによつて肉棒は勃起し、びくんっ、びくんっ、と脈打ってしまったこと——つまるどころ、そんな状態の肉棒へ、彼女は頬を寄せてしまっているということ。

「……つぐなわせて、くれっ……ッ……んっ……ちゅっ……」

すでに固くなった肉棒へ頬擦りしながら、上目遣いに見上げてくるアルテラ。そんな彼女の思いもよらぬ言葉と、火傷しそうなほどに熱い吐息が敏感な亀頭へ触れ、さらに彼女の薄く形の整った唇が、おぞましい形の肉棒へ触れた瞬間、ゾクツ、と腰へ悪寒が走った。

撫でるためにアルテラの頭へ載せていた掌へ、ついつい力が入ってしまう。快感と呼べるほどでもない微弱な刺激が肉棒を通じて、全身へ駆け巡ってくるのを感じながら。

——それと同時に、今すぐにも思う存分、腰を振り

——アルテラを蹂躪したいという欲求を抑え込みながら

されど古の戦闘王は只人の夢を見る (3)

充血し、はち切れんばかりに肥大した肉棒へとアルテラの唇が触れる。ちゅっ、ちゅっ、と優しく、触れ合うだけの、もどかしい快感を与えてくる口淫。玉袋や根元、裏スジまで全体を味わうような、拙く、ひた向きな彼女の奉仕が理性を溶かしていく。

「……うあ、んっ……ちゅ……え、あ……れろっ……ぢゅうっ……ん、むう……あ……ん、ペろっ……ッ……っはあ……っ……あんっ……う……かたく、へ……あ、っつ……」

たっぷりと唾液が乗ったアルテラの舌腹が肉棒を下方から舐め上げ、亀頭へ到達すると最も敏感な部分を柔らかく蠢く舌先が絡まってくる。まるで別の生き物のように肉棒を滑っていく舌、だがその口淫から与えられる微弱な快感は——本能を、性欲を煽ってくる。

舌だけでは足りない、口に含んで、吸い付いて、もつと淫らに、激しく奉仕してほしい。その願望、溢れ出てくる性欲が、つい口から漏れてしまう。すると肉棒へ顔を寄せ舌を這わせるアルテラが、不安そうに瞳だけで見上げてきた。

あまりにも油断していた、いくら物足りないからといって、そのようなことを口走ってしまったことに自責の念が沸き上がってくる。しかし、その言葉を聞いたアルテラは少しだけ動きを止めると——意を決したと同時に大きく口を開け、亀頭を呑み込んでいった。

「……ああ、んむっ……ん、うっ……お、あ……ぢゅっ……っ……ぢゅっ、ぢゅっ……んっ、あ……ん、んっ……おえっ……んっ、んっ、んうっ……ぷ、あっ……ッ!!」

瞬間、生暖かいアルテラの口内へ埋もれた亀頭を通して強烈な快感が腰から背中にかけて駆け巡る。だが、それだけではない。おぞましい形の肉棒を口に含み言われるままに吸い付き、彼女にとっては異物でしかないソレをくわえたまま舌を絡ませてきた。

熱く弾力のある、それでいて固い、鼻につく生々しい獣臭を漂わせる肉棒がアルテラの口内を蹂躞する。裏スジが容赦なく舌腹を擦り

先走りを塗り付け、亀頭が喉を突き、内側から獣臭が鼻腔を焼いた。アルテラが頭を揺らすたび、むせるたび、じゅぼつ、じゅぼつ、と音を立てる彼女の口端から唾液が溢れ落ちていく。肉棒という異物を口内へ迎えてしまった結果、彼女の小さな口が許容量を超えてしまったのだろう。

「……ん”ん”ん”っ……お、あつ……んう”っ……ぢゆつ……ツ……お、ごっつ……ぢゆつ、ぢゆんつ……ぢゆるつ……っ……じゆつ、んっ……んむつ、んっ、んん、んっ……お”……ッ!!」

眼下へ目を向けると、肉棒で喉を突かれる苦悶に顔を歪め目端に涙を浮かべるアルテラが見えた。だが、それでも彼女は決して肉棒から口を離そうとはしない。口元が体液で汚れようが、ままならぬ呼吸に苦しもうが、必死な口淫で奉仕し続けた。

そんなアルテラの姿が、想いが、理性を打ち砕く。

ただ肉棒を通して迸ってくる快感のままに、絶頂への期待のままに腰が揺れる。無意識ではなく本能でアルテラの頭を両手で固定し、肉棒を彼女の喉へ叩き付けようと腰を前後に振った。

「……ん”ん”ん”っ……つぶあつ……ツ……お、ん”っ……ぢゆつ……ぢゆる、ん”っ……む”う、ん”っ……あ”……ん”、ん”っ、ん”ん”っ、お”っ……ぐ、っ……う”う”……ッ!!」

激しく腰を振り始めたせいかアルテラの口内を犯す肉棒は容赦なく喉を突き、えぐる。柔らかい舌が滑る感触と、硬い歯に引っ掛かる痛覚、最奥の喉を亀頭でノックするたびに走る罪悪感——その全てが、絶頂への起爆剤となる。そこまで時間を必要とせず、びくんっ、びくんっ、とアルテラの口内で暴れていた肉棒が痙攣を始めた。

もう自制が、我慢が効かない。

腰からせり上がってくる真っ白な欲望を察知すると、スパートとばかりに激しく腰をアルテラの口元へ叩き付ける。そしてトドメとばかりに深く深く肉棒を彼女の喉へ突き立てた瞬間、ぞぞっ、と背中へ悪寒が走り、直後に虚脱感が襲ってくる——それは膨れ上がった欲望、強引に押し止めていたモノが放たれた証。

「……ッ……ぶっ、ん”っ……お”……ん”ん”ん”っ……ッ!!」

絶頂と共に龟头から迸った欲望、精液がアルテラの喉へと直接流し込まれた。粘性を帯びた精液は彼女の喉へと絡み易々と飲み下すのを許さない、だというのに容赦なく注がれる精液は——あつという間に、彼女の口、その許容量を超えてしまう。

耐えかねたアルテラが咳き込むと、これまで頑なに離すことのない肉棒が反動で口から飛び出てしまう。いまだ先端から、煮えたぎる灼熱の白濁を放つソレを。

「……………げほっ……………ッ……………かはっ、んっ……………ぶあつ、ん……………う、あ……………つ……………は、あ……………ん、はあ……………つ……………はあ、はあ……………あ……………う……………あああ……………」

痙攣と同時に先端から噴き出す精液は弧を描き、びちゃびちゃつ、と音を立ててアルテラの顔を、頬を、髪を汚していく。自分の顔が、髪が、体が白く染められていくのを黙って見つめる彼女の表情に嫌悪感はない。むしろ蕩けたような表情のまま口を開け、口といわず顔といわず、成されるがままに受け止めようとしていた。

アルテラの唇から、髪から、頬から、生臭い精液が、どろおつ、と糸を引き垂れ落ちていく。その様を眺めていたくもあつたが、ベッドに突いていた膝が言うことを聞いてくれない、絶頂と射精の余韻のまま脱力した体は勝手にベッドへ座り込む形となってしまう。

「……………ん、っ……………ちゅ……………っ……………ちゆるっ……………は、あ……………ます、たあ……………」

すると、ようやく口内へ溜まっていた精液を飲み下せたアルテラが活動を再開した。上半身を寄せ、後ろ手にベッドへ座るこちらへ跨がるように、のしかかってくる。間近にあるアルテラの瞳は劣情に揺れ、生臭い精液に汚れた顔を隠すことなく目を合わせてくるだけ。

蕩けきった表情、熱く焼けるような吐息、鼻を刺激する獣臭に紛れる女性特有の香り、その様、その姿は、まるで発情した獣そのもの。普段、自分のことを機械と言う彼女は居ない。肉体的な快楽だけではなく、己が身を焦がす劣情、尽きない愛情、満たされていく幸福感、数々の感覚と想いの津波に押し流されるアルテラは今、ただの獣へと成り果てている。

「……………ん、はあ……………つ……………はあ……………すまな、い……………ますたあ……………」

耳孔へ、熱い吐息が乗った囁きが響く。

アルテラの意図が分からず、射精によって霧が掛かった脳内が思考を始めた瞬間、突如として肉棒へ刺激が走り背中が粟立つ。目で見て確認することはできないが、感覚だけで股間の肉棒がどうなっているのかは、だいたい予想がつく。

アルテラがのしかかってくるまで、お互いの性器が触れ合っただけで済んでいるのだ。愛液と潮でドロドロになっている彼女の牝孔は、寸分変わらず肉棒の先端を捉えている——そして、こちらが制止の言葉をかけようと口を開いたと同時に、彼女は腰を下ろした。

「……………つ……………ひっ……………ぐ、っ……………う……………あああああッ!!」

アルテラの絶叫を聞きながらも、制止のために開いた口から言葉を放つことは叶わなかった。肉棒が彼女の牝孔を貫いた感覚、一気に呑み込まれていく感覚、千切らんほどに締め付けてくる圧迫感——そして肉棒を通して伝わってくる彼女の体内温度、溶けてしまいそうな蜜壺の熱が叩き付けられた。

密着した下半身、繋がった箇所が火傷を負ったように熱い。だが、痛みは感じない。むしろ痛みを感じているのはアルテラのはず、しかし彼女は破瓜の痛みよりも、肉欲によって理性を焼かれるより——繋がったことを、一つになれたことに喜びを感じていた。

「……………う”っ、あ”っ……………ん”、ぐう”う……………ッ……………あああ……………ああ……………つ……………つ……………あああ……………ッ!!」

だが、その喜びは言葉にならない。

その代わり、アルテラは獣のように吠えながら腰を揺らし始める。射精したばかりで固さを失った肉棒を強引に呑み込み、卑猥に腰を捻り、扱く、その行為は先の口淫による奉仕とは対極。贖罪とばかりに言われたことを忠実に言い、氣遣っていた奉仕に比べ——ただひたすら貪欲に、貪るように、彼女は腰を振る。

上半身を密着させたまま、跨がって獣の如く腰を振り続けるアルテラの顔には恍惚の表情が浮かんでいる。ばちんっ、ばちんっ、と肉打つ激しい音を部屋へ響かせ、歓喜と喜びの咆哮を上げ続けた。

「……………ひっ、ぎっ……………あ”あ”、ん”ん”っ……………お”、あ”……………はっ……………ん”ん”っ……………あんっ……………あ、っ……………あ”あ”あ”あ”ッ……………ん”、お”……………あ、あっ、ああ、んんっ……………ッ!!」

後ろ手を突き、ベッドへ座り、アルテラを支えながら、肉棒を貪る彼女の牝孔、膣壁の締め付けに抗うのは苦行に近い。先ほど絶頂し、敏感になっっている肉棒なら尚更だ。気を抜けば意識を持つていかれそうなほどの快楽、それを理性で繋ぎ止め——ようやく、彼女の肩へ手を掛けることができた。

そのまま肩を押し、密着していたアルテラと少しだけ距離を取る。

——すると驚いたことに、アルテラは泣いていた

獣のように腰を振り、言葉にならない咆哮を上げるアルテラの瞳からは大粒の涙が溢れている。痛みによるものなのか、涙腺の弛緩によるものか、真意は定かではない。だが、恍惚とした蕩けるような表情には——その涙は、あまりにも不釣り合いだ。

「……………ん、い……………んっ……………あ……………ます、たっ……………い、やつ……………はなれるっ、のっ……………や、らあ……………も、お……………おま、え……………が、っ……………いな、ひのっ……………ッ……………たえら、れっ……………なひ……………ッ!!」

ようやく、アルテラは言葉を吐けた。

熱に脳髓を焼かれ、理性を碎かれ、肉欲に溺れながらもアルテラは孤独を恐れている。そこで、ようやく彼女の真意を察することができた。彼女は体だけではなく、もつと根源的な意味の孤独を恐れているのだと——簡単に言えば心の繋がりが、縁、絆を求めているのだと。

ならば、応えなければならぬ。

肉欲に溺れる体に鞭打ち、アルテラの上半身を支えてやる。いまだ片手はベッドへ後ろ手を突いたままで、彼女の肩を掴んでいた腕を背中へ回す——正面から、抱き抱えるように。

そして性器同士で繋がった下半身だけでなく、上半身までも密着させる。互いが互いの肩へ顎を乗せる形となり、互いの口元が耳元へと来るように——飾りもなく、物怖じもなく、ただただ、アルテラの耳

元で一言だけ囁いてやった。

——愛してる、と

「……………つ……………」

すると、一心不乱に腰を振り乱していたアルテラの動きが止まった。言葉を通して想いが、彼女に浸透していく。それを見定め、後ろ手に突いていた腕も彼女の背中へ回す——離れていかないように、相手の体温を確かめるように、包み込むように、優しく抱き締めてやる。

「……………あ……………んつ……………ます、たあ……………つ……………あつ……………ん……………」

先に比べ、だいぶ落ち着きを取り戻したアルテラの吐息が耳へ当たり、くすぐったさを感じた。その感覚に、つい身を振ってしまいたい衝動に駆られるが、なんとか耐えた——ここからは、肉欲だけを求める獣同士の交尾ではない。

言葉で心を通わせ、互いの体を寄せ合い体温を共有し、二人で果てようと囁いた。どちらかが欠けることはない、ここに居る、そう言い聞かせるように、諭すように言葉を選びながらアルテラを包み込んでいく。

「……………つ……………ああ……………ずつと……………ずつと……………いつしよ、だ……………」

涙が滲む声と共に、背中へアルテラの両手が回される。

それを合図として、ベッドの上へ座りながら腰を上下に揺らす。柔らかな弾力のあるベッドの反動を利用して、下方からアルテラの牝孔を穿つ肉棒を、さらに奥へ奥へと押し込むように。

「……………ひつ……………んんつ……………あ……………は、あ……………あんつ……………ううつ……………ひや、あ……………ん、い……………ツ……………こ、れえ……………んんつ……………ふ、つか……………いい……………ツ!!」

ぎしっ、ぎしっ、とベッドを軋ませ、何度も何度も肉棒の先端をアルテラの最奥を目掛けて打ち上げる。身を捻り逃げようとする彼女を強く抱き締め、もっと深く、もっと強く、もっと激しく、何度も何度も腰を跳ねさせた。

ずんっ、ずんっ、と重力と自重で亀頭がアルテラの最奥、子宮口を

突き上げる。彼女の膣内へ溜まった愛液を掻き回し、時には押し込み、時には掻き出し——結合部から撒き散らされた体液がベッドを汚すのも気にせず、ひたすら子宮口ごと彼女を打ち上げる。

「……んんんうっ……あ、はっ……あんっ……お、あ……こ、れえ……ら、めっ……こわれ、りゅ……おかひく、なりゅ……ッ……んんっ……あ、ひっ……んんっ……お、くう……わらひ、のっ……いちば、ん……おくうっ……あ……つ……あた、って……りゅうう……ッ!!」

抱き締めているアルテラを肉棒で突き上げるたびに、びくんっ、びくんっ、と体の痙攣で反応を返してきた。それが絶頂への秒読みであることを感じ、一気に責め立てる。先ほど以上にベッドを軋ませ、激しく、深く肉棒を彼女の牝孔へ押し込んでいく。

ぐぢゅっ、ぐぢゅっ、と結合部から響く生々しい音に耳孔を犯され、肉棒が膣壁に締め付けられる快感に震えながらも、腰を振るのは緩めない。むしろ速度を上げ、強さを増し、アルテラを挿し貫かん勢いでベッド上を跳ね回った。

「……んんんっ……お……あああっ……きも、ちっ……いいいっ……あたま、っ……びりびり、してえ……も、お……なに、もっ……ッ……あ、ひっ……かんがえっ……られ、にや……ッ……あ……んんっ……あっ、あっ、ああっ、んっ……も、っ……がま、ん……でき、なっ……ひっ……ッ!!」

肉棒から感じる快感という肉欲、耳元で響くアルテラの喘ぎ声、そして通じ合う心は、あっという間に互いの限界を振り切ってしまった。ぞぞっ、と絶頂による荒波が彼女の全身を襲うと無意識のうちに膣壁が締め付けを増し、伸縮を繰り返し始める。

背中を仰げ反らせようとする彼女を逃がすまいと抱き締め、突如として不規則に伸縮し始めた膣壁の締め付けに逆らうように腰を跳ね上げ、思いつきり肉棒をアルテラの子宮口へ叩き付けた——瞬間、堰を切って真つ白な欲望が迸っていく。

「……っ……あ……く、りゅうう……うう、っ……んっ……あっ……ああ……ッ……くるっ……すご、ひのっ……がっ……、……あ……ッ……ん、っ……い、っ……い、っくううッ!!」

びゆるるつ、と二度目とは思えないほどの量の白い欲望、精液がアルテラの膈内、子宮口へと注がれていく。勢いよく撃ち込まれる精液は肉棒の痙攣に合わせ、どくんっ、どくんっ、と、何度かに分けて彼女の体内を満たしていく。

溶けてしまいそうな熱を持つ精液を注がれていく感覚に、アルテラは目を見開き、絶頂しながらも受け止めることしかできない。だが、彼女は確かに感じていた。自身の体内、子宮へ精液が満たされていくと同時に、心が満たされていくのを。

「……あ……う……あ、ああ……で、て……りゅ……ッ……おまへの……あつ、ひの、で……わらひ、が……みたされ、へ……くっ……んっ……お……あ……ああ……」

長い長い射精が終わると、とてつもない疲労感と倦怠感が襲ってきた。おまけに、激しい眠気まで。その誘惑は立つことはおろか、ベッドへ座っていることさえ気怠さを感じるほど。意識を失うのも、おそらく時間の問題だろう。

だが、それでも、アルテラを離さない。

吸い込まれるようにアルテラと抱き合ったままベッドへ倒れても、彼女の背中へ回した両手を解くことはない。その想いは彼女も同じだったのか、背中へ感じるアルテラの細腕の感触が、とても心地よく、嬉しかった。

——色々と思うことはある、やらなければならぬことがある

——でも、それでも、今はただ、眠りたかった

——隣で満足そうな寝顔を浮かべる、アルテラ愛する人と共に



「——ああ、これは夢か……」

アルテラは、これが夢であることに気付いている。

その理由は、大きく分けて二つ。
一つは、その光景。

あまりにも、現実場馴れしている。なぜなら自身が立つのは大きな十字架の膝元、ふと振り返れば十字架と対面できるよう均等に併設された長椅子の数々、顔を上げれば色鮮やかなステンドグラスから柔らかな日差しが降り注いでいるという幻想的な世界。

そう、それは一般的に教会と呼ぶ場所。

そんな場所に自分が立っている、ということ。

そして、もう一つの理由は――

「……この服装だな」

今、彼女が着ている衣服。

アルテラが着ているのは布面積が少ない、彼女が普段から着慣れている戦闘衣装ではない。わずかな装飾が施され、どこか気品溢れる肌触りの良い材質で作られた純白のドレス――俗に、ウエディングドレスと呼ばれる衣装だ。

女性ならば誰もが一度は身に纏うことを夢見る衣装、だがアルテラは自身には無縁なものであると思っていたし、そもそも衣服に執着などない――だというのに、わざわざ「このような礼装」を自身が身に付けている。これを夢と自覚してしまうのも、仕方のないことだった。

「……まさか、人の夢にまで干渉してくるとは、な」

アルテラは、苦笑を浮かべる。

そう、彼女は夢見た。

大王でも、戦士でもない自分を。

ただの人であったなら、という夢を。

だが、彼女は知らない。

今までの彼女は間違いなくフンヌの大王であり歴戦の戦士、もはや完結した自分は何者にも成れない、成れようはずがない。だというのに、夢の中とはいえ自分には縁のない場所^{教会}で、これまた自分には関わりのない衣^{ウエディングドレス}に身を包んでいる。

ならば、自ずと答えが見えてくる。

——そう、これは一人の人間の願い
——お人好しで、掴み所のない雲のような
——それでいて寄り添いたくなる大樹を思わせる
——そんな、彼女にとってかけがえのない人の願い

「ああ、夢の中とはいえ、いつか見た夢を本当に体験する機会があるとうとは思ってもいなかった。いや、夢の中だからこそ、叶えることができたと**言うべきか**……いや、いま**言うべき**は、このような言葉ではないな——」

たとえ夢の中とはいえ、アルテラがいつか見た夢、”大王でも戦士でもない自分”という**願いは叶った**。いや、叶えてもらった**と言うべき**かもしれない。

おそらくは無意識なのだろうが、”マスター”は自身が持つイメーヂを彼女の夢に投影することによって”この状況を”作り上げたのだろうから——とはいえ、なんとも強引な上に、この状況はアルテラの**願いの斜め上**を行っていた。

でも、それでも——
マスター
彼の**願いは叶った**。

アルテラは只人となる夢を見た。

たとえ目覚めれば消えてしまう泡沫だとしても——

「——ありがとう、マスター」

くおまけく

「結婚、婚姻を結ぶ。それは愛する者同士を公に夫婦として認める制度、か——ふむ、婚姻とは良い文明なのだ、破壊しない」

とある日の午後、エントランスで珍しい光景を見た。ソファーへ腰掛け、広げた雑誌の活字を真剣な面持ちで追っていくアルテラの姿だ——「どうやら」あの一夜”で体験した夢のおかげで、”結婚”というものに興味を示し始めているらしい。

何事にも無関心、興味を示さなかった彼女が——
そう思うと、どこか感慨深いものがある。

これを機に、もつと多くのことに興味を持つて欲しい。嬉しいことを当たり前のように喜び、辛いこと、悲しいことを当たり前のように悲しみ、サーヴァントとして第二の人生を楽しんでほしい——

ここは一つ結婚を話の種に会話を広げて、もつと多くのもの、色々なことに興味を持ってもらおう。そう思い至り、アルテラへ声を掛けようとした、その時——

「ふむふむ、”既婚した身で他の女性に手を出すのは禁忌であり、絶対に許されざる行為”——なるほど、これが”不倫”というものか。これは駄目だ。悪い文明だ。不倫するような者は許さん、破壊する」

——あ、これだめだ

——なんかもう、嫌な悪寒しかしない

三十六計、逃げるが勝ち。

踵を返し足早にエントランスからの離脱を試みる。

「む、マスター、ちようど良いところに居たな。少し話がある——」
だが、背後からアルテラ死の宣告告の音が——

／残念、ぐだ男の冒険はここで終わってしまった／

二人の女海賊が欲したモノ（1）

空から降ってくる殺人的な太陽光線に、ついつい目を細めてしま
う。眩しさから逃れるために視線を逸らすと、その先へ見えるのは水
平線まで続いている真っ青な海。さらには時おり潮の香りが鼻孔を
くすぐっていき、波の音が鼓膜を打ってくるのに気付く。

そう、ここは大海、オケアノス。

聖杯はすでに回収済みだというのに、何故こんな場所に居るのか、
と聞かれれば返答に困る。そもそも、ここを訪れたのは自分の意思で
はないのだから——もちろん、異常を観測したから赴いたワケでもな
い。齒に布着せぬ言い方をするならば、拉致されたと言うべきだろ
う。

「うーん、地図だとお宝のある海域は、この辺りで間違いないんだけど
……」

「ええ、そのようすわね——けれど、影も形も見えませんわ」

——共に居るのはアン・ボニーと、メアリー・リード

そう、彼女達こそがオケアノスを訪れている原因。

言い方を代えれば、犯人とも言う。

なにせ彼女達から要請を受け宝探しに繰り出したのが昼過ぎ、返答
に戸惑う暇さえ与えられず問答無用で引きずられ、ロマンの制止を振
り切つて強引にレイシフトさせられたのだから彼女達が犯人だ、現行
犯である。

という経緯があつて仕方なく彼女達の宝探しに付き合うことにな
つたワケだが、オケアノスへ来るなり錨を下ろしていた海賊船へ狙
いを定め、真っ正面から海賊へ喧嘩を売り船を強奪——宝の地図とや
らを片手に大海へと乗り出したはいいものの、地図へ示された場所
には肝心の宝島が存在していないという悲惨な結果。

「……も、もういいかな？」

「ええ、そろそろ頃合いですわ……」

波に揺れる船の上、直射日光が当たらない日陰から船首付近で地図片手に佇むアンとメアリーを眺めていたが、ふと彼女達の声が聞こえてきて我に返る。声量を落とし互いに顔を寄せ何やらヒソヒソと話し合っていた二人には、どこか落ち着きがない。挙動不審、とも言える。

どうにも気になってしまったので日陰から出て二人へ歩み寄ろうとしてしまった直後、アンとメアリーも示し合わせたように近づいてくるのに気付いた。アンは普段と変わらず穏やかに微笑んだまま、メアリーは——気温のせいだろうか、少し顔が赤いように思う。

徐々に距離が近付き、あと数メートルというところ——

「……ッ……お……お宝、みーつけ……ッ!!」

「お宝はっけーん、ですわ……ッ!!」

突如として、二人が駆け寄ってきた。驚きのあまり、ぎよっ、として身構えてしまったが——次の瞬間に感じたのは、柔らかくも温かい感触。小柄なメアリーが腰の辺りへ抱き付いてきて、ぎゅっ、と体を密着させ、アンが腕を組み豊満な乳房を押し付けてきた。

あまりにも唐突なメアリーのタツクルハグ、アンの腕組みに戸惑ってしまう。そんなこちらの事情など知る由もなく体を密着させてくる二人の火照った体と、真っ青な空から降ってくる目映い日射しの熱気のせいで身体中から汗が噴き出してきた——胸元へメアリーが頬を擦り付けてくる感触と、腕に感じる肉厚なアンの乳房の重みと柔らかさ、そして常夏の熱波が思考を遮ってくる。

「んう、んっ……っ……すーっ、はあ……」

ぐりぐりっ、と顔といわず頬といわず喜色満面で胸元へ擦り付けてくるメアリーを尻目にアンへ目配せする。すると視線に気付いた彼女は微笑みを絶やすことなく、腕を組んだまま顔を耳元へ寄せ囁いてきた。

「困惑するのも仕方ありませんわ、でも私は教えて差し上げることができませんの——それは、直接メアリーに聞いてあげて下さい……ほら、メアリー?」

アンに肩を揺らされ、ようやく胸元から顔を上げたメアリーと目が合った。いまだに火照った体を密着させてくる彼女の体が揺れ、腰へ回った彼女の腕に力が籠ったのを感じる——と、頬を紅潮させたメアリーが小さく、どこか歯切れ悪く口を開く。

「……え、つと……ぼ、僕達は海賊で、欲しいのは、お宝……つ……でつ……欲しいものは奪う、つていうのがルール、だからつ……あの……マスターが……ぼ、僕達にとつての……お、お宝つてこと、で……つまり、そのお……」

ごによごによ、と視線を迷わせながらメアリーが呟いていたが、どうやら羞恥心が限界に達したようだ。突如として顔どころか耳まで真っ赤にした彼女は「う”あ”あ”あ”ッ!!」と雄叫びを上げ再び胸元へ顔を押し付けてくる——なんだ、この可愛い生物。

メアリーの照れ隠しに、こちらまで恥ずかしくなってきた。ついつい視線を逸らすと、そこにはアンの顔。いつしか微笑みは満面の笑みへ変わっており、その表情は「ご馳走さまでした」と語っている——確信犯だな、この人。

「ほらほら、メアリー、まだ大事なことが言えてませんわよ——」
「……う”う”う……」

しかし、ここまでされては次にメアリーから言われるであろう言葉は推測できる。わざわざ偽物の宝の地図まで用意して、かなり強引に連れ出され、こんな状況となっている。そして極めつけは、先の言葉。“こういった事”に慣れていない彼女の、必死な言葉。気付いてやらなければ、酷だというものだ。

密着するメアリーの背中へ腕を回し、抱き寄せてやると彼女は顔を上げる。まだ彼女の顔は赤いままだったが、どうやら覚悟を決めたらしい。引き結んでいた口を開くと、深呼吸を何度か繰り返し——

「……ぼ、僕達のモノになって……マスター？」

そう、呟いた——



アンとメアリーに奪い取った海賊船の一室、それなりに豪華なソファや本棚が並ぶ部屋へと連れ込まれた。どこか豪勢な造りから察するに、船長室だろう。どうやらココで、彼女達は行為に及ぼうとしているらしい——それは問題ではない、彼女達ほどの女性と体を重ねるのに文句などあるワケがない。ただ——

——熱せられた室内は、極高の湿気が充満していた

——むあつ、と緩やかに襲ってくる熱が、発汗を促進させる

——さながら、サウナのようにだ

しかしアンもメアリーも気にした様子はない、彼女達はベッドへ歩み寄ると素早く衣服を脱いでいく。さすがに直視するわけにもいかない、彼女達へ背中を向け上着を脱ぎ去り上半身だけ裸になる——と、不意に背中へ柔らかな感触。それが乳房だというのに気付いたのは、脇下からアンの細くしなやかな腕が回されてから。

「……………んっ……………さあ、マスター……………こちらですわ……………」

瞬間、アンに背後から抱き着かれたまま、ぐいつ、と後方へ引き寄せられる。あまりにも唐突なことに足の踏ん張りがきかず、引かれるままに背中から倒れ込む先にはベッド——ぼふっ、と僅かな反動を背中へ感じるのも束の間、仰向けになった体へ彼女達が絡み付いてきた。

凹凸の少ないスレンダーな裸体を横腹へ密着させ、胸元へ顔を寄せてきたのはメアリーだ。火照った体、灼熱の室温に蒸された体が触れ合うと、意思とは関係なく体中から汗を滲ませてしまうほど——

「……………すう、んっ……………は、あ……………ますたあ、の……………にお、い……………これ、だめえ……………あたま、くらくらっ……………ひてくる……………っ……………ん、う……………んんっ……………ふあ、っ……………すううっ……………ツ……………はああ……………すご、い……………よお……………」

メアリーの鼻先が胸板を擦る、すると汗から発した刺激の強い臭いが彼女の鼻孔を突き抜けていく。鼻孔を焼く獣じみたオスの臭いは、今の彼女にとっては強烈な媚薬にも似た効果を与えてしまっている

のだろう——とろんっ、と蕩け熱に浮かされたような表情を浮かべたメアリーは、鼻息荒く顔を胸板へ擦り付けてきた。

だが、それはこちらにも言えることだ。

むあっ、とした大気に紛れて鼻に突く刺激臭と、女性特有の甘い香りが鼻孔を突き抜けていくと意思とは無関係に昂つてしまう。ズボン、下着の奥で肉棒が固さを増していくのを自覚するほどに——

「あらあら、自分だけ満足しては駄目ですわよメアリー。マスターのことも、しつかり気持ちよくなってもらわなくては……さあ、どうぞ、マスター……」

気付けばメアリーとは反対側に、これまた裸のアンが寝転んできた。密着している凹凸の少ないメアリーの体とは対称的な、肉厚で女性的な肢体が目飛び込んでくる——特に目を引いたのは、胸元で大きく揺れる二つの乳房。

アンに手首を掴まれ、導かれるまま、その乳房へと触れる。まだ力を入れてもいないのに、むにゅっ、と指が乳房へ埋まっていくのは驚きだ。押し返してくる弾力に負けじと指を、さらに奥へ奥へと埋めていく。じつとりと汗ばんだ乳房を、指の力加減によつて卑猥に形を歪ませるように。

「……ん、う……あ……いい、ですわあ……やさしくて、あつい……あんっ……」

むにゅっ、むにゅっ、とアンの乳房の弾力、柔らかさを堪能していると、逆の空いた手を引っ張られる。いまだに胸元から顔を離さないメアリーの、おねだり——火照った体、鼻孔から理性を焼かれた彼女の、快樂への欲求。導かれた先は、乳房とは少しだけ形の違う二つの丘、臀部だ。

桃のような形をしたソレへと手を這わすと、やはり、じつとりと汗ばんでいる。掌へ感じる水気と独特な柔らかさを感じつつも、指へ力を込めていくとメアリーの体が一瞬、びくんっ、と跳ねた。

「……んんう……ッ……やあ、んっ……ますたあ、の……てえ……あつい、よお……ああ、っ……すうう、んっ……あ……ん……ちゅっ、ちゅう……んっ……ちゆるっ……えあ……れろっ……んっ、く……」

ぐにつ、ぐにつ、とメアリーの臀部を揉みしだくと、そのたびに彼女は堪らず腰を揺らした。さらには、その小さな口内から舌を覗かせ、胸元や鎖骨に浮かぶ玉の汗、刺激臭が漂い滴るソレを恍惚とした表情で舐め取っていく——彼女が耐え難い快感に身を捻ると滑らかな肢体が胸元を擦り、時おり少しだけ固くなった乳房の突起の感触から察するに理性の枷が砕けつつあるようだ。

サウナのような汗が噴き出してくるほど熱せられた室内に、アンとメアリーの艶かしい喘ぎが響く。それだけではない、互いの体と体が擦れるたび、くちゅつ、くちゅつ、と生々しい水音まで鼓膜を叩いてきた。

「…………ん、う…………ああんっ…………ますたあ…………もっ、とお…………こつちもっ…………あ…………めで、てっ…………ください、ませえ…………」

ふとアンに重ねられた掌、しなやかな指が求めるように滑ると、豊満な乳房の頂点で起立する突起へと導かれた。すでに血が巡り始めていた彼女の乳首は、ぴんっ、と起き上がり愛撫を今か今かと待ちわびているように自己主張している。

指を伸ばし、腹で何度か転がしてやるとアン表情が変わっていき、こりっ、こりっ、と転がすように弄ると堪らないと顔を苦悶に歪め、優しく撫でてやれば物欲しそうに瞳を揺らす。その目まぐるしく移り変わる表情を見て”楽しい”、と思ってしまったのを彼女には悟られぬよう努めながら、彼女の豊満な乳房と勃起した乳首への愛撫を繰り返す。

「…………ん、う…………ちゅっ…………ちゅうっ…………ぶ、あ…………れろっ…………れろお…………ん、くっ…………はああ…………あ、んむっ…………ぢゅっ…………え、あ…………はな、とお…………く、ちい…………しびれてっ、りゅう…………あむっ…………れろっ…………もっ…………ぼ、くっ…………ほしっ…………よお…………ぢゆるるっ…………ますたあ、おねがいい…………もつとお…………くさ、くてえ…………あちゅい、のお…………ツ…………ちよお、らあい…………」

いつしか首筋まで顔を寄せ、吸い付いてきていたメアリーのおねだりが聞こえた。欲情のままに、体の疼きのままに口から出た言葉^{おねだり}。すぐにも彼女を思う存分、それこそドロドロになるまで犯したいとい

う衝動が湧いてくる——が、僅かに残った理性で押し留める。

何故なら、今の自分は彼女達マスターのモノなのだから。わざわざ言葉にするまでもない、欲しいのなら使えばいい、そんなに自分マスターで自慰がしたいのならすればいい、と意地悪くメアリーへ囁き返してやる——彼女が求めているのは体、肉体的な欲求だけではないのを知りながら。「……やら、あ……いいじ、わるっ……しな、ひれえ……ひて、ほしいのおっ……ますたあ、にい……しゆきっ……てえ……いわれ、たひっ……のお……う、あ……なん、れもっ……しゆ、るっ……ツ……なんれも、しゆるっ……からああ……ねおがいい……ッ!!」

悲鳴にも似たメアリーの叫びが、耳元で響く。熱せられた室内だというのに、その言葉は、ゾクゾクツ、と背中を震えるほどに淫らに聞こえた——なんかアンの口から小さく「ぐっじよぶっ」なんて聞こえたような気がしたけど、聞こえなかったことにしよう。

——うだるほどに熱せられた、サウナのような室内は

——三人分の汗から漂う獣臭が鼻を焼き

——艶かしく淫らな喘ぎと、生々しい水音を響かせ鼓膜を叩く

——溶けそうな熱気温、蕩けそうな熱体温

——崩れていく理性は止められない、止める手段がない、止める気もない

——彼女達も、そして、自分マスター自身も……

二人の女海賊が欲したモノ（2）

閉め切られた室内は裸といえど、常に生暖かい熱気が全身へ纏わりついてきて気持ちが悪い。額と言わず背中と言わず、浮かんでくる汗は留まることを知らない。だというのに、体は意思とは裏腹に震えてしまう。その理由は、今の状況——ベッドの上へ胡座を組んでいる自身を支えとして左右からアンとメアリーに挟まれている、この状況のせいだ。

豊満な乳房を押し付けてくるアンと、凹凸の少ない滑らかな肢体を擦り付けてくるメアリー。彼女達は時おり体を揺らし、捻り、乳房とわず肩とわず体を密着させてきた——にゆるっ、にゆるっ、と三人分の汗を潤滑油として肉と肉が擦れ合うたび生々しい音を立てながら。

「……ん、う……いかがですか、ますたあ……なあんて、聞くまでもありませんわね……んっ、あんっ……ふふっ、存分に……後堪能くださいませ？」

まだまだ余裕を窺わせる表情のアンが、耳元で囁いてくる。声質こそ普段と変わらないようだが、火傷しそうなほどに熱い吐息と、時おり漏れてくる微かな喘ぎは少なからず彼女を昂らせている証——肉厚で柔らかい乳房が胸板を滑っていると、たまに固い突起、自己主張し始めた乳首が擦れていく感覚が心地いい。

「……ぼく、のっ……こんなからだ、じゃっ……ッ……きもち、よく……ない、よねっ……っ……ご、めんっ……ごめんね、ますたあ……」
だが、アンとは反対側からメアリーの涙声が聞こえたので首を巡らせる。すると女性的な体つきのアンとは対照的な凹凸のない滑らかな肢体を必死に擦り付けてくるメアリー、その目元には涙の玉が見て取れた。

確かにアンと比べれば、天と地ほどの差があるメアリーの肢体。だが、それでも、と必死に体を密着させてくる彼女の想いで満たされていく。それを伝えようと空いていた腕を彼女の背中へ回し、そのまま

臀部へと向かわせた。

小振りな桃の形をしたメアリーの臀部、じつとりと汗ばんだ膨らみを撫で回し、弾力ある柔らかい肉へ指を埋め、時おり割れ目へと指先を挟ませる。そのたびに彼女の体は小さく、びくんっ、びくんっ、と跳ね回り、体を捻り逃げようと試みていた。

「……ん、う……いい、からあ……ますたあ、につ……ならあ……なにされて、もっ……いいからあ……ツ……ぼく、もっ……みてええっ……さわっ、てえ……きもちよくっ……なっ、てえ……あ、んっ……おねがっ……だからああ……」

一気に顔を近付けてきたメアリーの泣きそうな、それでいて切なそうな顔で視界が埋まる。鼻先同士を擦らせるも女性特有の甘い香りと汗の匂いを鼻先へ感じ、もはや我慢が利かなくなつた時——少しだけ強引に、彼女の唇を奪つた。

「……えっ……ちよっ……ツ……ん、う……んっ、あ……っ……れろっ……ちゆるっ……んっ……あ、はっ……んんっ……ぷあっ……は、あ……んあっ……ぢゅうっ……ツ……ま、ひゅ……たあ……」

戸惑いの声を上げるメアリーの言葉を遮るように、その小さな唇へ甘く噛みつき、舌を覗かせ舐め上げる。互いの吐息と唾液を交換するように、互いの唇を押し付け合う、すると最初は消極的だった彼女にも変化が訪れ始める——彼女の細い両腕が首へと回り、引き寄せるよう、離れぬよう強く顔を寄せてきた。

その動きと呼応するように、メアリーのキスも激しさを増している。舌同士を絡めさせ、唾液を塗り付け合うと、ぴちやつ、ぴちやつ、と生々しく大きな水音が鳴る。密着している互いの口元は、もはやどちらのものとも判断できないほど混ざり合い、白く濁った唾液でドロドロだ。

「……ん、う……ぢゅう……っ……んんっ……ぷあっ……は、あ……んっ……ちゅ、むっ……えあ……れろっ……んんっ、むうっ……んっ、ちゅぱっ……あ、はあっ……まひゅ、たあ……ん、むう、んっ……」
「あらあら、メアリーだったら……うふふっ、それじゃあ私は、こちらを……」

メアリーと舌を絡めていると、アンが心底嬉しそうに呟いた。汗に濡れた体、豊満な乳房の形を歪ませながら彼女の吐息が遠ざかっていく。にゆるっ、にゆるっ、と汗まみれの胸元から腹部を経由し、腰を過ぎ、アンの肢体が目指しているのは下半身——その事実に気付いたのは、すでに股間で勃起し起立していた肉棒へ鋭い刺激が走ってから。

部屋の熱気とは明らかに違う、火傷しそうなほどの熱が肉棒を包み込んできた。焼けるように熱い、それでいて柔らかなモノに包まれ、時おり亀頭を撫でていく水気たっぷりな肉の感触——そう、体の位置をズラしたアンは、おぞましい形の肉棒を、まったく躊躇う様子なく、その口に迎え入れたのだ、

「……………ああ、んむっ……………んっ、う……………ぢゆる、んっ……………え、あ……………ぢゆるっ……………んっ、んっ、んう……………ッ……………は、あ……………ますたあ、のっ……………かたあい……………それ、にい……………れろっ……………んっ……………すごい、におい……………れすっ……………っ……………はあ……………むっ、ん……………すてき、い……………」

口を寄せ、頬を寄せ、吐息混じりに亀頭へ舌腹を滑らしていくアンの表情が徐々に変わっていく。鼻孔を突き抜けていく雄の獣臭に彼女の余裕は剥ぎ取られていき、口淫という淫らな行為によって枷が外れた彼女の本能が剥き出しになっているのだろう。

アンは蕩けた表情を浮かべ、劣情に瞳を揺らしながら舌を使って亀頭を舐め回し、裏スジといわずサオといわず、縦横無尽に滑らせていく。さらには大きく口を開け肉棒を口内へ迎え入れると、一気に呑み込まん勢いで吸い付いてきた——肉棒は唇で何度も扱かれ、幾度となく喉を亀頭へぶつけられ、溢れんばかりの唾液を塗り付けられる。そのたびに、じゅぼっ、じゅぼっ、と周囲へ卑猥な水音が響く。

「……………ん、じゅっ……………ぢゆるっ、んっ……………お、んっ……………んっ、んんっ……………ぶ、あ……………ぢゆる、っ……………ッ……………ぢゆるっ……………ぢゆるっ……………ん、んっ、んっ、んんっ……………ぶ、あっ……………は、あ……………えあ、っ……………れろっ……………ぢゆる、んっ……………ぢゆるっ……………んっ……………ッ!!」

驚いたことに、アンの奉仕はそれだけに留まらない。ようやく彼女の口から肉棒が解放されたと思った瞬間、むにゅっ、と柔らかく弾力

ある何かが肉棒を挟み込んでくる——その肉厚で、柔らかく、重々しい質量の肉塊がアンの豊満な乳房であると気付いた時には、もう遅い。

肉棒を挟み込まれる圧迫感そのままにアンの体が、首が上下に揺れ始めた。ずりゆつ、ずりゆつ、と汗や唾液が付着する肉棒を挟み、混ぜられた体液を潤滑油として勢い良く滑っていく豊満な乳房の圧迫は腰を震わせるほどの快感を叩き付けてくる——そして、圧迫感と共に亀頭へ感じる彼女の舌先の感触は耐えがたいものがある。最も敏感な部分、亀頭の頂点へ空いた尿道をほじられるだけで、意思とは無関係に腰が跳ね上がってしまうほど強烈な刺激が襲ってきた。

「ふふつ、ますたあの……おちんちん、あつ、つう……んつ、あ……びくん、びくんつ……つて……ああんつ……かわいい、いつ……れすうつ……あんつ、むつ……ちゆつ……れろつ……ろお、れふかつ……きも、ひつ……いい、れふ……かあ……？」

「ん、ちゆつ……あ、むつ……れろつ……ぢゆつ……ぷあつ……ましゆ、たあ……んう……ツ……も、ろお……ん、ちゆ……ましゆ、たあ……のお……あ、んう……ん、れろつ……ちよおらあい……ましゆ、たあ……んつ……あ……しゆきい……ましゆたあ……」

体中に張り付いてくる部屋の熱気、股間でアンの豊満な乳房に挟まれ扱かれる摩擦熱、いやらしく絡まってくるメアリーの舌の粘熱、そして部屋中の熱気に負けず劣らずの存在感を放ち始めた獣の臭い——クラクラと頭が揺れ理性の枷は見る見るうちに解けていき、そのまま脳が溶けてしまうような錯覚。

二人に求められ、興奮を煽られ、次第に本能と嗜虐心が沸き上がってくるのを止めることができない。

メアリーの桃のような臀部を撫でていた掌を少し強引に奥へ差し入れ、一気に股間まで進行させる。すると指先と掌が、明らかに汗ではない別の水気へ触れた。それが彼女の秘部、牝孔から漏れ出た愛液であることは明白——わずかに粘性を帯びた愛液を指へ絡めると、柔らかく小さなヒダの奥、ヒクヒクと物欲しそうに開閉していた牝孔へ沈み込ませた。

「……………っ……………ひい、っ……………あ……………ん、いいいっ……………んあああっ……………ツ!!」

瞬間、メアリーは大きく、びくんっ、と体を跳ねさせ背中を仰け反らせる。いきなり敏感な箇所、最も大事な部分を指で犯されているという事実を彼女が自覚できたのは、軽いオーガニズムを感じた後——後ろから手を回しているのも彼女は逃げられない、離れることもできない、たとえ絶頂しようが、牝孔を指でほじられるのを受け入れるしかなかった。

「……………ん、い……………お、あ”あ”あ”っ……………ま、すっ……………たっ……………ちよ、っ……………ま”っ、へえ”え……………ツ……………ん、おっ……………あ、っ……………っ、い”い”い……………そ、ごおっ……………ぼく、のっ……………だい、じなっ……………とこ、ろお……………ん”い”い”い”い”い”い”い”い”い”い”い”い”い”い”い”い”い……………やめ、っ……………お、がしくなりゆっ……………んんう、っ……………あっ……………ら”め”え”え”え……………ツ!!」

軽く絶頂したばかりで敏感になったメアリーの牝孔を容赦なく指でほじる、耳元で響く悲鳴にも似た彼女の制止の言葉は興奮を煽る材料にしかない。じゅぷっ、じゅぷっ、と指を牝孔から出し、入れる、何度も何度も——まだ愛撫し始めて数秒だというのに、彼女の股間は愛液なのか潮なのか排泄液なのか判断がつかないほど多量の体液で濡れに濡れた。それでも、指は止めない。止めることが、できない。

その間に、空いた逆の手はアンの方へ——

むっちりと肉付きの良いアンの太股を撫で、膝裏へ掌を差し入れると軽く持ち上げる。すると彼女は、その促しに対して自ら片脚を上げてくれた——大きく片脚を跳ね上げ開帳した彼女の股間は、メアリーと同じように大洪水。牝孔から垂れた多量の愛液は太股を伝い、ベツドシートを汚すほど。

吸い込まれるようにアンの太股、内股を撫でながら掌を牝孔へと向かわせる。テラテラと光る愛液を指先で掻き集め、十分な粘り気を纏った頃を見計らい——彼女の牝孔へ、徐々に沈み込ませていく。すると奥へ奥へと指先へ力を入れるまでもなく、アンの牝孔は貪欲に喰らい付き、吸い付いてくる。

「…………ん、ぢゆるっ…………ツ…………んっ…………あ、あああっ…………いい、いっ…………あ、んっ…………ます、たあっ…………もっ、とお…………んんっ…………もっ、はげし、くうっ…………あ、っ…………ああんっ…………ツ…………あ…………ん、んんっ…………あ、ひいつ…………き、もちっ…………いい、れすっ…………んっ…………も、つ…………お、んっ…………もつとおお…………ツ!!」

アンのおねだりの通り指を膣内奥底まで突き入れ曲げてやる、指腹を膣壁へ擦り付けるように、引つ搔くように。それだけで彼女は堪らず艶かしく甲高い嬌声を上げた、腰を跳ねさせ背中を震わせながらも逃げる素振りはない。むしろ指をもつと奥へ、と腰を掌へ押し付けてくる始末。

お望み通りに、とアンの膣内で指を荒々しく跳ね回らせてやると、ぐちゅっ、ぐちゅっ、と膣内へ溜まった愛液が搔き混ぜられる生々しい音が響く——容赦なく膣壁を擦り、引つ搔き、えぐる。もしかしたら僅かなり痛みを感じているかもしれないと思っただが、それは杞憂だったようだ。アンの喘ぎは大きさを増し、股間からせり上がってくる快感に酔いしれるだけ。

「…………ん、いっ…………いい、いっ…………きも、ちっ…………いい、のおおっ…………んんっ…………ます、たあ…………もお…………あ、ひいつ…………い、つれっ…………くだ、ひゃ、い…………ツ…………あ、んむっ…………ぢゆるっ…………んっ…………ぢゅっ、ぢゆるっ、ぢゆるっ…………んっ、ぷあっ…………あんっ…………お、はっ…………ぢゅっ、るっ…………んっ、んっ…………ツ!!」

膣壁を責め立てられる激しさに呼応するように、アンの動きも激しさを増し速度を上げていった。豊満な乳房は大きく、激しく、それですら顔を見せる亀頭へ甘く噛み付き、ちゅう、ちゅうっ、と”ソコ”から出てくるであろう白い欲望を求めて吸い付いてくる。

——鼓膜をメアリーの狂おしい悲鳴のような嬌声に犯され

——肉棒と、そこから吐き出されるであろう欲望をアンに求められ

——負けじと彼女達の秘部、牝孔を責め立てる

頭の中も、体も、熱い。

ボーッと熱に犯された頭で、そろそろ我慢の限界に近いのを自覚し

続ける肉棒から苦しきのあまり口を離したアンへ、顔といわず頬といわず狙いを定め精液が飛んでいった。

びちゃびちゃつ、と音を立てアンの顔に着弾した精液は顔や髪を白く染め、糸を引きながら落ちていくと豊満な乳房までも零れていく——だがアンは欠片も嫌悪感を見せることなく自身の乳房へ落ちた生臭い精液を尻目に、再び肉棒を口内へ迎えると噴き出していく精液を呑み込んでいった。

「……………う……………え、あ……………あ、んっ……………ま……………しゅ、っ……………た……………」

ふと視線をやると、そこにはメアリーの蕩け切った顔があつた。弛緩した体は目から涙を流させ、口端からは涎を垂らし、だらしなく舌を覗かせる、緩み切った表情。そんな彼女の唇を強引に奪うと、どこか緩慢とした動作で舌を絡ませてきた——ぴちゃつ、ぴちゃつ、と唾液を鳴らし唾液を交換する。先の貪るような、獣じみたキスではない。労るように、慈しむように、優しく、それでいて淫らに舌を絡め合つた。

——汗に加え、三人分の体液は部屋へ獣臭を充満させ

——それぞれが、ぴちゃつ、ぴちゃつ、と卑猥な水音を立て合う

——そんな中、急に意識が遠退いていくのを感じた

——熱のせいなのか、射精による脱力のせいなのかは分からない

——持ち直す暇もなく、声を上げる間もなく

——どこか、ふわふわとした、感覚を味わつた

——遠退いていく意識が、ぷつりっ、と途切れる

——その瞬間まで……………

【番外編】

サンタと良い子の性なる夜（1）

ロマン主催のクリスマスパーティーが終わると参加した面々を見送り、自室の片付けも程ほどに身支度を整えてから寢床へ着く。まだパーティーの余韻はあったが、時計の針は0時を指そうという頃。疲労と眠気には、抗うことはできなかつたのだ——睡魔と倦怠感に誘われるまま、柔らかい布団へ潜り込むと瞼を閉じる。

と、何やら違和感を感じた。

具体的に言うなら、お腹の辺りが苦しい。

それほど嫌な感覚ではなかつたので、別に無視を決め込んでも問題はなかつたのだと思う。だが、何というか、虫の知らせというか貞操の危機というか、本能が”目を開ける”と訴えてきた。

重い瞼を開けると、まどろみ霞む視界が何かを捉えた。明かりを消した自室の白い天井の中へ見えるのは黒いシルエツト、それが”誰なのか”は、すぐには分からなかつた——時間の経過に合わせて徐々に鮮明になっていく視界、霞が晴れた時、ようやく”誰かが仰向けの自分に馬乗りで跨がっている”のだと自覚する。

どこか冷ややかな、それでいて溢れんばかりの覇気が印象的な黄金の瞳が自身を見下ろしていた。白い珠のような頬には僅かな紅潮、美しく艶やかな唇は目麗しい微笑を形作っている——そして、そんな真白の肌を包んでいるであろう衣服は、”黒”。胸元に結ばれた赤と緑に彩られたリボンが、”彼女”の呼吸に合わせて揺れていた。

「む、起きていたのか、トナカイ——」

そう、仰向けになった自分へ跨がっていたのは、サンタオルタだ。先ほどもパーティーに参加していた一人で、たしか見送った時は

ジャックと一緒にだったと記憶してる——というか、彼女の言葉には語弊というか、盛大な間違いがある。

——寝てたよ。起こされたの。今、キミに。

「ああ、そうか。だが過程はどうあれ、いま貴様は起きています。良い子は、もう眠る時間だ。せつかくプレゼントを持ってきてやったというのに、まだ起きている貴様は……悪い子だな」

ムチャクチャな理論だ、というか理不尽にも程がある。起こされた事実は棚上げしとして、起きてる結果だけで悪い子認定。そのサンタオルタ理論だと、世界中の人々が悪い子認定されてしまう——まあ、サンタオルタに限らずオルタなサーヴァント達は大体“こう”なのは知ってるから、今さら指摘しないけどね。

それよりも、もつと気になる事実がある。

何故、彼女は再び自室を訪れたのだろうか？

「とはいえ、普通の貴様は良い子なのは知っている、私はサンタクロースだからな」

仰向けの自分に跨がりながら、「ふふんつ」と自慢げなサンタオルタ。つつい「サンタクロース関係ないよね？」とツツコミを入れそうになったけど、十中八九ヤブ蛇だろうと黙っていた——と、その時。枕元、ベッドの傍らから自分の顔を覗き込んでくる視線に気付く。

「おかあさん、いいいいい——」

暗闇なので上手い表現じゃないけど、輝くような笑顔が闇の向こうに見える。猫を思わせる瞳、まだ幼いと言える顔立ちの女の子。短く白い髪の彼女がジャックであることに気付き名を呼んでやると、こちらの頭を撫でてきた——自身の髪を指先で弄ぶ彼女は楽しそうで、嬉しそうで、色々と言いたいのだが声を掛けるのを躊躇ってしまふ。

「……だが、今の貴様は悪い子だ……いいや、正確に言うなら……」
こつち”に悪い子が居る、な”

自分に跨がるサンタオルタが意味深に嗤うと、ゆつくりと腰を前後に揺らし始める。そちらへ視線をやると、大きく左右へ広げられた彼女の脚の付け根、衣装と同じ黒いパンストが”擦り付けられていた”

——緩やかな刺激を受けズボンの下で苦しそうに腫れる、悪い子^{肉棒}へ。

制止のために上げた手は、サンタオルタの白く長い指に阻まれる。指を絡め取られ自由を失った手は彼女の手の柔らかさ、暖かさを伝えてきて——その間も執拗に、丹念に、勃起した肉棒の形をズボン越しで確かめるように、彼女の秘部が擦られる。

「おかあさん、わるいこなの？」

背中を昇ってくる快感で徐々に昂っていくなか、いつの間にか顔を寄せてきていたジャックが不安げに呟いた。眉根を寄せ、こちらを覗き込んでくる彼女が小首を傾げると——少しだけ息を乱し、艶やかな吐息を吐くサンタオルタの言葉が遠くで聞こえた。

「……………ん、う……………ふ、う……………いや、いま”悪い子”は……………私っ、が……………相手をしてやっている。お前はマスターの苦痛を……………んっ……………和らげてやるが、いい……………」

「……………？ よく、わからないけど……………わかった……………んっ……………」

サンタオルタの言葉に頭上へ？マークを浮かべていたジャックだが、そう呟くとベッドの傍らへ上半身だけを載せて、顔を近付けてくる。そして、そのまま鼻先へ花にも似た香りが漂ってきたかと思うと同時に、彼女の唇で口を塞がれた。

分かってなくて無自覚にしているのか、分かっててしているのかはジャック以外に知る術はない。確かなのは、今まさに、唇同士が密着しているというコト——最初は優しい、触れ合うだけの口付け。しかし、優しかったのは数秒だけ。

「……………ん、う……………ちゅっ、う……………んんっ……………ぶあ、あ……………え、あ……………」

密着していたジャックの唇が、器用に口を押し開けてくる。甘く噛み付き、時には自ら首を曲げ貪るように。あまりにも自然な形で、いように誘導されるまま、流されるままに半開きとなってしまう口——開け放たれた唇を縫って彼女の舌が侵入してくるのを阻むことは、できなかつた。

呼吸に合わせて直にジャックの吐息を鼻先へ感じながら、口内へ侵入してきた舌に翻弄される。彼女の舌がこちらの舌腹を這っていくだけで甘い痺れが脳を焼いた。短い舌が器用に舌へ巻き付いてくるだけで、背中が跳ね上がった。流し込まれてきた蜜、唾液が喉を通過

していく度に体が熱くなっていった。

「…………ん、んっ…………ちゅっ、んっ…………えあ、はっ…………れろっ…………っ…………
ぷあ、はっ…………んう、っ…………おかあさん、いたくない…………う？」

眠気とは違う眩暈に明滅する視界いっぱい、ジャツクの顔が映る。その頬は紅潮し、口端からは唾液を流し、僅かに覗く舌には切れただばかりの唾液の糸が見て取れた。痛みなど、感じるわけがない。むしろサンタオルタが与えてくる緩やかな刺激とは別種の快感、幼い容姿の彼女が貪るようなキスをしてくるといふ意外性、背徳感に襲われる。

「…………んっ…………はあ…………ほう、貴様、意外にも”女”なのだ、面白い——どうだ、共に”悪い子”を懲らしめてやらぬか？」

ジャツクとのキスに夢中だったので気付かなかったが、いつの間にかサンタオルタは体を離していた。とはいえ、いまだ彼女は自分に跨がったまま。そんな体勢では望まぬとも見えてしまう、ベッドへ両膝を突いた彼女の股間、先ほどまで摩擦を繰り返していた秘所——明らかな水気、恐らくは彼女が秘所から漏らした愛液によつて滲む股間とズボンを繋ぐ糸を。

口元をジャツクの唾液に汚され、ズボンをサンタオルタに汚され、昂ってしまった意識と体は、もはや収めることができな、止められるワケがない——嬉しげに衣服を脱ぎ始めたジャツクと、股間の部分が愛液で黒く滲んだパンストを脱ぎ始めるサンタオルタ。二人が脱ぎ始めたのを、呆とした頭のまま、仰向けのまま、黙って眺めていた。これから行われるであろう行為に、期待しながら。



「…………ん、あ…………れろっ…………あ…………ふふっ、すごいニオイだぞトナカイ…………獣のニオイだ…………」

「…………ちゅっ…………ん、あむ…………じゆる、っ…………ん、んっ…………ぷあっ…………

おかあさんの、ここ……かたくて、あつい……びくん、びくん、つて……」

生まれたままの姿になったジャックと、自らの愛液で濡れた下着を脱ぎ捨てたサンタオルタ、二人の声が自身の股間の方から聞こえる。視線を落とすと、ものすごい光景——天井へ向かって大きく反り返った肉棒へ舌を、唇を這わせる二人の姿。左右から唾液を纏った二人の舌が、肉棒をご馳走だと言わんばかりに味わう様が広がっていた。

小さく舌を出し、舌尖を器用に用いて裏スジやカリなどを局所的に刺激してくるジャック。対してサンタオルタは、たつぷりと唾液を乗せた舌でサオや亀頭を大胆に舐め回してくる——強さも、リズムも、全てが違う二人の奉仕。だが、それは絶大な快感となって襲ってくる。ゾクゾクと這い上がってくる寒気で、無意識のままに腰や背中が跳ねてしまうほどに。

「……え、あ……れろっ……ん、んーっ……は、あ……良い、とても良いぞトナカイ……ああ、我慢できん……あ、んむっ……じゅっ、んっ……じゅるっ、ぢゅっ、んっ、んっ、んう、んんっ……ッ!!」

二人の奉仕に耐えていた最中、突如としてサンタオルタの蹂躪が始まる。大きく口を開けた彼女は、そのまま反り返った肉棒へ頭からかぶり付いてきたのだ。そして、そのまま、彼女は勢いよく前後に頭を振り始める。サオへ唇を滑らせ、呑み込んだ亀頭、裏スジへ舌を擦り付けるように。

「……あ……サンタさん、ずるいい……あたし、たちもお……」

「……ん、う？ んっ、んっ、んんっ……ぷあっ……すまん、少し冷静を欠いた、許せ」

「……もお……つぎは、あたしたちの、ばん……だからね……あ、むっ……んう……おっ、ひい……ッ……ん、ぢゅるっ……んっ、んっ……んんっ、ぢゅっ……ぢゅるっ、んむっ……ッ!!」

ジャックの悲しそうな声で、ようやくサンタオルタは我に返ったらしい。謝罪しつつ、どこか申し訳なさそうに眉根を寄せながら肉棒から口を離れた。混ぜ合わされた唾液と先走り、白く濁った糸を引きながら——入れ代わり、今度は嬉々としてジャックが肉棒へ顔を寄せ

まん……しないで、いい……よつ……あ、むつ……ん、んつ、んん、んつ……ふ、あ……ぢゆるるるつ……」

「……ん、あ……ぢゆるるつ、んつ……ん、んうつ、んんつ……ぶ、あ……良い、このまま果てる……つ……私達の、顔に……んつ……貴様の汚ならしい、欲望……ん、れろつ……はあ……ぶちまけて、しまえ……ツ……ぢゆる、ん……ちゆるつ、んむつ……ぢゆるるつ、ぢゆるるつ、んつ……んんつ……」

腰が、ぶるつ、と震える。サンタオルタが言うように自身が吐き出した欲望が二人を汚す様を想像してしまつて、もう抑え付けておくのも限界だ。昂りのまま二人の頭へ手を伸ばすと、肉棒の方へ引き寄せた——その行為は、もう限界であると彼女達へ伝えるサイン。

こちらの状態を察知し、二人の奉仕も激しさを増していく。鼻を突く獣臭を漂わせる、おぞましい肉棒へ顔を押し付けられているというのに、サンタオルタとジャツクの表情に嫌悪感はない——むしろ、どこか嬉しそうで、楽しそうで、なんとも扇情的な微笑を浮かべていた。

と、二人の唾液で濡れる玉袋から、欲望が登つていくのを感じる。あつという間に駆け上がってくる欲望は、すでに太くなった肉棒の中を巡り——絶頂を迎える刹那、亀頭の先端から勢いよく噴き出していった。びゅーつ、と噴水のように噴き出した欲望、濁った白濁が彼女達の頬を、口元を、鼻先を叩いていく。

「……んっ、あ……なん、ひゃ……れ、たあ……んう、あつ、くてえ……どろどろお……っ……れ、もお……いや、じゃ……ないっ……んっ……れろつ……ちゆるるつ……ぢゆる、んっ……えあ、んっ……ぢゆる、ぢゆるるつ……んんっ……」

「……ん、っ……はっ、すごい量だな、トナカイ……しかも濃いな、まるでゼリーのようだ。それに、臭いも酷い……ああ、”悪くない”……ん、っ……ちゆるるつ、ぢゆるる……ぷあっ……れろつ、えれっ……っ……んっ……ちゆる、んっ……」

びゆるるつ、びゆるるつ、と勢いを変えながらも断続的に射出された欲望、精液がジャツクとサンタオルタの顔を汚す。頬といわず、髪といわず、口元といわず、鼻といわず、彼女達の整った顔が汚ならしい白

濁に染まっっていく——突き抜けるような快感、絶頂が訪れてから数秒ほど経過した時、ようやく欲望が噴き出す勢いが徐々に弱まってきた。

そして、とうとう肉棒から白濁の噴出が止まる。

だが、こちらの絶頂、射精が終わっても彼女達の奉仕は止まらない。彼女達は互いの顔中だけに留まらず、下腹部や肉棒に付着した精液を舐め取っていく——僅かではあるが喉が揺れているのを見る辺り、間違いない飲み込んでいる。生臭い獣臭を漂わせ、粘性を帯びた精液を。

「…………ん、くっ…………んくっ、んっ…………ぶ、あっ…………けほっ、けほっ…………あ、なん、でえ…………くさい、し…………まず、いのにい…………とまら、にやい…………ツ…………ん、う…………れろっ、ぺろっ…………ちゆるっ、ちゅっ…………ん、っ…………じゅ、るっ…………」

「…………ん、んんっ…………ん、くっ…………は、あ…………喉に絡んで呑み難い…………おまけに臭い、不味い、此奴の言う通りだ…………貴様のモノでなければ、好んで呑み込もうとは思わんな…………っ…………あ…………違っ、違うぞツ…………嫌々だ、嫌々だからなツ…………私は戦利品は余すことなく頂く主義だから、仕方なくだツ…………勘違いするなよトナカイ…………ツ!!」

射精の余韻に浸りながら、びくんっ、びくんっ、と痙攣する肉棒を通して彼女達の唇と舌による緩やかな奉仕を堪能していると、ふと、おぼろ気な視界ではあったが彼女達の痴態を見てしまう——糸引く白濁で顔を汚し、目端に涙を浮かべながらも口による”掃除”を止めようとしないうジャック。悪態を吐き、こちらを睨みながらも赤面のサントオルタ。そんな、二人の様子。

だから、仕方ない。射精したばかりだというのに、再び肉棒へ血が通っていくのは、仕方のないことだ。あつという間に固さを取り戻した肉棒に、すぐさま彼女達は気付く——あくまで個人的な主観だが、ジャックもサントオルタも、どこか嬉しそう。もしかしたら、”これからの行為”に期待しているのかもしれない。

いや、期待していてほしいから、そう見えるのかもしれない。だって、こちらとしては”彼女達が期待していいようがいまいが関係ない”

のだから。アルトリア達には及ばないが、負けたままでいるのは癪だ。こちらだつて、やられるばかりではない。

さあ、次は、こちらの番だ――